現代忍者の日々

月見 岳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
現代忍者の日々

【Ｎコード】
Ｎ３４０９Ｄ

【作者名】
月見　岳

【あらすじ】
霧島霞はどこにでもいる普通の男子高校生……ではない。その正体は現代社会を生きる忍者。しかも父親や母親、妹に弟さらにペットの犬も忍者という忍者一家なのだ。『このご時世に忍者なんて必要か？』という疑問をいだきながらも、忍者という正体を隠し過ごす日々。それでも何の変哲もなく日々を過ごす霞だったが、現代忍者の生活はそれ程甘くなかった！

忍者一家の朝

皆さんは『忍者』はまだこの現代社会にいると思っているだろか？

とっくの昔にいなくなった？

太秦の映画村ぐらいの人しかいない？

確かに常識ではそうだろう。

しかし、忍者はこの現代社会を生き残っていた。

忍者らしく陰でひっそりと技を伝承していきながら……

朝。

本来ならば目覚まし時計がけたたましく鳴り響き、夢の世界から現実世界に引き戻してくれるだろうが、霧島（キリシマ）　霞（カスミ）こと、この僕にとっては気が抜けない時なのだ。

なにせこの3日ぐらいまともに起きることができなかった。

昨日は手裏剣で貼り付けにされたし、一昨日は濡れたタオルを顔にかけられて窒息しかけたし、その前はベットの下で爆裂玉を爆発させられた。

そして今日は……

―パチッ―

僕は目が覚めた瞬間、シュッとベットから距離をとった。

「……」

今日はなにもなさそうだ。

そう判断すると、僕は壁に掛けてある時計を見る。

５時５０分。

は、早く起きすぎた……

７時に起きればいいのに。

このままま寝てしまおうか、それとも着替えてしまおうかと考えていると、突然部屋のドアが開いた。

入ってきたのは霧島（キリシマ）　千里（チサト）、僕の母親だ。

「あら、起きてたの。オモシロくない」

「母さん、人の部屋に入るのにいちいち気配を消さないでよ」

「あら、気がつかないのが悪いのよ」

皆さんお気づきであろうが、僕と母さんは普通の人ではない。

忍者である。

そして、父親も弟も妹も忍者である。

霧島家は代々忍者の一族であり、その直系にあたる。だから家族全員忍者なのだ。

もちろん、ペットの犬だって忍犬だ。

しかも、現実的な忍者でなく、漫画みたいな非現実的の忍者でもある。

残存を残す移動や高層ビルの上まで跳ぶのはお手の物だ。

そんな非現実的で反則的な身体能力を持っていても、父さんはサラリーマン、母さんは専業主婦、弟と妹は中学生、そして僕は高校生と至って普通の家庭だ。

正直、こんな身体能力や、毎日忍具を隠し持つことすら必要ないと思う。

「霞は起きてたし、舞と涼を起こしましょうか」

そう呟くと母さんは嬉々として僕の部屋から出て行った。

数十秒後……

ズドンと何かが爆発する音が霧島家に響いた。

その音と一緒に『うわぁ！』という声が聞こえたのは気のせいだろうか……

とりあえず、僕は制服に着替えて一階に降りた。

「あれ、舞はもう起きてたんだ」

そこには妹の霧島（キリシマ）　舞（マイ）がもそもそとトーストを食べていた。

兄の僕がいうのなんだけと長い髪とかが大和撫子みたいな感じで結構美人だ。

「……おはよう」

「うん、おはよう」

「……」

「……」

沈黙が支配する朝の食卓。

舞は無口だから話題を振っても一言で終わってしまい会話が続かない。正直、学校での友人関係とか心配してしまう。

「あれ？父さんは？」

いつもならすでに朝の食卓についているはずの父さんがいない。

「今日から出張。もう出かけた」

「へぇ、知らなかった」

「……」

「……」

やっぱり会話が続かない。

「う～、おはよう兄さん姉さん」

まだ少し眠そうにやってきたのは霧島（キリシマ）涼（リョウ）。さっきの爆発の犠牲者だ。

男なのだが、女顔な上小柄なので、よく女の子に間違えられている可哀想な弟だ。

「ねぇ母さん、もう少し普通に起こしてよ」

「そんなのオモシロくないでしょ」

母さん、いつの間にこっちにきていたんだ。

「……自分で起きれないのが悪い。母さんがくる前に起きればいい」

「そうよ、母さんの気配を感じないと」

どうやら普通に起こす気はまったくないらしい。

「ねぇ、兄さんからもなんとか言ってよ。兄さんだって嫌でしょ」

「あら、霞は母さんが起こす前に起きてたわよ」

「えっ！」

涼よ、僕を裏切られたような目で見ないでくれ。

「兄さんだけはと信じてたのに……」

「よく分からないことで信じられていてもこっちは困る」

まったく、意味が分からないよ。

「ほらほら、霞も涼も早く朝ご飯食べちゃいなさい」

「は～い」

「……むぅ」

朝ご飯を食べ終わり、家を出るまでまだ時間があったので、僕はのんびりとテレビを見ていた。

あっ、今日は午後から雨なのか……

傘もっていかなきゃ

「午後から雨なの、洗濯物それまでに乾くかしら？」

母さんがお茶を飲みながら悩んでいる。

「そうそう霞」

「んっ、なに？」

「帰りに髪を切ってきなさい」

確かに僕の髪はボサボサで、前髪は目が隠れるくらいだ。
普通ならとっくに切ってしまっているだろう。

「別にいいよ、このままで」

「あんたね、せめて前髪だけでも切りなさい」

「なんで？」

「あんた、顔立ちはいいんだけど髪で隠しちゃってるのよ」

顔立ちがいい？僕が？

「母さんがお金は出してあげるから、髪切ってきなさい」

「……今度の日曜に行くよ」

とりあえずの妥協案。

「兄さん、ついに髪切るんだ」

「この前切ったの半年前」「そういえばそうだったわね。しかもその時律儀にも前髪だけ切らなかったのよね」

はて、そうだったかな？

「今回は必ず前髪切るのよ」

「ハイハイ、分かりました」

「ハイは一度！！」

言葉と同時に放たれる無数の手裏剣。
そのすべてが僕に向かってくる。

―トストストストストス―

なんとか全て回避する事ができた。だけど、僕が座っていたイスの背もたれには隙間なく手裏剣が突き刺さっている。
このまま座ったら痛そうだ。

「母さん！危ないじゃないか！もし僕に刺さったらどうするんだよ！」

「母さんは霞をそれくらい避けられないような子に育てた覚えはないから大丈夫よ」

「なにが大丈夫なのさ！」

「だから大丈夫だって、母さんが本気で投げてないし」

「いや、そうじゃ――」

「いい加減にしなさい。テレビが聞こえないじゃない」

いつもより声が低かった。
僕の背中に悪寒がはしる。
舞と涼は顔を真っ青にしてこっちを見ている。
母さんの放つ殺気が恐ろしく冷たい……

「あら、　今日の占い二位、いいことあるかしら」

もうすでに母さんは元の様子に戻っている。
しかし、母さんの殺気は久しぶりに浴びた。
いつになっても恐ろしい。

「あんた達、そろそろ出る時間じゃないの」

「んっ？まだ少し早いけど行こうかな」

「あっ、兄さん。ボクも行くよ」

「私も……」

「それじゃあ母さん、行ってくるね」

「ハイ、いってらっしゃあ～い」

いつもより早く僕達は折り畳み傘をカバンに入れて学校に向かった。

学校にて

僕が通っている高校は柚城(ユズシロ)学園高等学校。
小中高の一貫校で、中学と高校は隣同士で簡単に行き来ができる…
…というか渡り廊下で直接繋がってたりする。
ちなみに小学校は全く違う場所に独立して存在している。
涼と舞と別れた僕は、そのまま校舎に入る。
教室に向かう途中、数人の知り合いと出会い、朝の挨拶を交わした
が、これといって変わったことではない。
１－Ｃの教室に辿り着き、何の躊躇いもなく扉を開く。
僕が扉を開いた瞬間、教室にいたクラスメート達がこちらを向いた
が、すぐに興味をなくし、各自お喋りなどに戻る。
僕はそのまま自分の席に向かう。窓際の真ん中の席だ。
とりあえず僕は席につく。
あ～～～、暇だな～～～。
僕が机に突っ伏していると横の席に誰かやってきた。
たしか隣は……誰だったかな？
まぁ、忘れていたって問題はないっか。
ほとんどのクラスメートの名前なんて覚えてないし。
……そういえば、その事をある友人に言ったら、『お前、少し人間
に興味を持てよ』って言われたっけ。

「よっ！霞」

そう言って僕の背中を思いっきり叩く男。
彼は僕の友人の一人で、僕に人間に興味を持てと述べた人間、早川(ハヤカワ)
東(アズマ)という。
サッカー部所属でキーパーをしている。話に聞くと、どうやら１年
生でありながらもレギュラーらしい。その事も関係してか、東はよ

くモテる。

「おはよう霧島君」

東の後ろからひょっこり現れる女子。
彼女は東の幼なじみ、滝川（タキガワ）　鳴海（ナルミ）だ。
なかなか髪が長くて可愛らしい女の子で、学校で人気があるとかないとか……

「おや、今日も『夫婦』で登校ですか」

「あはは、やだな霧島君」

そう言って僕の背中をカバンで叩く。
思いっきり振りかぶられていたこともあり結構痛かった。東と鳴海は仲がいい。
二人は付き合っているという噂があるくらいだ。
僕は、この噂は正しいと思っている。

「そんな照れ隠ししなくても、もうみんなにバレてるよ」

僕は親切にその行為が無意味であることを告げてあげる。

「へっ、バレてるって？」

「二人が付き合っていること」

「……」

あれ、黙っちゃった。

東のほうは固まってるし……。
僕、変なこと言ってないよね。

「私達、そんな風に思われているんだ」

「ああ、そうみたいだな」

錆びたブリキ人形みたいにギギギと首を動かし二人は視線を交わしていた。
いや～、仲がいいね～

「あのね、霧島君。私達は付き合ってなんかないよ？」

「そうだぞ、俺たちは付き合ってない」

「ははは、今更そんな嘘が――」

『付き合ってない！！』

二人がハモって否定する。
何か必死だな～。
そんなに隠したいのか。

「……お前、まだ信じてないようだが俺達は本当に付き合ってないからな」

「そうだよ霧島君」

「……そうなんだ」

「良かった！信じてくれたんだ！」

「いや、まて！コイツ絶対信じてないぞ」

おっ、よくわかったね東。

この時ちょうどチャイムがなって、東と鳴海は自分の席に戻っていった。

担任の先生がやってきて朝の連絡を聞き流し、そして午前中の授業を特に居眠りをすることもなく、ただ無心の状態でボ～～～っとして過ごした。

昼休み。

僕はいつも気に入っている場所で昼食をとっている。

その場所とはズバリ中庭の外れにある比較的大きな木の下。

日当たりがよい上にめったに人がくることがない。まさに独りで居たいときにぴったりの場所だ。

そして今日も僕はそこで昼食を独りで食べるつもりだった。

「アレ？誰かいる……」

どうやら先客がいるようだ。仕方ない、教室に戻ろうかな。

「あっ！兄さん！」

先客から声がかかる。

僕の知っている声、涼の声だ。

先客とは涼だったのか……

「涼はなんでここにいるのさ？」

「兄さんと一緒にお弁当食べようと思って……。姉さんももうすぐ来るよ」

「舞も来るのか……」

その時、僕達の上空を黒い影が通過し、木に突っ込んだ。

「……舞、大丈夫？」

僕がそう呼びかけると、

―シュター―

舞が何事もなかったように一瞬で降りてきた。だけど髪には葉っぱとかが絡まっている。

「問題ない。ちょっと急ぎすぎただけ」

「姉さん！いくら急いでたからって『跳んで』きちゃダメだよ！誰かに見られたらどうするの！」

「それも問題ない。私を見切れるのは父さんと母さん、それに兄さんだけ」

「そうだけど……」

「それに、早く兄さんと一緒にお弁当を食べたかったから……」

「おい、僕は一緒に食べるなんて……」

僕はそれ以上言葉を発することができなかった。
だって、舞と涼が潤んだ目でこっちを見てくるし……。
涼、男なのにその顔はダメだろう。

「ハァ、仕方ない、はやく食べよう。昼休みが終わっちゃうよ」

僕はため息をつきながらそう告げると二人は顔を輝かせた。
あぁ、僕って押しに弱いんだな～
そう自分で思いながら昼休みを過ごした。

放課後に疑心暗鬼

昼休みは特に変わりなく（いつもより二人多かったが）過ごし、午後の授業も適当に過ごした。
まぁ、体育の授業は手を抜きすぎて怒られたけど……
次は少し真面目っぽくしよう。

さて、今は放課後。
部活をしている人は部活動に励み、汗を流したりと色々やっている。
僕は帰宅部なので、これから『帰宅』という行動に励もうと思っている。
僕は教科書の類を鞄に詰め込みそのまま教室を後にしようとする。
しかし、教室を出る手前で肩をガシッと掴まれた。
これでは帰宅ができないので抗議するため後ろを向くとそこには『おしどり夫婦』の二人。

「ねぇ、東。肩を離してくれないかな？」

「それはできないな。離したらお前は帰っちまうだろ」

「そうだけど？」

「ちょっとお前に帰られると困るんだよ」

東の顔が少しばかり怖い。
その隣にいる鳴海もどうやら怒っているようだ。

「僕は早く帰りたいんだよ。家に帰ってレンタルした映画を観ないといけないからね」

「そうか、つまり帰っても暇なんだな。ちょっと来てもらうぞ」

そう言って僕をグイグイと引っ張っていく。
あぁ、映画を観るの楽しみにしてたのに……

「ちょっと！肩痛いよ」

「そうか、我慢しろ」

「いや、それは理不尽――」

『うるさい』

うわっ、二人ハモって言われたら怖いよ！
しかも、肩を掴む力が強くなってるし。

「ここでいいだろう」

そう言って辺りをみる東。
僕が連れてこられたのは校舎の屋上。
一体なんなんだろう……？
まさか！！朝に隠し事がバレていることに対する逆恨み！
つまり僕をここ（屋上）に連れて来たのはボロ雑巾にするため……
なんてこった！このままでは僕の身が危ない。
しかし、これはただの憶測だ。東と鳴海がそんなことを――

「霞、朝のことなんだがな……」

うわ～、予想当たっちゃったよ……。

僕は次に起こるであろう惨劇を回避するため、隠し持っている『眠り玉』にこっそり手にもつ。
さぁ、いつくる……。

「お前、まだ俺達が付き合っていると思ってるだろ」

「そうだけど？」

「ハァ、そうか」

……アレ？ため息ですか？
殴りかかってくるんじゃなかったのか？
……わかった！僕が油断した隙に一気に殺るつもりだな！
束もなかなか考えたな。

「あのね、霧島君。何度も言うけど私達付き合ってないよ？」

「そうだ。誤解だぞ」

「そ、そうなんだ」

ここで油断したらいけない……。

「まだ信じてないな」

「ううん、霧島君が信じてくれないよ～」

鳴海が目をウルウルさせて、今にも泣きそうになっている。
そんな顔で見られたら……
ダメだ！これは奴らの罠――

「……」

「あ～！わかったよ！信じるよ！」

仕方がないんだよ……。
あんな感じに見つめられたら……。
捨てられた子犬みたいだし。
あ～あ、僕、ボロ雑巾になる前に逃げれるかな……。

「なんか投げやりだが……まあいい、とりあえず信じてくれたんだな」

ああ、東のこんなに嬉しそうな顔を見るの久し振りだな。

「ホントに良かったよ！誤解されたままじゃイヤだもん」

鳴海がピョンピョン跳ねて喜びを表現している。
……アレ？僕、殺られないの？杞憂だった？
それなら別によかったんだけど……。
僕は手に隠し持っている『眠り玉』をしまう。

「さて、僕は帰るとするよ。帰って映画を観ないといけないからね」

僕はそう言って屋上を立ち去ろうとしたが……

「まぁ、ちょっと待てよ」

ガシッと僕の肩を掴む東。
僕はまた東に捕まってしまった。

「東、僕は家に帰って映画を観るという予定が――」

「暇だな」

有無を言わさないね、東。

「で、何なのさ東」

とりあえず僕は用事を聞くことにした。

だって、掴まれた方の肩がミシミシいってたし。

「あぁ霞、日曜日三人で出かけないか？」

「日曜日……」

確か日曜日は髪を切りに行く日だな……。

でも髪を切りたくないんだよな～

だったら予定を入れてしまえば髪を切らなくてすむな……。

うん、決まりだな。

「うん、いいよ。別に予定ないし」

「そうか、よかったな鳴海」

「へっ！あ…うん！」

アレ？なんか鳴海の顔が赤いような……。

「兄さん！！いけません！！」

突然聞こえる舞の声。
どうやら、屋上の出入り口から聞こえるみたいだ。
そっちを見ると舞が腕を組んでこっちを睨んでいた。

「兄さん、日曜日はついに髪を切る時でしょう！」

「なに！そうなのか！」

大げさ気味に驚く東。
君がそんなに驚く必要ないじゃないか。

「東先輩、鳴海先輩。兄さんをせっかく遊びに誘っていただいたのにすみません」

舞は東と鳴海に頭を下げる。
なんか僕が悪いことをしたみたいじゃないか。

「いやいや、別に謝れるほどじゃないよ」

東が顔を真っ赤にして答えている。
……珍しい。

「兄さんの代わりと言っては難ですが、代わりに私が日曜日に同行させていただいてよろしいでしょうか」

「えっ、霧島さんがですか！」

東は嬉しそうにしているが、鳴海はさっきと違い残念そうだ。

「むぅ、霧島君が行かないなら私は行かないよ」

「そうですか、では東先輩、二人で行きましょう」

「喜んで！」

あ～あ、顔がニヤケちゃってるよ。

「では、兄さん帰りましょう」

「ちょっと待て、そう言えばお前は何故ここに来た！」

「兄さんが日曜日に予定を入れようとしたのが聞こえたからです」

「聞こえた……どこから？」

「教室です」

教室って……屋上からかなり離れているよな。

まぁ、舞は忍者だし、聞こえるか……。

僕は聞こえないだろうけど。

「兄さん、なにやってるんですか。先輩方はすでに行ってしまいましたよ」

「あ…今いくよ」

僕はみんなを追って屋上を出て行く。

あ～あ、せっかく髪切らなくてすむと思ったのにな……

放課後に疑心暗鬼（後書き）

どうも、この小説をよんでいたたぎありがとうございます。（読者がいるか分からないけど）。コツコツとやり続け、やっと3話です。3話を書くのは苦労しました。操作をミスり全削除を2回やってしまい、かなりショックでした。あの消えたときの喪失感はもう味わいたくありません。　　話は変わりますが、今作の主人公は忍者です。しかし、まったく忍者らしくないじゃありませんか！そろそろ『忍者』として活躍させたいものです。さて、なにさせようか……

涼とお嬢様（前書き）

1日で二回目の更新！

涼とお嬢様

今日は土曜日。
週休2日制のおかげで学校は休み。
あ～、ゆとり教育最高！

さて、僕は今何をしているかと言えば何もしていない。
つまり暇なのだ。

―ピンポーン―

呼び鈴が霧島家に鳴り響く。
誰か来たみたいだ。

―ピンポーン―

アレ？誰もいないのか？

「母さ～ん」

返事がない。
仕方がない、僕が応対するか。

―ピンポーン―

「ハイハイ、今行きますよ～」

僕はリビングから出て玄関へ急ぐ。
玄関のドアにかかっている鍵をあけ、チェーンロックを外す。

「どなたですか～」

僕はそう言ってドアを開ける。
ドアの向こうには清楚な感じの女の子とその横には……今なら秋葉原にいるような格好の人。

「えっと……メイドさんですか？」

「はい、確かにそうです。私はこちらの香苗お嬢様専属のメイドでございます」

「はぁ、そうですか……」

専属ってことは横の女の子はお金持ちか……。

「どうも初めまして。私は西山（ニシカワ）　香苗（カナエ）と申します。よろしくお願いします」

そう自己紹介をして深々と頭を下げる。
礼儀正しい娘だな。

「これはこれはご丁寧に」

こちらも頭を下げる。
一応、こっちも名乗らないとな。

「僕の名前は霧島　霞だ。よろしく」

「霧島　霞さん……涼様のお兄様ですね」

……涼様？

「涼様って……もしかして霧島　涼のことでしょうか？」

自分の頬がピクピクとひきつっているのがわかる。

「はい、そうです」

西山さんは満面の笑み。
なんだか周りに向日葵が咲いてるみたい。

「ところで、涼様はご在宅でしょうか？」

「ん……涼ね。多分居るよ。ちょっと待ってね、今呼んでくるよ」

「はい！ありがとうございます」

やっぱりいい娘だな～

「涼～」

僕は今涼の部屋の前にいる。

「涼～」

ドンドンとドアを叩いても反応がない。
だけど僕は中に涼がいると確信している。
だって涼の気配がするし。

「涼〜、居留守使うつもりなら完全に気配を消せ〜」

「――っ！」

涼が息をのむのが分かった。
たぶん、完全に気配を消していたつもりなんだろう。
まだまだ未熟だね。
僕もだけど……

「……むっ！」

気配からして逃げようとしているみたいだ。
なぜ逃げようとするのか分からないけど、僕から逃げれると思うなよ！

僕はドアを蹴破り涼の部屋へ入る。
その途端、部屋は煙に覆われる。
煙玉か……まだまだだね。

「ていや！」

僕は涼の部屋の窓に鎖分銅を放つ。

「うわぁ！」

涼の声と手に持った鎖に感じる手応え。
捕まえた。
煙幕がなくなるとそこには鎖でぐるぐるになった涼が転がっていた。

「に、兄さん！今回は見逃して！」

「見逃してって言われてもな。何を見逃すんだ？」

「い、今家に来ている娘から……」

「ん？彼女なのか？」

「違うよ！」

なんだ違うのか……

「まぁ、とにかくお客さんがお待ちだぞ」

僕は涼に巻き付いている鎖をほどくと、涼の首をヒョイと持って玄関へ向かう。

なんか涼が猫みたい。

「兄さん！お願いだから見逃して！お慈悲を～！」

「諦めろ」

「そんな～」

色々とジタバタしていた涼だったけど玄関にきた途端、ピタリと動きが止まった。

よく分からないね。

「はい、涼を連れてきたよ」

「ありがとうございます！お兄様！」

ははは、お兄様って……

「さて、僕は自分の部屋に戻るとするよ。昨日、東のせいで観れなかった映画を観ないといけないからね」

「兄さん！行かないで！」

「あぁ、西山さん。何だったら家にあがってくれてもいいよ」

「お心遣いありがとうございます。ですが、私は涼様と私の家に向かう事になっていますので……」

「えっ？そんなのしらな――」

「そうか、まぁ、夕飯までには帰ってきなよ」

「兄さん！？」

僕と西山さんは涼の発言を華麗に無視して勝手に話を進める。

いや、だって我が弟にやってきた春だよ？応援しなきゃね。

「ではお兄様、少々涼様をお借りします」

西山さんはそう言うと、家の前で急停車した黒塗りの高級車に涼を放り込む。

アレ？運転していたのさっきのメイドさんじゃなかったかな？

「それでは」

そう挨拶をして黒塗りの高級車に西山さんも乗り込む。
黒塗りの高級車は西山さんを乗せるとタイヤを滑らせて急発進。
ものすごいスピードで去っていった。
それにしても……メイドさん、かなりのやり手だな……。
あと、誘拐や拉致と……違うよね？

涼とお嬢様（後書き）

そろそろ、主人公を戦わそうと思います。どんな感じにしようかな～。それはともかく、さすがに1日2回の更新は辛い……。もうすぐ暇ではなくなるので更新が遅くなります（多分）

涼、帰宅せず！（前書き）

なんでメイドを出したんだろ……？

涼、帰宅せず！

西山さんが涼を連れて行って大分時間がたった。
そろそろ夕飯時、涼はまだまだ帰ってきていない。

「霞～、涼知らない？」

僕がリビングにある４２型の液晶テレビでレンタルした映画を観ていると母さんが邪魔をしてきた。

「涼なら友人の家だと思うよ」

「あら、困ったわね。もうすぐ夕飯なのに……」

母さんがおたまを片手に、もう片方の手を頬につける。

―ピロピロピロ、ピロピロピロ―

僕の携帯の着信音。
一体誰なんだ？
携帯の液晶画面には『涼』と表示されている。
なんだ、涼か。
僕は観ていた映画を一時停止にして電話にでる。

「はい、もし――」

―あ！もしもし兄さん！―

『もしもし』ぐらい言わせてよ。

―助けて！西山さんに閉じ込められたんだ―

「そうか、夕飯までに脱出しなよ」

―ちょっと兄さん！？助けてよ！―

「お前だって忍者だろ、それくらい出来なくてどうするんだよ」

―出来ないよ！何度も試みたけど、ここのメイドさん強くて捕まっちゃうんだ―

やっぱりメイドさんただ者ではなかったんだ……。

―とにかくボクじゃムリなんだよぉ～―

あらら、泣きそうになってるよ。

―見つけましたよ、涼様―

電話口からあの時のメイドさんの声がする。

―香苗お嬢様がお待ちです、ついて来てもらいますよ―

―い、イヤだ！―

―仕方ありません。無理矢理連れて……あら？外部と連絡をとっていたのですか―

―あっ！返して！―

どうやら携帯をとられたみたいだ。
切られるか？
―とにかく涼様はお嬢様の所にいってもらいます―
パチン
ん、何の音だ？指を鳴らしたのか？
その後にたくさんの人の足音。
―うわぁぁぁ！兄さん助けて～―
どっかに連れて行かれたか……。
―もしもし―
携帯を切ろうとした時に聞こえたメイドさんの声。
「もしもし」
―涼様のお兄様ですね、お名前は確か……―
「霧島　霞だ」
―そうでした、霞様でしたね―
「で、涼は夕飯までに解放してくれるんですよね？」
―お嬢様次第です―

お嬢様次第ですか……

―とにかく、涼様の身は私達が責任をもってお守りいたしますのでご安心ください―

「いや、そういうこ――」

―ではご機嫌よう―

ピッ！、プー、プー

きっ、切られた……。

なんか強引だったな。

「電話、涼からだったの？」

「うん、そうだけどなんか帰れない感じだったよ」

「あら、どうして？」

「逃げようとしてもメイドさんに捕まるみたい」

「メイドさん？」

そりゃあいきなりメイドさんって言われても分からないよね。

「メイドさんって言ったら西山さんちのメイドさん達のことかしら？」

えっ……通じちゃった？
よく分かったね母さん。
……じゃない！なんで母さんが西山さんのメイドさんを知っているんだ！？

「母さん知ってるの！？」

「知ってるもなにも、『西山家メイド部隊』といえばこの町の主婦の間では有名よ」

は？西山家メイド部隊？
意味分からん。

「炊事、洗濯、掃除といった家事を完璧にこなし、なおかつ接客に緊急時の対象も完璧、侵入者に対する戦闘はアメリカ軍に一目置かれてあるのよ」

ア、アメリカ軍？

「そりゃあ涼では逃げれないわ」

「へぇ～、そうなんだ」

「でも困ったわね……皆揃わないと夕飯にできないし……」

母さんは頬に手をつけて悩みのポーズ。
その時にリビングに入ってくる人間。
舞だ。

「……母さん、どうかした？」

母さんは入ってきた舞を見てポンと手を叩いた。
何か考えが浮かんだようだ。

「ねぇ舞、ちょっと涼を迎えに行ってくれない？あの子ったら帰ってこれないみたいなの」

「帰ってこれない？どこから？」

「西山さんち」

「……わかった」

了解はしたけどイマイチ『帰ってこれない』の意味が分かっていないみたいだ。

「そうそう、霞も行きなさい。どうせ暇でしょ」

「母さん、僕はまだ映画を――」

「行くわよね？」

有無を言わさない僕の母。
いつの間に包丁なんか持っているのでしょうか……。

「行けばいいんでしょ行けば」

僕は投げやりに答える。
逆らったら後が怖いし……。

「それと忍道具はフル装備で行きなさい」

「えっ？なんで？」

「それは行けば分かるわ、早く装備を整えていきなさい」

母さんは僕と舞をリビングから追い出した。

仕方がない、装備をとってくるか……。

僕と舞がリビングから出て行った後、母さんが『フフフ、二人にいい修行になるわ』と言っていたのを僕と舞は知る由もない。

涼、帰宅せず！（後書き）

どうも、読んでいただきありがとうございます。次はちょっとバトルが入る予定でいます。後、感想を書いていただくと嬉しいです。

西山家へ侵入せよ！（前書き）

長くなりそう……

西山家へ侵入せよ！

母さんに涼の迎えを頼まれた（脅された）僕は舞と一緒に西山家の前にいる。

「デカいね」

「大きいです」

僕達の目の前にあるのは西山家の門。
僕の家ぐらいあるな……。
とにかくインターホンはどこだ？
あっ、あった。

「……舞、金持ちでもインターホンはあんまり一般人と変わらないんだな」

「インターホンに変えようはないでしょう」

それもそうか……。
僕はインターホンを押す。

「……」

反応がない。
僕はもう一度インターホンを押す。
しかしなにも反応がなかった。

「おかしいな……どうしてかな？」

「涼の携帯にかけてみます」

舞はスカートのポケットから携帯を取り出し涼の携帯にかける。

「……ダメです。圏外か電源が切られてます」

「圏外ってことはないと思うし、多分電源が切られてるんだろうね」

「そう考えるのが正しいでしょう」

さて、これからどうしようか……。呼び鈴を押しても反応がないし、涼の携帯にも繋がらない……。

「とにかく、誰もこないんだから勝手に入るしかないと思うけど……」

「事実、それしかありません」

「でも不法侵入だよ？」

「私達は忍者です。法律なんて関係ありません」

いや、関係大ありだと思うよ？

「そうと決まれば早速侵入です」

舞はそう言うとおもむろに自分の服に手をかけ、一気に剥ぎ取る。

（ように見えるけど素早く脱いだだけ）

すると現れたのは忍装束の舞。

全体が藍色のような色の半袖の忍装束で腕には三本の苦無をくくりつけている。

「ほら、兄さんも忍装束になってください」

「なる必要……あるか？それ以前に侵入はダメだろ」

「つべこべ言わないでください！」

り、理不尽だ……

「早くしてください！」

「わかったよ……」

僕は自分の着ている服に手をかけ、一気に剥ぎ取る。
そこには忍装束の僕。
闇に溶けるような色の忍装束で、舞と違い腕は露出していない。
そして、腰の後ろには直刀の忍者刀。
普段は前髪で隠れている目が現れている。

「あぁ、やっぱり兄さん格好いいです」

舞がなんかポ～として僕を見ている。
格好いい？嘘だぁ～。

「さて、兄さんがカッコ良く忍者姿になったところで早速侵入しましょう」

「まぁ、侵入すると決めたからには真面目にしまいとね」

そう言って僕は覆面をする。
その隣で舞も覆面をする。
もうどこからみても忍者にしか見えないだろう。

「さぁ、行こう！」

僕と舞は跳ぶ。
そして門を上に着地。
まずはどういうとこか見とかないと……。
門の上から見えたのは、まず広い前庭。
そこには噴水とか温室？みたいなやつがある。
そしてその奥にある建物。

「どうやらあれが西山家の邸宅だな……」

「そのようです」

「だとしたら、あの中に涼がいると考えるべきだね」

「ですがあの大きさです。探し出すのは大変かと」

「確かに……」

これじゃあ、絶対に夕飯までに間に合わない。

「そこで、私が新しく作った忍具を使うことを提案します」

「ほぉ、どんなのだ？」

舞はおもむろに懐から、手のひらサイズの黒くて丸いものを取り出した。

「これは、私が特別に火薬を調合して作った爆裂玉で、あの邸宅ぐらいなら木っ端みじんです」

そんな物騒なもの、いつの間にか作ったんだ？

「……で、木っ端みじんにした後どうするんだ？」

「瓦礫の中から涼を掘り出します」

「その方が時間がかかる。却下」

「……」

舞が恨めしそうな目でこっちを見ているけど無視。

絶対、爆裂玉を使いたかっただけだ。

「まっ、仕方がない。とにかく涼を探そう」

「……分かりました」

僕と舞は門からの上から飛び降りて、邸宅に向かい走り出す。

とりあえず短距離の陸上選手の全速力以上のスピードで。

―ビー！！ビー！！ビー！！―

噴水の近くまでくるとなにやら警報音が鳴り響いた。

その音で僕と舞は走るのを止める。

「なんでしょう？」

「警報音……センサーがあったみたいだね」

「では警備員がすぐに来てしまいますね」

「そうだろうね、警備員が来たら厄介だし……とにかく急ごう」

僕と舞が再び走り出そうとした時だった。

『警告します！！直ちに西山家の敷地から立ち去りなさい！！でなければ攻撃を加えます！！繰り返しはしません！！』

僕達の前方で拡声器を片手に怒鳴る人。

声からして女性みたいだ。

「女性の警備員ですか？それにしてはなにか……」

「……ん？いや……違う！あれは――」

『メイド！』

僕と舞がハモる。

なんで警備員じゃなくてメイドさんが出てくるの！？

しかもあの人だけじゃないし！？

なんか横に５人ぐらい並んでるよ！？

……ん？なにあれ？なんかメイドさん達の前に置いてあるもの……。

……って、おい！あれは！

「ガトリングガン！？」

うわ～、ガトリングガンをこっちに向けてるよ……。

『……ところであなた達、その格好はコスプレ？』

……あんたたちだけには言われたくないよ。

「……兄さん、どうしますか？」

「とりあえず……物騒なもんだけでも潰しとくよ」

僕は袖から飛び苦無を五本取り出し、腕はそのまま手の力だけで、苦無を一度に五本放った。

苦無は音もなく飛び、ガトリングガンに命中。

ガトリングガンは煙を上げ使い物にならなくなった。

突然使い物にならなくなったガトリングガンに驚いてメイドさん達が慌てふためいている。

今のうちに行っちゃおう。

「舞、行くぞ」

「……（こくり）」

僕と舞は今度はある程度本気で走る。（というより跳んでいる）

普通の人だったら一瞬の影にしか見えないだろう。

僕と舞は一気に駆け抜ける。

その場に残ったのはガトリングガンをなんとか動かそうとするメイドさん達。

僕達が消えたのに気がついたのは大分たってからだったとか。

西山家へ侵入せよ！（後書き）

どうもありがとうございます。いきなりですが更新スピードが遅くなります。スミマセン。次こそ絶対にバトルさせようと思います。

戦うメイドと忍者（前編）（前書き）

主人公は忍者です。しかし人は殺しません。

戦うメイドと忍者（前編）

西山家の邸宅地下室。
たくさんある中の一番深いところにある地下室。
そこは、モニターやパソコン、通信機といった沢山の機材や装置がところ狭しと並んでいる。
そんな地下室に場違いな人間……メイドさんが何人もいた。
そして装置をいじったり、パソコンをカタカタしたりと忙しそうに動き回っている。
そんなメイドさん達を高いところから見渡すメイドさん一人、何やら電話機で話している。

―スミマセン。侵入を許してしまいました！―

「そうですか……仕方ありません」

メイドさんは沢山並んでいるモニターに目を向ける。
モニターには西山家の敷地に設置されている監視カメラから送られてくる映像を映している。
そのモニターのひとつになにか横切ったような影が一瞬映ったのにメイドさんが気付く。

「97番カメラをメインモニターに、少し巻き戻してください」

「分かりました」

大画面に映る映像を凝視する。

「巻き戻して……ストップ、スロー再生……ストップ！」

ストップをかけたところ、そこには忍者の格好をした人間が映し出されている。

「侵入者は忍者ですか……」

顎に手を当て、どうやら思案の様子。

（コスプレ……という様子ではなさそうです）

そんなことを思っている時だった。

―ジリリリリ、ジリリリリ―

けたたましい音が鳴り響く。

非常事態を知らせる赤い電話機が鳴っていた。

メイドはすぐさま受話器をあげた。

「なんですか」

―大変です！屋上に配置していた狙撃部隊が全滅しました！―

「死傷者の数は？」

―それが……誰も傷ついてないんです―

「……？どういうことです」

―どうやら狙撃部隊全員の銃が破壊されたようで……―

「では、部隊のメイド達は全員無事なのですね」

―はい―

メイドは一度受話器を耳から外し、敷地内に配置しているメイドの位置を映し出すモニターをみる。

「狙撃部隊は二手に分かれ、中庭のハウンド隊と邸宅内を警戒しているビーグル隊と合流してください。私のドーベル隊も出ることにします」

―了解しました！―

メイドは返事を聞くと受話器を降ろす。

「では、ここは頼みましたよ」

メイドはそう言うと部屋から出て行く。

出て行く時、少し口元がニヤリとしていた。

僕と舞は今、西山さんの家の玄関にいる。

あの後、僕は屋上から僕達を狙撃銃で狙う人達を、苦無を投げて無力化させてここまできた。

あ～あ、苦無って結構高価なのに……。

後で回収しないと小遣いが減らされる……。

「兄さん、溜め息ついてどうしました？」

「別になんでもないよ。それよりどう？まだ時間かかる？」
舞は今扉の鍵穴にガチャガチャとピッキング道具を差し込んでいる。
「技術の進歩というものは素晴らしいものです。すでに１０回も開け閉めを繰り返してます」
「もうとっくに開いてたんだね……」
「いま閉まってます」
……おい
「はい、兄さん開きました」
「それじゃ、堂々と真っ正面から入りますか」
僕は忍者刀に片手をかけ、扉を開き侵入する。
中は特に危険はなさそうだ。
それにしても広いな……。
「兄さん、どうしますか？このように広いと部屋も沢山あるはずです。探すのにも限界が……」
確かに一部屋ずつ探してたら夕飯に間に合わない。
「誰か捕まえて聞き出しますか？」
「……そうだね。その方が手っ取り早い」

それじゃあ誰か見つけないと……。
ん？気配？誰かくるな。
飛んで火にいる夏の虫　てか。

「兄さん、捕縛しましょう」

「そうだね……本気でいこう」

僕と舞は一瞬にして消えた。

「人数は……三人か」

天井にぶら下がりながら僕は呟いた。
さて、どうするかな……。

「兄さん、あまり夕飯まで時間がありません。このままでは母さんがお怒りに……」

「……強行策にでるか。時間が惜しい」

僕と舞は一瞬にして巡回中のメイドの前に現れる。
メイドさん達はかなりびっくりした様子だったけど、すぐにアサルトライフルをこちらに向けてきた。

「こちらC班、侵入者発見！直ちに応援を送ってれ！」

ひとりがインカムのマイクに怒鳴っている。
あ～あ、応援呼ばれちゃった。

「兄さん、のんびりしてられません。応援がきます」

「そうだね、とにかく潰そう」

僕は忍者刀を抜き放つ。

『月影』

これが僕の忍者刀の名前。

幼稚園の頃からの僕の愛刀だ。

「容赦はしないよ」

僕は常人では目に見えない速度で間合いを詰める。

そして、光が一閃。

―チン―

勝負は一瞬だった。

僕は涼しい音を鳴らし、忍者刀を鞘におさめる。

その途端、バタバタとメイドさん達が全員倒れる。

「兄さん、なにやってるんですか！」

「大丈夫、峰打ちだから。まぁ、骨までは分からないけど……」

「そうではありません。これでは涼の居場所を聞き出すことができません」

「……しまった。久しぶりだったからつい」

「つい、ではありません」

「仕方ない、応援の人から聞き出そう」

ドタドタと足音が聞こえてきた。

「兄さん、今度はちゃんとしてください」

「わかってるって」

僕は今度は懐から苦無を取り出す。

「てい！」

掛け声と共に放った苦無は廊下の角から出てきたメイドさんに命中、柄の方だから気絶……だよね？

「行きます！」

舞が掛け声と共に丸くて黒っぽいものを投げる。

……あれ？もしかして爆裂玉？

―ズドン、ズドンズドン―

爆裂玉が爆発した。

その爆発にメイドさんもろとも僕達も吹き飛んだ。

「なんてことしてくれたんだ！」

「……張り切りすぎました」

吹き飛ばされた僕たちは中庭と思われる場所に難なく着地。
忍者で助かった。

「そこまでです！」

いきなり現れたメイドさん達、周りをぐるりと囲まれた。
張っていたな……。

「仕方ない、潰すぞ！」

「はい！」

こうして忍者とメイドの見た目不思議な戦いが始まった。

戦うメイドと忍者（前編）（後書き）

まず始めになかなか更新できなくてすみません。諸事情により書くことができませんでした。これからも精進していくのでよろしくお願いします。

戦うメイドと忍者（後編）（前書き）

主人公、メイドでも容赦はしません

戦うメイドと忍者（後編）

中庭でメイドさん達に囲まれた僕達。
この状態を打破するには戦うしかない。
僕は腰の後ろにある忍者刀を抜き放ち、逆手にもって構える。
舞は手に鎖鎌を持っている。
分銅のついている鎖をグルグル回転させている。
メイドさん達は銃剣の付いた８９式５．５６ｍｍ小銃を突きつけている。

「総員、確保！」

その声にメイドさん達が飛びかかってくる。

「無駄です！」

舞が鎖鎌の分銅の付いた鎖をびゅ～んと放つ。
その攻撃にいくらかのメイドさんがダウン。

「ゴメンな」

僕は一言謝罪の言葉を述べる。
そして迫り来るメイドさん達に僕は忍者刀で斬りつける。
まぁ、峰打ちだから死ぬことはない。怪我はするだろうけど……。

「タァ！」

「ていや！」

僕と舞は次々と飛びかかってくるメイドさん達を戦闘不能にしていく。

「つ、強すぎます！化け物ですか！？」

後ろの方にいるメイドさんが叫ぶ。……化け物とは失礼だ。
僕達は忍びであって化け物じゃない。

「そこまでです！」

凛とした声が響く。
その声の方を見ると総勢６人のメイドさん。
その中心には西山さんの専属メイドの人がいる。
どうやらこの人が声の正体みたいだ。

「あなた達は下がりなさい。今の状態では戦闘は無理でしょう」

「しかし！――」

「大丈夫です。あの侵入者どもは私達がぶちのめします」

……なんか、口悪くなってないか？

「さあ、みんなを安全なところへ」

「はい！」

残っていたメイドさん達は倒れるメイドさん達を支えながら去っていく。
残ったのは６人のメイドと２人の忍者。

「さて、よくも好き勝手にやってくれましたね……」

鋭い目つきでこちらを睨みつける。

「私達、ドーベル隊が許しません！」

一斉に８９式５．５６ｍｍ小銃をこちらに向ける。

「撃て！」

―ババババババババ―

甘い！

―キンキンキンキン―

僕は飛んでくる銃弾を忍者刀で弾いたり叩き落とす。

弾ききれなかったり、叩き落としきれなかった銃弾は素早く動いて避ける。

動きが速くて残像が残っている。

「兄さん、援護します！」

舞が無数の苦無を放つ。

飛んでくる苦無に気づき、２人のメイドが撃ち落とす。

２人が撃てていた分の銃弾が飛んでこないこの隙に、飛んでくる銃弾を避けながら一気に距離を詰める。

「はぁ！」

忍者刀を一閃、一人倒す。
後ろから８９式５．５６ｍｍ小銃の銃底で殴りかかってきたメイドの鳩尾に忍者刀の柄で一撃を加え、メイドさんは昏倒。
これで二人。

「兄さん、こちらの二人を無力化しました」

苦無を撃ち落としていた二人を舞が知らぬ間に無力化、これで四人。

「くそぉおおおぉ！！」

叫び、フルオート射撃しながら突っ込んでくるメイドさん。
なかなか男勝りじゃないか。
しかし、何事も自棄になってはいけないな。
僕は足元に落ちていた小石を拾い……

「てい！」

と、手首の力だけで放つ。
小石は見事にメイドさんの額に直撃し、そのままバタッとぶっ倒れた。

「私だけ……ですか」

残ったのは西山さんの専属メイドさんのみ。

「どうやら銃でなく剣（つるぎ）で戦わなければ勝てないようです」

メイドさんはそう言うと８９式５．５６ｍｍ小銃を放り投げ、どこ

からともなく銃剣を取り出した。
こちらも忍者刀を構え直す。

「……」

「……」

双方睨み合ったまま時間が過ぎる。
その緊張感に耐えかねたのか、舞が少し足を動かし、ジャリと音が鳴る。
それが戦闘開始の合図だった。
始めに動いたのはメイドさん、少し遅れて僕も動く。

―カキン、キン、キンキン―

壮絶な斬り合い。
金属と金属がこすれ、ぶつかり合い火花が散る。
こんな相手は久し振りだ。ゾクゾクするね。

「ハァ！」

一瞬の隙をつき、苦無を放つ。
しかし、メイドさんに弾かれてしまう。
それでも問題はない。
なにせ僕の狙いは別にあるのだから……。
僕はメイドさんが苦無を弾いた瞬間、目に見えないで真後ろに回り込む。
そして忍者刀を一閃。

―ガキィン―

！防がれた！？

「舐めないでください……そんな子供達騙し……私に通用すると思わない事です！」

鍔競り合いをしていたけどメイドさんに押し返される。
どうやらメイドさんは本気のようだ。
だったらこっちも本気を見せてやる！

「行くぞ！」

僕はメイドさんに向かって走り出す。
メイドさんは銃剣を防御の構えでもつ。

「我流・零（ゼロ）斬り！」

僕の編み出した技『我流・零斬り』。
この技は文字から想像出来るように、数字のゼロを描くように楕円形に斬りつける技なのだ。
そして、僕はその技を繰り出す。

「ぐふっ！」

そんな声をあげ、メイドさんがバタッと倒れる。
どうやら僕が勝ったようだ。

「兄さん、さすがです。お見事でした」

「う～んそうかな……まだ改良の余地があるよ」

「あっ！そう言えば涼の居場所を聞き出すことを忘れてました」

「あっ……」

すっかり忘れてたよ。

これじゃあ、涼の居場所をが分からない。

―ピロピロピロピロピロ―

？この音は？

「あ、私の携帯です」

舞はゴソゴソと懐を探り、携帯を取り出す。

―ピッ！―

「はい、あっ、母さん……はい……はい……しかし涼は……はい……はい……分かりました。では」

―ピッ！―

「母さんから？なんだって？」

「それが…『よくメイドさん達を倒したわね。帰ってきていいわよ』と」

「じゃあ涼は？」

「それは『涼だって忍者なんだから脱出しないと、これも修行よ』とのことです」

……ということは、まさか涼を連れ帰るというのは嘘で本当は戦闘訓練ってことか？

「はぁ、なんかどうでもいいや……帰ろ」

「そうですね……」

僕と舞は溜め息を吐くと帰宅のため、夕闇の中に一瞬にして消えた。

その後、涼は夕飯ギリギリに泣きながら帰ってきた。
向こうでよっぽどのことがあったらしい。
後、僕と舞がボコボコにしたメイドさん達は半数が入院したらしい。
その他にも、トラウマを抱えたのがいたという話を聞いた。

散髪にいこう（前編）

今日は日曜日。
僕にとってはある意味運命の日。

『散髪』

僕が出来るだけ避けていたことだ。
おかげで僕の髪はボサボサ、前髪は鼻の頭ぐらいまで伸びて、表情を伺うことはできない。
正直、僕だって髪の毛を切りたい。
ならなぜ切らないか？
それは髪を切るとなると必然的にあるものが向けられるからだ。
そのあるものとは……『ハサミ』。
僕は髪を切るだけとわかっていても、どうしても『ハサミ』という刃物を向けられると本能的に身を守ろうとして相手をぶちのめしそうになる。
実際、小学生の時に暴れて母さんに止められた。
その時の記憶はなく、気がつけば病院のベッドに包帯グルグル巻きのミイラ状態で寝かされていた。
そんな過去があり、僕は極力散髪を控えている。
できれば今日だって行きたくない。
だから、僕は前日の晩ご飯を食べたら、そのまま自分の部屋から外へ脱出、一晩野宿してそのままとんずらしようと思っていた。
しかし、母さんは僕の動きに気がついたらしく、僕の晩ご飯だけに眠り薬を混ぜ、気付かずに完食してしまった僕は、階段を上っている時に強烈な眠気に襲われ、そのまま意識を失った。
そして今日、自分のベッドで目が覚めると全身が痛かった。
どうも意識を失った後、階段から落ちたらしい。

「はぁ…」

「なに？また溜め息なんかついて」

僕は朝の食卓に着いている。

箸で鮭の塩焼きをほじくりながら溜め息を吐くと、昨日実の息子に薬を持った張本人が迷惑そうな顔をしてお茶を飲んでいる。

「……この溜め息の原因の大半は母さんのせいだけど」

僕は母さんをジト目でみる。

「あら、どういうこと？」

「どういうことじゃないよ！昨日、僕に眠り薬を盛っただろ！！」

僕はバンと勢い良く両手をテーブルに叩きつけ立ち上がる。

その衝撃で食器が音をたてた。

「あら、そんなことしたかしら？」

「したかしら？じゃないよ！実の息子に薬を盛るってどんな親だよ！」

「……あのね、例え母さんが霞に薬を盛ったとしてもね、気付かない方が悪いのよ」

なっ、なんて親だ……。

僕は唖然として口をあんぐりあける。

「ふぁ～、おはよぉ～」

まだ眠たそうに欠伸をして涼が入ってきた。
その声に固まっていた僕は正気に戻る。

「やっと起きましたか……」

舞がキッチンから出てくる。
どうやら食器を洗っていたようだ。
エプロン姿がなかなか似合ってる。

「おはよー姉さん」

「おはようございます、愚弟」

ぐ、愚弟……？
いきなりなんだ？

「ね、姉さん？愚弟ってボクのこと？」

「あなたの他に誰かいますか？」

舞に言われて涼は泣きそうになっている。

「舞、なんで愚弟なんて言い出したのさ？」

涼が可哀想なのでとりあえず理由を聞いてみる。

「昨日の一件で、私の中で涼の株が大暴落しました。それにより呼

び方が『愚弟』に下がりました」

つまり、見損なったということか……。

「ちなみに兄さんの株は鰻登りに上がりました。よって『兄上』に昇格です」

「あ、兄上ね……」

僕は苦笑いを浮かべる。

別に『兄さん』でもよかったんだけどな……。

そう思いつつ、僕は再び食事を開始する。

「それより愚弟、いつまでパジャマのままでいるつもりですか。早く着替えてきなさい」

「えっ？アレ？着替えてない！？」

……まだ寝ぼけてるのか？

「しかもそのパジャマ、女物です」

「えっ！嘘！？」

涼は自分のパジャマを見て驚いている。

「母さん、どういうこと！？これ買ってきたの母さんだよね！？」

「そうよ」

視線をテレビの画面に固定し、湯呑み片手に簡単に答える。

「なんで女物なんて買ってきたのさ！」

すると母さんは湯呑みをテーブルに置き、ふぅと溜め息を吐いて視線を涼に移す。

「そんなの決まってるでしょ。涼には男物が似合わないからじゃない」

まぁ、確かに今のパジャマでも違和感はない。

全体にアニメチックな猫がプリントされているパジャマなんて普通は中学男子は着ないと思うけど……。

そのことが影響してか、今の涼は女の子にしか見えない。

「うぅ…このパジャマ、可愛いから気に入ってたのに……」

気に入ってたんだ……。

なんか、本当に男なのか疑ってしまいそうだ。

「ごちそうさま」

僕は朝食を食べ終わり、食器を片付けてリビングを出ようとした。

「霞、ちょっと待ちなさい」

ドアノブに手をかけた瞬間、母さんに呼び止められる。

「なに、母さん」

「はい、これ」

そう言って差し出される紙幣。
樋口一葉の肖像画が印刷されている。

『５０００円札』

あぁ、久し振りに見るな～。
けど、これは？

「髪切るでしょ、だから散髪代よ」

「いつも行ってる床屋なら散髪代で５０００円もいらないんだけど……」

１５００円で充分だ。

「あ、理髪店じゃなくて美容院に行きなさい。舞と涼が行ってるとこよ」

えっ、美容院？
それはちょっと気が引けるんだけど……。
なんか、空気があわないっていうか、雰囲気がちょっとね。

「とにかく、美容院に行くのよ。場所は涼に案内させるから」

「ハイハイ、分かったよ」

僕は５０００円札をヒラヒラさせて自分の部屋に戻っていった。

一時間後……
僕は再びリビングに戻って、ソファーに寝っ転がってテレビを見ていた。
―ピンポーン―
呼び鈴がなった。
「霞、ちょっと出て」
母さんに言われ、仕方なく僕は玄関に向かう。
「どなたですか?」
そう言ってドアを開けると東が立っていた。
「よっ、よぉ…」
「どうしたの?」
「い、いや…舞さんを迎えに……」
舞を迎えに?
……あ!そういえば僕の代わりに舞が遊びに行くことになってたっけ。
「今呼んでくるよ」
僕は東をその場に待たせて舞の部屋へ向かう。

舞の部屋は僕の部屋の２つ隣だ。
舞の部屋のドアには『Ｍａｉ』とローマ字の看板が掛けられている。
そして、その下に『火気厳禁』と原発とかで見かけるあの黄色いマークの表示。
そんな物騒な表示がされているドアをノックする。
中から『はい』という声と同時にドアが開く。

「兄上？なんですか？」

「東が迎えにきたよ」

「分かりました。すぐに行きます」

舞は再びドアを閉めた。
さて、僕もそろそろ散髪に行こうかな。
僕は自分の部屋から財布を持ち、リビングへ行く。

「それでは行ってきます」

リビングに入ろうとした僕の後ろを舞が駆け抜けていった。

「いってらっしゃい」

僕がそう言ったと同時に閉まる玄関。
聞こえてないな。

「涼～、そろそろ行こうか」

リビングで本を読んでいる涼に声をかける。

「えっ？そんな時間？」

「そうだよ」

それを聞いた涼は慌てだした。

「に、兄さん。ちょっと待って、準備してくる」

そう言ってリビングを飛び出していった。

涼が戻ってきたのは１０分後だった。

「母さん、行ってくるよ」

「は～い、いってらっしゃい」

家を出た僕は涼に連れられて美容院にむかった。

あぁ、嫌だな～。

散髪にいこう（後編）（前書き）

いつの間にか２０００ＨＩＴを超えていた……

散髪にいこう（後編）

僕と涼はならんで町を歩く。
今更だけど、僕が住んでいる所は霧瀬市というところだ。
町の真ん中を川が流れていて、冬にはよく町全体が霧に包まれる。
町の中心は比較的発展しているけど、少し離れると田園風景が広がっている。
そして、僕達が歩いているのは比較的発展している駅の周辺、駅前の商店街だ。
近年、シャッター通りに成りつつあるような商店街と違い、結構活気付いていて、夕方には主婦の方々や学生で賑わう。
僕も母さんに頼まれて（脅されて）よくおつかいにきたりしたりしてお世話になっている。

「あっ！霧島君！」

なんか聞き覚えがある声がしたような気がする。
僕は声がした方向を見てみた。
だけど人が多く、魚屋さんとか八百屋さんのおっちゃんの声とかの人の声でよくわからない。
気のせいかな……。

「兄さんどうしたの？」

「いや、なんか『霧島君』て呼ばれた気がして……」

「そう？ボクは聞こえなかったよ？」

「ん～、空耳かな～？」

僕は腕を組んで、再び歩き出す。
きっと頭の上にハテナが3つぐらい浮かんでいるだろう。

「き～り～し～ま～く～ん」

再び聞こえた声。
どこかで聞き覚えがあると思ったら鳴海の声だ。

「霧島く～ん」

後ろを振り返ると、鳴海がこっちに走ってきていた。

「奇遇だね霧島君。君も買い物？」

「いや、散髪にね」

「へ～、ついに髪切るんだ～。前髪もバッサリ？」

鳴海はニコニコと笑顔だ。
だけど、隣にいる涼に気付き笑顔が固まった。

「き、霧島君。この隣の人は……ま、まさか彼女！？」

……へ？彼女？
まさか涼のことを言ってるのか？

「彼女って……もしかしてコイツのこと？」

僕はそう言って涼を指差す。

それに鳴海はコクリと頷いた。

「ハハハ、コイツは僕の『弟』だよ。『彼女』じゃないよ」

「おとう、と？」

「弟」

「……男の子なんだ」

鳴海は感嘆の声をだす。

その反応に涼はヘコんでいた。

「ほら涼、自己紹介」

「あ、霧島　涼です……男です」

「滝川　鳴海です。ゴメンね、勘違いしちゃって」

「いえ、もう諦めましたから……」

なんか、涼は女の子に間違えられるのに諦めの境地にいるようだ。

「それじゃあ霧島君に弟君、私まだ用事あるから、じゃあね」

鳴海は踵を返して人混みの中に消えていった。

一体、鳴海はなにがあって僕に声をかけたんだろ？

考えでもって分かるわけがない。

仕方がない、僕達も行きますか。

僕は再び歩き出した。

だけど、涼がまだヘコんでいるらしく足取りが重い。
結局、涼はそのまま立ち直らず、僕はその後ろを歩いていくしかなかった。
おかげで大分到着が遅れることになった。

「ここがそうなのか？」

「うん」

その店は商店街の少し路地に入った所にあった。
見た目落ち着いた感じの外観の店舗だ。

「さっ、兄さん入るよ」

「えっ？あっ、少し待て」

だけど涼は僕の手をグイグイと引っ張っていく。

「こんにちは～」

「いらっしゃ～い」

涼は店員さんとそんなやり取りをして店内に入った。
店内も外観と同じく落ち着いた感じの雰囲気だ。
なかなかはやりそうだけど、店内には客らしき人はいなかった。

「今日はボクの兄さんをお願いします」

「涼君のお兄さんか、分かったよ」

知らぬ間に涼が若い男性に僕のことをお願いしていた。

「お兄さん、こっち座って」

僕は指定された椅子に座る。

涼は近くのソファーに座ってこっちを見ている。

「どんな髪型にする？」

「……まかせます」

どんな髪型がいいか言われても、僕にはどんなのがいいのか分からない。

「そっか、分かったよ」

男性はハサミを手に取る。

これからが大変だ。

『刃物を向けられる』という行為による防衛行動を起こさないように耐えなければならない。

「兄さん」

「なんだい涼、僕はこれからの戦いに備えて精神集中してるんだけど」

「はい」

そう言って渡されたのは缶コーヒー（カフェ・オレ）

「少し落ち着きなよ」

「そ、そうだね」

僕は缶コーヒーをグイッと飲む。
この時、緊張していたからか僕は気がつかなかった。
渡された時、すでに缶コーヒーが開けられていたという不自然さに……。

「……っ！」
急に襲ってきた眠気。
あまりの眠気に手に持っている缶コーヒーを落としそうになる。
しかし、落ちる前に涼が奪い取る。
どうやら、僕が飲んだ缶コーヒーに睡眠薬が混ぜられていたようだ。
しかも、普通の睡眠薬では考えられない即効性。
これは多分、舞が調合した忍び薬の睡眠薬だ。
そこまで判断したけど、襲い来る眠気に抗えない。
薄れてゆく意識……もうダメ。
こうして僕は夢の世界に旅立った。

僕は体が揺らされる感覚を受け、夢の世界から現実に戻っていく。

「……んあっ？」

「やっと起きた」

僕は少し寝ぼけた感じのまま体を起こす。

どうやらソファーに寝かされていたみたいだ。

「よく寝てましたね」

店の若い男性がやって来て言った。

「お兄さんが寝ている間に髪を切らしていただきましたよ」

男性はそう言うと鏡をこちらにむけた。

そこには目を隠すどころでなく、顔を隠しそうなぐらいあった前髪がバッサリ切られており、忍装束の時ぐらいにしか見ることのなかった目があらわれている。

少し鋭いけど優しさが感じられる目だった。ボサボサだった髪も少し長めで置かれている。

「兄さん、格好いいよ。髪をちゃんとしただけども人って変わるんだね」

「……そうか？僕はただ視界が広くなったとしか思わないけど」

前は前髪のせいでよく見えなかった。

「兄さん、明日学校に行ったらきっとスゴいよ」

なにがスゴいのかよく分からないけど、涼の目は輝いていた。

背中に視線を感じながら、とりあえず僕は会計をしにいった。

……美容院で髪を切るのに結構お金かかるんだな。

母さんがお金を出してくれて良かったよ。

お金を払い、僕と涼は店を出た。

家に帰る途中、涼が寄り道をしようと言ってきたけど、僕は断って

真っ直ぐ家に帰った。
その間、涼は頬を膨らましてずっと怒っていた。
そんなんだったらひとりで行けばいいのに……。

散髪にいこう（後編）（後書き）

なんかグダグダな小説を読んでいただきありがとうございます。おかげで２０００ＨＩＴにいってました。これからもコツコツと頑張っていきます。前回、バトルをやってみましたが、正直なところ訳が分からなくなりました。ちなみに、メイドさんはもう出ません。この小説ですが、とりあえずこのまま平和に話を続けていくつもりです。主人公などにやらせたいこととかなにかあったらお申し下さい。

父、帰宅につき

『ただいま～』

僕と涼が声をそろえて言って玄関に入る。
すると、リビングの方から『おかえりー』という母さんの声が聞こえた。
道中、ずっと不機嫌だった涼は、不機嫌なまま自分の部屋へ行った。
僕は母さんにお釣りを返しにリビングへ向かう。
もし、お釣りをちょろまかしたすると、後が恐ろしいことになるのが分かっているので、僕はお釣りを誤魔化さない（誤魔化すことができない）

「母さん、お釣り」

「テーブルの上に置いといて～」

母さんに言われたとおりにレシートとお釣りをテーブルに置く。
僕はそのまま、近くにあるソファーに腰をかけてテレビを観ることにした。

テレビを観て１０分くらいたった時だった。

「ただいま」

という声が玄関から聞こえた。
その後、パタパタという足音をさせ、リビングに入ってくる人間。

「あ、兄上。帰ってましたか」

東と出掛けたはずの舞が帰ってきた。
まだ昼をちょっとしか過ぎていない。
帰ってくるには早すぎる。

「あれ？舞帰ってくるの早かったね」

「はい、東先輩はどうやら今日、サッカーの試合をほっぽりだしていたらしく、サッカー部の人達に見つかり連れ去られていきましたので帰ってきました」

東、試合サボっちゃダメだろ……。
レギュラーなんだから。

「ところで兄上」

「なに？」

舞が頬を赤らめてこっちを見ている。

「……人って変わるものですね」

「……はい？」

舞はよく分からない事を口走ると、さっさと自分の部屋に戻っていった。
……最近、家族みんなでの団欒というものが少ないと思う。
涼と舞は自分の部屋に籠もってるし……。
僕がちょっと霧島家の家庭関係に心配を覚えた時だった。

―プルルルル、プルルルル―

家の電話がなった。

「霞～、ちょっと出て～」

台所から母さんが声をとばしてきた。

「え～～、僕、今手が離せ――」

―ドン！―

僕の目の前に突き刺さった包丁。

背中に嫌な汗がかいているのが分かる。

「あら、手が滑っちゃった。また滑っちゃうかもね」

あっけらかんという母さんの手には予備の包丁が握られている。

なんか、目が光ったような……

「あっ、手が滑っ――」

「電話に出てきます！」

僕はリビングから飛び出した。

全く、母さんには逆らえないよ。

僕はとにかく、いまだにけたたましい音を鳴らしていた電話をとる。

「はい、もしもし霧島です」

「お、霞か」

受話口から聞こえてきた男性の声。
ここのところ、出張で見かけなかった父さんの声だ。

「うん、そう――」

「時間ないから手短に言うぞ」

僕が言い切る前に父さんが言葉を重ねる。

「父さん、予定が早まって今日帰るから。母さんに言っといてくれ……あっ、晩御飯はいらないから、じゃ！」

―ブツ！プープープー―

父さんは一方的にまくし立てると勝手に切ってしまった。
僕は受話器を置き、リビングに戻る。
すると母さんが台所からお玉片手にやってきた。
……包丁じゃなくてよかった。

「霞～、誰からだった？」

「父さんからだったよ」

「そう、それでなんて？」

「今日帰るだって」

「えっ！どうしよう、晩御飯作ってないわ！」

母さんは手を口に驚いている。

「晩御飯はいらないって」

「あらそう、よかった」

母さんは再び台所に戻っていった。

僕はその後なにもすることもないので、晩御飯までずっとテレビを観ていた。

晩御飯を食べ終わり、家族団欒の時を過ごしていたときだった。

「今帰ったぞ～」

という声と共にリビングにスーツを着た男性が入ってきた。

……窓から

そう、庭に出ることのできる窓からだ。

「父さん、玄関からはいってきなよ」

「ん？まぁ、固いこと言うな」

父さんはやれやれという感じでソファーに腰を降ろすとネクタイを緩めた。

「母さん、ビール取ってくれないか」

「はい、どうぞ」

高速で飛んでくる缶ビール。
父さんはそれを見ることもなくキャッチした。
缶ビールをプシュという音をたててあけると、泡が溢れ出してくる。
父さんは慌てて溢れ出してくる泡を飲んだ。

「やっぱりビールを投げてたりするのは駄目だな」

呑気にそんなことを言いながら、僕が観ていたテレビを勝手にチャンネルを変える。

「……僕、観てたんだけど」

「んぁ？そうか、悪かったな」

父さんは謝罪の言葉を述べたが、チャンネルを戻す気配がない。
どうやらチャンネル権は完全に奪われてしまわれたようだ。
こうなると諦めるしかない。
奪還しようものなら確実に武力衝突になって、僕はその後、五体満足で過ごせるか分からないだろう。

「そういや霞、お前髪切ったか」

「え、切ったけど？」

父さんはじ～～っと僕を見てくる。
まるでなにか吟味しているようだ。

「これなら……大丈夫だな」

小さい声で父さんが呟く。
なにが大丈夫なんだ？

「よし、写真を撮るなら今しかない！」

そう言って立ち上がる父さん。
その様子を見て母さんが何かを察したようだ。

「母さん、準備を！」

「分かったわ！」

母さんは興奮した様子でリビングから飛び出していった。
一体なんなんだ？

「兄さん、いったい何事？」

戸惑った様子で入ってきた涼。
どうやらお風呂上がりのようだ。

「さぁ？僕にもさっぱり」

「……あれ？父さん？」

「ん？おっ、涼か。すまんなちょっと今忙しいんだ、用事あるなら後にしてくれ」

父さんはなぜか、テレビとかソファーがある区画を片づけていた。

「父さん帰ってきてたんだね、気付かなかったよ」

「ああ、ちょっと前に帰ってきたんだよ」

普段の様子から想像できないぐらいテキパキと片づけている父さんの様子を二人で傍観する。

「霞、ちょっと来なさい」

突然、戻ってきた母さんに腕を掴まれて連れて行かれる。
連れて行かれたのは僕の部屋。

「霞、今から制服に着替えなさい」

「えっ、なん――」

「着替えなさい」

首に苦無を突きつけられる。
とにかく着替えろってことだね。

「わかったよ、着替えればいいんでしょ」

「分かればいいのよ、じゃあ着替えたら下に降りてきてね」

母さんはそういい残し、僕の部屋から出て行った。
とにかく、僕は制服に着替えることにした。

制服に着替えてリビングに降りると、リビングの一区画、テレビとソファーがあったところが、撮影スタジオみたいに変わっていた。

「霞、ここに座れ」

父さんはスタジオの真ん中にある椅子を指差す。
僕はその指示通りに座る。
すると、母さんとなぜか舞が近くにやってきてちょこちょこっと髪をいじった。
母さんと舞が離れると、父さんは三脚にセットされた一眼レフのデジタルカメラを覗き込む。

「霞、ちょっと笑って……」

僕はよく分からないまま、少しはにかむ感じで笑う。

―カシャ―

とシャッターが降りる音がした。
父さんはデジタルカメラの液晶で撮った写真を確認する。

「うむ、これで充分だよ母さん」

「そう、それはよかった！」

父さんは母さんに親指をあげグッとして、母さんは手を叩いて喜んでいた。

「ねぇ父さんに母さん。一体いきなり写真なんか撮ってなんなのさ」

「ふふふ、そのうち分かると思うわ。さあ父さん、早速始めましょう」

「そうだな。早速作業にかかろう」

母さんと父さんはいたく興奮した様子で、デジタルカメラをもってリビングから出て行った。

残されたのは、僕とよく状況がのみこめていない涼、なぜか平然としている舞に、撮影スタジオと化しているリビングの一区画。

これ、誰が片付けるんだ？

「兄上、とにかく片付けましょう」

「……そうだね」

「ほら愚弟、さっさと手伝いなさい」

「えっ、ボクも？それに愚弟って……」

撮影スタジオと化したリビングの一区画は、結局僕と舞と涼が協力して元に戻すことになった。

そういえば僕、なんで写真なんか撮られたんだろ？

しかも、いちいち制服に着替えさせて……。

元に戻す作業中に考えてみたけど、結局僕には分からなかった。

閑話休題・登場人物紹介（前書き）

※注意　まだ、小説で明らかになっていない設定が出てきます。
知りたくない人は回れ右。

閑話休題・登場人物紹介

霧島（キリシマ）　霞（カスミ）

主人公。
霧島家の長男で顔はなかなかいいのだが、髪がボサボサで前髪は目を隠していて、通りすがりの小学生に、『幽霊だ！』と指差されたことがある。
しかし、今は髪を切ってちゃんとしている。
忍者としては霧島家で三番目の実力の持ち主で、『先手必勝』『卑怯結構』をモットーにしている。
その影響か、『武士道』『正々堂々』という考えが嫌い。
忍刀の『月影』を主体にする攻撃が得意であるが、他にも様々な忍具を使いこなすことができ、オールマイティーな戦いをする事ができる。

霧島（キリシマ）　舞（マイ）

霧島家の長女。
黒く長い髪の持ち主で、見た目は大和撫子な感じである。
学校ではモテるらしいが、本人は全く色恋沙汰に興味がない様子で、告白してきた人には精神的に再起不能になるような断り方をしているらしい。
忍者としては霧島家で四番目の実力の持ち主。
火薬の調合や忍び薬の調合が得意で、日々自分の部屋で研究をしている。
最近ではウランの研究をしているらしく、かなり危ない道に走って

いる。
調合の技術を生かし、家ではカレーをスパイスから調合して作ったりする。
本人曰く、料理は比較的得意らしいが、実際に関しては未知数である。

霧島（キリシマ）　涼（リョウ）

霧島家の次男?。
女顔で、初対面の人には必ずといっていいほど女の子に間違えられるが、戸籍上の性別は男である。
しかし、生物学上の性別は霞も舞も涼の性別をハッキリさせられない。（知っているのは母と父のみ）
本人は男だと言い張っている。
なぜか、体育の授業と水泳に参加することを母と父に禁じられている。

忍者としては霧島家で最も下の実力。
だからといってもそこらのチンピラとかヤクザよりは上……のはず。
家事全般が得意（唯一、霞や舞に勝てる）で、たまに料理を作ったりしている。

霧島家　　母親&父親

霧島家の大黒柱であり、霧島家最強の父親と、霧島家最大の情報ネットワークを持ち、霧島家で二番目の実力の持ち主の母親。
父親は見た目、眼鏡のグーたらな中年サラリーマン、母親はどこにでもいそうな主婦である。

早川（ハヤカワ）　東（アズマ）

霞のクラスメート。
中学の時からの友人で、サッカー部所属。ポジションはキーパー。
一年生でありながら、レギュラーに選ばれた。
その事から女子にまあまあモテるらしい。
鳴海とは幼なじみでよく二人で登校する姿から、二人は付き合っていると周りから認識されている。

滝川（タキガワ）　鳴海（ナルミ）

霞のクラスメート。
東と同じく、中学からの友人。
家が神社でよく巫女として手伝っている。
霊能力があり、見えないものが見える。
東とは幼なじみ。

閑話休題・登場人物紹介（後書き）

今回は登場人物の紹介でした。ちなみに霞の両親の名前は考えていません。あくまで父親は父さん、母親は母さんです。まだ小説内で出ていない設定がいくつも紹介しました。そのうち小説内で出てくると思います。あと新キャラも……。あ、そういえばユニークが３０００を越えていました。ビックリですね～。実はこの小説、ちょっとしたノリで書きました。いや、メイドとか魔法少女とか、なんか正義と悪の戦いに乱入して双方をボコボコにしたりする小説って面白いかな～て。まぁ、バトルが上手く書けないからまだやらないけどそのうちやります。とにかくこれからも頑張らないと……。

日々に変化の兆し（前書き）

感想等あればしてください。

日々に変化の兆し

「いってきまーす」

僕はそう言って家を出る。
いつも一緒に行っている二人がいないことを除けばいつも通りだ。
舞はどうやら用事があるらしく、先に学校に行っている。
涼は僕が朝ご飯を食べている時点でまだ眠っていたから、きっと母さんによる恐怖の目覚めが待っているだろう。

「ひゃ～～～～！！」

朝の静かな住宅街に響き渡る涼の悲鳴。
全く、近所迷惑じゃないか。

僕は再び静かになった住宅街を歩く。
いつもと同じ景色だけど、今の僕には結構新鮮だ。
周りがよく見えるようになったし、いつも登校中に出会う小学生に『幽霊だ！』と指をさされることもなかった。
本当、周りから気味が悪いものを見るような眼で見られないようになって良かった。
僕は意気揚々と学校への道のりを歩く。

「にぃ～ふぁ～ん」

後ろから聞こえたくぐもった声に僕は振り返ると、涼がトーストをくわえて走ってきていた。

「に、にぃふぁん。おひふぇひふぁふぁふぃへ」

「なに言ってるか分かんないよ」

涼はくわえていたトーストを鞄を持っている手と逆の手に持つ。
口の中に入っていたのを飲み込むと、今度はちゃんと日本語を喋り出した。

「兄さん、おいてかないでよ」

「起きないのが悪い」

「起こしてくれてもいいじゃない」

トースト食べながら言われてもな……。
第一、トーストくわえて走って登校なんて普通するか？

「母さんが起こすだろ」

「母さんの起こし方じゃ、ボクの身が持たないよ」

「だったら自分で起きることだね」

「そんなぁ～」

そんな子犬みたいな眼をしてもダメ。
もうその眼に対する耐性は出来ているんだ。

「兄さんの薄情者！」

「そうだけど？今更気がついたの？」
薄情なのは自覚している。
「……うぅ、嫌みが通じないよぉ～」
あらら、涙目になっているよ。
涼って泣くと面倒なんだよな～。
なかなか泣き止まないし、泣き声はうるさいし……。
まぁ、今じゃあおおっぴらに泣くようなことはなくなったけど……。
「ねぇ、兄さん。なんでボクを面倒なものを見るような目で見てるのさ！」
ん？よくわかったね。
今まで、涼は分からなかったのに……。
あっ、髪切ったからか。
今は普通に僕の顔は隠れてないしね。
あ～あ、今までだったら表情とか読まれなかったのにな～。
「ちょっと、兄さん！聞いてるの！？」
横で涼が何か喚いている。
うるさいったらありゃしない。
涼も泣きそうになったり怒ったりして大変だろうに……。
……情緒不安定なのかな？
とにかく、僕は横で喚いている涼の声がうるさいので聞き流すことにした。
涼は学校につく間、僕の横でずっと何か喚いていた。
途中、泣きそうな声で

「母さんに兄さんの悪事を捏造して言いつけてやる」
と聞こえたので、とりあえず兄弟の戯れとして絞めておいた。

学校に着き、僕はいつも通りに１－Ｃの教室の前。
そして、ためらいなく教室の扉を開く。
すでに教室に入っていたクラスメート達が、一瞬僕を見たけどすぐに興味を失して、各自自分のしていたことに戻る。
１秒、２秒、３秒、と時間が過ぎる。
そして、５秒たった時……。

―バッ！―

教室にいるクラスメート達が一斉に僕をみた。
なんか、視線が集中して恐いんですけど……。
僕は出来るだけ視線を気にせず、自分の席につくことにした。
あぁ、視線が痛い。

「なぁ、アイツ誰だ？」

「転校生じゃないのか」

「それだったら教室じゃなくて職員室だろ」

「というか、あそこの席誰だった？」

「え～～と確か……。ゴメン、分かんないや」

小声だけど、僕には聞こえる会話。
どうもクラスの中の僕は空気のような存在だったみたいだ。
正直、ちょっと悲しい。
まぁ、僕もクラスメートの名前なんて東と鳴海しか知らないけど。

「よっ！霞！」

その声と共に、背中に感じる衝撃と痛み。
その衝撃に少し驚きながらも僕は振り返る。

「おはよ、霧島君」

「あ、おはよう鳴海、東」

振り返るとそこにはやっぱり東と鳴海がいた。

「今日も『夫婦』で登校なんだ」

「いや、だから夫婦じゃないって」

「あっ、そっか。まだ東が１８じゃないもんね、籍はまだ入れてないよね。……じゃあ今はカップル？」

「……言い方が悪かったな。霞、俺達は夫婦でもカップルでもない！ただの幼なじみだ！」

「それくらい知ってるよ。ただの冗談さ」

「……冗談にはキツすぎる」

そんな僕と東のやりとりを見ていたクラスメート達がざわめきだした。

「……霞って、まさか霧島のことか！？」

「たしか霧島君って、なんか幽霊みたいな人じゃなかった？」

「そうそう、なんか表情が前髪で隠れて分かんなくって気味悪かったわ」

「髪切るだけで人って変わるのね～」

そんな感じの声が聞こえてくる。

「にしても、霞変わったな」

東が感嘆の声を漏らす。

その横では、鳴海が顔を真っ赤にしてこっちを凝視している。

「これは鳴海、急がないとヤバいんじゃねぇ～か」

東が顔をニヤニヤさせて肘で鳴海を突く。

「え、いや、その……えっと……あの、だ、大丈夫だよ！」

顔が真っ赤なまま言う鳴海。

なにが大丈夫なんだろう……。

「そうか～？今日の一件できっと狙ってくる奴が出て来るぞ。今ま

では鳴海一人だったから良かったけど、今度はそうも言ってられなくなるぞ」

「そうだけど……」

狙ってくる？

まさか鳴海は命を狙われているのか？

んなわけないか……。

きっとなにかの景品のことだろ。

「そんな弱気じゃいかん！女は度胸だろ！」

「女は度胸……」

「そうだ！度胸だ！」

「度胸……そうだよね！女は度胸だよね！」

なんか、東と鳴海が勝手に盛り上がっている。

盛り上がるのはいいけど、僕の席の隣でするのはやめてくれないかな……。

「ということで霧島君」

「へっ？なに？」

いきなり鳴海に会話を振られてびっくりした。

「今日から”霞君”って呼ぶことにしたから」

「あ、うん了解」

鳴海は僕の返事を聞くと満足そうな顔をして、スタスタと自分の席に行ってしまった。

「はは、少し進展だな鳴海」

「進展って、なにが？」

「……敵は意外と強敵かもな」

東は僕に呆れた感じで言うと自分の席に戻っていく。

一人残された僕は、なんか今までに感じたことのない類の視線を感じ、その方向を見る。

そこには5人位の女子のグループが僕を凝視していた。

目立たず、普通に生活してきたのに……。

髪を切って素顔をさらけ出しただけで、なにか変わってしまった気がする。

……もぉ一体、なんなんだよぉ！

日々に変化の兆し（後書き）

どうも！　月見　岳です。読者の皆様、こんな小説に付き合ってもらいありがとうございます。　さて、作者はこの小説、そろそろ最終回に繋げるような話を考えなければいけないと思っています。

しかし、全く思いつかない現状から、最終回はまだ先になることでしょう。　さっさと終わればいいのに！　と思った方、どうもすいません。まだ色々とあるんです、はい……。　次回更新は少し遅いかもしれません。

霞のお嫁さん

髪を切ってすっかりこの髪型に慣れて、数日がたったある日のことだった。
その日は土曜日で、僕は前日の学校からの帰りに寄った、某有名レンタルショップから借りてきた映画を観ていた。
前回はアクションだったけど今回はＳＦだ。
地球にＵＦＯがやってきて攻撃してくる。人類は力を合わせて、全世界一斉攻撃を仕掛けるとかいうハリウッド映画だ。
事の始まりは、物語が終盤に入った頃だった。
台所で夕飯の支度をしていた母さんが唐突に言ってきた。

「あっ、霞。あんたのお嫁さん決まったから」

「ふぅ～～ん」

……あれ？なんか流しちゃいけないような言葉じゃなかったっけ？

「母さん、今何だって？」

「聞いてなかったの？返事してたじゃない」

「映画に集中してたから聞き流した」

「あんたねぇ～～」

ハァと母さんが溜め息をつく。

「もう一度言うわよ。あんたにお嫁さんができたわよ」

「……」

僕はテレビの画面を観たまま固まる。

……お嫁さんって、あれだよな。結婚の相手で……えっ、お嫁さん？誰の？確か母さんは『あんたに』て言ってたよな……。その時母さんと会話をしていたのは僕だけだし、部屋にも母さんと僕しかいない。つまり母さんの言う『あんた』は僕のことであり、つまり僕にお嫁さんができたということで……。

「ええ～～～！？」

「ちょっと、びっくりするじゃない」

「こっちの方がびっくりだよ！」

テレビの画面では沢山のＦ－１５が隊列を組んで飛んでいる。クライマックスまで近い所までいっている。

だけどもう映画どころでない、こっちは勝手に人生の相手を決められなければいけないか問い詰めなければならない。

「どういうことだよ！」

「どういうこともなにも、めでたくお嫁さんが出来たってことよ」

「なんで！」

「そりゃ、相手があんたのことを気に入ったからに決まってるじゃない」

「あ～～っ！そういうことじゃなくて！」

僕はイラついて頭をガシガシと掻く。

「どうして勝手に人の人生を左右しちゃうようなことするのさ！」

「だって、あんた霧島家の跡継ぎじゃない」

「だからなんなのさ！」

「だから霧島家の忍者を残していくために他の一族からお嫁さんをもらわないと……」

「だったら僕じゃなくて涼でもいいじゃないか！」

「涼では無理なのよ」

「どうして」

「どうしても」

「そんなの理不尽だっ！！」

「まっ、このことに関しては夕飯の後に父さんから詳しい話があるから」

「やっぱ父さんが原因か！」

「あ～～もう、ギャーギャーうるさいわよ。ちょっと静かにしなさい。さもないと……ねぇ？」

母さんが包丁を片手に、笑顔でこちらに振り向く。
笑顔だけど眼が笑っていない。
背中がゾクリとする。
僕は否応なしに黙らされることになった。

「さあ、話せ。やれ話せ。とにかく話せ、馬鹿親父」

父さんが夕飯を食べ終わった頃を見計らって、僕は父さんに詰め寄った。

「か、霞？一体何のことだ？父さんにはサッパリ……それに馬鹿親父とはあんまりだ」

「戯言は聞きたくない」

「な、なんか兄さん怖い……」

涼が僕の剣幕に少し震えている。
これは仕方がない事なんだよ涼。
こいつはとんでも無いことをしてくれちゃったんだ。

「父さん、よくも人の人生を左右するようなことをしちゃってくれたね……」

「うむ、何のことだ？」

「とぼけないで！」

バンと両手でテーブルを叩く。

「なに勝手に人の結婚相手決めてるんだよ！」

僕の言葉に涼は呆然とし、父さんはなにか心当たりがあったみたいで顎に手をあて笑っている。

「あぁ、その事か。良かったろ、嫁さんができて」

「良くない！」

「可愛くて家事も出来るし……いい娘だぞ？」

そう言って父さんは写真を見せる。
お見合い写真みたいな感じの写真だ。
写真の中の娘は満面の笑みで笑ってる。
なんか、笑顔が眩しい。
セミロングぐらいの髪で、パッチリした目をしていてスッキリとした顔立ち。
将来的には、美人になることだろう。
しかし、今はまだ『愛らしい』の範疇に入る……そんな感じの女の子だ。

「忍三家の桃地家の三女、桃地（モモチ）　朱里（アカリ）さんだ。忍者としても腕がたつぞ」

「……しのびさんけ？なにそれ？」

「兄さん、興味もつのそこなんだ」

うるさい、涼。

「あぁ、そうか。お前たちはまだ知らないんだったな。いい機会だ、教えておいてやる。『世界』というものの一部をな」

すごく真面目な顔をして父さんは言った。

僕が今まで見てきたグーたらな父さんとは違った感じの雰囲気だった。

霞のお嫁さん（後書き）

え～～、題名が『霞のお嫁さん』のくせに、お嫁さんが登場する訳でもなく、名前のみの登場となってしまいました。どうもすみません。

次回は少し真面目な話（の予定）になります。

井の中の蛙、大海を知る。（前書き）

※ほぼ全文が会話です。しかも読みにくいと思います。スミマセン。

井の中の蛙、大海を知る。

僕達が”忍者”であることの理由。

それを父さんから聞かされることになり、自分の部屋で新型爆裂玉の制作をしていた舞を呼び出し、僕達三人は父さんと母さんに向かい合って座った。

「父さん、いきなり呼び出してなんです？」

「お前たちに話しておかないといけないことがあってな、それで集まってもらった」

「何なんですか？」

「我々、”忍者”の存在についてだ」

お前たち、自分がこの現代において”忍者”であることに疑問に思ったことあるか？

そりゃあ頻繁にあるさ。

私もそう思うことがあります。履歴書に書けるようなことではありませんし……。

ボクもそう思うよ。

まぁ、そうだろうな。

……で、ボク達”忍者”の存在ってなんなのさ？
今時、主君に仕えているってことはないんでしょ？

仕えている……じゃないな。組織として存在しているからな。

組織だって？

うむ、三つの忍者の一族が集まって形成された組織、それを『忍三家』と呼んでいる。

そのまんまですね。

うるさい。父さんが考えたんじゃない。
……でだ、その忍三家は、桃地家、鷹山家、黒井家の一族で形成されていて――。

ちょっと待ってよ！
僕達、霧島家は忍三家じゃないの！？

話は最後まで聞け霞。今から話すとこだったんだ。

……ゴメン。

……でだ、我々霧島家は忍三家には入っていない。
我々霧島家の役割、それは『忍三家』のバックアップだ。

バックアップ？
どんな事？

それを話す前に、『忍三家』の役割と『世界』の一部について話しておこう。
まず『世界』の一部についての説明だが、『表の世界』があると同時に『裏の世界』も存在するということは分かるか？

マフィアとかスパイとかの裏社会ってこと？

そうだ。よく分かってるじゃないか。伊達に映画ばっかり観ていないな。

……悪かったね。

まぁ、『裏の世界』は”裏社会”の認識でいい。問題は次だ。

次？

『世界』は階層を為している。だから、裏社会の裏社会が存在する。この裏の裏社会のことを『闇の世界』と言ってるがな。我々は。そして、この『闇の世界』こそ”忍者”の仕事場だ。

『闇の世界』ってどういうとこなんです？

『表の世界』より、科学が発展している。オーバーテクノロジーって奴だな。
そして何より、空想の世界でもある。

空想の世界？妄想の世界の間違いじゃないの。

失礼な。父さんは妄想癖なんぞないぞ。

父さん、空想の世界ってどういうこと？

ん？あ～～、簡単に言えば、パラレルワールドとか魔力とかだな。

……父さん、精神科行く？

母さん、父さんの言ってることは本当なのですか？

ええ、本当よ。
それに、父さんは言ってないけど『闇の世界』は法律とかそんなの一切関係ないわよ。
命の値段が簡単に付けられるんだから……。

『闇の世界』は『表の世界』の人間には知ることはできない。まぁ、『裏の世界』の人間は何かを感じてはいるだろうが、やはり『闇の世界』を知ることはできない。
もし、知ったとしたら元の世界には戻れない。
もちろん、『闇の世界』より深い世界は存在する。
まぁ、その存在しか分からないがな。

だから『世界の一部を教える』って言ったんだね。

ああ、『世界の全体構造』を知るのは我々〝忍者〟では無理だからな。

……？ところで『忍三家』の役割って？

おっと、忘れていた。『忍三家』の役割だったな。
このことは母さんから話してもらう。なにせ母さんは鷹山家の人間

だったからな。
母さんの方が詳しい。

母さんて、鷹山家ってとこから嫁にきたんだ……。

え～～と、『忍三家』の役割だったわね。
簡単に言えば、『忍三家』は『闇の世界』を『表の世界』と『裏の世界』に知られるようにすることよ。

え？『表の世界』と『裏の世界』は『闇の世界』を知ることはできないんじゃないの？

そうよ。だけど、『闇の世界』の住人が『表の世界』に介入は出来るのよ。
もし、『闇の世界』の住人が『表の世界』に『闇の世界』の存在を明かしたら……『世界の階層』がなくなって、世界は混沌と化すわね。
まっ、もし『闇の世界』のことを話ても『表の世界』の人間は実際に”力”を見せない限り信じないでしょうけど……。
だけど、もしその様な存在が現れたりしたり、『闇の世界』で起こった事が漏れそうな感じになったりしたら『忍三家』が処理するのよ。
宮内庁の任を受けてね。

く、宮内庁？

そうよ、『忍三家』は宮内庁の管轄よ。
警視庁とか防衛省の管轄ではちょっと変でしょ。”忍者”として。

……そんなんでいいのかな～？

でね、霧島家はその『忍三家』のバックアップ及び援護が主な役割なのよ。
ま、今はそんなに任がくることはないわ。大体が『忍三家』で処理してるから。

……さて、大体話す事はこれくらいだな。
もし、まだ知りたいことがあるんだったら自分で知ることだ。
それじゃあ、これにて終了！
あ～、疲れた……。
母さん、ビール。

もう飲んだでしょ。
ダメよ。

そ、そんな～。

井の中の蛙、大海を知る。（後書き）

前書きにも書きましたが、ほぼ全文が会話になってしまいました。
（というか、そうしました）　次回は元に戻りますので……。

霞、遭遇する。（前書き）

新しい連載しました。そちらもよろしくお願いします。

霞、遭遇する。

父さんたちの話から数日。
僕は胸につっかえるような感じがしていた。
なにか、僕は大事なことを忘れているような気がする……。
しかもかなり重要なことを。

「……う～～ん？」

このところ僕はずっと思い出そうとしている。
”あの話”の前のことだったと思うんだけど……。

「……う～～ん」

「おいおい、どうしたんだ。朝からずっと唸ってるじゃないか。道に落ちてるものでも食べたか？」

僕が首を捻って考えていると、東がとても失礼なことを言ってきた。

「失礼な！僕が東みたいに道に落ちてるものを食べる訳ないだろ」

「食べるか！」

「えっ！食べないの！？」

「……そんなにびっくりしないでくれるか」

東はがっくりと頭を垂れる。

「俺ってそう思われてたんだな」

「なにを今更」

「……」

東は頭を垂れたまま、ヨロヨロと自分の席に戻っていった。
途中、他の人の机に当たって席の人にボールペンでつつかれていた。
なぜか東の周囲だけが薄暗く感じるのは気のせいか？

「ねぇねぇ霞君」

クイクイと制服の袖あたりを引かれる感じと共に背後から聞こえる声に僕は振り返る。
そこには最近、僕のことを”霧島君”から”霞君”と呼ぶようになった鳴海が後ろの席に座っていた。
確か僕の後ろは鳴海じゃなかったような……。

「なんかね、A組に今日転校生が来るみたいだよ」

「ふ～ん、そうなんだ」

「あれ？気にならないの？転校生だよ？」

「うん、どちらかといえば、鳴海が僕の後ろの席に何故我が物顔で座っているかの方が気になる」

「え？さっき席替えしたじゃない」

「え！嘘！？」

そんなの知らないぞ。

「霞君、クジ引かないから同じ席なんだよ」

なんてこった……僕が思考の海を彷徨っている間にそんな事があったなんて。

……あれ？東の席、変わってないな。

「東、席変わってないけど……」

「あぁ、東君はクジを引いても同じとこだったんだよ」

うわっ、それは可哀想に……。

けど、なぜか僕の心が少し晴れた気がするのはなぜだろう。

午前中の授業を必要に思ったとこ以外、全て聞き流してそつなく過ごした。

そして、今は昼休み。

いつもなら、お弁当を持って中庭で食べるところだけど、今日は生憎母さんが『なんか、今日お弁当作る気がしない』という理由でお弁当を作ってくれなかった。

仕方なく、僕は食堂へと足を運ぶ羽目になったのだが……

「……一体、何事だ？」

教室を出てすぐに、廊下を埋め尽くす……とまではいかないけど、通行に支障をきたす程の人がいた。

どうも中心は１－Ａみたいだ。

「……うわぁ～、凄い人だね」

僕と同じく食堂に行くつもりだったのか、鳴海が僕に声をかける。

「これ全員、転校生を見にきた人達だよ」

「へ？転校生？」

「も～～霞君。朝に教えたでしょ」

……そう言えばそうだった。

「……仕方ない、回り道していこう」

「え！？転校生、どんな人か見に行かないの？」

「うん、特に知り合いになりたいとも思わないし」

それにあんなに人に囲まれては相手も嫌になるだろう。
そこにさらに人が増えるとなると相手が不憫だ。
それより、食堂でなに食べようかな……。
そんなにお金使いたくないんだよな～。

僕は鳴海と二人で食堂に来た。
あまり食堂に来たことはないが、この学校の食堂はよく混んでいる。
これは座るところ探すのも大変だな。

「混んでいるな」

「う～ん、そうだね。私が席を取っておくから、霞君は私の分も買ってきてくれない？」

「分かったよ、何がいい？」

「私、カレーがいいよ」

「了解」

僕は一番の混雑の様相をみせる一角に向かう。

「痛！誰だ、俺の足を踏みやがった奴は！」

「あ、そのカツ丼僕のです！」

「やべっ！２０円足りねぇ」

「ちょっと、何順番抜かしてるのよ！」

「うわっ！誰だ、俺の制服にケチャップつけやがったの」

怒声が飛び交う人混みの中、僕は隙間を縫って進み、邪魔な奴は足を払って転かしたりして最前列に到達。

「おばちゃ～ん、カレーライスとキツネうどん！」

僕は出来るだけ大きい声で言う。

何とか相手にも伝わったみたいだ。

「はい、カレーライスにキツネうどん！」

「ありがとう」

僕はおばちゃんに礼を言うと、混雑している一角から抜け出す。

さて、鳴海はどこか……。

「霞く～ん、コッチコッチ」

食堂の一番端にあるテーブルの端に、僕の名前を呼ぶ鳴海がいた。

なんか、視線がこっちに飛んでくるんですけど……

いろんなとこから。

僕はそんな視線を気にすることを止めて近づく。

「はい、これ」

「ありがと～」

僕は鳴海にカレーを渡すと隣に座る。

「大変だったでしょ」

「う～ん、まぁ、人多かったしね」

ズルズルとうどんをすする。

うん、なかなか美味しいじゃないか。

「霞君は食堂初めて？」

「うん、いつもは弁当だからね。鳴海はいつも食堂なの？」

「いつもじゃないよ。たまにくるぐらいかな」

「そうなんだ」

油揚げをかじる。

お、これもなかなかだね。

「……あの、前いいですか？」

僕が油揚げの品評をしていると、向かいから声がかかった。

声からして女の子だ。

「どうぞどうぞ、座ってよ」

「は、はい。ありがとうございます」

どうやら僕の向かいに座ったようだ。

僕は今ダシを飲んでいてよく見えないけど……。

「……ふぅ」

ある程度ダシを味わい、鉢をテーブルに置く。

この時初めて向かいの女の子の姿を確認した。

黒いセミロングの髪にスッキリとした顔立ち……あれ？どっかで見たことがある顔だ……。

すぐに脳内で検索、そしてデータが出てきた。

朝の忘れ事と一緒に。

「な……っ！」

なんてこった！
今の今まで忘れてたけど、父さん達が勝手に人の結婚相手を決めやがったんだった。
そんでもって目の前にいるのは……

―お嫁さん―

確か名前は『桃地　朱里さん』だったな。
ってなんでこの学校に！？

「どうしたの霞君？」

「なななんでもないですよ？」

いかん！
動揺しすぎだ！

「……あの」

「は、ハィ？」

いきなり話しかけられて変な発音になってしまった。
ヤバい、かなり不思議だ僕。

「霧島　霞さんですよね」

「ち、違いますよ」

「え？なに言ってるの霞君。そうじゃない」

な、なんて事を言ってるのさ鳴海は！

「やはりそうでしたか」

「霞君と知り合いなの？」

「知り合いもなにも……」

あ、なんかその後は言わないで。
と言うか言わないでください。
ヤバい事になりそうなんです。

「妻です」

この瞬間、周囲の空気が凍った。
鳴海を中心にして……。
ああ、嫌な予感がビンビンするよ……。

霞、遭遇する。（後書き）

新しい連載しました。世界観は同じです。更新は出来るだけ頑張りますが、遅れていくことになると思われます。

霞、修羅場体験？（前書き）

更新、遅れましたね。スミマセン……。

霞、修羅場体験？

あの後、異様な雰囲気の中昼休みは過ぎ、午後の授業へと入った。
５時間目の数学の授業の間、後ろからの強烈な視線……もとい殺気を感じながら受けることになった。
始めは気にしないつもりだったが、その殺気はじわりじわりと僕にダメージを与えていき、胃がキリキリと痛んできた。
その痛みは時間がすぎることに増していき、そして６時間目は保健室で一時間休む羽目になった。
耐え忍ぶことが忍者として必要なのに……。
視線だけで僕の耐久力を奪うとは……。
……鳴海、侮れん。

「いたた」

くぅ～～、まだ少し痛いな。
だけどもう戻らないとな。

「先生、お邪魔しました」

「はいよ～～」

僕は保健室から出る。
それにしても軽い保険医だな。
僕はまだ感じる痛みを我慢しながら教室に向かう。

「――っ！いたた！き、急にまた痛みが……」

１－Ｃの教室がある廊下に足を一歩踏み入れた瞬間、痛みがまた…

…。

あ～、なんかある教室から禍々しい雰囲気が漂っている。

忍者歴１６年、今までいろんな経験をしてきた。

だけど、視認できるような殺気を見た（？）のは初めてだ。

「……あ、あそこに行かなければならないのか？」

というよりあそこに『行く』前に、先にあの世に『逝く』ような気がするんだが……。

そんな感じで僕は教室に向かうのを躊躇っていた時だった。

１－Ｃの教室の扉がガラッと音を立て開いた。

そしてそこから我らの担任、持田（モチダ）先生が顔を真っ青にして出てきた。

お腹でも痛いのかな……？

「……駄目だ、このままでは全滅してしまう……」

持田先生が僕の存在に気づく。

その瞬間、救世主が現れたような表情。

「霧島君！待っていたよ！さぁ、教室に入りたまえ！」

「え？いや、先生？あんな所に入ったらヤバいですよ？」

「あんな所とは失礼な！君のクラスだろ！」

「いやまぁそうですが……」

「それに君がいないと困るんだ！君はクラスの期待を背負ってるんだ！名誉なことだろ」

「別に名誉なんて欲しくありません」

「そんなことを言わずに……生け贄になってくれ」

「ちょ！生け贄ってどういうことですか！？」

「それは……教室に入ればわかることだ」

気がつけば教室の扉の目の前。
僕の生存本能が撤退を呼びかけている。

「さぁ、覚悟を決めたまえ」

「え？なに？僕が入ることは決定ですか？」

「君はC組の英雄だ」

持田先生は僕の背中を掴み、空いている方の手で扉を開き、教室に僕を投げ込んだ。

「うわっ！」

咄嗟のことだったので着地に受け身をとることが出来ず、腰を強打した。
しかし、そんな事は関係ない。
僕が教室に投げ込まれた時点で事態は急変した。
全ての殺気が僕に注がれている。
発生源は……鳴海。
……ちょっと待て、僕の席は鳴海の前じゃないか。
発生源に近づくという愚行は避けたいんだが……。

「霧島君、早く座りなさい」

教壇に立つ持田先生からの指示。
それでも僕が躊躇していると、

「周りの生徒を見てみなさい」

という持田先生。
僕は言うとおり周りの生徒を見て、そして気がついた。
クラスの全員といっていいほどの人数が机に突っ伏している。
みんな寝ているのではなく、失神しているようだ。
意識がある人をちらほらいるけど、みんな顔をしかめている。

「これ以上、犠牲者が……ぐっ……で、でる前に……君には生け贄に……」

持田先生が胸を押さえて苦しみながらも、教卓を支えにして踏ん張っている。
なかなか頑張っている。
だけど……僕は自分の身の安全を優先する！

「早退します」

と宣言をし、教室の出口へ右向け右。

「なっ、ちょっと待ちなさい。後、ＨＲだけだから……」

「イエイエ、帰りますよ。死にたくないし」

「君はこのクラスを見捨てるのか！？」
「先生は僕を見捨てましたよね？」
「ぐっ、だ、第一、この状態にしたのは君のせいだろ」
「知りませんよ」
その時、今まで微動だにしなかった鳴海が、首だけ動かしてこっちを向く。
その顔を異様なまでの笑顔。
それがまた怖かった。
「霞君」
「はい」
「早く座りなよ」
「……えっと」
「座りなよ」
「……はい」
有無を言わせない。
そんな感じ。
僕は仕方なく自分の席に座る。
ぐっ、強烈な殺気が……。
一瞬で背中が嫌な汗でびっしょりだ。

持田先生、早くＨＲを終わらして！
僕の胃に穴が開く前に！

無事ＨＲが終わり、さぁ帰ろう（もとい逃げよう）として、陸上短距離の選手もビックリのスタートダッシュを切ったのだが……。

「ちょっと待った」

と鳴海に肩を掴まれた。
東より力強くないか？

「霞君？今失礼なこと考えなかった？」

ミシミシと音を立てる僕の肩。

「そ、そんな事ナイヨ？それより、肩放してくれないかな？」

「ダメ」

あえなく却下されてしまった。

「それより、私ちょっと聞きたいことがあるんだ～」

「へ、へぇ～、なにを～」

「それはここで言えないから、屋上へごあんな～い」

僕はそのまま鳴海に引きずられていく。

誰か、僕と変わってください……。
今ならオマケもついてきますよ～。
鳴海に引きずられて屋上へ。
そこには一人の女子生徒がいた。
僕も知っている桃地　朱里さんだ。

「さて、説明してもらうよ」

そう言って引きずってきた僕に、手を腰において顔を近づける鳴海。

「説明ってなにを？」

なんとなく察しはついているけど、あえてわからないふり。

「なにって……桃地さんが霞君の奥さんだってこと！」

「ハッハッハ、聞き間違いじゃないの？」

その時、朱里さんがボソッと

「……妻です」

空気が凍りついた。
僕は作り笑いをしたまま固まる。

「桃地さん？いまなんて？」

あ、鳴海から黒いオーラが出てる。
顔は笑ってるけど

「私はカスミさんの妻ですと言ったんです」

「……霞く～ん？ど～ゆ～こと～？」

「し、知らない」

「知らない訳ないでしょ！」

「ほ、ホントだって！僕の両親が勝手に決めたことだから！」

「……そう」

鳴海は僕をジト目で見ている。

どうもまだ信じていないな。

……というより、僕がなんでこんなに必死にならないといけないんだ。

なんか、馬鹿らしくなってきた。

「じゃ、話がそれだけなら僕は帰るから」

敬礼みたいな感じに手を上げ、出口へ向かおうと……。

「ちょっと待ってください」

朱里さんからストップがかかる。

予想していなかった人物からだったので少しビックリした。

てっきり鳴海からだと思っていたんだけど……。

「な、何かな？僕は早く帰りたいんだけど」

「え、いや、自己紹介がまだでしたんで……」

言われてみればそうだ。

「僕は霧島　霞」

「桃地　朱里です。今日からお世話になります」

「……あれ？鳴海は自己紹介しないの？」

「霞君が保健室にいる間にもうしたよ。朱里さん、霞君に会いに来てたから」

そうだったんだ。

「それじゃ、僕は帰るから！」

僕はそう言い残し、屋上から立ち去る。

鳴海が何か言ってたみたいだけど無視。

僕は階段を駆け降りていった。

帰ったら父さんに断固抗議してやる。

霞、修羅場体験？（後書き）

はい、やっと新キャラの桃地　朱里さんの登場です。　更新が遅れてすみません。この作品、主人公が忍者なのに忍者らしくないような気がして作品の方向を考えていました。今も悩んでます。なんとかなると思ってますが……。

霧島家に居候。（前書き）

思ったより早く更新できました。

霧島家に居候。

僕は、一旦家に帰った後、某王手レンタルビデオショップに借りていた映画を返しに行った。
すると、そこで偶然にも中学時代のクラスメートに出会い、話しかけられた。
相手は僕が変わったことに驚いていたが、僕は相手の名前が思い出せず、とりあえずその事がバレないように適当に話を合わせていた。
中学時代といっても3ヶ月ぐらい前に卒業したんだけど……。
コラ、そこ！薄情なんて言わない！自覚してるから。
まぁ、そんなハプニングを乗り越えて、僕は返すついでに、新たに映画を借りてきた。
今度はスパイアクション。
こういう映画に出てくる道具とかはなかなか面白いものが多く、新しい忍具の開発に役立つ……と思う。
そしてその帰り、急がないと夕飯に間に合いそうになかったので、僕は建物の屋根を『跳んで』行くことにした。
これなら、家まで一直線で帰れるし、なにより車に轢かれる心配もない。（当たり前）
いつもは見つかるとヤバいからやらないんだけど……。
そのおかげで無事、夕飯前にたどり着くことができた。
玄関を開け

「ただいま」

というと、

「おかえり～」

と母さんの声がリビングから聞こえた。
他にも涼と舞の声も聞こえる。
あれ？他にも女性の声が……あっ、テレビか。
僕は取りあえず皆が揃っているであろうリビングに向かう。

「あ～、お腹減ったよ」

そう言ってリビングに入る。

「それじゃあ夕飯にしましょうか」

皆が食卓につく。
父さんがまだ帰ってきていないのはいつものことだ。

『いただきます』

と、手を合わせ声をそろえる。
今時こんな事をする家庭は少ないんじゃないだろうか……。

「ねぇ、兄さん。また映画借りてきたの？」

「あぁ、今度はスパイアクションだ」

「へぇ～、観るときには言ってね。ボクもみたいから」

「兄上は恋愛物は観ませんね」

「そうだね、なんか純愛とか観ているとムカついてくるんだよね。
絶対なんか別の思惑があるだろって思っちゃうから」

「……僻み？」

「涼、あとで覚えてろ」

こんな感じで、いつものように賑やかな食卓。
会話に花が咲く。
僕は冷や奴を食べようとして、醤油をかけていない事に気づく。
醤油さしは涼の前。

「涼、ちょっと醤油取って」

「どうぞカスミさん」

「あ、どうも朱里さん」

涼の向かい、つまり僕の隣から醤油さしが差し出された。
僕は醤油さしを受け取り、冷や奴にかける。
あっ、醤油かけすぎた。
……アレ？なんかおかしい。
冷や奴にネギが乗ってないことか？
……そんなことじゃない。
一体なにが変なんだ？いつもと何かが違う

「どうかされましたか？カスミさん」

「いや、何かへ……」

「へ？」

「……」

「……カスミさん？」

「……な、なんで朱里さんがウチに居るんだ！？」

今更気付いたけど、僕の隣には朱里さんが座っている。

というか、ウチの食卓に馴染みまくっている。

「霞、食事中に大声を出すもんじゃないわよ」

「いやだって――」

「霞、わかった？」

「……はい」

仕方が無いじゃないか。

まさかテーブルの下から僕のお腹に忍者刀を突きつけてくるんだから……。

母さんには逆らえないよ、ホント。

夕飯を食べ終わり、とりあえず僕は朱里さんがなぜウチにいるか本人から聞いてみることにした。

「ちょっと朱里さん、今いいかな？」

「はい、いいですよ」

母さんの代わりに食器洗いをしていた手を止める。
朱里は自ら食器洗いを申し出たのだ。
今時、こんな娘はいないだろう。
そして、仕事を請け負ってもらった母さんは、現在ソファーに座ってくつろいでいる。

「あのさ、君の事なんだけど……」

「私がどうかしましたか？」

「うん、なんでウチに居るの？」

「えっと、妻だからです」

また『妻』か……。
この娘大丈夫か？

「あのさ、妻って……誰の？」

「そんなの決まってますよ。あなたのです」

朱里さんはそう言って僕を指差す。
つられて僕も自分を指差す。

「僕？なんで？」

「写真を拝見させてもらいました」

写真？

「その写真を見て衝撃を受け――」

「ちょ、ちょっと待って！写真てどんな？」

「えっと、ちょっと待ってください」

朱里さんがゴソゴソとズボンのポケットを探る。

「あっ、これです」

差し出されたのは一枚の写真。
そこには僕が写っている。
髪を切った日に撮った写真だった。

「この写真を見た瞬間、カスミさんを気に入りまして……カスミさんがどのような人物か知るためにここに来たんです」

「そ、そうなんだ。ところでこの写真はどうして？」

「これはカスミさんのお父様から送られてきたんです」

あのクソ親父！！
勝手になにやってんだ！
あの時に撮った写真にこんな思惑があったなんて！

「あの……カスミさん？」

「あ、ゴメン。ちょっと考え事してた」

「そうですか」

「まぁ、君がここに来た理由は分かったよ。でも一人でこの町に来たの？」

「はい」

「じゃあ、一人暮らしなんだ。大変だね」

「いえ、そのことですが……」

急に歯切れが悪くなる朱里さん。
その様子に嫌な予感がする。

「あら、朱里さんならウチに住んでもらうわよ」

リビングでくつろいでいたはずの母さんが台所にやって来た。
……ちょっと待て。
ウチに住んでもらうってどういうことだ。

「母さん、どういう事だよ」

「朱里さんはウチで預かるの。つまり下宿よ下宿。ちょうど一部屋余っているし、相手の親御さんも一人暮らしさせるのも不安でしょうしね」

なんか、最もらしい理由だけど、絶対に面白がってやってるよ。

「と言うこと何で……」

朱里さんはおもむろに、着けていたエプロンを外すと、その場で正

座をして三つ指をたてると、

「ふつつかものですが、よろしくお願いします」

朱里さんは深々と頭を下げた。

こうして、霧島家に新しい住人が加わることになった。

霧島家に居候。（後書き）

はい、どうも読んでくださってありがとうございます。　はてさて、実は作者、今まで忘れてました。　……霞の母親の名前。　皆さんは覚えてますか～？　この前、読み返してみて気がついたんですけど、霧島　千里なんですよ、一番最初のお話を読んでください。　霧島家で名前がないのは父親だけなんですよね。　そのうち明らかになると思います。　では、また近いうちに更新をしたいと思います。　これからもよろしくお願いします。　次回は久し振りにちゃんと東が登場（予定）です。

忍犬、シバ吉。

朱里さんが霧島家に居候する事になって次の日。
今日は土曜日で休みだ。
本来ならゆっくり惰眠を貪りたいところだけど、キッチリ朝の7時には目が覚めてしまった。
取りあえずお腹が空いたので、リビングに降りる。
既に台所で母さんが朝食の支度をしている。
それともう一人……。

「あれ？朱里さん……？」

「あっ、おはようございますカスミさん」

そう、朱里さんが台所に立っている。
ただ突っ立ってるんじゃなくて、せわしなく動き回っている。

「いい娘ね～、朱里さん。今時あそこまで家事ができる娘はいないわよ。貰っとかない訳は無いわよ」

とか言いながら母さんが肘で僕を突っつく。
母さん、朱里さんだけに家事をまかせてなにしてんだ。

「母さん、朱里さんに家事させちゃ駄目だろ」

「あら、朱里さんが自分にやらせてくださいって言ってきたのよ。これがさせてみたら母さんより手際が良くってね～」

だからってそれに甘えちゃいけないだろ。

「それに、お義母様は休んでいてくださいって言われちゃったしね」

「だからって……」

ん？なにか犬が吠えたような声が聞こえたような……。

―ワン！―

やっぱり……。
どうやらウチの庭から聞こえてたみたいだ。
ウチは犬なんて飼ってないはずだけど……。
僕は庭側の窓をガラガラと開ける。

―ワンワン！―

あれ？ウチの庭に犬がいる。
犬種は……柴犬か？
ご丁寧に犬小屋も設置されている。
謎の犬は、おすわりの状態で尻尾を左右に振っている。

「はて？この犬は……？」

「あ、私が連れてきたんです」

僕の後ろから朱里さんがひょこっと顔を出す。

「朱里さんが？」

「はい、こちらにくる時に桃地家に置いてくるつもりでしたが、ど

うしてもついてくるので仕方なく……」

「まぁ、仕方ないか……」

「ありがとうございます」

朱里さんは頭を下げた。

「この子、名前は？」

「はい、『シバ吉』と言います」

シバ吉？

まさか、柴犬だからか？

簡単に名前を決めすぎだろ。

「あの……カスミさん、すみませんがシバ吉を散歩に連れて行ってくれませんか？」

「散歩？」

「はい、今少し手が放せないもので……」

「いいよ、別に」

朱里さんからリードを受け取ると、僕は庭に出てスリッパを履く。

シバ吉の首輪にリードを取り付ける。

初めてだから少し手こずった。

「それじゃあ、行ってくる」

「はい、シバ吉をお願いします」

僕とシバ吉は朝の町に出掛けていった。

僕は取りあえず、近くの公園にやって来た。
早朝……という訳でもないが、こんな時間帯にも関わらず、散歩やジョギングをしている人が多い。

「う〜ん、思ったより人が多いな」

「ワン！」

お、シバ吉も賛同か？
案外、気が合いそうだな。

「そんじゃ、別のとこに行くか」

僕とシバ吉は公園から出て行った。

公園から出て僕はシバ吉と歩く。
学校に行くよりも早い事もあってか、すれ違う人も少ない。

「静かだな……」

こういう静けさは結構好きだ。

いつも僕の周りが賑やか（悪く言えばうるさい）からね。

「……？」

ふと、下から感じた視線。
シバ吉が僕を見上げていた。

「……なに？」

って、犬に聞いても意味がないか……。

―ヒュッ！―

音を立て何かが僕の顔を掠めた。
あのまま気付かず歩いていたら、確実に額に直撃だった。
頭だけ動かし、ギリギリで避けのだ。
掠めたところから少し血が出ている。
突然のことで驚いたけど、すぐに現状を把握の為に頭を働かす。
飛来物を避けることは出来たけど、どこから襲われたか分からない今、迂闊に動かない方がいい。
僕は取りあえず、飛来物が何かを確認するため、背後を確認する。
見ると、ブロック塀に苦無が突き刺さっている。
どうやら同業者の人間に襲われたみたいだな。

「――っ！」

背後から感じた殺気。
僕は咄嗟に民家の屋根に跳ぶ。
その瞬間、元いた場所に手裏剣が大量に突き刺さる。
クソ、誰だ。こんな馬鹿げた事をしやがるのは！

「チッ……」

僕は柄にもなく舌打ちをする。

朝っぱらから襲われたんじゃあ、舌打ちの一つもしたくなるもんだ。

シュッと僕の前に現れたシバ吉。

「ウゥゥ〜〜〜〜」

低い唸り声をあげ、僕に牙を見せ威嚇している。

どうやら、僕はシバ吉に襲われたみたいだな。

「シバ吉、お前、やっぱり徒者じゃなかったな」

犬相手に話しかける。

「忍犬……て奴か」

シバ吉はどこから取り出したのか苦無をくわえる。

相手はやる気満々だね。

「何のつもりか知らないけど……遊びの相手、してやるよ」

僕がそう言った瞬間、シバ吉のシュッと姿が消えた。

僕も右手を前に出す。

―バシィィィン！！―

朝の住宅地に響き渡る音。

「まったく……」

僕はハァと溜め息を吐く。
僕の右手には尻尾を掴まれてブランブランしているシバ吉がいる。
当の本人はイマイチよく現状が分かっていないみたいだ。
勝負……僕にとって遊びは一瞬で終わった。
普通の人では認識出来ない速度で接近してくるシバ吉を、ただ右手だけで尻尾を掴んで捕まえただけ。
ただそれだけのことだ。

「さて、どうしてやろうか」

僕はそう言って黒く笑う。
それを見て、シバ吉はビクッと体をさせ、ガタガタと震え始めた。
ちょっとやりすぎたか……。

「安心しなよ、別に捕って食おうとする訳じゃないよ」

そう言って、僕はシバ吉を離す。

「さて、そろそろ戻ろう。朝ご飯を食べないとな」

「ワン！」

ご飯という言葉に反応したのか、シバ吉は涎を垂らしている。

「お前、食い意地は張ってそうだな」

僕とシバ吉は帰宅への路へついた。

「ただいま」

「お帰りなさいカスミさん」

家に帰ると朱里が迎えてくれた。

お、和食か。

「カスミさん、その傷は……」

「ん？これ？シバ吉と遊んだ時にちょっとね」

「遊んだ……て、やはりシバ吉に襲われたのですか！？」

「やはり？」

どういう事だ？

想定していたことなのか？

「いえ、シバ吉は初対面で力量のある方とよく勝負をするのです」

「はぁ？なんで？」

「シバ吉は勝負をする事で、相手が主として相応しいか確かめているのです。どうやら、カスミさんはシバ吉に認められたようですね」

そうだったんだ。

忍犬特有の遊びだと思ってた。

「さて、私はシバ吉に餌をやってきますね」

朱里さんはそう言うと、庭に出て行った。
朝ご飯を食べながら、庭の様子を窺う。
シバ吉は尻尾を左右に振って、朱里さんが餌入れにドッグフードを入れているのをジッと見ている。
あっ、涎が垂れている。
朱里さんの『おすわり』と『待て』の指示を守り、『よし』の声で餌に飛びついた。
餌に食いつく様子からは普通の犬と変わらない。
……忍犬には見えないな。
僕はシバ吉に少し呆れながら朝食を食べるのだった。

忍犬、シバ吉。（後書き）

前回のあとがきにて、東が登場すると言いましたが……すみません、登場しませんでした。　まぁ、影の薄いキャラだから仕方ない…としましょう。　次回はチョイ役で登場……かも。

バレました。

朱里さんが霧島家にやってきて数日がたった。
僕は朱里さんがウチに居候していることを東や鳴海に知らせてない。
というか、知らせる必要はない。
ということで、今僕が陥っている状況には非常に不満である。

「どういうこと霞君？」

「どういう事だ霞？」

「霧島ぁー！貴様という奴は！！」

「落ち着け、今は抑えるんだ！」

「うがぁぁぁぁ！！」

「いかん！田中が野獣化したぞ！」

「皆、田中を押さえ込むんだ！」

とまぁ、僕の周りは非常に騒がしい。
ちなみに今僕は椅子に麻の紐で縛り付けられている。
何故、このようなことになったか僕にも分からない。
放課後、僕は家に帰るために教室から出ようとしたら、クラスメート（主に男子）が出入り口全てを封鎖。
その後、背後から接近してきた鳴海により捕縛され、椅子に座らされた。
そして今に至る。

田中と呼ばれた男子生徒は数人の男子生徒により教室より退場させられていく。
その際、押さえ込む時には犠牲になった人達も運ばれていく。

「霞君！聞いてる！？」

「いや、全く」

あ、ヤバい。
ここは『聞いてる』と言うべきだった。
正直に言っちゃった。
ほら、鳴海がプルプルと肩を震わして――

「かぁ～すぅ～みぃ～くぅ～～ん？」

「すみませんでした！」

僕は土下座――といっても縛らり付けられて出来ないので心の中でして、実際は頭を下げた。

「あの……ところで何故僕はこんな事になってるんでしょうか？」

僕は取りあえず、今気になっていることを控えめに聞いてみる。
周りが野郎ばかり（鳴海を除く）で暑苦しい。
というか、野郎じゃなくても暑苦しいだろう。
全く、梅雨の季節も重なって最悪なんだけど。

「決まってるでしょ！朱里さんのことよ」

「だったら僕は関係――」

「あり、だよね？一緒に住んでるんだから」

……そうだった。バレたんだった。

あれは昼休み、弁当を持っていつもの中庭に行こうとしたとき、朱里さんがやってきて、必死に説得されて結局、教室で僕、鳴海、東、朱里で食べることになった。

この時の会話の中で、朱里が一人暮らしをしている話になり、この時に朱里が僕の家に下宿していることを喋ってしまい、事がバレてしまったのだ。

「まぁ、そうだね。ウチに下宿してるから」

「チクショウ！！羨ましい！！」

「美少女と一つ屋根の下なんて！」

「憎い！憎いすぎる！！」

僕の言葉に周りの野郎共が吠える。

教室が封鎖されて出ることが出来ない女子達が迷惑そうな目で見ている。

「いやホント羨ましいな」

「東、貴様もか……」

「舞さんに朱里さん。美少女揃いだな」

「そうかな？」

「鳴海だって焦ってんだろうな」

「なんで鳴海が焦るのさ」

「……いや、まぁ……なぁ？」

「僕が尋ねてるんだ。何故僕に聞く」

僕は東と会話をしながら、制服の袖から苦無を取り出し、みんなにバレないようにロープを切る作業に入る。

「霞君？どうして私たちにこの事を言ってくれなかったの？」

「なんで僕が鳴海や東に言わなきゃいけないのさ」

「だって……それは……中学からの仲なんだし……」

急に鳴海の勢いが鎮静化していく。

……逃げるなら今だ。

苦無を持つ手に力を込めて、一気にロープを切断する。

ロープが体から解けると同時に立ち上がり、僕を囲んでいる人垣を急激な加速ですり抜ける。

急なことで状況把握が出来なかった野郎共が、僕が逃げ出したことに気がつく。

「逃げやがった！」

「霧島って運動神経よかったか？」

「んなことどうでもいい！捕まえろ！」

騒然となる教室。
さっさと脱出だ。

「ここは通さん！」

教室の出入り口に立ちふさがっている巨漢。
見た目から相撲部所属ってところかな？
名前は……誰だっけ？
それ以前にクラスメートか？

「すまないが通してもらうよ。名無し君！」

僕は走る勢いをそのままに跳ぶ。
そして右足を曲げて膝を突き出す。
単なる跳び膝蹴りだ。

「グハァァァァァ！？」

僕の跳び膝蹴りは、見事に巨漢の顔にめり込む。
断末魔をあげて巨漢は倒れていく。
安らかに眠ってくれよ。
僕は倒れている巨漢を越えて廊下を走り出す。
もちろん、鞄も忘れていない。
さぁ、家に帰ろうじゃないか。

霞が出て行った教室。
今まで霞を囲んでいた男子生徒も、すでに霞を追いかけて教室にはいない。
教室にいるのは数人の女子生徒と、東と鳴海ぐらいだ。

「鳴海、やりすぎじゃないか？」

東が教室の出入り口を睨んでいる鳴海に言う。

「なに？文句ある？」

「いや、文句と言うより疑問だな」

「疑問？なによ」

「なんで鳴海は怒ってるんだ？」

「えっ？」

鳴海は少し驚いた表情をする。
本人は怒っている自覚がなかったみたいだ。

「そ、それはやっぱり一つ屋根の下、若い男女がいるのは良くないと思って……」

「二人で住んでる訳じゃないんだ、特に問題ないだろ」

「そ、そうかもしれないけど……」

しどろもどろとする鳴海の様子を見て、東はなにかに気付いたらし

く、ニヤニヤと嫌らしい目で見る。

「ははぁ～ん、嫉妬だな」

「ち、違うよ！」

鳴海が顔を真っ赤にさせて否定する。

「そうかそうか、鳴海は霞のことがす――」

「うわぁぁぁぁぁぁ！？ダメダメ！」

鳴海はさらに顔を真っ赤にさせ、右ストレートを東の顔面にめり込ませる。

東を黙らせるため反射的に行ったことだ。

渾身の一撃に東は呆気なく意識をとばした。

「あ……だ、大丈夫東君？東君、お～～～い」

倒れ込んでいる東をペシペシと叩く鳴海。

目覚める様子がない。

「起きないや、このままにして帰ろ」

鳴海は自分の席から鞄を取り、教室から出て行く。

ちょっと前まで残っていた数人の女子生徒も既に居なくなっていた。

教室に残ったのは気を失った東と巨漢の男子生徒。

東と巨漢の男子生徒が気がついたのは外が暗くなってからだった。

二人とも自分の扱いが酷いことに嘆きながら帰ったとか。

ちなみに、霞は帰ろうとして下駄場で追いかけてきた男子生徒に囲まれたらしいが、偶然に生徒指導の先生（柔道部顧問）が通りかかり、霞が集団でイジメられていると思いこんだ先生により、男子生徒達は生徒指導室に連行されて、無事に帰宅の路へつくことが出来た。

バレました。（後書き）

今回は早く更新できました。　さて、この作品のキャラが登場の当初と性格?が変わってきてるような気がします。　舞は無口キャラにするつもりだったし、東はあんなやられ役みたいじゃなくて、格好よくモテるキャラにするつもりだったし……。　いやはや、ノリで書くのは怖いですね。

霞、つかれる。（前書き）

長いです。いつもより二倍くらい。

霞、つかれる。

朝。

今では日課になりつつあるシバ吉との散歩をしている時だった。

「……あれ？こんなの在ったかな？」

僕の目の前には、石柱みたいなものが建っている。
いつもと違う散歩コースを行こうとして獣道を通ったら、これを見つけたのだ。

「あ、なんか書いてある。え～～と？」

僕は刻まれている文字を読もうとしたけど、かなり古いものらしく、読みにくい。
それに……。

「漢字ばっかりだな……」

古典は少し苦手なんだよな……。
僕は結局、解読することを諦めた。

「ホント何だろ、これ」

僕はちょっと石柱に触れた。

―ガラガラガラ！―

壮大な音をたて、石柱があっという間に崩れてしまった。

「ぼ、僕のせい？」

どうしたものか。

周りには誰もいない（いるはずかない）からこのままトンズラしちゃうか。

「シバ吉、帰るぞ！」

僕はそう言ってシュッと消える。

「ワン」

シバ吉も一度吠えてから、僕と同じようにシュッと消えた。

残ったのは元・謎の石柱の瓦礫だけだった。

朝のシバ吉の散歩から帰ってきて、僕は調子が悪かった。

体は今までに無いくらい怠いし、なんか肩が重たい。

学校を休もうかと思ったけど、母さんに有無を言わずに放り出された。

文字通りに。

仕方なく学校へ歩き出すと、車が急にハンドルをきって僕に突っ込んでくるし、黒猫が大量に襲いかかってきた。

とりあえず、車は飛び越えたし、猫は返り討ちにした。

えっ、動物虐待？動物愛護法違反？

大丈夫、シバ吉がしたから。
まぁ、そんな感じでどうも調子が悪い。

「はぁ、疲れた……」

学校に来るだけで疲労感を覚えるなんて……忍者として恥ずかしい。
それにしても、体が重たい。
特に肩のあたりが重い。
あるで……そう、人が乗っかってるみたいに……。

「おはよ、霞君。それどうしたの？」

教室に入ってきた鳴海が言う。
。
それに今日は東と一緒に登校じゃないのか……。

「それってなに？」

「あ……いや、霞君憑かれてるなって思ってね」

「まぁ、疲れてるよ？」

「あ、分かってたんだ」

……馬鹿にしてるのか？
疲労感ぐらい分かるよ、生き物だし。

「体が重いし、やる気は出ないし……て、それは元からか。それに全身を支配する倦怠感。これを『疲れている』と言わずしてどうする」

「確かに、『憑かれる』とそうなるからね」

はあ～、しんどいよ～。
あ、今日体育ある日じゃないか！？
どうしょう、サボっちゃおうかな……。

「大丈夫？」

「大丈夫じゃないかも……」

僕の回答に鳴海は眉をしかめる。
どうかしたか？

「霞君。今日の帰りにウチに寄ってよ」

鳴海んち？
確か鳴海のウチは神社だっけ。
豊稲神社といったかな？

「鳴海んちといったら豊稲神社だよね？」

「そうだよ」

う～～ん、疲れてるからな～～。

「疲れてるし……止めとくよ」

「憑かれてるからきてほしいんだけど」

疲れてるから？
疲れに効くものでもあるんだろうか？
だったら行こうかな……。

「分かったよ。帰りに寄らせてもらうよ」

「うん、じゃあ放課後ね」

こうして僕は豊稲神社行きが決定した。

豊稲神社は霧瀬市の中心から少し離れた場所にある。
山の中腹に位置し、元旦には初詣の人で賑わう。
まあまあ規模の大きい神社ってところだ。
そんな豊稲神社に鳴海は住んでいる。
豊稲神社の神主が鳴海の父親だからだ。
鳴海本人は巫女をやってるらしいが……見たことはない。

「霞君、ここで待っててね」

僕は鳴海に連れられてきたのは、豊稲神社の社。
そこで待たされている。

「……なんか、少し朝よりマシかも」

少しだけ楽になったような気がする。
あくまで気のせいだけど……。
ふと、僕は時間が気になって腕時計を見る。

１７時０７分

場合によっては少し帰りが遅くなるもしれない。
母さんに連絡しておこう。
僕は携帯を取り出し、適当にメールを打つと、母さんの携帯に送信した。
もし、母さんが見なかった場合も考えて、舞にもメールを送っておいた。
え、なんで舞かだって？
涼じゃ頼りにならないからだよ。
メールを送信し終え、携帯をしまった時、タイミング良く鳴海がやってきた。
僕は鳴海の恰好に少し驚いた。

……なぜ巫女姿？

なぜか巫女姿の鳴海。
制服姿しか見たことがないので何だか新鮮な感じがする。
しかし、それをぶち壊すものが鳴海に装備されていた。

……えっと、コルトＭ４Ａ１カービン？

鳴海はアサルトライフルを背中に、腰にホルスターが二つが装備されている。
巫女にアサルトライフル。
滑稽に思えて仕方がない。
どうやらホルスターのやつはＭＰ７Ａ１が二丁みたいだ。

「お待たせ、霞君」

「いや、別に待ってはいないけど……その恰好はなに？」

「巫女服だけど？」

鳴海はその場でクルリと回ってみせる。

僕が聞きたいのはそういう事じゃないんだけど……。

「どう、似合ってる？」

「まぁ、ね。それより背中の〝それ〟が気になるんだけど」

「これ？エアソフトガンだよ。ほら、ここに東京マ〇イって書いてるでしょ」

鳴海が指差したところには確かに東京マ〇イと書いてある。

「いや、その使い道が知りたいんだけど」

僕がそう言うと、鳴海はキョトンとした顔をして、

「〝除霊〟だけど」

と、逆に不思議そうに言われた。

今時の除霊にはこんなものを使うのだろうか。

というより、なぜ除霊なんぞしなきゃならんのだ。

僕は疲労回復のため……

「じゃあ、除霊するから動かないでね」

鳴海はそう言ってＭ４カービンの銃口を僕に向ける。

ちょっと！なにするつもりですか！

「いくよ～」

ヤバいよこの人！
撃つ気満々じゃないか！
エアソフトガンだからといっても銃口を向けられるのは嫌ですよ！？
それにエアソフトガンに”人に向けないでください”って書いてる
でしょうが！

―シュポポポポポポ―

ＢＢ弾が発射される。
それを僕は咄嗟にかわす。
実弾を避けるより簡単なことだ。
僕が避けたことにより、発射されたＢＢ弾は障子を突き破り外へ……

―ズドドドドドドド―

……へっ！？
一体なにが起こったんだ？
え～～と、着弾したらドッカ～ン？
ありえん。エアソフトガンじゃそんな事が起こる訳ない。
違法改造銃か？
それはヤバいだろ。
殺傷能力ありそうだし、銃刀法違反だよ。
まぁ、僕も忍者刀持ってるし人のこと言えないけど。

「鳴海！違法改造は銃刀法違反だよ！」

「大丈夫！銃自体は改造してないから！」

だったら、あのＢＢ弾の威力はどうなんだ！？

「改造したのは弾の方だから！銃刀法違反にはならないよ」

そうなのか！？

そういうものなのか！？

「一応、当たったら大変な事になるよ」

「いや、だったら尚更、人に銃口をむけちゃ――」

―シュポポポポ―

うわぁぁぁぁ！

また撃ってきたよ！

不意打ちだったけど何とか避けたよ。

ギリギリだったけど！

髪の毛が何本かカスったよ！

僕は鳴海から逃げるため社から出る。

「コラ！霞君逃げるな！」

「逃げなきゃ死んじゃうって！」

飛び交う銃弾……じゃなかった、一方的に飛んでくるＢＢ弾。

僕はそれを難なく避けていく。

「むぅ～～～、霞君、体育の成績悪いはずなのに……。全く当たら

ないよ」

しまった……。

学校では僕は運動音痴という設定だったんだ。

忍者としての力がバレたら厄介だしね。

例えば、色んな部活に勧誘されたり、体育大会では全種目を出場させられるかもしれないからね。

そんなの面倒くさい。

「えい、当たれ当たれ！」

鳴海がさらに発砲。

僕、鳴海に恨まれることしたかな……。

飛んできたＢＢ弾を体を傾けて避ける。

僕の肩をＢＢ弾が掠める……かと思われたけど、肩を過ぎてすぐにＢＢ弾が炸裂した。

予想だにしていなかったことだったので、その爆風をまともに食らった。

おかげで僕は吹き飛んだけど、何とか受け身をとってダメージをなくした。

僕はズボンについた汚れを叩き落として立ち上がった時だった。

『グギャャャャャ！？』

人のものでも動物のものでもない、今までに聞いたことがない声。

僕は周囲を見渡したけど、なにもいない。

一体なにが……？

「霞君、今の声、聞こえた？」

「あ、あぁ聞こえたよ。一体何なんだ？」

「霞君に取り憑いていた者の声だよ」

「取り憑いていた？」

そんなオカルトチックなものが……。

「気付いてたんじゃないの？」

「いや全く」

「だって憑かれてるって言ってたじゃない」

「それは体に感じた疲れで……」

まさか、『疲れ』と『憑かれ』で双方に相違があったていうオチか？

なんか馬鹿らしくなるな。

「まぁ、互いの勘違いが分かったところで……なんか僕の背後から殺気立った気配がするんですけど」

「うん、確かにちょっとヤバいかも……」

―ゴゴゴゴゴゴゴゴ―

そんな音が周囲に鳴り響く。

「霞君、後ろ……」

鳴海が僕を指差す。
いや、僕の後ろか？
僕は後ろを振り向く。

『ふぅぅぅぅ……』

……侍？
鎧に籠手、兜に腰に日本刀。
侍というより、どこぞの武将か……。

『許さん、許さんぞぉぉぉぉぉ』

うわっ、かなりご立腹のご様子ですな。
カルシウム不足なんだろうな……て、幽霊には関係ないか。
きっと、生前の時点でカルシウム不足だったんだな。

『うおぉぉぉぉぉぉぉ！』

侍が雄叫びをあげながら僕たちに突っ込んでくる。

「霞君、下がって！」

鳴海がＭ４カービンを構える。

―シュポポポポポポ―

状況から考えてかなり気が抜ける音を出しながら、火を噴く（？）
Ｍ４カービン。

『甘いわぁ！』

侍は刀を抜くと強烈な一振り。
この動作だけで鳴海が発射したＢＢ弾が全て凪払われる。
……ビックリだな。

「え～～～い」

鳴海がフルオート射撃で撃つ。
大量のＢＢ弾が放たれるが、侍は巧みに刀を操り、全て払うか弾き飛ばしている。
フルオート射撃だったこともあり、すぐに弾は尽きる。
鳴海は予備のマガジンを取りたそうとするが、その隙に侍が一気に間合いを詰める。

『覚悟！』

侍が鳴海に斬りかかる。
鳴海は咄嗟にＭ４カービンで受け止める。

―ガキッ―

そんな感じの音を立て、刀がＭ４カービンの銃身の半分くらいまで刺さる。
あれじゃあ、使い物にならないな……。
……あれ？あの侍って幽霊みたいなもんじゃなかったか？
なんで鳴海のＭ４カービンを斬ることができたんだ？
もしかして、あいつ実体化とか言うやつをしてるんじゃないか？

「これ高いのに……」

鳴海はＭ４カービンを捨て、一旦侍から距離を取ると、ホルスターからＭＰ７Ａ１を取り出して両手に構える。
しかし、銃口を向けた先にいたはずの侍が消えている。

「え、いない？」

「鳴海、後ろだ！！」

鳴海は見ていなかったみたいだけど、僕はしっかり見ていた。
鳴海がＭＰ７Ａ１を取り出すのに一瞬、侍から目を外した。
その瞬間、侍は地面に潜り鳴海の後ろに出てきたところを。
僕の声に反応して、鳴海は後ろに振り向くが、既に侍は刀を振りかぶっている。
思いっ切り斬りつけて、鳴海を真っ二つにする気だ。
このままでは鳴海はやられてしまう。
……仕方がない。

鳴海は振りかぶられている刀を見て、思わず目を瞑った。
振り下ろされる刀。
その後に感じるであろう強烈な痛みを覚悟するが……。

―キィィィン―

金属音がしただけだった。
鳴海が恐る恐る目を開けてみると、予想していない光景。
霞が侍と鍔迫り合いをしている。

『ぐっ、貴様……やはり徒者ではなかったか！』

「さぁ？どうだろうね」

ガチガチと音を立てる二つの刀。
一つはよく見る普通の日本刀。
もう一つは直刀の形状をしている忍者刀。

「鳴海、早く動いてくれないか？ずっとそこにいられると困るんだが」

「あ、うん」

鳴海はとりあえず、二人（？）から距離をとる。

『そろそろ正体を現したらどうだ？』

「そうもいかないさ、友人が見てるんでね」

霞と侍は二人同時に後ろに跳び、距離をとる。

……さて、どうしたものかな？
僕が鳴海を助けた時点で、鳴海は僕の事を聞いてくるだろうな。
何だったら、忍び装束になって正体ばらしちまうか？
でも家訓がな～～。

霧島家・家訓
その１
”忍者たるもの、決して正体知られるべからず”
その２
”バレたときは仕方がない”
その３

”決めた事は守りましょう”

……って大丈夫じゃん。

最初はその1だけしか家訓として存在していなかったけど、確かウチの爺さんが加えたんだっけ？

その3は……確か母さんだったか？

まあ、とにかく。このままで事を進めたとしてもだ。

どの道、鳴海から追求されるだろうし、”忍者”ってことが鳴海にバレるのは時間の問題だろう。

だったら、一丁暴れますか、忍者として。

霞、つかれる。（後書き）

どうも月見　岳です。　今回は長かったです。　書いている内に調子に乗ってつい止める場所を見誤りしました。　本当は一話完結にするつもりだったんですが、次に続きます。　あぁ、次書いたらネタが尽きる……。

忍者と侍、時々巫女。（前書き）

作者、現在負けられない戦いの真っ只中です。

僕が来たときはまだ明るかった豊稲神社も、日が沈んだ今、すっかり暗くなっていた。

「霞君、助けてくれてありがとう。だけど下がってて。一般人には危ないから」

鳴海が険しい表情で言う。
僕が一般人だって？
一般人が刀持ってるか普通。

「……鳴海、僕が握っている物、気にならないのか？」

「刀でしょ」

「その刀を一般人が携帯してるか普通？」

「持ってない……って事は、霞君はなんで！？」

今頃気付いたか。
なんて言うか……抜けた奴だな。

「まぁ、僕も一般人じゃないってことさ」

「霞君、一体な――」

『死ねぇぇぇ！！』

いきなり、地面から生えてきた侍が僕に斬りかかってきた。
不意打ちとは……武士道もあったもんじゃないな。

―ズバッ―

侍が霞を斬った……と見えたが、斬ったのは霞の学生服だった。
斬られた学生服を見て、侍はニヤリと笑い、鳴海は呆然としていた。

「全く、侍の癖に不意打ちとはやってくれるじゃないか」

御神木の上から聞こえてくる声。
霞のものだ。
侍と鳴海が声のする方向を見ると、濃い藍色の忍び装束の人間が、
御神木の太い枝に立っている。

『やはり忍びだったか』

「そうだ」

『ククククッ……ハハハハハ！』

いきなり笑い出した侍。
僕と鳴海は訝しむ。
侍は、怪訝な表情の僕たちに刀の刃を向けると、声高々に宣言をする。

『我は忍びに殺されたんだ！』

……まさかね。
この後、”積年の恨み！”とか言って斬りかかって――

『積年の恨みぃ！』

僕に斬りかかってくる侍。

うわ～～～、最悪だな。

僕は枝からクルリと飛び降り着地。

侍はそのまま、誰もいない枝を切るだけだった。

『大人しく斬られろ！』

「ヤダね。第一、僕が殺したんじゃないんだ。関係ないじゃないか」

『関係ある！貴様が忍びであるかぎりな』

……理不尽だ。

『と言うことで死ね！』

「んなことで死ねるかっつーの！」

競り合う忍者刀と日本刀。

互いの刀がぶつかった時に、火花が散っていた。

……くっ、力じゃ負けるか……。

僕はじりじりと競り負けていく。

「霞君！」

鳴海がＭＰ７Ａ１を発砲。

気の抜ける音を立て、ＢＢ弾が発射される。

発射されたＢＢ弾は、見事侍に直撃。爆発した。僕と鍔迫り合いを

していたから、凪払うことも出来なかったし、回避も出来なかったんだろう。

『グハァァァァァ！』

侍が爆発で吹き飛ぶ。
ちなみに僕も爆風をもろに浴びて、多少ダメージを受けた。

「大丈夫！？」

鳴海が僕に駆け寄ってきた。

「な、何とかね……。あの爆発が無かったら無傷だったろうけど」

「ご、ゴメン……」

僕がちょっと皮肉で言っただけなのに、鳴海はシュンとしてしまった。

「さて、とにかくあいつを何とかしないとな……」

「そうだね」

僕と鳴海は、同じ方向に顔を向ける。
そこには、禍々しい黒いオーラを出している侍が立っている。

『フシュゥゥゥゥ』

侍が刀を構え走ってくる。
今までより倍のスピードだ。

『グガアァァァァ！』

振り下ろされる刀。
僕と鳴海は左右別に跳び、なんとか回避する。

「たぁ！」

鳴海が横っ飛びの状態のままで発砲。
しかし、発射されたＢＢ弾は侍の一振りによって全て落とされてしまう。

『邪魔をするなぁぁぁぁぁ！』

侍が高速で刀を一閃する。
その時、発生した強烈な風の風圧で鳴海は吹き飛ばされる。

「きゃあああああ！」

「鳴海！」

ヤバい！あのまま行くと鳴海が御神木に激突だ。
僕は瞬時に動き、鳴海の後ろに回り込んで、鳴海を受け止める。

「ふぅ、危ない危ない」

「あ、ありがとう」

「怪我、してないな？」

「うん」

「よし、じゃあ鳴海は後ろに下がって僕を援護して」

「わかった」

僕は鳴海の前に出て忍者刀を構え、鳴海はマガジンを素早く取り替え、両手にＭＰ７Ａ１を構える。

『うおぉぉぉぉぉ！』

雄叫びをあげ向かってくる侍。
僕も侍に向かって走る。
侍が僕に刀を振り下ろす。
その瞬間加速し、侍の斬りを避け、背後に回り込み忍者刀を一閃。

―ガキィィィン―

金属同士が擦れ、火花が散る。
なっ！受け止めやがった！
こいつ、さっきより戦闘能力があがってないか？

―シュポポポポ―

鳴海が発砲。
僕と鍔迫り合いをしている事により、払うことも避けることもできない侍は直撃を喰らう。
僕は巻き込まれないように寸前の所で上空に跳んだ。

……これでやったか？

僕が少し気を抜いた瞬間、背後に強烈な殺気を感じた。
見ると、侍が刀を振りかぶっている。

んな馬鹿な。なんで僕の後ろに……

空中にいるので避けることは出来ない。
僕は振り下ろされた刀を忍者刀で受け止める。
しかし、勢いまでは殺すことが出来ず、地面に叩き落とされる羽目になった。

「ぐっ……」

全身に激痛が走る。
しかし、ここは懸命に耐えなければ……

僕は痛む体に鞭打って、グルリと体を回転させる。
その瞬間、僕が元いた場所に上空から侍が刀を突き刺してきた。

あのままだったら死んでたな……。

僕は立ち上がり、刀が抜けず悪戦苦闘している侍に斬りかかる。

「てい！」

『グハァ！』

お、一応ダメージは与えられるのか。
しかし、そんなに効いてそうにないな……。

とりあえず、もう一回斬りつけようとした時だった。

『グワァァァァァ！』

いきなり、侍が苦しみ出した。

倒れ込み、のたうち回っている。

僕、なにもしてないんだけど……。

侍はある程度、のたうち回ると、ピタリと動きを止め、光の粒子となって上空高くに飛んで行った。

何なんだ一体？

とりあえず、終わったのか？

「終わったのか？」

鳴海に聞いてみた。

「うん、勝手に終わっちゃったみたい……」

勝手に……というのがよくわからないけど、終わったんなら普通の恰好に戻るか。

僕は素早く忍び装束から普通の学生服の恰好に戻る。

「あ、そう言えば！霞君て忍者だったんだね！」

「まあね、僕的には鳴海がこんなコンバットなことしてるとは思わなかったよ」

僕の発言に、鳴海はアハハと手を頭にやる。

「でも凄いね霞君。本当にシュッて瞬間移動できるんだね」

「全速力ならね。あと、僕の事は内緒だからね」

「分かってるよ」

本当に分かっているのだろうか……。
少し不安なんだけど……。
しかし、なんであの侍はいきなり苦しみだしたんだ？

「お、大丈夫だったか」

鳥居の方から一人の男性がやってきた。
ここの神主さん……つまり、鳴海のお父さんだ。

「お父さん！」

「鳴海、大丈夫か？」

「うん、なんとかね」

「そうか、良かった」

おぉ、今時珍しい、父と年頃の娘が仲がいいみたいじゃないか。
ウチなんか舞はバカ親父に近づきたがらないぞ。

「君は……霧島君だね？」

「はい、そうですが……何故僕のことを？」

神主さんとは初対面なんだけど……。

「いや、娘から色々聞かせてもらっているからね」

「ちょ！お父さん！！」

「ハハハ、まぁ娘と仲良くしてやってくれ」

「は、はい……」

なんか、この人には適わない気がする……。

「にしてもお父さんはどこに行ってたの？私たち大変だったんだから」

「あぁ、慰霊塔だよ」

慰霊塔？

そんなものこの辺にあったかな……。

「その慰霊塔というのは、昔このあたりであった戦で亡くなった人の為に造られたんだけどな。実はその戦の時に忍者に殺された将の悪霊が封印されていたんだ」

僕たちが戦っていたやつか……。

「で、その封印が弱くなってきたから強化しようと思って行ってみ

れば、見事に崩れていてね」

「……あのその慰霊塔ってどこに在るんですか？」

何故だろう。

凄く嫌な予感がするんですけど……。

「あそこの山の中腹ぐらいかな」

神主さんはここから近くに見える山を指差す。

あそこは……シバ吉と散歩に行った場所じゃないか……。

まさか……な。

「もしかして、慰霊塔って、よく分からない漢字が刻んである石柱……だったりします？」

「お、知っているのかい？その通りだよ」

なんてこった！

僕が崩したやつじゃないか！

結局は自業自得だったのか！？

「いや～～、また封印するのは大変だったよ。適当にその辺の石を器にして、そこにその悪霊を無理やり押し込んだんだからね」

「じゃあ、あの悪霊が消えたのはお父さんが封印したからなんだ」

「そうだ」

「……あれ？霞君、どうしたの？」

「な、なんでもないよ?ぼ、僕、もう遅いし帰るね」

多少、動揺してしまった。

まさか、慰霊塔を壊しましたなんて言えるはずがない。

「あ、うん。それじゃあまた明日」

「じゃあね」

僕は逃げるようにして、その場から立ち去った。

心の中で土下座して謝りながら……。

忍者と侍、時々巫女。（後書き）

どうも、月見　岳です。　いきなりですが、なんかグダグダになってきてます。　まぁ、それはそれで続けるつもりですが……。
おっと、忘れてました。作中で”コルトＭ４カービン”をアサルトライフルとしてましたが、詳しくはカービン銃です。　あと、何かキャラクターに関する質問やリクエストなどあればできる限り答えます。　さて、次はどうしようか……。

舞、社会科は苦手？（前書き）

番外編……みたいな感じかな？

舞、社会科は苦手？

鬱陶しい梅雨も抜け、蝉が鳴き出して夏の趣が出てきたこの頃、7月に入り夏休みがもう、すぐそこまで来ている。
しかし、夏休みに入る前に、中高生達には越えなければいけない壁が存在する。

”期末テスト”

この壁を越えられなかった者は、夏休み期間中に学校に行き、補講を受けた上で追試を受けなければならない。
それが嫌で普段、机に向かうことがない生徒達も、机に向かい勉強する。
勿論、僕も机に向かって――

「あ、バッテリー切れた」

はい、某タッチペン式のゲーム機をしてますよ。
ちゃんと勉強机で……。
……えっ？遊んでるじゃないかって？
脳をトレーニングするやつだから遊んでないよ。
こんな事をしているけど、実はもうテスト3日前。
普通なら大変な目にあってるところだ。
しかし、僕はまだ余裕がある。
だからと言って、僕が天才な訳でもない。
成績は中の上だ。

まぁ、日々の努力の結果……と言いたいけど、僕は大体一夜漬けで勉強するからね。

一夜漬けのプロなのさ。
だから、テスト前日まで余裕があるんだよ。

僕はバッテリーが切れたゲーム機を充電器に繋ぎ、代わりに本棚から文庫本を取り出す。
ある映画の原作だ。

その文庫本を開いて読み始めた時、僕の部屋のドアがノックされた。

「どうぞ～」

ガチャと音を立て開くドア。
入ってきたのは舞だった。

「失礼します兄上」

「舞、どうかしたの？」

「はい、実は……」

舞はおもむろに何かの本を出して

「勉強を教えていただきたく……」

差し出されたのは『歴史』の教科書。
ご丁寧に『地理』までセットになっている。

「えっと……自分でできないのか？」

「はい……教科書を読んでもサッパリ……」

恥ずかしそうに顔を俯かせる舞。
参ったな……。
歴史なんて暗記みたいなものじゃないか。

「分かった。教えてあげるよ」

「ありがとうございます兄上」

僕は立ち上がり、本棚の脇に立てかけていた折り畳み式のテーブルを部屋の真ん中におく。

「さて、テストの範囲は？」

「近代です」

僕は舞の教科書をめくり、近代のあたりが書いてあるところを開く。
途中、肖像画に落書きがあったのは見なかったことにしよう。

「え～～と、とりあえずどれだけ知識があるか問題を出すよ」

「分かりました」

「まず一問目」

１９１４年、オーストリアのフランツ・フェルディナント大公が暗殺されたサラエボ事件を契機に勃発した世界規模の戦争は？

「……第三次中東戦争」

「……えっと、それは思いっきり現代だよね」

「というのは嘘で……」

「嘘で？」

……舞の目が泳いでる。

「……た、太平天国の乱？」

「……答えは第一次世界大戦だからね」

「あ、あ～～～、そっちですか」

そっちとはどっち何だよ。

分かってないだろ……。

「二問目」

明治になり、西洋の文化が入り、制度や習慣が変わった現象をなんと言うか？

「ぶ、ぶん……」

「ぶん？」

「文明……」

お、後少しだ。

もう正解に近づいている。

さぁ、大きな声で

「文明論之概略！」

―ガクッ―

僕は予想だにしない解答に頬杖をついていたのがズレて、机に顔を打ち付けてしまった。

文明論之概略って言ったら、一万円札の肖像画で有名な福沢諭吉の著書じゃないか。

まぁ、確かに刊行したのは１８７５年（明治８年）だけどさ！

「兄上、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だけどさ……文明論之概略なんてよく出てきたね」

「もしかして……正解ですか！？」

「いや、不正解だ」

一瞬、嬉しそうな表情をしたがすぐにシュンとしてしまった。

「正解は文明開化だからな」

「引っかけ問題ですか……」

引っかけじゃないんだどな。

「次、地理の範囲は？」

「日本全体です」

「そうか、とりあえず……」

各都道府県の県庁所在地を述べよ。

「んじゃ、ノートに書いていって」

そう言って僕は舞にノートを渡す。

ノートを受け取った舞は、頭を抱えながらも書き始める。

――20分後

「で、出来ました……」

「ん、どれどれ」

舞からノートを受け取る。

「札幌市、富山市、那覇市……バラバラだな」

せめて、東北は東北とかでまとめて欲しかった。

「水戸市、神戸市、広島市……」

うん、なかなか順調に当たっている。

「高松市、松江市、前橋市……うん？甲賀市だと？」

滋賀県の県庁所在地が甲賀市になっている。
滋賀県は大津市だろ。
あれ、よく見れば三重県も伊賀市になっているじゃないか。
三重県は津市だろうが。
……まさかあれか？忍者繋がりか？

「どうですか？」

「う～～ん、滋賀県と三重県以外は正解」

「甲賀市と伊賀市ではないのですか？」

「大津市と津市だからね」

「惜しいですね」

……どこがだよ。
僕は溜め息をつく。

「舞、残念だけど、歴史に関しては僕が教えるより、まず基本的な事を覚えなきゃ。というより、歴史なんて覚えてなんぼだからね」

「……はい、分かりました」

「んじゃ、一人で歴史暗記しておきな」

「えっ？地理を教えてくれるんじゃ……」

「歴史、今すぐやらないと、多分酷いことなるぞ」

「……」

「そんな点数、母さんに見せたら……」

「……（ビクッ！）」

舞の体が小刻みに震え出す。

どうも、脳内でシュミレートしたみたいだ。

「兄上、助けてください……」

ウルウルした目、しかも上目遣いで僕を見てくる。

普通ならここで折れる所だけど……

「ムリ！」

即答する。

もう、その目には抗体が出来てるんだよ。

「そ、そんな～」

「まぁ、骨は拾ってあげるよ」

「あ、兄上～～」

「そんなに嫌なら朱里さんに教えてもらいなよ。僕ではお手上げ」

僕は実際に両手をあげてみせる。

「それはなんか……嫌です」

「なんで？」

「何というか……プライド？」

「そんなプライド捨てちまえ！」

全く、危機感がないんじゃないか？

「とにかく、母さんに殺され……じゃなかった、怒られたくなかったら朱里さんに教えてもらうこと。いいね？」

「……はい」

舞はうなだれて僕の部屋から出て行く。

「！舞、忘れ物！」

教科書を忘れていくとは……。

僕はドアが閉まる寸前に投げる。

教科書は隙間を通り、舞に直撃。

ドアが閉まると同時に舞が倒れる音がした。

……まっ、いっか。

その後、舞は朱里さんの教えもあり、７８点という点数をとることができ、母さんの鉄槌が振り下ろされる事はなかった。

その代わり、他教科の点数が少し落ちたらしい……。
ちなみに僕はすべて平均点＋１５点という点数をとり、ある意味凄かった。

舞、社会科は苦手？（後書き）

月見　岳です。　今回は霞が舞に勉強を教える（と言っても、さじを投げましたが）話でした。　あぁ、当初の舞の設定が壊れていく……。　初めは無口キャラのつもりだったのに……。　さて、次回更新は……少し遅いかも？　感想等してくれると嬉しいです。

実は〇〇〇でした。（前書き）

ちょっと無理矢理かも……

実は〇〇〇でした。

期末テストも終わり、無事に夏休みに入って数日。
僕は冷房が程良く効いたリビングにてテレビを観ている。
今、映っているテレビからは

『全国的に猛暑で、昨日の最高気温が４０℃を記録した』

とかいうニュースが流れている。

「ふ～～～ん、暑そうだね～～」

麦茶片手にそんな感想を言っていると、リビングに涼が入ってきた。
汗だくで今にも倒れそうなくらいフラフラだ。

「はひぃ～～～～、暑かった」

ドンという音を立て、テーブルに二つの大きなエコバックをおく。

「あら、買い物ありがとう」

台所から母さんが声を飛ばす。
涼は冷蔵庫を開け、麦茶を取り出すと、コップに注ぎ一気に飲み干した。

「プハァ、生き返った～～」

「外、やっぱり暑かったか？」

「うん、途中で倒れるかと思ったよ」

「そうか……」

やっぱ、外は暑いか……。

当分、外にはでないでおこう。

「兄さん、最近出歩いてないでしょ？引きこもるのは良くないよ？」

「外に出たらどんな事態になるか分かっているのに、誰が好き好んで外に出るかっての」

その時、ニュースだった番組が終わりＣＭになった。

軽快な音楽が流れてくる。

画面には上空から撮ったのであろう、広大な土地にいくつものプールが広がっていた。

どうやら、新しくリニューアルオープンした遊園地のプールのＣＭみたいだ。

「いいな～、プール。行きたいな～」

「確かになぁ……」

だけど、着くまでにくたばりそうだな……。

それに、人が多いだろいし……。

「いいな～～」

ＣＭが終わっても、涼は指を加えてテレビを……っておい、なんで僕を見る。

「いいな〜」

「……」

「いいな〜」

「……」

「いいな〜」

「……そんなに行きたいなら友達と行ってきなよ」

このまま耳元で言われるのは鬱陶しい。

「ダメよ」

後ろから母さんの声が響いた。

「なんでダメなのさ？別にいいんじゃないの？」

とりあえず疑問に感じたので聞いてみる。

「ダメなものはダメなのよ」

「それは理不尽じゃないの母さん」

「そうだよ！ボク、一度もプールに行ったことないし、学校のプールも経験ないし……なんで？」

「それは……っ」

珍しく母さんが焦っている。
というか涼、お前はプールに行ったことなかったのか……。

「……仕方ないわね。そろそろ、真実を伝えないといけないわね……」

あれ？なんか、急にシリアスな感じになったな……。
なんでこんなことに？
また、父さんが何かしでかしたのか？

「真実ってなに？」

「嘘偽りのないことだ」

「……兄さん、ボクは言葉の意味を聞いてるんじゃないよ」

「……すまん」

別にいいじゃないか。
ちょっとボケてみただけなのに……。

「で、ボクの真実ってなにさ？」

母さんは難しそうな顔をしている。

「涼、あんた自分の性別……分かってる？」

『はっ？』

僕と涼の声がハモる。

「涼は男だろ」

「ボクは男だよ」

それがどうかしたのか？
まさか、『実は女の子でした～』とかいうのか？
ははは、そんな事ある訳が……
あれ？母さん？何でそこで目をそらすの？
まさか……本当に……。
い、いや、そんな訳がある訳ない。
第一、まず本人が気付くはずだ！

「……どうやら、霞は感づいたようね」

「――っ！と言うことはまさか！？」

「……そのまさかよ」

「えっ？ええっ？」なんてこった……。
こりゃ、びっくりどころじゃないよ。

「に、兄さん。話が見えないんだけど……」

涼がオロオロとしている。
多分、この事実は本人が一番驚くことになるだろう。
まさか……

まさか……

「涼、あんたは”女の子”なのよ」

母さんから告げられる真実。
涼は自分の理解の範疇を越えたらしく、ポカンとした表情をしている。
しばらく、その状態が続いた。

「か、母さん？なんだって？」

涼が解凍されると、頬がひきつらせながら母さんに詰め寄る。

「涼、あなたは”女の子”なの」

母さんが視線を反らしていう。
何らかの後ろめたさがあるみたいだ。
涼は涼で雷に撃たれたような感じになっちゃっている。

そんな時、玄関がガチャと音を立て開く音がする。

「ただいま」

「ただいま帰りました」

舞と朱里さんの声。
そのまま、二人はリビングに入ってくる。

「あれ？兄上、愚弟は一体どうしたのですか？」

「なんか……固まってますね」

両手に紙袋を抱えた二人はテーブルにその紙袋を置く。
涼は外から汗だくで帰ってきたのに、この二人は汗すらかいていないな……。

「涼は今、自分の真実を知って頭の中がオーバーロード状態なんだよ……」

僕は左右に振りながら言い、さらに続ける。

「正直、僕も真実を知った時は驚いたよ」

「……あの、兄上？愚弟の真実とは……？」

「そうだね、舞の言う”愚弟”が”愚妹”だったということかな」

「ハッ？」

意味が分からず、目が点になる舞。
一方、朱里さんは感づいたらしく驚いた表情をしている。

「……つまり、涼は”女の子”だったということさ」

「えっ！ウソ！？」

まぁ、母さんが『なんちゃって』とかいう可能性は無きにしもあらずなんだけど……。
今の母さんの表情からして本当っぽい。

「母さん、本当に涼は……」

「本当よ」

……あ～～、どうコメントしたらいいのだろうか？
とりあえず涼、ご愁傷様。
僕がしてあげられることは何もない。
まぁ、あったとしてもなにもしないけど……。

「兄さん！」

涼が復活。
胸ぐらを掴むような勢いで僕に詰め寄る。
実際、胸ぐらを掴まれていた。

「確かめて！」

「……何を？」

「ボクが本当に”女の子”か！」

はい？一体どうやって確かめろって言うんだ？
僕が涼を訝しんだ目で見ていると、涼はおもむろに服を脱ぎ始め……

「って、おい！やめんかぁ！」

「え？」

ふぅ、危ない危ない……。
へそが出ている程度で助かった。

「舞、朱里さん。涼を頼みます」

「了解です兄上」

「はい、分かりました」

では、僕はリビングから一時撤退と行きましょうか。

数分後……

「兄上、どうぞ」

廊下で待っていた僕に舞が声をかける。
リビングに入ると、涼が涙目でいた。
なんとか泣かないで頑張っている。
しかし、廊下は暑かったな……。

「なぁ、母さん。なんで涼を”男”として育てたんだ？いつかバレる事くらい分かってただろ？」

一番疑問だったことを母さんに尋ねる。
僕の質問に共感したらしく、舞と朱里さんが頷いた。

「いつか話さないといけないとは分かってたわ……」

「だったら、なんで？」

「……のよ」

「え？」

声があまりにも小さすぎて聞こえなかった。

「母さん、なんだって？」

「……一姫二太郎」

「は？」

「子供は一姫二太郎が良かったのよ！」

『はあぁぁぁぁぁ！？』

みんながハモった。

そりゃもう見事に。

というか、”一姫二太郎”ってアレだよな。

子供は一番目は女の子で二番目は男の子が良いって奴だよな……。

でも、最初に生まれた僕は男。

そりゃ、男として育てられましたよ。

てことは、母さんが言ってるのは、間違った捉え方をした方じゃないか？女の子は1人、男の子は2人が良いっていう方。

これ、間違いなんだよ？

「母さん、”一姫二太郎”の意味、多分間違って認識してると思うよ？正しくは、”子供は一番目は女の子、二番目は男の子が良い”だよ」

「あら、そうなの？勘違いしちゃってたのね」

……不憫だ。

あまりにも涼が可哀想だ。

「クスン、女の子だったんだ……。ボク、女の子だったんだ……」

「涼、アナタはそりゃもう立派に”女の子”です」

「うわ～～～～ん！」

舞が追い討ちをかけ、遂に涼は泣き出してしまった。

母さんの意味の分からない理由の為、しかもその理由は勘違いによる間違いだったとは……流石に同情するよ。

けど、涼も普通、学校の保健の授業で気がつくと思うんだけどな……。

「兄さ～～～～ん」

涼が僕に泣きついてきた。

とりあえず、僕は涼の頭を撫でてあげた。

しばらくそうしてあげると、涼さ泣き疲れてしまったのか、静かに寝息をたて始めた。

仕方ない、涼の部屋に運ぶとしますか。

「ちょっと涼を部屋に置いてくるよ」

僕は涼を脇に抱える。

「兄上、その運び方はちょっと……」

「確かにカスミさん、それは……」

女性陣からの非難。

この運び方のどこが悪いんだ？

仕方なく、背中に負ぶうことした。

はぁ、全く、世話が焼けるよ。

本当……。

実は〇〇〇でした。（後書き）

どうも、月見　岳です。　ついに、涼の真実が明らかになっちゃいました。　正直、今じゃなくても良かったと思いましたが……。
次回はどうなることやら……。

蠢きだした者達。

そこは山奥だった。
一般人では通れない、猟友会の人でも来ないような山奥だった。
そして、山奥であり、秘境であった。
周りを見れば、木が無数に立ち並び、名前もよく分からない草が生い茂っている。
そんな秘境でも、住所では日本の首都、東京都であるのだからビックリだ。
そんな秘境に小さな集落が形成されていた。
その集落の中で一番大きな日本家屋。
その中で多くの人間が集まっていた。
しかも皆さん忍び装束だ。
そんな皆さんの前で跪いている一人の少女、桃地　朱里だ。
周りの皆さんが忍び装束に対し、朱里は白のワンピース。
明らかに普通の恰好なのだが、いかせん、周りの皆さんが忍び装束なので物凄く浮いていた。

「朱里よ、霧島家はどうじゃ？」

忍び装束の皆さんの中でも一番ご高齢に見える老人が、少し身を乗り出して聞く。

「はい、皆さんいい人です」

「そうか……」

老人は長い髭を触りる。

「……で、お主の”夫”はどうじゃった」

「はい、私が思っていた通りの方で気に入りました」

「そうか、それは良かった」

ホッホッホと笑う老人。

しかし、すぐに笑わなくなり、只でさえ細い目を更に細め、声のトーンを少し低めに言った。

「そやつの忍びとしての実力は……どうじゃ？」

その瞬間、部屋の空気が冷たくなった感じを朱里は感じた。

「実力は計りかねますが……私のシバ吉を退けました」

「うむ、シバ吉を……。じゃが、それだけでは力量を計りかねるのぉ」

「……しかし、シバ吉に勝ったのであれば、それ以上の力量があるのでしょう」

老人の横にいた男性が、老人に耳打ちをし、さらに続ける。

「我が桃地の一族の同じくらいの年齢の者に、シバ吉に勝てる者は朱里ぐらいかと……」

「うむ……」

老人は難しそうな表情をする。

「朱里、もう良いぞ。長旅で疲れただろう。ゆっくりしていきなさい」

「はい」

朱里はお辞儀をすると、後ろに下がり、襖の奥へと消えていった。

部屋に残ったのは忍び装束の皆さんだけだ。

「やはり、霧島家の力は侮れんのぉ」

「確かに、霧島家の者は、”忍三家”には手に負えない特殊性を伴う出来事に駆り出されますからね。”忍三家”より、実力が上であるとは分かっていましたが……」

「さすが、霧島の血……というべきじゃな」

「そうですね。闇の世界が力をつけ、”忍三家”の力のみで対処仕切れなくなっている今、霧島の血は我々の新たな力として必要かと……」

忍び装束の皆さんが頷いた。

「将来、”忍三家”で我が桃地の一族が優位に立つには、我が桃地家に新たな血……霧島の血を入れ、技を手に入れる……」

老人の言葉に皆さんが再び頷く。

「……しかし、”忍三家”の他の一族も、我らと同じことを考えて

いるはずじゃ」

「どういう事です？他の一族が、例え霧島の血を狙っていたとしても、霧島家の当主が桃地家の者から息子の嫁にという依頼があったのでしょう。なら、他の一族は諦めるはず……」

比較的、若いと思われる人からの疑問。

老人は静かに目をつむり

「確かに、霧島家の当主から、『誰か、息子に嫁を！』という便りがきたときは、そりゃ、かなり喜んだんじゃが……」

老人はカッと目を見開き

「あの霧島家の当主！他の一族にも同じ手紙を送っとった！」

老人の言葉に、周囲にざわめきが広がる。

「え～～い、静まらんかぁ！」

老人が声を張り上げ怒鳴る。

頭の血管がプッツンといってしまいそうな気迫だった。

その気迫に一気に皆さんが静まった。

「全く、年寄りへの配慮がたらん……」

老人はぼそっと一言いった後、咳払いを一回して立ち上がる。

「いいか、皆の者。我が一族の繁栄のため、何としても……。何としても、朱里と夫婦（めおと）にするのだぁぁぁぁぁ！（出来れば婿として）」

老人の叫びに同調し、周りの方々も……

『うおぉぉぉぉ！！』

夜の秘境の集落に雄叫びが響き渡った。

その頃、霧島家邸宅……

へっくし！

「あら、風邪？」

「う～～ん、そうかな？」

確かに、ちょっと寒気だするが……

ゾクゾクッ

「う、なんだ？急に寒気が……」

「あら嫌だ。本当に風邪かしら？」

「……とりあえず、もう寝るよ」

「そうしなさい」

僕はリビングから出て、自分の部屋に入る。

何でも急に寒気なんか……。
まさか、これから別になにも起こらない……よね？
ただの風邪だよね……。

僕は自分にそう言い聞かせながら眠りにつく。嫌な予感がビンビンしてるのは……気のせいだよな。

蠢きだした者達。（後書き）

どうも、シリーズで読んでいた小説が最終巻を迎え、悲しみに打ちひしがれている月見　岳です。　……あぁ、楽しみがまた減った。

さて、今回はプロローグ的なものです。というか、最初は本当に話のプロローグの一部でした。しかし、思いのほか長くなったので、”プロローグ的な一話”としました。じゃあ、次回が本編なのだろうか……。むしろ、この小説自体、短編集であって本編はないのではないか……。深い事は考えません。問題は先送り。作者の計画性のなさが見えてしまいますね……。

霞、襲われる。（前書き）

評価感想、してくれると嬉しいです。

霞、襲われる。

現在、日本中の子供達は夏休みの真っ盛り。
宿題そっちのけで遊びまくっているだろう。
それは、僕にも当てはまることで、今はリビングで夏の甲子園を観ている。

「あ、ホームラン」

画面では、投手がガックリと膝をつき、ホームランを打ったバッターは片手を突き上げてダイヤモンドサークルを走っている。

「あら、打たれちゃったの」

母さんがリビングに入ってきた。
両手にエコバックを持っており、ご丁寧にネギが飛び出していた。

……ウチにいる女性陣はなぜこんなに暑いのに汗をかかないのだろう？

女性陣……この中に新たに組み入れられた涼は、特に変わった様子は無い。
ただ、現実から逃げているようだ。
まぁ、そのうち、現実と向き合わなければいけなくなるだろう。
その時、どうするかは涼次第だ。
……柄にもないことを考えてしまった。
暑さのせいで頭がオーバーヒートを起こしているのだろうか……？
だったら、少しヤバいかな……。

「ちょっと、霞。聞いてるの？」

ヤバいヤバい。

考え事をしていて、母さんの話聞いてなかった。

「ごめん、聞いてなかった」

「全く、あんたって子は……」

母さんがハァとため息をつく。

「そんなんだから女の子にモテないのよ」

「別にいいよ、モテなくても」

別にモテないからといって、困ることはない。

……僻みじゃないよ？本心だから。

まぁ、僕には恋愛なんて無理な話だよ。

初恋だってしてないね。

「……あんた、そんなこと言って悲しくない？」

「……？まったく」

母さんが呆れた感じで僕を見ている。

なんか、おかしいこと言ったか？

「……青春時代が台無しね」

「え？なんだって？」

「別に、何でもないわ。……あらら、人参とジャガイモ買い忘れてたわ」

母さんは頬に手を当て、困った表情。

「ちょっと、霞。買い物行ってくれない？母さん、夕飯の支度しないといけないから」

「え、ヤダ」

僕が即答すると、ソファーの前にあるテーブルにドンという音を立て、包丁が突き刺さった。

おそるおそる後ろを向くと、母さんが笑顔で……

「次は……無いわよ？」

「行ってきまーす！」

僕は、さっき母さんが使っていたエコバックを持つと、リビングから飛び出した。

全く、朱里さんだったら、買い忘れとかしないのに……。

ちなみに、すでに我が霧島家は、家事全般が朱里さんに依存している。

母さん曰わく、『花嫁修行よ』と言っているが、母さんが楽したいだけだろう。

現在、朱里さんは里帰りをしており、久々に母さんが主婦の働きをしているのだ。

「全く、母さんも人使いが荒いよ」

僕はブツブツ文句を言いながら商店街を歩く。
威勢のいい声が飛び交っている。
え、展開が早い？
僕の自慢の”俊足”で来たからそんなに時間がかかってないのだ。
僕はいつも買っている八百屋で、人参とジャガイモを買うと、（思いっ切り値切った）帰宅の途へつく。

―ピロロロ、ピロロロ―

突然、僕の携帯が鳴った。
液晶画面を見ると、母さんからみたいだ。

「何、母さん？」

「あ、霞？ついでに卵買ってきてね」

ブチ、ツーツー

母さんは用件だけ言うと勝手に切ってしまった。
全く、母さんって――！

――思考中断。

僕目掛けて飛んできた飛来物を人差し指と中指でキャッチする。

一体何事だ！？

飛来物を確認すると、僕もよく見る”手裏剣”だった。

同業者の仕業……。
一体誰がこんなことを……。
人通りが多い商店街で襲ってくるなんて……。
誰かに当たれば危ないですまないぞ。

僕は周りを見渡して見るが、周囲に人がたくさんいて、特定する事ができない。
とりあえず、早く卵を買って、人通りの少ない場所に行かなければ……。
最悪、周りを巻き込んでしまう。

「急ぐか……」

僕は走り出した。

……卵って、なに屋さんで買えばいいんだ？

○

なんとか、卵を探し出して買い、今度こそ帰宅の途へつく。
ちょっと前のこともあるので、出来るだけ人通りが少ない場所を歩く。
え？人通りが多いとこの方が狙われにくいだって？
確かにそうかもしれないが、僕を狙ってきた同業者に興味があってね。〝生け捕り〟にしようと思ってるんだ。
さて、一体こんなイタズラをする同業者はどんな奴だろうか？
お仕置きをしないとね～。

……！どうやら、お見えになったようだね。
後方、５０メートル。
様子見ってところか……。

「――っ！」

敵、後方より急速に接近！
人通りがないといっても、住宅地での戦闘は避けたい。
なら、とりあえず逃げるのみ！

僕は近くの家の屋根に飛び乗り、屋根づたいに跳んで行く。
背後から僕を追いかけてくる気配が一つ……いや、二つだ！
とにかく、人がいない場所……ちょっとばかし暴れられる場所は……。

僕は跳びながら周りを見渡す。
あった！工事現場！
マンション建設現場だったけど、会社の倒産で工事がストップしているってところだ。
あそこなら誰もいないし、多少暴れても大丈夫だな。

僕はその工事現場へ向かって跳んだ。

……卵、割れてないよね……？

○

「……さてと」

僕は中途半端に建っているマンションの鉄骨の上にいる。
追っ手を待ち受けている最中だ。

「……！」

僕の向かい側の鉄骨の上に二人の忍びがシュッと現れる。
僕はその二人を睨みつける。

「……おまえさん方、一体なにが目的だ」

「……」

「……」

二人の忍びはだんまりだ。
その代わり、行動で二人は意思を示した。

一人は忍者刀を構え、もう一人は手裏剣を指の間に大量に構えている。

敵意剥き出しだ。

「……同業者に恨まれるようなことした記憶ないんだけどな」

話せば分かる、なんて言っても聞くような相手じゃないし……。
とりあえず、相手してあげるしかなさそうだ。

「……仕方ない」

僕はそう呟くと、エコバックを放り投げ、着ている服を一気に剥ぎ取る。
その下から現れたのは忍び装束。
重力に従って落ちてくるエコバックを受け取り、

「相手、してやるよ！！」

と言う。
……エコバックを持った忍者って滑稽だよね。
そんな事より、お二人さんだ。
エコバックが邪魔だが……何とかいけるか？

僕は腰の後ろにある忍者刀『月影』を抜く。
夕陽の光を受けて、刀身が朱くなっている。
なんとも幻想的だけど、エコバックでぶち壊しだ。

「来ないなら……こっちから行くよ」

僕がそう言うと、二人は行動を起こした。

煌めきを放ちながら、大量の手裏剣が迫る。
それを僕は跳んで避ける。
そのまま、別の鉄骨に着地。
その着地を狙って、もう一人の忍びが忍者刀で斬りつけてくる。

―カキィィィン―

甲高い金属音が鳴り響く。
僕が忍者刀を”月影”で払ったからだ。
そのお陰で、相手の懐に一瞬の隙ができた。

僕がその隙を見逃す筈もなく、相手の懐の中に、火のついた爆裂玉（舞特製）を入れてあげる。
そして、相手の腹に蹴りを入れ、吹き飛ばす。

―ズガァァァン―

吹っ飛んで、さらに爆発を受けて吹き飛ぶ忍者。
爆発をもろに喰らっているから、死んでなくとも戦線に戻るのは無理だろう。

「……あとは、お前さんだ」

「……」

やっぱり、撤退してくれないか……。
一人倒せば、撤退してくれるかなって思ってたけど……甘かったか。

「ていや！」

「……」

ほぼ、二人同時に放った苦無。
その全てが空中で激突する。
僕は瞬時に移動。
敵の側面から斬りつける。
手応えあり。

「――っ！変わり身！」

そこに突っ立っていたのはデカい丸太。

クソ、やられた！
僕は、別の鉄骨に飛び移る。
その瞬間、元いた場所に大量の苦無が突き刺さる。

おいおい、鉄骨に突き刺さってるよ……。

僕は振り返ると同時に、敵の位置を確認。
ありったけの手裏剣を放った。
しかし、残念ながら直撃する事はなかった。
まあ、カスったかもしれないが……。
再び飛来する手裏剣。

一体、どんだけ持ってんだ！

僕は月影を巧みに操り、半分を避け、半分は弾いた。

「霧島家奥義、斬撃・鎌鼬！（カマイタチ）」

月影を素早く振り、鎌鼬を発生させて遠くの敵を斬りつける技で、
僕の十八番だ。

真空の刃は、敵の忍者に向かっていく。

「……！」

敵の忍者は何かに気付いたらしく、体を捻る。
真空の刃は敵の忍者の肩を斬りつけた。
忍者は肩を押さえ、しゃがみこむ。

「まだまだ！！」

僕は一気に敵の忍者と距離を詰める。
これで勝負をつける！

「我流・紫電颯刃！（しでんそうは）」

忍者刀で、ただ純粋に斬りつける技なのだが、高速で斬りつけるため、刀身の周りに真空の刃ができ、例え刀身が当たらなくとも、真空の刃で斬りつけることができる技だ。

―キィィィィィン―

「――っ！」

なっ、防がれた！？
最初に倒したはずの忍者が僕の月影を……。

「ぐっ！」

突如、腹部に感じた圧迫と痛み。
蹴り込まれたか……。
蹴り飛ばされた僕。
なんとか体勢を立て直し、鉄骨に着地。

痛みをこらえ、敵の方を見る。

肩を怪我している忍者を、もう一人の忍者が抱えて……って、逃げるのか！？

「お、おい！？」

僕の叫びも虚しく、敵の忍者は煙玉を投げ、煙幕を張ってしまった。

「ケホ、ケホ」

せき込みながらも、僕は団扇で煙幕を晴らす。
え、なんで団扇があるか？
忍者だから。

「あ～～あ、逃げられた」

せっかく、痛めつけて生け捕りにして、何で僕を襲ったか問い詰めるつもりだったんだけどな……。
逃げられたんじゃ仕方ない。
とっとと帰……。

僕は手に持っている筈のエコバックがないことに気づく。

あれ？どこにいった？

キョロキョロと周りを見渡す。
そして見つけてしまった。
地面に落っこちているのを……。
見事に卵が割れている。

「なんじゃこりゃあぁぁぁぁ！？」

夕闇の霧瀬市に僕の叫びが響き渡った。

結局、霞は卵を自腹で買い直した。
さらに、今回の戦闘で紛失した苦無、手裏剣の数が多く、母さんに怒られた上に、小遣いの２ヶ月停止を言い渡された。
あの忍び共、許すまじ！

霞、襲われる。（後書き）

誰か、助けてください！　……どうも、月見　岳です。
参った。ネタがない。ストーリーが思いつかない。　ということで、
更新が遅れます。　楽しみにしてる方、すみませんが、気長に待
っていてください。

履歴書に特技・忍術とは書けません。（前書き）

とりあえずの再開です。更新はやっぱり不定期……かと。

履歴書に特技・忍術とは書けません。

夏休みもお盆に入る頃。
朱里さんはお盆が過ぎるまで、実家に帰省するらしい。
例年通りなら、僕は既に学校より課された提出物を全て終わらせて、暇にしてみればいるころだ。
そして、今年も既に提出物は終わらしている。
つまり、今は何もすることもなく暇である。
暇であるのだが……今年は少し違った。

「うむぅ……」

僕は一冊の冊子を凝縮している。
タダで手に入れることができる”求人情報誌”だ。
なぜ僕が求人情報誌を見ているか？
それは理不尽にも母さんに”小遣い支給2ヶ月停止”を言い渡されたからだ。
しかも、今まで夏休みのために貯めていた資金が紛失した分の苦無、手裏剣の購入費に”強制的”に当てられた。
おかげで夏休みが半分残っている今、とても経済的に苦しい状況なのだ。

「う〜〜む」

「……兄さん、昼間に公園にいるようなサラリーマンみたいだよ」

なんか、涼が失礼なことをほざきやがったが、温厚な僕は気にしない。
……気にしない。

えぇ、怒っていないとも。

「……ひにゃ！」

持っていた求人情報誌を丸めて涼にぶん投げる。
見事に眉間にヒットした。
女の子というのが判明したからって容赦はしない。
全く、昼間に公園にいるサラリーマンに失礼じゃないか。

「うぅ、兄さん痛いよ」

「自業自得だ」

「でも、何で兄さんが求人情報誌なんて見てるの？」

「……母さんのせいさ」

まぁ、実際は僕のせい何だけど。
他人のせいにしないと気が済まない。
なんで苦無が一本３０００円なんかするんだ！

「……なにがあったか知らないけど、バイト探してるんだね」

「あぁ、そうだ」

この時期、バイトの募集が多いのか少ないのかは分からないが、既に二件も面接で落ちている。
履歴書の特技の欄に『忍術』と書けないのが辛い。
忍者から忍術を無くせば、なにが残っていると言うんだ。

「バイト募集、結構あるんだね」

涼が求人情報誌をペラペラとページを捲りながら眺めている。

「でも、ほとんど接客業。兄さんには向いてないね」

「自覚してるよ」

無愛想だからね。

それが原因で面接に落とされたんだし……。

「でも兄さん、接客業以外となるとまったく見当たらないよ？」

「そうなんだよな……」

「どうするの？」

「どうするもこうするも、お手上げさ。最終手段として”新聞配達”っていう手があるけどね」

「……なんか、勤労学生って感じだね」

勤労学生……僕には似合わないな……。

「勤労学生ってキャラも、兄さんには似合わないよね」

「……」

自分でも分かってることを言われると、無性に腹が立つ。

しかも、相手が涼となると尚更だ。
不思議だよね～。

さて、近くにあるものは……。
……ちっ、茶菓子の瓦煎餅しかないか。
まぁ、堅いしいっか。

僕は無言で瓦煎餅を涼に投げつけた。

「ひぎゃ！」

見事、鼻の頭に命中。
少し、気分が晴れた。

○

結局、僕は今日バイトを見つけることは出来なかった。
色々と電話をしてみたけど、面接を行ってもらうことすら叶わなかった。
そんなんなら、求人なんか出すなっての！

「……どうしたんだ霞？考え事か？」

「あ、うん……ちょっとね」

今は夕食の席。
珍しく帰ってきている父さんに聞かれた。
顔に出てたかな？

「なんだ?父さんに相談してみなさい」

「……」

「どうした?遠慮は要らない」

いえ、父さん、あなたに相談するのが心配なんです。

「兄さん、アルバイト探してるんだ」

涼!?

なに言っちゃってくれてんの!?

「あら、家計の足しにでもですって?悪いわね~~」

「それは断じて違う」

ここは、はっきりと言っておかなければ……。

母さんなら本当に全部ごっそり持っていきかねん。

「しかし、なぜ兄上がアルバイトを?」

「まぁ、ちょっと思わぬ出費があってね。懐が寂しいんだ」

「だけど、全部断られちゃったんだよね~~」

面白そうに話す涼が、無性に腹が立ったので、とりあえず、後でシめることにした。

「霞、おまえバイトしたいのか？」

「そうだけど？」

「そうか……」

缶ビール片手に、う～～～むと声を出してなにやら考えている父さん。

父さんの事だ。きっとろくでもないことだろう。

僕は、そうたかをくくって、そのろくでもないことが僕に降りかかってこないように、急いでご飯を食べる。

「ごちそうさま」

さあ、部屋に避難だ！

すばやく、食器を流しに持っていき、リビングからの脱出を試みる。

「霞、ちょっと待て」

……呼び止められてしまった。

あきらめも肝心だな……。

「なに、父さん？」

「バイト……したいか？」

「そりゃ、お金いるしね。バイトはしたいよ？」

「そうか。なら、バイトしてみるか？」

「バイトするにも、採用すらされてないんだよ」

「俺の知り合いのところでだよ」

「知り合い？」

こりゃまた厄介そうなとこに思えるな。

「お前なら、大丈夫だろ」

「なにが？」

「色々だ」

……やばそうな感じがするんだが、気のせいか？

「で、どうする？」

「接客業かそのバイトは？」

「違う」

「へぇ、接客業じゃないなら兄さんやれば？」

「確かに、兄上は接客業には向きませんしね」

それはわかっているのだが、情報源が父さんってことが少し厄介なんだよな……。

大体、どんな会社でどうゆう仕事かがわからない。

怪しいことこの上ない。
ここは、慎重に――。

「時給は１５００円だ」

「やらせてもらいます」

即決だった。
見事に即決してしまった。
僕自身、気がつくと父さんに頭を下げていた。
金とは恐ろしい。

「それじゃ、明日早速行こう。ちょうど、父さんも用事があったところだ」

「お願いするよ父さん」

こうして、僕のアルバイトが決まった。
さて、どんなとこだろう……。

履歴書に特技・忍術とは書けません。（後書き）

どうも、月見岳です。
しばらくの休載、失礼しました。なんとか、再構築できそうなので再開しました。
とりあえずですけど……。

暗部機関にようこそ！（前書き）

あ～～、遅れました。
言い訳とか今後についてとかは後書きで

暗部機関にようこそ！

「…えっと……」

「ん、どうした霞？」

僕は今、父さんに案内されて、僕が勤めるバイト先へと連れてきてもらんたんだが……

「……ここ、なのか？」

「そうだが？」

え～～、僕の目はおかしくないよね。
じゃあ、やっぱり僕が見ている風景に間違いはないよね。

「なんで『墓地』なんだよ！」

そう、墓地です。
墓場です。
ｍｅｍｏｒｉａｌ　ｐａｒｋです。
隣町の保上町（ホガミチョウ）にある御笠霊園だ。
御笠山という山の中腹に存在する、見晴らしの良い霊園だ。

「どうした、早く来い」

墓場の入り口で突っ立っている父さんが、呆然としている僕に声を飛ばす。
その声に僕は我に帰った。

「まてまて父さん！なんか間違ってないか！？バイト先って墓場かよ！！」

「なんだ、怖いのか」

「んな訳あるか！」

「……だろうな」

スタスタと墓場へと入っていく父さん。
仕方なく僕もその後について行く。
霊園内は沢山の墓石が立ち並んでいて、大小様々な墓石がある。

「父さん、僕は墓参りにきたわけじゃないんだけど……」

「分かってる。そう心配するな」

いや、だってねぇ？
父さんだし？

「さて、コイツだ」

父さんに連れられてきたのはあるお墓の前。
霊園の人目のつかない隅にポツンと一つだけ立っていた。
墓石には何も刻まれていない。
”形だけ”のお墓みたいだ。

「ちょっと見てろ」

父さんがそう言うと、墓石の天辺に手のひらをおく。

―ポ～～ン―

そんな電子音がした。
その後、

『認識、完了しました』

という人工音声がする。
そして、ゴゴゴッと音を立て墓石が横にずれる。
そこから、地下に続く階段が現れた。

「ついてこい」

父さんはそう言うと、階段を降りてゆく。
僕もその後をついて降りていく。
降り始めると、僕の後方から再びゴゴゴッと音を立てて、入り口が勝手に閉まり始める。

「……父さん、閉まりかけてるけど」

「問題ない」

どこが？と思ったけど、既に入り口は閉まってしまった。
おかげで真っ暗……といっても下の方に灯りがあるのか、微かに光を感じることができる。
しかし、これでは一般人じゃなにも見えないだろう。
だけど、父さんと僕はなんの支障もなく階段を降りていく。
これくらいの暗闇なら普通に周りを認識することはできる。

忍者だから。

階段を降りていくと、ランプに照らされた白い壁にぶち当たる。
つまり、行き止まりだ。
父さんはおもむろに壁に近づく。

『指紋認識、確認しました』

人工音声が響いた。

『声紋認証――』

「忍に名はなし」

『声紋認証、確認しました』

……忍に名はなし、か。
なんだかな～。

『網膜スキャンを行います』

お、網膜スキャンもあるのか……。
なんつーか、厳重じゃないか？

『個人認証終了。ようこそ、霧島様』

そんな人工音声がした後、白い壁がゆっくり持ち上がっていく。
今気づいたけど、どうも何らかの金属の隔壁だったみたいだ。
え？曖昧すぎる？
仕方ないじゃないか。

僕だってよく分からないんだから……。

僕は父さんの後ろをついて歩いている。
ＳＦとかに出てくる宇宙船の内部みたいだ。
本当に宇宙船とかだったりして……。
なんて、映画の観すぎだよね。

「ここだ」

パシュと音を立て扉が開く。
自動ドアですか……。
父さんはためらいなく内部に入っていった。

「ガキ共～、生きてるか～」

「ちょっと、霧島の親父さん！なに言ってんですか！？」

「なに、ちょっとしたお茶目じゃないか副長さん」

「いい年した親父がお茶目かよ、キモ！」

「なんだ、ガキ。まだ生きてたか。てっきり死んだもんだと思ってたぞ」

「勝手に殺すな！」

……え～～と、お呼びでない？
一体なんですか？この人たちは……。

『霧島様、息子さんが困ってますよ』

部屋全体に響いた声。
その声に、見知らぬ二人がこちらを向く。
やっと気づいたみたいだ。

「えっと、そいつ、親父さんの子供か？」

目つきの悪い少年がこちらを睨む。
たぶん、本人はただ見ているだけなんだろうが、いかせん、目つきが悪すぎた。
見られている方は睨まれているようにしか思えない。
正直、少し怖い。

「おお、紹介する。息子の霞だ」

「……ども」

とりあえず、軽く頭を下げておいた。

「副長がこの前、”あ～～～！人手が足りない！”って言ってただろ？だからウチの息子をバイトにどうだって思ってな」

「それホント！？」

目つきの悪い少年の横にいた少女が、父さんの言葉に喰いついた。
どうやら、この少女が”副長”らしい。
ショートカットの髪型に黄色いカチューシャが印象的だ。

「ああ、こき使ってやれ」

「やった～～～！これで人手不足が緩和されるわ！」

喜ぶ少女と対照的に少年は訝しむ目でいう。

「おい親父。忍三家は闇に不干渉が絶対だろ？いいのかよ？」

「霧島家は三家とは違うんだよ」

「よくわからねーな」

……よくわからないのは僕なんですが？

放置ですか？

自己紹介すらなしですか？

『ほらほら、また霞さんが困ってますよ』

また、全体に響く声。

一体どこから？

「あ、ゴメンね。自己紹介すらしないで。私は樫野　美里。よろしく。で、こっちが……」

「木野　拓也だ。よろしく」

「霧島　霞。よろしく」

「それと……」

『はじめまして、ナビィです』

「え、まただ。一体どこから？」

僕はキョロキョロと周りを見渡してみるが、声の主が分からない。

「あ、探しても無駄だから。ナビィは人工知能……ＡＩだからね。施設全体のシステム管理をしているのよ」

「じ、人工知能！？そんな技術がもうあるのか！？」

『そんな驚かれるものではありませんよ』

声の具合から、少し照れてるようだ。

「それより副長。そろそろ本題」

「あ、そうね」

美里さんがポンと手を叩く。

「暗部機関にようこそ霞君！歓迎するよ。それと……」

美里さんは僕の目の前に”雇用契約書”と印刷された紙を突き出すと

「時給制と日給制と月給制。どれがいい？」

「はぁ？」

暗部機関にようこそ！（後書き）

ども、月見岳です。
投稿が遅れたのは……そうですね、作者が学生なのと、後……事故って怖いし痛いですね。
今後とも更新していくつもりです。
応援よろしくお願いします。

職場は命懸け。（前書き）

あれ……これってコメディー？

職場は命懸け。

壮大に響く発砲音。
時折、罵声や爆発音が混ざって聞こえてくる。
火薬の匂いが物凄い。
そう言えば、昔に観たミリタリー映画でこんな撃ち合いのシーンがあったっけ。
確か、ソマリアが舞台で、『モガディシュの戦闘』を描いた作品だったな。

―ヒュン―

耳元を掠めていった銃弾。
僕を狙ったものではない”流れ弾”なんだろけど、もし、があった場合を思えば背筋が凍る。

こんなドンパチ戦場みたいな状況になっているのは、海外ではなく紛れもなく日本である。
……もう一度いうが日本だ。

「いつ、日本は銃社会になったんだ……」

「あ？なに言ってんだ？”この世界”じゃ当たり前のことじゃねーか」

僕の独り言を聞いていたのか、律儀に答える木野　拓也。
８９式小銃を脇に構えて、いつでも撃てるようにしている。

ここで今の僕が陥っている事態を説明しよう。

あの後、雇用契約書たるものにサイン、更に血判した後、

「早速仕事よ！」

と言われ、有無を言うまもなく軍用ヘリＮＨ９０に放り込まれた。
そして、飛んでいるヘリから落っことされ、どこぞの地下施設に侵攻し、そこの守備部隊と交戦中。
こんな感じ。

「つーか、あんたたちは僕になにをしろと？」

「言ってなかったか？」

聞いてません。

「そういや、言った覚えがねぇーや」

おい。

「そんじゃまぁ、説明する。まず……」

「まず？」

「……」

「……」

「……スマン、忘れた」

「ちょい待てコラ。」

思わず、胸倉を掴みそうになったけど、なんとか自制することができた。

「ま、とにかくテキトーにやってくれ。俺たちの目的は施設の破壊だから」

「そんな、テキトーにって……」

……ん？施設破壊が目的？
テキトーに？

「なら、テキトーにぶっ壊していっていいのか？」

「まぁ、最終的にこの施設がぶっ壊れればいいからな。いいんじゃねぇか？」

「なら、テキトーにぶっ壊してくる。日頃の憂さ晴らしに」

○

「さてと……」

木野　拓也は、霞がどこかに行ったのを確認すると、おもむろに耳に取り付けている無線機を作動させた。

「全部隊、状況を報告」

数秒後、返答が返る。

《こちら1班、B地区とD地区を破壊。現在はA地区に進撃中》

《こちら3班、E地区を破壊。現在、C地区にて交戦中！》

《こちら4班！B地区にて交戦中！攻撃熾烈！》

《こちら2班、今F地区を破壊した》

「了解した。2班はこれよりB地区に行き、4班と合流して支援しろ。俺は3班に合流する。1班はそのまま進撃を続けろ。もうすぐ作戦も終わりだ、気を引き締めろ」

通信を終えると、木野は小銃を構え直し、走り始めた。

○

「おい、どうだ？」

「いや、こっちは大丈夫みたいだ」

黒い戦闘服とボディアーマーの二人の兵士が警戒している。

二人の兵士が所属していた部隊は、『機関』の攻撃を受け、呆気なく全滅。

彼らは直前に警戒任務で部隊を離れていたので助かったのだ。

「とにかく脱出だ。この施設はすでに堕ちた」

「確か、この先を曲がった所に、隠し通路があったはずだ。そこから脱出できる」

「よし、そこから地上に出て本部に連絡だ。奴らの襲撃時に通信室を破壊されたから、本部に連絡がされてないんだ」

二人の兵士は静かに走り出した。
気配を探り、出来るだけ足音をたてず、自らの気配を消し、しかしながら走るスピードを落とさずに。

「ここだ」

何の変哲もないただの壁。
しかし、一部だけ触ると感触が違うところがある。
兵士の一人がその部分を押し込む。
すると壁の一部が円形に開かれる。

「さあ、行くぞ」

兵士達が円形に開いた入り口に入ろうとした時だった。

「なんだ、そう言う仕掛けはどこも変わらないんだな」

『！！』

突然の声に驚き、振り向いた。
しかし、誰も見当たらない。

「どこ見てんだ。上だよ、上」

声の通りに上を見る。
そこには、時代劇でしか見かけたことのない出で立ちの人間が天井に張り付いていた。

「に、忍者？」

「大正解」

忍者の姿がフッと消える。

「君たちには恨みはない。だけど、僕の収入になってもらうよ」

それが二人の兵士が意識を失う前に聞いた声だった。

○

僕の前には目を鳴門にしている兵士が二人倒れている。
施設設備をぶっ壊しに行った僕なのだが、たまたまこの二人を見かけたので、こっそり後ろをついていった。
すると、逃げ出そうとしていたので、とりあえず捕まえておくことにした。
なんか、役に立つかも知れないし……。
僕は二人を簀巻きにするためにロープを取り出して巻き始める。

「ん？」

突然、二人の兵士の血色が悪くなった。
ところどころ痙攣している。
ただならぬ状態。
一体どうしたのか？
ふと見たら、二人とも首に小さな針が刺さっている。

（これは……忍び針）

僕が忍び針を取ろうとしたときだった。

「――っ！！」

微かな気配を感じ取り、後ろに跳ぶ。
すると、元いた場所に手裏剣が突き刺ささった。
それは微かな気配だった。
僕が周囲に気を張っていて、なんとか感じとれたぐらいだ。

（クソっ、同業者か！？）

心の中で悪態をつきながら、月影を引き抜く。
相手に”同業者”がいるなんて聞いていない。
内心の焦りが隠しきれない。
なぜ僕が焦っているか？
それは、この兵士たちにある。
たぶん、忍び針には即効性がある神経性の毒が塗られていたんだろう。
しかも、”同業者”の人間が使うものだ。
早く解毒薬を飲ませて上げなければならない。
ちょうど、大体のものに効く解毒薬を持っている。
舞特性の薬だから大丈夫だとは思うんだが……。

「そこ！」

斬撃・鎌鼬

真空の刃を放つ”飛ぶ”斬撃。

真空の刃が黒い二つの影を切り裂いた。

ゴトン

音を立てて落ちてきたのは真っ二つになった丸太。

「むっ、変わり身か」

思わず声に出してしまう。

気づけば、その一瞬の隙をつかれ、大量の苦無が僕にむかって放たれていた。

その攻撃を避けるため、上に跳び、さらに天井を蹴る。

そしてそのまま苦無を放ったのであろう忍者に急接近。

まだ未完成ではあるが、僕の技の中でもっとも速い斬撃を放つ。

「我流・紫電颯刃！」

――キィィィィン！

金属と金属のぶつかった音。

涼しい音の後、ギチギチと音を立てている。

僕が狙っていた忍者の前に、忍刀を持つ忍者。

激しい鍔迫り合い。

その時に、僕は気がついたことがあった。

こいつ達とは一度戦っている、と。

○

「お前たち、御使いの帰りに襲ってきたやつだな」

「……」

「無言……なら、その通りだと受け取らせてもらう！」

力で無理矢理相手の忍刀を払う。

「お前等のせいで！お前等のせいで！僕の小遣いが無くなったじゃないか！」

迫り来る大量の苦無と手裏剣を鎌鼬で凪払う。

「そのせいで、バイトしなきゃならなくなったじゃないか！絶対に許さん！」

爆裂玉を取り出し、ぶん投げた。

二人の忍者の足元に着弾、爆発を起こした。

周囲に煙が立ち込める。

そのせいで視界はゼロ。

ふつうは煙以外見えない。

だけど、僕には二人の位置が見えていた。

怒りと執念の結果かもしれない。

「これで終わりだ！」

両手に持てるありったけの爆裂玉をバラまいた。

―ドン、ドドドォォォォン

連鎖的に爆発した。

爆風で首に巻いている布がはためく。

この時は怒りのあまり、この場所が室内で、しかも地下であるということをすっかり忘れていた。

あれだけの爆発を起こしている。

天井はすでにボロボロだ。

こうなったら何が起こるか？

―ピシッ―

「あっ」

天井に亀裂がはしる。

今になって、ここが地下だということを思い出した。

「や、ヤバいような……」

―ピシピシッ―

数秒後。

天井が崩落してきた。

さらに、土砂や岩石とかまでも崩落してくる。

「ウヒャ～～」

僕は虫の息の兵士達を抱え、円形の穴から脱出した。

忍者達の安否を確認してないけど……多分まだ生きてるだろう。
爆発の瞬間、忍者達の姿が消えた。
つまり、さっきの攻撃によるダメージは無い。
あのまま逃げたのだろう。
なぜ逃げたかまでは分からないけど……。

○

「霧島！」

前から木野が走ってきた。
その後ろからも数人が走っている。
全員が僕と同い年またはそれより下に見える。

「ん？こいつらは？」

「まぁ、捕虜ってとこだよ」

あの脱出の後、そのまま地上に出て、二人の兵士に解毒薬の飲ました。
一命は取り留めたみたいだけど、医者に見てもらった方がいいだろう。

「しかし、よく脱出できたな」

「まぁね。そこの二人が、本部に連絡するとかで脱出経路を開いた時だったからね。」

「本部に連絡だと？」

木野の表情が急に険しいものになる。

「どうした？」

「いや……”奴ら”の本部は俺たちですら把握していないんだ。もしかしたら、コイツらが何かしら知っているかもしれないなと思ってな」

「”奴ら”？一体何なんだ？それは今日のこれと関係あるのか？」

「あぁ、奴らと言うのは『黒き霧』という組織だ。今日のこの施設も『黒き霧』の実験施設だったんだ」

「『黒き霧』って組織は何なんだ？それにここは何の実験施設だったんだ？」

僕の質問に、ちょっとばかしタジタジになる木野。

「まぁ、待て。説明は帰ってからだ。とにかくヘリが来た」

確かに、ヘリの爆音が遠くから聞こえる。

「分かった。帰ったらとりあえず、『黒き霧』……だったか？その組織のことだけども教えてくれ」

○

黒き霧……

暗部機関のデータベースには国際的犯罪集団組織という位置付けがされてある。
暗殺などといったことから、太平洋沖での空戦などといった様々な規模で展開する。
詳しい組織の規模は不明だが、かなりの規模であると推測される。
通常戦闘員は各国の軍隊と似通った能力であるが、その上、特殊戦闘員の戦闘能力は桁違いになると報告がある。
過去に特殊戦闘員二名により、某国の一個師団が壊滅的被害を受けている。
彼らの目的、中枢、幹部など詳細は不明。
尚、調査実行中。

これが『機関』が知りうるすべての情報だ。
機関の本部に帰ってきた僕は、すぐに副長に頼んでデータベースの閲覧を許可してもらった。
そして、黒き霧の情報はこれだけ……。

まぁ、あまり関与しないでおこう。

現在、僕は父さんの運転する車の中だった。

「あっ……」

思い出したことがあった。
あの忍者のことだ。

「そう言えば父さん。今日、忍者と戦ったよ」

「なに……っ？」

車が蛇行した。
その際に、頭をドアにぶつけた。

「…ったぁ～。ちょい父さん！」

「す、すまん。少し驚いてな……。で、忍者だって？」

「あぁ、今日僕が捕虜を捕まえた時にね」

「どこの忍者か……分かるか？」

「いや、分からないよ」

「そうか……」

父さんはそれっきり黙ってしまった。
しばらく、そのままでいたけど、ふと気づいた。

「父さん……」

「どうした？」

その時、サイレンが響いた。

『そこの黒のセダン。左に寄って止まりなさい』

「あ……」

「……遅かったか」

スピード違反だった。

職場は命懸け。（後書き）

どうも、月見岳です。
最近は週一の更新は不可能の状況になってきました。
とりあえず、今回で『機関・アルバイト編?』は終了です。
次回はコメディーっぽくするつもりです。
というか、これコメディーの分類でした……。

番外編・涼、散々な一日（前編）（前書き）

番外編です。
涼が主人公です。

番外編・涼、散々な一日（前編）

うぅ、ミンミンと蝉の声が朝っぱらから聞こえてうるさいったらありゃしない。
せっかくの夏休みなんだ。別にいつも通りに起きなくてもいい。
まだ、昨晩つけていたクーラーの冷気が残っていて、これがまた二度寝するのに最適な温度にしてくれている。
これは二度寝しないとね。
……と言うことで夢の世界にいってきます。

「起きろ愚妹」

ドゴォ！
壮絶な音を立て、強烈な姉さんの踵落としがボクの腹部にめり込んだ。

「くぅ……な…なにをするんだ…姉さん」

「夏休みだからといって、いつまでも寝ている愚妹が悪いのです」

「だからと言ってこんな起こし方はないよ」

「ならこれを使いましょうか？」

そう言って姉さんは一抱え程ある丸い球体を取り出した。
中にはきっと火薬が大量に入っているんだろう。
こんなもの使われたら、この家が吹き飛ぶよ……。

「今回は新たなチャレンジとして、プルトニウムを使ってみました」

「……え？」

プルトニウム？
……ヤバいよそれ！？
あらゆる面でヤバいよ！？

「冗談です」

……え、冗談？
そうだよね。冗談だよね。
普通に考えたら冗談だよね。
あ～あ、一気に目が覚めちゃったよ。

「目が覚めたみたいですね愚妹。早く着替えて朝ご飯を食べに来なさい」

「うん、わかった」

姉さんはボクの部屋からスッと出て行った……と思ったら、ドアを少しだけ開けて

「さっきのは冗談です」

そう言って閉めた。

……えっと、なにが？
まさか冗談が冗談だとか？
……それだけは違ってほしい。

ボクはそう思いながら着替えるのだった。

○

「おはよー」

ボクがリビングに行くと、テーブルの上にトーストと目玉焼き、そして牛乳が置かれている。

……あれ？兄さんの姿が見えない。
まだ寝ているのかな？

「姉さん、兄さんまだ寝てるの？」

「兄上はすでに出かけました。愚妹、あなたと一緒にしてはいけません」

「……姉さん、ひどい」

でも、兄さんが休みの日にこんな早く出掛けるなんて珍しい……。

ボクはそう思いながらトーストをかじる。

「あら、涼くんは今起きたの？」

「あ、朱里さんおはよー」

「おはようございます」

台所にいたのか、エプロン姿の朱里さん。
なんというか、様になっている。

「あら……」

「？？」

朱里はボクを見て少し困った顔をする。
ボクの体全体を見ている。

何か変なとこでもあるのかな？

気づけば、ボクはトーストをかじったままの状態で止まっていた。

「……女の子っぽくないわね」

「ふぁい？」

あ、トーストかじったままで返事したから変な声になっちゃった。
特におかしくはないと思う。
普通のジーンズに半そでのTシャツ。
しかも、Tシャツは柄物でなく無地だし……特に問題ないと思う。

「涼くん、女の子なんだから男物の服装は……」

「駄目ですか？」

確かに、どれも男物ではあるが、今まで着ていたものだし……。
というより、女物の服なんて無い。

「駄目って訳じゃないんだけどね～」

「女として自覚がありません」

そりゃ、ちょっと前まで男だと信じて疑いませんでしたから。
それに、今だって男だと思ってるし……。
というか、そう思わないとボクの色々なものが壊れる。

「……愚妹、いい加減に現実と向き合いなさい」

「……」

「あなたは”女”なのです」

分かってるよ。
だけど……

「ボクは……やっぱり男だよ。産まれてから十数年間そう過ごしてきたんだ。今更変えられないよ……」

そう、やっぱりいきなり変われっていうのは無理なんだよ。
ボクが俯いていると、それを無表情で見ていた姉さんが、

「なに柄にもなくシリアスになってやがるんですか愚妹。変な物でも食べたんですか？意地汚い。あっ、そう言えば愚妹の分の牛乳は消費期限が3日前に切れていましたね。それが原因でしょうか？とにかく、愚妹、あなたにシリアスな雰囲気は5年早いです。そんな雰囲気をかもし出すくらいなら、とっとと朝ご飯を食べてください。後あなたの食器を洗うだけですから」

……凄いや姉さん。噛まずにあんなにまくし立てることができるなんて。

そう言えば、なんか姉さんがボクを馬鹿にしてたような……それに、牛乳がどうとか言ってた気がするけど、姉さんの話すスピードが早くて聞き取れなかった。

「姉さんよく――」

「そんなことはどうでもいいです。早く食え」

そう姉さんは言うと台所に消えていった。

なんか、誤魔化された気がする。

ボクはなにか引っかかる感じを覚えながらも、朝食をとり始める。

そして、牛乳に手をかけたとき……

「あっ、涼くん。それはやめた方が……」

「えっ？」

「あ、アイスコーヒー煎れてきますね。ついでにその牛乳、捨ててきますね」

朱里さんは、ボクから牛乳の入ったコップを掻っ攫うと、姉さんと同じく台所へ消えていった。

ボクも家事手伝ったほうがいいのかな？

姉さんよりはできる自信あるし……。

姉さんの作る料理、不味くはないんだけど美味しくもないんだよね。

なんか……そう、味がない。

その一言に尽きるんだよね。

そんなことを考えていると、額になにやら衝撃と痛みが走った。

「〜〜〜〜っ」

声にならない悲鳴をあげる。

どうやら、お玉が飛んできたみたい。

「愚妹、さっき失礼なこと考えましたね」

「そんなこと、思ってないよ」

「はいはい、嘘だって丸分かりです」

姉さんは再び台所へ消えていった。

……ところで、お玉はどうするの？

○

朝食を食べおわり、自分の部屋で漫画を読んでいる時だった。

―トントン―

ボクの部屋がノックされた。

「どーぞー」

「邪魔します、愚妹」

「どうしたの姉さん」

「出掛けます。とっとと準備しやがれ」

「えっ？どこに？」

「そんなの着けばわかります。では下で待っています」

バンと音を立ててドアを閉めて、姉さんはボクの部屋から出て行った。

（一体なんだろ？）

と思いながら、取り敢えず、愛用五年になる小さな肩掛けのカバンに、財布と携帯を放り込む。

うん、特にほかに入らないからこれでいい。

カバンを肩に掛け、下に降りて、さあリビングに――

「遅い」

姉さんの短い言葉を認識したと同時に顔面に衝撃を受けた。

突然のことだったので、衝撃に耐えきれず、そのまま体が後ろに傾いて――

「ヒギャ！」

ゴチンという音が聞こえたと思う。

後頭部を思いっ切り床に打ちつけた。

一瞬、意識がブラックアウトしかけた……。
痛む後頭部をさすり、何とか立ち上がる。
「……姉さん。何するのさ」
「ただクッションを投げただけです。大袈裟すぎです愚妹」
「……クッション？」
確かに自分の足下には、いつもソファーの上にあるクッションが転がっていた。
「それすら気付きませんでしたか……忍者失格です」
「……むぅ」
それは酷いよ姉さん。
「ほら、二人共。遊びはそこまでにして出掛けましょ」
視線で火花を散らしていたボクたちの間に入ったのは、朱里さんだった。
あれ、朱里も一緒に出掛けるの？
「そうよ？」
「！なんでボクの考えてたことが！？」
「声にでてましたよ愚妹」

「……」

あ、そうなんだ……
今度から注意しよう。

「ところでさ、ボクたち何しに出掛けるの？」

ボクがフツーに疑問に思っていることを言う。
いきなりボクの部屋にやって来て、とにかく出掛ける準備をしろだし……。
外はくそ暑いのに出かけるなんて、訳が分からない。

「あぁ、言ってませんでしたね。これから衣料品を買いに行くのですよ。愚妹、アナタのね」

「服？いーよ別に……」

「ダメ、涼くん。地味な服……というより、男性物の服しかないんだからちゃんと買わないと」

そう言われても……
別にボクは服装なんてどうでもいいし……。

「愚妹、あなたの意見はまったく反映されません。母さんからの厳命です」

え……

「もし、拒否した場合は明日から”メイド服”というもので生活だ

そうです」

イヤだーーー！！

ゼッーーータイに嫌だ！！

そんなの着たらボクの尊厳というか、なんか色々なものが霧散しそうだ。

「それが嫌なら……分かってますね？」

「……はぃ」

「朱里ちゃん、なんか怖い」

うぅ、なぜだろう。目から涙が……。

ボクは姉さんに引きずられて、泣く泣く服を買いに行く事になったのだった。

誰か、助けて……

番外編・涼、散々な一日（前編）（後書き）

どうも、月見岳です。
今回は番外編ということで、涼が主人公です。
この番外編で新キャラでも出したいな～とでも思っています。
気づけばこれで三十話、グダグダとやっていましが、結構いけるもんですね。
ふと思いましたが、この小説のキャラはどれが人気があるのでしょう？
というより、この小説キャラが少ないか？
もしくは霧島家の子供たちのキャラが濃くないか？
いや、除霊にエアガンを使う巫女の鳴海もインパクトが……どうだろう？
東は論外か……。
ということで、皆様、できればこの小説で好きなキャラを教えてください。
お願いします。

番外編・涼、散々な一日（中編）（前書き）

ちょっと短いかも……。

番外編・涼、散々な一日（中編）

あ～～、暑いよ……。
太陽もこんなに頑張らずに、もう少し控えめにしてくれないかな……。
その分、冬に頑張ってくれればいいから……。

ボクは霧瀬市の繁華街を歩いている。
駅から少し離れたところだ。
夏休みということもあってか、若者たち（ボクらを含む）で溢れかえっている。

むぅ……人混みは苦手なんだけどな……。

「とりあえず、あそこのデパートに行きましょう。そこなら大体のものはあるはずです」

「そうね、舞ちゃんの言う通りね」

「そうと決まれば、さぁ行きましょう」

あの……、ボクに発言権はないのでしょうか……？

仕方ないので、ボクは姉さんたちの後ろを歩いていった。

○

「……アレ？」

最初に気付いたのはボクだった。

「どうしました愚妹」

「うん、あそこ……」

そう言って、ボクは向かい側の歩道を指差した。

姉さんたちも、つられてそっちを見る。

「あそこにいるの……兄さんじゃない？」

「……確かに兄上です」

「カスミさんですね」

そう、兄さんがいた。

しかも……

「女の子が一緒にいるね」

「鳴海先輩ですね」

「……」

朱里さん、沈黙が怖いです。

目が……なんか鋭いです……。

とにかく、兄さんが鳴海先輩と一緒にいた。

もしかして……デート？

「もしかして兄さん、鳴海先輩とデートしてるのかな？」

この問いかけに反応したのは、朱里さんだった。

「ハハハ、なに言ってるの涼くん。そんな訳ないじゃないですか。カスミさんと私は許嫁の関係ですよ。つまり、婚約者な訳ですよ。もしデートでしたら浮気ですよ浮気」

「お、落ち着いて朱里さん」

「そうです。落ち着いて下さい。落ち着いてその苦無を納めてください！」

「なに？私は至って冷静ですよ？あの女をどうやって消すか、計画を立てられる位にね」

「ダメだよ！早まっちゃダメだよ！」

「そうです。今、鳴海先輩を消したら、朱里さんは兄上に嫌われます！」

「嫌われる？」

ピクッとして、殺気立っていた朱里さんが、急にブルーな雰囲気を醸し出した。

「…やはり、私はカスミさんに嫌われてるのでしょうか……」

『えっ？』

あまりに予想していない展開になったので、ボクと姉さんは同じ声を発した。

「最近冷たいですし、あまりに話しませんし、一緒に出掛けたくても既に居ませんし、ほかにも……」

……なんか、ドンドン朱里さんが沈んでいく。

「どうせ私なんか……」

「だ、大丈夫だよ……多分」

「多分ですか……」

あわわ、どうしよう～～、やっちゃったよ。

姉さん助けて～。

「大丈夫です。兄上は朱里さんを嫌っていません」

「……本当？」

「はい。ただし、恋愛感情は無いでしょう。兄上はただの”居候”として、朱里さんを見ています」

「居候か……」

「居候です」

「でも、考えてみれば、まだチャンスはあるんですね」

「あります」

「そうか、なら頑張ります！！」

どうやら元気になったらしく、片手拳を上げている。

「何を頑張るんだ？」

『うわぁぁ！』

突然、かけられた声にみんな驚いた。

後ろを振り向くと、

「に、兄さん」

「兄上…」

「カスミさん」

兄さんだった。

隣には鳴海先輩もいる。

「なんだ、そんな驚いて？」

「いや、別に……」

「それより兄上、鳴海先輩と、その……デ、デートですか？」

「は？」

姉さんの言葉に、兄さんはポカンとする。
鳩が豆鉄砲をくらった感じ。
鳴海先輩は先輩で顔を真っ赤にさせて、頬に手を当ててクネクネしているし、朱里さんは無表情で、じ～～～っと兄さんを見ている。
だから朱里さん、怖いですって。

「あ、いや……。本当は東を含めた三人で映画に行くはずだったんだかな。東の野郎、昨日飲んだ牛乳が腐ってたらしくって、腹がヤバいと電話してきてな。結局、二人でこうして行ってるのさ」

「でも、それって結局デートじゃないの？」

「そうなのか？……こういうのデートっていうのか涼……？」

全く、この兄さんは……。
色恋沙汰に興味ないんだから……。
少しは青春したらいいのにって思う。

「そうです！デートなのです！」

鳴海先輩はそう言うと、思いっ切り兄さんの腕に引っ付いた。
兄さんは、突発的な先輩の行動にかなり驚いている。

そして、そんな鳴海先輩を見て、反応を起こした人間が一人いた。

「なぁぁぁにぃぃぃしてるですかぁぁぁ！！」

もちろん朱里さんだ。

怒声を響かせ、鳴海先輩を引き離そうとする。
だけど、鳴海先輩もしっかりと兄さんの腕に引っ付いて抵抗している。

「離れなさい。今すぐカスミさんから離れなさい！」

「イヤだね」

「離れなさい！泥棒猫！」

「誰が泥棒猫よ！この腹黒女！」

「私は腹黒くありません！」

兄さんを挟んで、ギャアギャアとふたりは罵りあう。
どんどんと、雰囲気が鋭く、黒くなってきた。
兄さんはかなり迷惑そうに、そして必死に何とかして鳴海先輩が掴む……もとい、抱きしめている腕を外そうとしている。

「くっ、外れない……！舞に涼、見てないで助けてくれ！……ええい、何でこの二人はこんなに仲が悪いんだ！」

それは兄さんが悪いんだよ。
それに、なぜか分からないけど、嫌な気分だし……。
なんか、ムカつく。

「あぁ、クソ。雰囲気にやられて胃が痛くなってきやがった。……とにかく離してくれ鳴海！この空間から逃げたいんだ！」

『ウルサい！ちょっと黙っててよ！』

「……ウルサいのはお前たちだよ」

『なんか言った？』

「いえ、なにも……」

ちょっと反抗したんだけど、兄さん、弱い……。
でも、あんなのに睨まれたら仕方ないよね。

「兎にも角にも、決着をつけないといけないみたいだね」

「そのようですね」

周りにさらに剣呑な雰囲気が流れる。
ちょっと、苦無を出さないで下さい朱里さん！
それに鳴海先輩も、何エアガンなんか取り出してるんですか！？

「ちょっと待ってください。ここで殺り合うには人目につきます」

姉さん、その止め方はどうかと……。

「場所を変えるべきです」

「……確かに、そうかもね」

「舞ちゃんの言う通りね」

あ～～あ、なんか変な方向に進んじゃってるよ。
一体何しに来たんだっけ？

「全く、この二人にも困ったものだな」

「そうだね、兄さん……」

「……」

「……」

「あれ？兄さん？いつの間に？」

気付いたら横に兄さんが立っていた。
あの喧騒の中心にいたはずなのに……。

「……あぁ、何とか逃げてきた。もうすぐ映画が始まる時間だしな。ということで、後は頼んだ」

兄さんはそう言い残すと、フッと姿が消えた。

そんな……後を任されても困る。
でも、この人達どうしょう……。
なんか、殺る気でいるし……。
それに姉さんは、面白がって煽ってるし……。
あぁ…、もうボク帰っていいかな……？

番外編・涼、散々な一日（中編）（後書き）

どうも～、月見岳です。
やっぱ、コメディーっぽいのは書きやすいですね～。
……ハッ！新キャラ忘れてた！
次回こそ、次回こそは……。

話は変わりますが、ちょっと気まぐれで涼を描いてみました。
……ビックリです。二頭身キャラでしか描けなくなってました。
まぁ、絵を描くのは苦手なんですけどね（笑）
自己満足です。

あと、皆さんいつでも好きなキャラを教えてください。

番外編・涼、散々な一日（後編）

……誰か、助けてください。

いや、ホントに……。

出来れば、兄さんが再び現れて、この恐慌たる現状を打破、解決していただくのが喜ばしいのたけど……。

そんな確率は万にも一つないから諦めるしかない。

今頃、兄さんは映画を観てるんだろな……独りで。

とにかく、ボクを助けて欲しい。

現状は急を要する。

……誰か、

……誰か、

誰か、あの三人を止めてください！！

○

ボクたちは今、霧上川の河川敷にいる。

ボクの前には、朱里さんと鳴海先輩が睨み合っている。

しかも、朱里さんは紫色の忍び装束、鳴海先輩は巫女装束と、誰かに見られたらある意味デンジャラスだったりする。

二人とも、殺る気満々でフル装備だ。

その間で姉さんはレフリーのごとく立っている。

だけど、顔は嬉々としている。

何がそんなに楽しいのだろう？

そして、ボクにはもうこの人たちを止める手段がない……。

「それでは両人、準備はいいですね」

「モチロン、この為にありったけの弾を持ってきたんだから」

「その弾、一発でも当たるでしょうかね」

「簡単よ」

両者の視線が火花を散らしている。

「……では、始め！」

姉さんのかけ声と共に、戦いの火蓋が切って落とされた。

……迷惑なことに。

○

―シュポポポポポポポポ―

そんな気が抜ける音をさせて火を噴く（？）Ｍ４Ａ１。

「そんなもの、当たりません！」

着弾の瞬間、朱里さんの姿がフッと消えた。
弾はそのまま進み、地面に着弾。

―ズドドド

レートを放つ。
鳴海先輩は左斜め後ろに跳び、直撃は何とか避けたのだが、巫女服の右横腹部分が無残に破れていた。

「どうしました？思ったよりあっけないですね」

ニヤリと笑う朱里さん。
朱里さんの右手……いつの間に装着したのか、鋭い刃が三つ付いているツメを装着している。
そして、そのツメには巫女服の破れた布切れが付いていた。

「……なかなかやるね」

鳴海先輩はそう言うと、持っていたＭ４Ａ１をガシャという音を立て地面に落とした。
そして、腰につけている大きなホルスターから、ＭＰ７を二丁取り出し両手で構え、

「もう、手加減しないよ！」

発砲した。
下手な鉄砲、数打てば当たるを狙っているような乱射っぷりだ。
至る所で着弾による爆発が起こっている。
これでは迂闊に朱里さんも近づけない。

「……くっ！」

「ホラホラ、どうしたの！」

朱里さんは飛んでくる弾と、爆発によって飛んできた石とかを避け

るのに精一杯だ。
しかし、朱里さんはニヤリと笑い、

「その余裕、もうすぐなくなりますよ」

「……なにを！」

その瞬間、二丁のＭＰ７が弾切れを起こした。
この時を好機と見た朱里さんが一気に鳴海先輩に再接近する。

「……私もなめられたものね」

鳴海先輩がポツリと呟く。

刹那――

鳴海先輩はマガジンキャッチを押し、空になった弾倉を落としつつ、
ＭＰ７を持った両手を下げる。
すると、巫女服の両袖から弾倉がスッと出てきて、見事にＭＰ７に
納まった。

まるで、映画を見ているみたい。そんな鮮やかさだった。

そして……

「……両者そこまで」

戦いは終わった。
結果は両者引き分け。

あの後、鳴海先輩は朱里さんの眉間に銃口を突きつけたのだが、朱里さんも鳴海先輩の首にツメを突きつけていた。
そこで姉さんのコールがかかったのだ。
結局、結果はあまりにも呆気なかったけど……。

「フフフ……」

「ハハハ……」

「!?」

いきなり笑い出す朱里さんと鳴海先輩。
両者とも武器を相手に突きつけたままだ。
異様な雰囲気が立ち込める。

「まだ…まだですよ」

「そう、まだまだ終わるのは早いね」

ヤバい！二人共暴走している！？
姉さんもその事に気づいたらしく、止めに入った。

「ちょ……二人共、もう勝負は終わりました！」

「巻き込まれたくなかったら、舞ちゃんは引っ込んでて」

「そうだよ、妹クン」

「しかし……！」

姉さんだけでは厳しいものがあったので、ボクも支援に行くことにした。
えっ？ボクが今まで何をしていたかって？
誰か来ないか見張ってたんだよ。

「ねぇ、二人ともうやめようよ」

「それは無理だよ弟クン」

「そうです。どちらか倒れるまでしなければならないのです」

……ダメだ。
全く止める気なしだよ。
しかも、さっきよりピリピリしている。
いつ、戦いが再開してもおかしくない状況だ。

「……愚妹、一旦この場から離れ――」

姉さんが言っている時、一陣の風が吹いた。
それが開始の合図となった。

鳴海先輩が引き金を引き、朱里さんの姿がフッと消える。
そして、朱里さんは数メートル離れた場所に姿を現した。
ニヤリと笑っている。

その顔を見て、鳴海先輩は何か気付いたらしく、上方にＭＰ７を構え……

「何してますか愚妹！早く逃げなさい！」

「えっ？」

姉さんは既に安全圏に逃げていた。
そして、上の方を指でさしている。
その方向には……

「なっ！爆裂玉！？」

沢山の爆裂玉がこちらに降ってきていた。
鳴海先輩は爆裂玉を撃って爆発させまくっているが、何せ数が多すぎる。
……って、ボクも巻き込まれるじゃないか！？
早く逃げないと！

視界の端で鳴海先輩が横っ飛びをしたように見えた。
その次の瞬間、近くに落ちた爆裂玉が爆発し、その爆風で吹き飛ばされた。

受け身をすることができずに、地面に落ちたのは痛かった。
しかもそのあと、地面に埋まっていたと思われる金ダライが、爆発で吹き飛ばされ、ボクに直撃した。

それが影響したのか、ボクはそこで意識を失った。
でも、意識を失う直前、

「お前ら、何やってんだ！！」

兄さんの声が聞こえた。

○

「…う……ん」

何だろう？

何だか温かい……。

ボクは一体何をして……？

「おっ、目が覚めたか？」

「……兄さん？」

目を開けると、兄さんの顔が近くにあったのはビックリした。

そして、すぐにボクが兄さんに背負われている事に気がついた。

でも……なぜ？

確か服を買いに行くとかで無理矢理連れて行かされて、鳴海先輩と兄さんに出会って、朱里さんと鳴海先輩がしょうぶして……あ、そうだった。

ボク、金ダライの直撃を受けて気絶しちゃったんだ。

でも……

「ねぇ、何で兄さんがボクを背負ってるの？それに皆は？」

そう、何故あの場に居なかった兄さんがボクを背負っているのか？

そして、いたはずの朱里さんや姉さん、鳴海先輩がいない。

ボクには分からない。

「あぁ、三人ならこっぴどく叱ってから帰した。多分、家でも怒ら

れているんじゃないか？」

「じゃあ、ボクが背負われているのは？」

「それは、涼が気絶していたからな。気がつくまで待ってたんだけど、日が沈んできたしね。仕方なくさ」

確かに、今は夕焼け空だ。
太陽が沈みかけている。

「それより……気がついたなら自分で歩いてくれないか？」

「えっ、あ……もう少し、このままで」

「おいおい、勘弁してくれよ」

兄さんはそう言いながらも、ボクを背負って歩く。
なんだかんだで、やっぱり兄さんは優しい。

「ところで、涼たちは一体何しに繁華街にきたんだ」

「あっ」

すっかり、当初の目的を忘れていた。
ボクの女らしい服を買うはずだったんだ。

「その様子じゃ、目的を達成することができなかったみたいだな」

「うん、服を買いに来たんだ。女の子っぽいもの」

「なんだ、嫌じゃなかったのか？」

「まあ、そうだけどね」

「あ～～、舞か」

さすが兄さん、察しがいい。

「しかしだな、涼はいいのかそれで？」

「えっ？なにが？」

「女らしい格好をすることだ。嫌なんだろ？」

「そうだけど……」

「だったら無理することないさ。別に女らしくなくてもいいじゃないか、ボーイッシュって感じで」

「だけど、母さんが……」

「大丈夫、こうなったのは母さん達が悪いんだから、母さん達にとやかく言う権利はないよ。もし、母さんが『女らしくしろ』って言っても、僕が涼を守ってあげるよ」

「兄さん…」

なにか、胸にグッとくるものがあった。感動してしまった。

兄さんがそこまで言ってくれるなんて……！

今日一日、色々と散々な事があったけど、最後に今までのことがチ

ヤラになるくらい、ボクにとっては嬉しいことだ。

ボクは小声で兄さんに礼を言う。

「……ありがとうね」

「ん？なんか言ったか」

「なにも～」

「そうか…？」

ニコニコと笑うボクを、兄さんは不思議そうに頭の傾げたのだった。

結局、ボクは兄さんに家まで背負われて帰った。

途中、兄さんの背中の温もりが、夏場ということもあり、暑苦しいと思ってしまったのは秘密だ。

できれば、秋か冬の時期がよかった。

番外編・涼、散々な一日（後編）（後書き）

どうも、月見岳です。
まず始めに、ごめんなさい。新キャラの登場を忘れていました。
本当は中編で出す予定だったんですが、仕方なく本編からで出します。
しかも二人！
登場予定は未定ですが！（ダメじゃん）

まあ、この番外編で色々とやりたいことがあったんですが、労力と時間の問題で端折りました。
またそのうち、番外編があるかもしれません。

外出、そして新たな影？（前書き）

なんかもう……グダグダです

外出、そして新たな影？

暑さがまだまだ続く今日この頃。
夏休みも明日で最後。
宿題がまだな涼と舞は、今は各人の友達宅で鋭意勉強中だ。
僕は既に終わらしているので問題ない。
だから、暇であるのだけど……。

「ふぁぁあぁぁ……」

クーラーの効いた部屋でゴロゴロとしています。
なに？グータラだと？
ほっとけ。

―トントン―

「ん？」

部屋のドアが控えめにノックされた。

「どうぞ～」

すると、オズオズと朱里さんが入ってきた。
白のワンピースに小さな鞄を持っている。
さらに、頭には麦わら帽子みたいな帽子を被っていた。
どうも、お出掛け衣装みたいなんだが……。

何となく嫌な予感を胸に抱きながら、とりあえず聞いてみた。

「えっと、何か用？」

返ってきた答えは予想されていたものだった。

「一緒に出掛けましょう！」

その眩しすぎる笑顔に”断る”という選択肢を削除せざるおえなかった。

○

霧瀬市の繁華街。

一応まだ夏休みだというのに、なんだかいつもより少しだけ若者が少なく感じるのは気のせいだろうか？

「カスミさん！次はこの店に入りましょう！」

「……了解」

かれこれ二時間、暑い中ぶっ通しで朱里さんはこんなテンションだ。しかも汗一つかいておらず、正直、体温調節のシステムが壊れているのではないかと疑ってしまう。

「さぁ、早く」

「待て、分かったから引っ張るな！」

朱里さんは僕の腕に引っ付いて引っ張っていく。
腕に何やら柔らかい感覚を感じ、青春真っ盛りの男子高校生なら喜ばしいことなんだろうが、今の僕にとっては暑苦しいとしか他ならない。
頼むから離れてください。
そんな僕の切なる願いなんか知ったこっちゃない朱里さんは、そのまま僕を店内に連れ込んだ。

『いらっしゃいませ～♪』

「……ヌ？」

女性の何だか黄色い声が店内に響いた。
店舗内に入るまで気がつかなかったが、どうやらここは喫茶店のようだ。
適度に効いた冷房が気持ちいい。

「二名さまですね、此方にどうぞ～♪」

店員の人が先導した先の席に、自然に向かい合うように座った。

「ご注文をどうぞ～♪」

「……アイスコーヒー」

「じゃあ私も同じ物を……あと、レアチーズケーキ」

「アイスコーヒー二つにチーズケーキ一つですね～♪かしこまりました～♪」

やたらテンションが高い店員は注文を取ると、さっと去っていった。

ふと周りを見渡してみる。

そして少し後悔。

客のほとんどが女性ばかりだった。

ちらほら居る男性は彼女連れだ。

なんとも居たたまれない。

「……どうしました？」

「うん？あ…いや、ちょっとこの雰囲気が居づらくって」

僕の答えがいまいち分からないらしく、首を右に傾げていた。

あぁ、分からないですか……。

貴女は、僕がこの雰囲気に居たたまれなくなっていると、察してはくれませんか……。

「アイスコーヒーとチーズケーキお持ちしました～♪」

「ありがとうございます」

「イエイエ～、お仕事ですから～♪」

僕と朱里さんの前にアイスコーヒーが置かれた。

勿論、チーズケーキは朱里さんの前。

「ではごゆっくり～♪」

再び店員は消えていった。
……なんなんだ、あの店員は？
何故あんなにも間延びした口調なんだ？

「ところで、この後どうしますか？」

「ん？決めてないの？」

「はい」

……なら家に帰りたい。
しかし、この正直な心を素直に言ってはいけないことぐらい分かっている。
とにかく、涼しくて暇が潰せて疲れないところは……。

「……っ！？」

「……どうしました？」

……何か、変な視線を感じて窓の方を向いたんだが……。
そこには道を歩く人々が行き交う光景と普通なものだ。
気のせいか……？

「カスミさん？」

「……何か、変な視線を感じなかったか？」

「……変な視線ですか？いえ、別に…」

「そうか……」

朱里さんも忍者だ。

変な視線があれば気付くだろうし、やはり気のせいか……。

「で、どうしますか？」

「そうだね……」

何か条件に合うのは……

あっ…

「映画館なんてどう？」

○

霞達が喫茶店から動き出す頃、同じく近くで動き出す影があった。

「ふぅ…さっきはヤバかったです」

緑色の忍び装束を着込んだ少女だった。

霞が感じた視線も、この少女のものだった。

「さすが、霧島家の忍です。完全に気配を消していたつもりが察されるとは思わなかったです」

少女の視線の先には、並んで歩く朱里と霞に向けられている。

「しかし、桃地が既に来ていたとは……出遅れたです。黒井も送り込んだと聞いていますし、油断ならないです」

フッと少女の姿が消える。

次に現れたのはビルの給水タンクの上だ。

「にしても、霧島家の長男……霞と言いましたか、なかなかの良いです」

ちょっと頬を赤らめているが、少女自身は気付いていない。

霞の何がいいのか分からないが……。

「フフフ、落としてみます」

不気味な笑いが、霧瀬市に静かに響き渡った。

「――っ！」

「どうしました？」

「いや、急に寒気が」

「風邪ですか？」

「分からない」

「明日、新学期なんですから。気を付けてください」

「あぁ、すまない」

……本当に風邪の寒気何だろうか？
もっと違うものだと思ったんだがな……。

しかし、映画を観た後、霞はすっかり元に戻っており、変な視線とか寒気のことなんてすっかり忘れて、家に帰ったのだった。

外出、そして新たな影？（後書き）

どうも、月見　岳です。　現在、絶賛夏バテ中です……。　話は変わって次回から二学期編です。　新キャラ登場ですよ～～。

波乱の予感？（前書き）

新キャラ続々登場……かも？

波乱の予感？

とうとう、長かった夏休みが終わり、今日から新学期。
昨夜、涼と舞が宿題が終わらないとかで泣きついてくるというハプニングがあり、少々寝不足気味だが問題はない。
今日は、始業式だけで午前中に終わる。
帰ってから眠ればいい。

久し振りに制服に袖を通し、新たな気持ちで学校に行く。

ガラッと気持ちいい音を立て教室の扉を開く。
教室に居る数人の視線を浴びたが、ただの確認だったので、すぐ興味がなくなったようだ。

……さて、寝よう。

机に突っ伏した。

さようならリアルワールド、そしてこんにちはドリームワールド。

「オイッス！」

ドリームワールドへの入国手続きの最中、我がドリームワールドは衝撃と共に崩壊した。

誰だ！僕の邪魔をするのは！？

「久々～」

……東だった。

「久し振りの登場だな東。今回もどうせチョイ役だろ」

「……おい、チョイ役ってどういう意味だ」

「おっと、声に出てたか？気にするな。ただの僕の心の声だから」

「……なんか、俺の扱いが酷いような気がする」

気のせいだ。

そんなやり取りを東として時が過ぎていく。
後五分ぐらいで予鈴がなる、そんな時だった。
鳴海が慌てて教室に飛び込んできた。
余程急いでいたらしく、息が乱れている。

「はぁ…はぁ…お、おはよー…」

「お、おはよう……」

なにをそんなに急いできたのか？
もしや寝坊して急いできたのか？
そういえば、東と夫婦の登校じゃなかったな……。
そうか！寝坊した鳴海は急いで支度をしたが、すでに東は先に行っており、その事に気付いた鳴海は走って追いかけた。しかし、追いつくことはなく学校に着いた。
……これは…離婚の危機だな。

「霞、多分お前が考えていること、正解からかけ離れていると思うぞ」

「……ヌ？何故？」

「どうせお前の事だから、俺達の事『夫婦』でどうこう思ってんだろ」

東はふるふると首を振る。

……何故わかった？

「……はぁ…何の話？」

ようやく息が整った鳴海が尋ねる。
どうやら話を聞く余裕がなかったらしい。

「鳴海が何でいつもより遅いのかって話」

「私？あぁ、ただの寝坊だよ。昨日の夜に徹夜しちゃって」

鳴海は頬を掻きながらテヘヘと笑う。

徹夜って……何してたんだ？
気になるところだが、一応プライバシーとか何だかんだで聞かないでおこう。

「ほら、座れお前ら～」

担任の先生が教室に入ってきた。

皆、慌てて自分の席に座る。

「皆夏休みを堪能したか～。先生は仕事で休みが少なかったぞ～。テメェ等が羨ましいぞボケ！」

突如、ブチキレた先生を見て、クラス中が唖然とする。

「大体、あのクソハゲ教頭が……」

ぶちぶちと教頭の悪口を呪詛のごとく言い出した。

誰か止めろ。

「あ～もう、思い出しただけでムカつく！とにかく、転校生の紹介！」

ナヌ？転校生ですと？

こりゃまた転校生にとっては、入りづらい状態なことだ。

しかし、教室の扉は、躊躇いを感じさせない勢いで開かれた。

――結果、転校生は女子であった。

ショートカットで身長は……低め。

スレンダーな体型で、陸上部にでもいそうな活発そうな少女であった。

転校生が教壇まで来ると、担任が黒板に名前を書き出す。

――『鷹山　桜』

タカヤマ　サクラ？

「はい、自己紹介」

「鷹山　桜です。よろしくお願いします！」

○

桃地　朱里は焦っていた。
表情からは伺いしれないが、内面はかなりの恐慌に陥っていた。
まるで、世界恐慌の時のウォール街の如くであった。
事の発端は、転校生・鷹山　桜である。

（な、何故？何故鷹山家の人間が！？）

鷹山家……忍三家の一つ。
霞の父親が、霞の嫁を求め、一筆送った所である。
その事は、既に里帰りした時に聞いており、朱里は母親に『とっとと寝取っちゃいなさい』と親とは思われないことを言われたのだ。
しかし、全く他の家からのアプローチらしい事が霞に行われなかったので、スッカリ忘れていたのだ。

（油断していました。　まさか今になって他の家からアプローチがあるとは……）

真剣に考え出す朱里。

故に周囲が見えていなかった。

「あ～かりん」

「はひっ！」

背後から一人の女子生徒に抱きつかれた。
しかも、胸を掴んできた。

「な、何するんですかぁ！？」

朱里は頬を朱く染め、胸を両手で抱えるように隠して立ち上がった。

「いや～、あかりんが難しい顔をしていたから、リラックスさせてあげようと思って」

「出来ません！」

「タハハ～、そかそか」

全く悪びれた様子なく、頭を掻いている。

「あっ、そうそう！知ってるあかりん？実はね、二年のところにも転校生が来たんだって。しかも双子だってさ」

朱里は笑顔で言う友人の言葉に、少しイヤな予感がした。
少し表情が堅くなっている。

「……そ、そうですか。この同時期に転校生とは、めっ、珍しい事もありますね…」

都会の学校とかは分からないが、中堅…のちょっとしたのような町の学校だ。
ただでさえ、転校生は珍しいのに、同時期に転校生とは珍しいものがある。
かく言う朱里も転校生だったのだが……。

「ナニナニ、何故あかりんは動揺しているのかな～？」

「ど、動揺なんかしていませんよ！」

「そう～？」

とか言っておきながら、朱里はやはり動揺していた。
このクラスに鷹山家の人間が転校生してきたと言うことは、残る一つの忍三家……黒井家の人間の人間が来ている可能性がある。
そして、その二年生の転校生が黒井家の人間かもしれないのだ。
一気に霧島の遺伝子を狙う人間が増えるのだ。
動揺せざるおえない。

（……しかし、二年生の転校生については、まだ可能性の領域です。調べれば…）

「でね、二年生の転校生は『黒井さん』だって……ちょ、あかりんどうしたの！？フラッてしてたよ！？」

「だ、大丈夫です……。ちょっと目眩がしただけです」

呆気なく正体が分かり、しかも最も朱里が望まない人物だった。

（やはり黒井家でしたか～～。何となく分かっていましたが……）

ハァと朱里は溜め息を吐いた。

「あかりん、溜め息なんかしたら幸せ逃げちゃうよ？」

「そんなの迷信です」

「ううっ、あかりんが冷たいよぉ……」

ヨヨヨと泣き真似をする。

そんな友人を見て、朱里は再び溜め息を吐いたのだった。

○

ワイワイガヤガヤ

現在、お昼時の昼休み。

僕達は食堂にて昼食を食べている。

メンバーは、霧島家兄妹、東、鳴海、朱里といったメンツだ。

……いや、もう一人いる。

確か、朱里さんの友人でクラスメートだったはずだ。

名前は……？

「楠木　加奈だよ」

「ヌ？」

「だから楠木　加奈だって！私の名前！」

「……いや、知っていたぞ？クラスメートだし…」

「間があったよね今？忘れてたでしょ！？」

……断じて忘れた訳ではない。

覚えていないだけだ。

「まぁ、そんな事は置いといてだ。何故こんなに集まっている？いちいち僕が食堂で食べるのについて来なくていいだろ」

「それは何か面白そうな事が起こる予感がするからですよ、兄上」

……なんだ、その予言めいた言葉は？

正直、洒落にならんのだが……。

そんな時、不意に声をかけられた。

「ここ、いい？」

全員が声のほうを見た。

――鷹山　桜。

どうやら、彼女が台風の目らしい。

はぁ、一体どうなることやら……。

波乱の予感？（後書き）

どうも、月見岳です。
現在、レポート提出等、大学の試験に向けて対処中で連続徹夜だったりします。
おかげで、文が変かも知れませんでしたが、それは御愛嬌で……
とまぁ、そういうことなので、８月ぐらいまで更新ができない可能性があります。
現実逃避で執筆するかもしれませんが……。
とにかく、無事にやり過ごせる様に応援してください。
小説も試験も……。

先輩を敬え……！（前書き）

文章の構成がちょこっと変わっています。

先輩を敬え……！

……うむ、何故こんな事態に陥っている？
どこで判断を間違えた……。
なんとも言えない雰囲気。
その元凶たる朱里、桜、鳴海の三人は静かに睨み合い、視線の交点に火花が散っているように見える。

「……はぁ」

本当になんでこんな事態になっちまったんだ。
溜め息を吐くのも仕方がない。
霞は現実逃避を兼ねて、何故こうなってしまったのか思い返すことにした。

○

「いーよいーよ座りなよ」

加奈が勝手にそんな事を言っちゃってくれた。

「どうもです」

桜は静かに座った。
可愛らしい風呂敷に包まれた物体を取り出し、風呂敷を解いた。
そこから現れたのは楕円形の弁当箱。

「あれ、鷹山さんはお弁当派？」

箸を喰わえたまま加奈が尋ねる。

コラ、行儀が悪いぞ。

「はい、自分で作った方が何かと安全なんです」

チラッと朱里を桜は見た。

「…安全？」

つまりは、”誰かに毒を盛られないため”と言うことだ。

そして、”誰か”というのは朱里のこととして桜は意識している。

どうも、朱里のことを知っているみたいだ。

朱里の知り合い……いや、同業者だから知っているというところか……。

つまり、鷹山　桜は忍者ということか。

……いや、ただ無駄に用心深い人なのかも知れない。決めつけるのは良くない。

第一、”毒を盛られないため”とかいう理由じゃないかもしれない。

どうも職業柄、こういう考えになってしまうな。

全く、自分が嫌になる。

「改めて挨拶を……鷹山　桜です。よろしくです霞さん」

「……あぁ、よろしく」

……ん？何故名前を知っているんだ？

「鷹山さん、なんで霞の名前知っているんだ？」

東が尋ねた。

そして、それが引き金にもなった。

「それは霞さんの花嫁候補だからです」

『なんですとぉー！！』

全員が叫んだ。

食堂ということも忘れて……。

食堂にいる生徒の視線がこちらに向く。

どうもすみません、お騒がせして……。

「どどど、どういう事霞くん！？返答次第では――」

「落ち着け鳴海。僕にもサッパリだ。だからそのエアガンを仕舞いなさい」

「大丈夫、死なない程度に痛めつけるだけだから」

「撃つことが前提か！？」

「駄目だよ鳴海先輩、撃つなら人がいないとこで兄さんに気付かれないでやらないと」

「涼！？なに言ってやがる！後で覚えてろ！」

「……悪役の捨て台詞みたいですよ、兄上」

「クッ…、舞までも……。まさに四面楚歌とはこのことか……」

霞の周りは敵ばかり、味方はなし。
そして霞は思った。

（何故こんな事態に陥ったんだ……）

朱里、桜、鳴海が睨み合い、涼、舞が霞に冷たい視線を向けている。
東に関しては、なにか呪詛のようなことをブツブツと呟き、ヤバいことになっている。
こんな東を見られたら、女子の人気が下がりそうだ。
そんな事、霞にとっては知ったこっちゃない。
例え、東の人気が下がったとしても本人が悪いのだ。
霞にとって今の重要事項は、『自らの保身』と『現状打開』である。
まず、『現状打開』から試みた。

「まぁ、皆。落ち着いて話し合おうじゃないか」

『なに』

「……いえ、すみません」

凄い迫力で睨み付けられた。
呆気なく白旗を振る。
霞は『現状打開』を諦め、『自らの保身』に全力を尽くすことにした。

自らの保身……今回はこの食堂からの脱出である。

朱里、桜、鳴海に関しては睨み合っているし、東は呪いを呟き続けている。
気配さえ消してしまえば気付かれずに脱出出来るだろう。
しかし、問題は舞、涼のが妹達。
こちらに冷たい視線を浴びせ続けている。
まず、目をこちらから逸らさなければならない。
目くらましに閃光玉、煙玉は使うことは出来ない。
どうしたものか……？
――そうだ！ここはトイレに行くふりをして……

「……ちょっとトイレに」

立ち上がり、脱出を試みる。

「……兄上、進行方向にはトイレはありませんが？」

あえなく失敗。
あまりに不甲斐ない凡ミスに、思わず舌打ちをする。
さて、どう切り抜けるか……。
そのままの体勢で止まったまま、頭を回転させて考える。

――考える

――――考える

――――――考える

――あぁ、面倒だ！！

『強行突破』

これで決まり！
さぁ実行！！

「あ、逃げた」

涼がそう呟いた時には、すでに霞の姿は消えていた。

この後、霞が消えたことに気付いたのは３０秒後のことである

○

霞は校舎屋上にある貯水タンクの上で寝っ転がっていた。
今日は始業式だけで、昼までで終わっているのだから、とっと帰っても良かったのだが、帰ってもする事がない。
……というか、あそこから逃げ出したことから、家に帰ってロクなことがないと思う。
仕方なく、空を見上げて黄昏ていたときだった。

―キィ―

そんな音を立てて、屋上の鉄のドアが開いた。
誰か来たのだろう。
特に気にすることもないので、そのまま黄昏る。

やっぱり、真っ昼間の外は暑いな……。
ここで眠ったら干物になっちまうな。

「おい」

どうせ今頃、僕を探して皆彷徨いているんだろうな。

「おいと言っている」

そう言えば、『暗部機関』の人達、元気にしているだろうか？
あの後、数回バイトしただけだしな……。

「知って無視しているのか？」

用があれば携帯にかけるとか言ってたけど、僕の携帯番号教えてないんだが……。

「オイ！」

……チッ、外野がウルサいな。
気付いていたさ、初めっから。

「なんだ」

「なんだじゃない！何故無視する」

「決まってる。厄介ごとに関わりたくないからだ」

「それではまるで、私が厄介者のようではないか！？」

大声を出したからなのか、肩でハアハアと息をする少女が立っていた。

「……ところで、お前誰だ？」

「黒井　夏」

「黒いナッツ？それは食べたくないな」

「く・ろ・い・ナ・ッ！黒井　夏よ！」

「……冗談だ」

全く、冗談が通じない人間みたいだな。

「で、ナッツは何しにここに来たんだ？」

「ナッツ！？なんだそれは！？」

「あだ名だが……気に入らんか？」

「気に入らん！！」

チッ！贅沢な奴め。

「……ならいいや、それで何しに来たんだ？くそ暑い屋上なんかに」

「……特に理由はない。何となく、といったところか」

「何となくね～…」

何となくで普通、屋上なんかに来るか？

……いや、人のこと言えないな、僕も。

「……気付いていないと思うが、私は一応君の先輩に当たるんだぞ？」

「いや、そんな事は知っているが……」

「気付いていたのか！？」

何を驚いているんだこの先輩は……。

ネクタイとかスカーフの色を見れば、学年なんぞ一発で分かるだろうに。

「なら君は、私が先輩だと分かっていて、その口の聞き方なのか！？」

……あぁ、つまり生意気だということですか。

「別に、１つだけ年上だからって何も変わらないでしょう、先輩」

”先輩”というとこを、思いっきり皮肉を込めて言う。

なにせ”黒井　夏”たる人物は先輩には見えない。

なんか、涼並みに小さいし、童顔だし、ツインテールだし……って最後のは関係ないか。

「１つだけでも年上だ！先輩なんだ！敬意を込めろ！」

「あ～～、はいはい」

「なんだその目は！面倒くさい奴を見るような感じで見るな！」

「分かったから……用がないならどこかに消えてくれ」

「……くそっ！」

見た目に似合わない口調で先輩は言うと、しばらく寝転がった僕を見下げていたが、諦めたらしく、貯水タンクから降りて屋上の鉄のドアを開く。

「覚えてろ！霧島　霞！」

先輩はそう捨て台詞をついて屋上より撤退した。
ちょっと弄りすぎたか？

「……ん？」

ふと気が付いた。
あの先輩、何故僕の名前を知っている？
僕は自己紹介をした記憶はないぞ。

「……まぁいいか」

僕は気にしないことにした。
気にしたらきりがない。
分からないものは分からないものなのだ。
僕は再び黄昏ることにした。

その後、適当な時間になったので帰宅した僕を待っていたのは、我が妹達の冷たい視線と異常なまでに少ない夕飯だった。

ちなみに、夕飯を作ったのは朱里で、夕飯の少なさに対する僕の苦情はすべて無視されてしまった。

何故だ……！

先輩を敬え……！（後書き）

月見　岳です。　　テストは……まぁ乗り切った。　　さて、とりあえずこれ以上キャラは増えないと思います。　気が付けば、予定にないキャラとかもいますが……結果オーライで（なにが？）

　そのうち、正式に人気キャラ投票でもしてみようかな？

さぁ、次回更新も頑張ろぉー！（夏バテにてカラ元気）

殴りこみですか？（前書き）

コメディーほぼナシ。

殴りこみですか？

その連絡は唐突にやって来た。
それは休みの日、珍しく霞が、自らの部屋で苦無や手裏剣とかを磨いたりと忍び道具の整備をしていたときだった。
悲しいくらい滅多になることがない携帯が鳴ったのだ。
携帯のサブ液晶には見たことのない数列が並んでいた。

「……もしもし」

《あ、霧島君？》

暗部機関副長、樫野　美里だった。
どうして自分の携帯番号を知っているのか気になったが、そこは深く勘ぐらないことにした。
どうせ、ろくなことではない。

「で、用件はなんだ」

《うん、ちょっとね。電話では言えないから、本部まで来てくれない》

「嫌だ、ことわ――」

《そう言うことだから、必ず来なさい。これ、命令》

美里は言うことを言うと、勝手に通話を切ってしまった。

どうやら、隣町まで行かなければならないようだ。

○

「で、用件とはなんだ……」

霞は少々疲れた様子だった。
それも仕方がない。
前回は車で来たが、今回は突っ走ってきたのだ。
屋根を跳べば、道路関係なく一直線で目的地に行け、車なんかより早くに到着するのだが、アップダウンが激しく、非常に疲れてしまうのだ。

「人手が足りない……というか戦力がダウンしてね～」

「はぁ？戦力？」

霞は意味が分からないと言った感じだ。
事実、分かっていなかった。

「ということで任務依頼」

「拒否だ。木野がいるだろ」

「残念ながら別件でてんてこ舞いよ」

「……クッ、それ以前に何故急に戦力がダウンした？機関員のストライキか？」

「まだそれならいいんだけどね～」

美里は苦笑した。

「機関最強と謳われた機関員が、ある任務で生死不明。同行した機関員も……。おかげでかなりの戦力ダウンなのよね～」

軽い感じで言っているが、かなり重い出来事だ。

「ということで、コッチは手伝ってもらわないとかなりヤバいのよ」

「……むぅ、仕方がない」

「それじゃ、任務お願いね～」

「で、任務とはなんだ」

「そうね、一言で言えば”殴り込み”よ」

「……ハ？」

霞は素っ頓狂な声をあげた。

「殴り込みだと？相手はヤクザなのか？」

「そんな裏社会の組織ではないわ。闇社会の一組織、その名も”魔法協会”」

「……魔法？」

また、素っ頓狂な声をあげた。
訳が分からない事ばかりだ。

「魔法協会は、ウチの機関と協力関係にあるんだけどね……」

「なら何故殴り込みなんか……」

「最近、魔法協会の内部争いが酷くてね。おかげでコッチは大迷惑。いい加減にしてほしいからね」

「なら、僕でなくても……」

「さすがに機関員を使ったら色々不味いのよ。それに比べて、霧島君は忍者。闇社会の監視者でしょ？」

「……忍者が闇社会の監視者とか初めて聞いたぞ」

「あらそう？でも、事実よ」

まぁ、監視者云々は後で聞くとしてだ。

「とにかく、どこに殴り込むんだ？」

○

そこは森だった。
様々な樹木が立ち並び、ちょっとした秘境になっていた。

そんな秘境な森のある一区画。
そこは周囲に比べると開かれており、その真ん中には大きな切り株があった。
そして、その切り株を囲んで黒い三角帽に黒いマント姿の明らかに怪しい人達がいた。

「どういうこと！」

「だから言ったでしょ！」

なにやら揉めていた。
切り株を間に怒鳴り合っている。

「魔法協会はこのままじゃ駄目なの！闇社会が不安定な今こそ、魔法協会を正しい地位するチャンス！」

「ふざけないで！そんな事許せるわけないでしょ！」

「機関の眷属になるつもりか！？このままでは魔法協会は発展しない！」

「だからと言って、機関に喧嘩を売っても犬死にするだけよ！？」

周囲に剣呑な雰囲気が流れる。
二つのグループが切り株を挟んで睨み合う。
まさに、一触即発といった感じだ。

そんな光景を木の上からこっそりと見つめる人影。
闇に溶けそうな色の忍装束を身にまとい、覆面で顔と頭部を覆い隠し、唯一鋭い目が伺える。

もちろん、霞である。

「格好はまさに魔法使いだな」

霞は小声で呟いた。

そういう霞もまさに”忍者！”という格好なのだが……。

「とりあえず、もう少し近づいてみるか」

その瞬間、霞の姿がフッと静かに消えた。

次に霞が現れたのは、睨み合う集団に一番近い木の上だった。

「お、ここからならよく分かる。一触即発だな」

眼下には様々な杖を構え、睨み合う人達。

武力衝突は避けられそうにない雰囲気だ。

そして……

「どうやら、実力行使にでないといけないようね」

「へぇ～～、奇遇だね。私もそう思ってたの」

切り株の上にあった一枚の枯れ葉が舞った。

それがゴングになった。

「空を切り裂け、真空の刃！ウインドエッジ！」

「闇を貫け、裁きのイカズチ！ジャジメントサンダー！」

真空の刃とイカズチがぶつかり合った。
それを機に、周囲にいた魔法使いを巻き込んでの魔法合戦になった。

「すべてを燃やせ、破滅の業火！フレアバースト」

「すべてを凪払え、氾濫の水流！ウォータースプラッシュ！」

「光よ、我に集え！ライトニングアロー！」

――その他云々。

様々な呪文が飛び交い、火、水、風、雷や光がしっちゃかめっちゃかに飛び交っている。

（これ、殴り込みの前に自分たちで潰れないか？）

霞がそう思った時だった。
潜んでいた木の幹に、炎系の魔法が直撃、大きな衝撃と共に燃え盛った。

「やばっ」

霞は木から飛び降りた。
しかし、そこは魔法合戦の真っ只中。
巻き込まれるのは必然だった。

「うぉ！……ちょっ、まて」

霞は忍者刀『月影』を引き抜き、飛んでくる超常現象をさばいた。

「くそ、いい加減にしろ……！」

霞は月影を鞘に納め、代わりに両手の指の間に、爆裂玉（小）を構え……

「奥義・火龍炎獄」

――投げた。

周囲に爆裂玉が散らばり――

ドン、ドドドドン、ドドン！！！

広範囲で爆発した。

「な、何事？」

「この爆発は一体？」

「何があったんだ……」

吹き飛ばされた魔法使い達が起き上がりだす。

そして、魔法使い達が見たのは、忍装束を身にまとい、覆面をした忍者。

「……闇の監視者だ」

誰かが呟いた。

「お前ら、いい加減しろよ……な？」

凄みをきかせ、霞は言った。
魔法使いの数人は震え上がった。
しかし、急進派の魔法使いの数人は立ち上がり――

「くそ、全員、集中砲火！」

霞に杖を向け、発射する。

「……フッ」

霞に当たる前に姿が消える。

『幻影！？』

「残念、残像だ」

その瞬間、光が一閃、二閃、三閃。
魔法使い達がバタバタと目を鳴門にして倒れた。

「ふん、後衛が接近戦で前衛に勝てるかっての」

それはゲームでの話だ。
実際には、魔法使いたちもそれ相応の接近戦闘能力を持っている。

「たあぁぁぁ！」

霞の背後から一際長い杖に風を纏わした魔法使いが、斬りかかって

きた。

「ハァ！」

「きゃあ！！」

霞の裏拳を顔面に喰らい吹き飛んだ。
甲高い声を上げる魔法使い。
どうやら女性のようだ。

「まったく、後ろからの攻撃で声をあげてくる奴がいるかっての」

女性でも容赦はしないようだ。

「次は……誰だ？」

鋭い目が魔法使いを睨みつける。
再び、震え上がる魔法使い達。

「もう……いい加減にしような？」

『は、はい～～～！』

一目散に魔法使いたちは逃げて行った。
ある者は走り、ある者は箒に乗っかって空へ逃げてゆく。

「なんだ、逃げたか」

ちょっとホッとしたように言った。
無駄な戦いは誰だって避けたい。

「ねぇ」

「うん？」

全員消えたに見えたが、一人だけ残っていた。

……あれ？何故か見覚えがあるんだが？

「あなた、誰かに似ている感じがするのよね～」

「気のせいじゃないか……」

とかいいながら、気のせいでないと霞は思っていた。

しかし、相手をどこで見たか思い出せない。

「……あ」

「どうかしたの？」

「い、いや…」

思い出した。

思い出してしまった。

よりにもよってクラスメイト。

そして朱里の友人。

――楠木　加奈。

まさか、魔法使いだったのか……。

「う〜〜ん」

マジマジと霞の顔を覗き込む加奈。
コラ、顔が近い。

「……覆面とっていい？」

「いやいやいや、駄目だから！そんなことされたら死ぬから！！」

「大げさね。死にはしないわよ」

そう言いながら、霞の覆面に手をのばす。

「うおぉぉい！！」

ズザザザッと霞は後ずさりをした。

「大丈夫大丈夫」

じわりじわり、手をワキワキさせて加奈は霞に近づいていく。
何か、色々とヤバくなっている。

「クッ……さよなら御免！！」

霞は、自分の足元に球体をぶつけた。
すると、白い煙が周りに立ち込めた。
煙幕だ。

「けほ、けほ、風よ、流れろ」

加奈が呪文を唱えると、そよ風が吹き、煙幕をはらした。
そこには霞の姿はなく、ただの草が生えるだけだった。

「……逃がしちゃった」

「すご〜〜い加奈。忍者さんを追い込むなんて」

木の陰から、ひょっこりと少女が顔を出した。
もちろん、三角帽にマントは標準装備だ。

「別に追い込んでないわ。誰かに似ていたから確かようとしてただけ」

「でも、忍者さんは逃げちゃったよ？」

「そうなのよね〜〜」

加奈はハァと溜め息をついた。

「一体誰に似てたのかしら？」

その問いに答える人はいなかった。

殴りこみですか？（後書き）

どうも、月見岳でございます。
そして、グダグダとごめんなさい。
予想に反したストーリーになっちゃって……。
ま、結果オーライということで。
次回はコメディー多めにやります。
そして、次回でネタが尽きます。
このままでは、シリアス一直線で最終回に向かってしまいますので、
ネタが思いつくまで番外編2をしたいと思います。
そこで、番外編2の主人公は誰がいいか応募します。
期間は8月23日までにします。
メッセージか、感想評価でお願いします。
応募がない場合は、……どうしよう？

忍三家の娘たち（前書き）

ハッハッハ、やっちまったぜ～！
……ごめんなさい。

殴り込みから三日後だった。
その日、霞は銀行から出て来た。
顔は少しゆるんでいる。
けして、銀行強盗や金庫破りをして大金をせしめたからではない。
ただ単に、先の任務の報酬が入金されたからだ。
事実、霞の視線は銀行の預金通帳に注がれ、その上にやついている。

「フフフッ……これで我が懐の冬に春がやって来る」

霞の頭ではお札が舞い、更に欲しい物へと変換される。

「ゲームに本、そういやあのゲームのサントラ買わないと……」

その時、ふと霞は気が付いた。

――あれ？入金少なくないか……？

ふと浮かぶ疑問に霞は頭をひねる。
しかし、それほど長くは続かなかった。

――まぁ、いいか。

霞は深く考えない人間だった。

○

――おや？

懐が暖かくなった霞が繁華街を歩いていた時だった。
霞はある人影を見つけた。
黒のツインテールがヒョコヒョコし、身長通りの童顔、そして吊り目。

――先輩じゃないか。

黒井　夏だった。
キョロキョロと繁華街を不審な行動をしている。
まるで人目を気にしているようだ。

「何だ、あれは……？」

先輩をあれ扱いとは、敬いが全くない。

夏は周囲の様子を確認すると、路地に繋がる道に入っていく。

――なんか匂うな……。ついて行くか？

霞が動きだそうとした時だった。

「カスミさん！」

霞の真横に朱里が突然現れた。

「なんだ！？いきなりどうした？」

「ポニーテールでちっこくて吊り目の女の人見ませんでした？」

ハアハアと息が切れている。
何故か分からないが急いでいるようだ。

「……もしかして、黒井　夏とかいう先輩か？」

「知ってるんですか！？」

「ウオッ！」

朱里はグイッと霞に顔を近づけた。
ちょっと顔が近すぎる。
しかし、朱里は気にせずまくし立てる。

「何故知ってるんですか！？」

「いやまぁ……会って話したことあるし」

「いつ！どこで！なぜ！」

「……。この前、学校の屋上で、何か知らんが絡んできたから」

適当に返した霞だが、嘘は吐いていない。

「……黒井家もすでに接触してきてましたか……」

「どうした？」

「いえ……なにも、本当になにも……」

まるで自分に言い聞かせるように頷いた。

「……では、私は急ぎますので」

何故か覚悟を決めたような顔をして、シュッと消えた。

霞は朱里の様子に少し違和感を抱いた。

「追いかけてみるか……」

霞はポツリと呟いた後、すでに霞の姿は消えていた。

○

霧瀬市で一番高い建物の屋上……

本来ならば人が入れない場所であるが、そこには一人の少女がいた。

特徴的な黒のツインテール、言わずもがな黒井　夏だ。

風にツインテールをなびかせ、腕を組んで立っている。

霞が見かけてそれ程時間が過ぎていないのだが、どうやって瞬時に移動したのだろうか……。

「……来たわね」

そう呟く。

三秒後、背後に忍装束の朱里が現れた。

「黒井……夏…」

鋭く細められた朱里の目が夏を睨みつける。

「そんなに睨まないで。君と戦うつもりはないよ」

「それは私も同じです」

双方に沈黙が支配する。
しかし、その沈黙は長くは続かなかった。

「みつけたぁー！！」

上空から女の子の声がした。
見ると空にはハングライダーみたいな翼を付けた少女が飛んでいた。

「なにあれ？」

「あの破天荒な道具……鷹山家のもの？」

少女は空中で翼を折りたたみ、クルクルと回転して降りてきた。
シュタと音を立て着地した少女は緑色の忍装束を身にまとっていた。

「黒井家に桃地家の人ですね」

「そう言うあなたは鷹山　桜ですね」

朱里の言葉で分かった新事実。
鷹山　桜が忍者だったとは誰が予想できたでしょう！（何を今更だが）

「ななな！何故それを！？」

「いや、分かるでしょ」

夏がさらりと言った。

「あああ、あなたは、くくくろ、黒井　夏ですね　！」

桜は言葉を詰まらせながらも、ビシィと夏を指差した。

「そうだけど」

ハウッ！

そんな声をあげ、体を仰け反った桜。

二人は意味が分からず、リアクションについて行けない。

「何故正体がバレても冷静なのです！？」

「……別に、隠してないし」

ハウッ！

再び同じリアクション。

「じゃじゃぁ、そこの忍者は桃地――」

「そうですが……？」

「ハウッ！セリフの途中に言われたです！」

ヨヨヨと泣き崩れる。

まぁ、嘘無きだが。

気が付けば、この屋上に忍三家の各家の人間が揃っていた。

「で、あなた達は私に何か用があるわけ？」

吊り目を更に吊り上げ、イライラと腕を組んで、夏はかなりご立腹の様子だ。

「そうでした。黒井　夏……いや、あえて黒井先輩と呼びま……どうしました？」

「ううん、〝先輩〟って言ってくれるんだね」

突如、目尻に涙を浮かべた夏に朱里は怪訝な表情をした。

「……で、黒井先輩に聞きたいことがあります」

「なに？何でも聞いてよ。君はいい人だ」

「……では、黒井先輩。あなたは霧島家の血を狙っているのですか？」

「……まぁ、そう言われたね」

「そして、そのためにこちらに来た、ということですね……鷹山家も」

「そうです」

桜は頷いたけど、夏は頷かなかった。
横に首を振っている。

「私は昔からこの街に住んでいるわよ？」

「えっ？しかし二年生に転校してきた黒井というのは……」

「ああ、それはお兄ちゃんだね」

『お兄ちゃん！？』

朱里と桜の声がハモった。
驚愕で二人とも目を点にしている。

「そっ、お兄ちゃん。私達、二卵生双生児なのよ」

「はやぁ～～、これまたベタな設定だねぇ」

桜が感嘆の声を出すが、何がベタで設定なのか、意味が分からない。

「もしかして、黒井先輩は分家の人間ですか？」

「いや、一応本家よ？まぁ、煙たがられているれどね」

苦笑いをして、夏は自嘲的に笑った。

「まっ、気楽に生活してるよ」

「……なんか、スミマセン」

「いいよ、気にされるような事じゃないし」

ちょっと重苦しい空気になる。
そんな空気に慣れていないのか、桜はオロオロとするだけだ。
そんな空気に堪えかねて、桜が声を出そうとした時だった。

ヒュウウウ！！

何かが空を切る音。
そして……

「うわぁぁぁぁ！！」

叫び声がした。
三人が声の方向を見ると、そこには闇色の忍装束に身を包み、必死の様子で逃げる忍者……霞と、箒に乗って、霞を追っかける魔法使い……加奈がこちらに向かってきていた。
どうやら、箒が空を切る音みたいだ。

「せっかく探索結界にヒットしたんだ！今度は逃がさないよぉ！」

「ええい！しつこいんだよ！お前はストーカーか！？」

「いい加減捕まりなさい！」

「嫌だ！」

加奈は箒に跨り、杖を振り回して、霞に向かって火の玉や雷を乱射している。
そんな攻撃を避けながら、霞は丸い球体を落とした。

その瞬間、あたりを眩い閃光が起こった。
更に霞は煙幕を張り、加奈の追跡を振り切った。
建物と建物を伝い、跳んできた霞は三人の建物に着地した。

「おお朱里、こんなところに……」

そして、霞は首を傾げた。

「ナッツじゃないか」

「黒井　夏！そう呼ぶのは止めて！先輩だよ」

「あ～、はいはい」

夏に対してかなりなおざりだ。不憫。

「それに、鷹山さんも……まさか」

「忍者です」

「あ、やっぱり？その格好見ればね」

そして霞は気が付いた。

「ナッツはどうなんだ？」

夏は忍装束では今現在はない。

「これでも一応忍者よ。ついでにナッツは止めて」

「……善処するナッツ」

「……。善処する気なしね」

それは置いといて

「ちょっと逃げるのに手伝って――」

「御用だぁ！！」

ドガァン！

霞が立っていた所に稲妻が落ちた。

寸前の所で霞は避けたが、かなりの冷や汗ものだ。

霞が振り向くと、そこには箒に乗って宙に浮かぶ加奈の姿があった。

「てめぇ！殺す気か！？」

「大丈夫よ、多分」

「多分かよ！」

「ウルサいウルサァァい！潔く捕まりなさぁーい！」

加奈の杖から青く光った糸みたいなものが、勢い良く霞に向かう。

「忍具・白色煙玉！」

ボンボンボン。

そう音を立て、霞の周りで破裂した煙玉。
霞の周囲を白い煙が充満して、霞の姿を見えなくした。

「無駄よ！この魔法にはホーミング機能を付加しているの！見えなくしたところで意味はないわ！」

程なくして、煙幕の中から霞が飛び出してきた。
更にそのあとを追って、魔法の糸が追撃をかける。

「ちっ！」

霞は舌打ちをすると、

ピィィィィィィ！

指笛を鳴らした。

五秒もたたない内に、加奈の背後に茶色の柴犬が現れた。

「シバ吉ぃぃ！ヤレェ！」

霞の叫びにシバ吉はワンと一声吠え、シュッと消えた。

バキィィ！！

音をたて、加奈が跨っている箒が真っ二つに折れた。

「なっ！」

目の前で突然弾け飛んだ箒に目を見開いて驚く。そして……

「いいいやあぁぁぁぁぁおおおおちいいいい」

るうううう……

ドップラー効果で声を響かせて、加奈は空から落ちていった。

「……落ちちまったな」

霞は、屋上の縁からそっと下を覗き込む。

落っこちたであろう場所には、凄惨たる状態で血だまりに……なっていなかった。

地面に激突したという感じではなかった。

第一、加奈がいない。

「ちょっと……煙たいじゃない」

「そうです。いきなりすぎですぅ……」

「いたたた……腰打ちました」

忍三家の三人娘が煙幕の中から現れた。

「……魔女さんは？」

「落っこちた」

「死んだですか？」

「大丈夫だ。ゴキブリみたいにシブトいみたいだ」

イマイチ分からないらしく、桜は首を傾げていた。

「しかし、シバ吉。助かったよ」

霞はシバ吉の頭を撫でる。
シバ吉は嬉しそうに、くぅ～んと鳴いた。
シバ吉の頭を撫でていると、はたと気が付いた。

「……僕はなにしてたんだっけ？」

霞は首を傾げた。
朱里を追跡しようとしたら、逆に加奈に追いかけられる羽目になって、すっかり自分が何をしたかったのか忘れてしまったようだ。

「ところでさ。三人は何やってたんだ？こんな所で」

「……色々ですよ？」

「女には秘密があるのですよ」

「そうですか……」

そこで霞は『うん？』と首を傾げた。

「ナッツはどこに消えた？」

三人と一匹は屋上を見渡したが、そこには夏は居なかった。

○

場所は変わって魔法協会日本支部。
一応、首都東京の霞ヶ関に置いてある。
ただ、上空ではあるが……。
土地が抉れた感じで浮いており、そこに荘厳な石造りの建物が建っている。
そんな目立つ物が日本の首都、しかも中心に浮かんでいたら騒ぎになるのだが、空間分離結界により、別空間に存在している。
しかも、不可視結界と不可聴結界、更にステルス結界がその浮遊している土地を張られているため、空間分離結界が解けて空間が戻ったとしても、表社会の一般人に見つかることはない。レーダーに映ることもない。

「あ～～っ！また逃げられた！」

ジタバタと加奈は暴れていた。
協会の建物内、テラスみたいになってあるところでだ。

「空間転移しなかったら死ぬとこだったんでしょ？」

加奈と同じくらいの魔女が紅茶片手に言った。
彼女は加奈の友人だ。
加奈の愚痴をにこやかに聞いて上げている。

「そうだけどねぇ～～。あぁ、私の箒がぁ～～」

「加奈の箒、速くて高機動なので有名だったよね？名前なんだっけ？」

「スワロー。ツバメよ」

「あぁ、ヤクルト」

「……」

「冗談よ」

一口、紅茶を口に含んだ。

「でも、よく監視者を追いかけれるよね。普通、怖くて逃げるよ？」

「そう？別に怖くないわよ？」

その時、テラスに一人の女性がやって来た。

「加奈さん」

「なにって……ゲッ！」

「ゲッとはなんですかゲッとは……」

不満そうな顔をする女性。

加奈は女性を見た途端、頬が引きつった。

「ともかく、一緒に来てもらいますよ？結界を張らず、街で暴走しただけでなく、魔法を乱射した事についてお説教ですよ？」

ニヤリ

女性は黒く笑った。

その笑顔に加奈は震え上がった。

「いや……いぃぃぃやぁぁぁ」

加奈は女性に引きずられて、テラスから消えていった。
一人になった加奈の友人は、優雅に紅茶を飲んでいた。

○

更に場所は変わって黒井家。
木造一軒家で周りには木が鬱蒼と茂っている。
おかげで昼でもうす暗い。
洗濯物が乾きにくそうだ。

「時に夏、首尾はどうだ」

「う～ん、イマイチだね」

「そうか、こちらはもう少しで準備が出来る」

「そう……」

夏は悲壮な表情をする。
夏の兄は、丁度顔の部分が影になっていて、表情を伺い知れ無い。

「もう、どうすることも出来ないの？」

「ここまで来たんだ。やるしかない」

「でも……！」

「仕方ないんだ、分かってるだろ」

「でも、間違ってるよ。絶対……」

兄妹の間に沈黙が支配した。

「もう、やるしかない。やるしかないんだよ」

夏の兄はそう言うと、立ち上がって部屋から出て行った。

「間違ってる……私はそう思うよ」

残された夏は、小さな声で、しかし自信をもって言った。

家の周りの木々が、風でざわめいた。

静かに、それでも確かに何かが起ころうとしていた。

忍三家の娘たち（後書き）

どうも、月見岳です。お久です。
更新が遅れ、すみませんでした。
しかも、そんなに面白くないという醜態をさらしてしまいました。
ここ最近、自身のテンションがガタ落ちしていたことと、モチベーションが下がっていたこともあり、こういう事態になりました。
今はなんとか持ち直しつつあります。
さあ、これから終わりに向かって頑張ろう。

気まぐれで書いた短編がありますのでそちらもよろしく。
短編シリーズとして、続くかもしれません。

下剋上日和（前書き）

お久しぶりです。
ちまちまと進めて出来ましたので投稿です。
なお、これは例外的な出来事です。
あと、危険！期待するな！

下剋上日和

「なにやってるんだ？」

自宅に帰ってきた霞の第一声はこうだった。
唯一の憩いの場となりつつある学校屋上で、こりゃまた幾度と無く出現しだした黒井　夏先輩、通称ナッツ先輩をことごとく言葉で弄りたおし、日頃のストレスを解消し、気分が晴れている霞の心に一気に暗雲が立ち込めた。

「あら、霞お帰りー」

「おや、帰ってきたのか」

「あ～…、ただいま」

霞は疑念が籠もった声で言う。
視線はダイニングテーブルの物にいっている。

「……それは何だ？」

霞の指差した物、ダイニングテーブルの上に散らばっている……

「旅行パンフレットよ」

語尾にハートが付きそうな感じで母親が言った。
（年を考えろよ……）
ウインクまでセットで少々無理が感じられた。

「北海道、沖縄、オーストラリアにフランス？サイパンにハワイまであるじゃないか」

国内、国外様々のパンフレットがある。

その一つ一つを霞の両親はニコニコワクワクといった様子で見比べている。

「スイス・オーストリアの旅もいいわね。リヒテンシュタイン公国にも言ってみたかったのよね」

「イタリアもいいな。バチカン市国の教会の地下倉庫に予言書があるらしい。なにせ、ヨハネ・パウロ二世が内容を見て卒倒したとか、内容公開を求めてハイジャックが起こったりした代物らしい。興味あるし……忍び込まないか？」

「いいわね。その話ならきいたことあるわ。第一次世界大戦と第二次世界大戦のこと書かれてたんでしょ？で、最後の予言が謎ってやつ」

「そうそう。噂じゃ、第三次世界大戦とか人類の最後とかって言うやつ……なんの予言だったかな？」

「なんだったかしら？」

（知らねぇよ！）

内心、コアな話の内容についていけず、霞はイライラしていた。

「で、父さん達は旅行にでも行くのか？」

「そうじゃなきゃ、旅行パンフレットなんぞ見ん」

「……」

このクソ親父……。

殴り倒したくなる衝動を抑えるが、拳だけは握っていた。

「ウチにそんな金はないだろ……」

「金ならある。心配ない」

どこにだよ。

霧島家は中堅家庭、簡単に海外旅行なんぞ行けるわけがない。

「お前のバイト代だ」

「ふざけるな」

握りしめていた拳を、ダイニングテーブルに叩きつける。

「どういうことだ。納得いく説明を求める」

「まぁ待て。落ち着け」

落ち着けるか。

霞の静かなる怒りのボルテージが上がっていく。

「答えによっては、それ相応の対応をする」

「ふん、返り討ちだ」

確かに、今の霞では父親に適わないだろう。

「とにかく、どういうことだ」

「簡単だ。お前の本来入るバイト代のちょっとを、機関に言ってちょろまかしただけだ」

何という事でしょう。
勤め先がグルだったのです。
しかし、霞には気になるところがあった。

「”ちょっと”とはいくらのことだ？」

「……二万」

「本当は？」

「五万」

「と思わせて？」

「十万」

「のつもりが？」

「その二倍」

つまり、二十万ということだ。

「僕のバイト代の五分の四じゃないか！どこがちょっとだよ」

どうやら、霞は二十五万をバイトで稼いだらしい。
命がかかっているのを考えると安く思える。

「高校生でそんな大金持たせられないわ。あんたなら五万で十分すぎるでしょ？」

「だからって何でそっちが勝手に使うんだよ！貯金すればいいじゃないか！将来の為に！」

「金は使うものだ」

「それに今回は、霞が私達に”日頃のお礼”という感じでねぇ」

「何でだよ！！」

霞の叫びも虚しく、両親は嬉々としてパンフレットを見始めた。
そんな両親を見て、霞は思う。

――これは、下克上しかない！

忍者の社会は、絶対的な実力主義。
これは、霧島家にも当てはまる。
トップが父さん。その下に母さん、そして霞。
だが、ナンバー2とナンバー3には圧倒的な差が存在した。
つまり、霞は両親には勝てない。そう思っていた。
実際、中学の時に一度下克上を仕掛けたことがあった。

当時は反抗期ということもあって、よく周りが見えていなかったのだろう。
実力差なんて関係なかった。
結果を言えば、全治一カ月。見事にボコボコにされた。
それ以降、反抗期はなくなった。我が家の恐怖政治で。
しかし、今回は違う。
あの時よりも実力は確実に上がっている。実戦だって経験した。
確かに経験と実力では差があるだろう。
だが、今回は心意気が違う！想いが違う！
前回のしょうもない反抗心からではない！
理不尽で意味不明な圧政に苦しむ人が立ち上がる感じ。
そう、革命だ！これは革命なのだ！
この霧島家に革命を起こすべく、僕は立ち上がるのだ！

拳を握り締め、霞は強く決意した。

「――いざ」

スッと、袖から苦無を取り出した。

「勝負！」

戦いの火蓋が切って落とされた。

○

「のおぅっ！？」

恐ろしいスピードで飛来した鎖分銅。
それを、寸前の所で何とか避ける。
先制を母さんにとられた。
回避で横に体勢を崩した霞は、その状態のまま、手に持った苦無を放つ。
しかし、それは当たる事無く、鎖分銅の鎖に弾かれてしまう。
体勢を崩したままの霞は、そのまま床に手をつき、側転をしながら手の力のみでジャンプする。

「ていっ」

空中で無数の手裏剣を放つ。
だがそれも、鎖分銅を高速回転させる守りを破る事ができない。
むしろ、全て弾き返した後に、攻撃をしてくる。

「ハァ！」

霞は、鎖分銅の攻撃を苦無で何とか防ぐ。
しかし、攻撃はこれだけではなかった。

一つ、二つ、三つ、四つ……

四つの鎖分銅が、霞の両手両足に絡み付いた。

「しまっ――！」

――ドガ！

空中から床に叩きつけられる。
肺の空気が一度に押し出された。

「カハッ……！」

更に、追い討ちをかけるごとく、霞の上からリビングにあったソファーが降ってくる。

「グフッ……」

流石に、ソファーを上から落とされると辛い。

霞は大ダメージを受けた。

（ソファーとかって……嘘だろ……）

もはや、戦闘継続は不可能だった。

霞は、頭を何とか動かし、母さんの方を見た。

沢山の鎖分銅の鎖を持ち、こちらを見て笑っている。

「まだまだね♪」

そんな母さんの楽しそうな声を聞いて、霞の意識はなくなった。

戦闘時間・２８秒。

○

その後――

「ほら、さっさとしろ」

「分かってるよ父さん」

霞は部屋を片づけている。
壁に刺さった苦無や手裏剣を引き抜き、ソファーを元に戻し、床を直した。

「まだまだヒヨッコだな、霞」

「悪かったね」

父さんの言葉にムッとしながらも、霞は手裏剣を引き抜いていた。

「だが、仕方がないことだ。父さんも霞ぐらいの時はよくしたものだ」

「父さんも？」

「あぁ、一度も勝てた試しはないがな」

「……」

「だが、それで強くなっていくんだぞ」

「……今の社会、強くなったとこで意味ない」

霞は黙々と手裏剣を引き抜いていく。
なんでこんなに投げてしまったかのだろう。

「そりゃ、そうだが……いや、いつか良かったと思うときがくる」

「そうかな」

「あぁ、絶対に」

その自信がどこから来るのか分からない。
自身の経験……なのかもしれない。

（まっ、いいけどね）

霞は、ただひたすら片付けを進めるのだった。

下剋上日和（後書き）

皆様、お久しぶりです。月見　岳です。
休止中にかかわらず、投稿です。これは、休止してなんじゃないかと思う今日。
一応、報告しておきます。
最近の不景気ということで、副業の本格化はとりあえず早めに切り上げることにいたしました。
いやぁ、タイミングが悪かった。損失はありませんが、得もなし。
引き返せる内に引き返す。臆病風に吹かれました。
ということで、近いうちに休止状態をやめる予定です。
まぁ、更新はなかなかできないでしょうが。（本業の学生が忙しい）
では、また近いうちに……。

惚れ薬ぱにっく！（前）（前書き）

やっぱり、こういうのあった方がいいよね。

惚れ薬ぱにっく！（前）

カーテンを締め切り、薄暗い室内。
なにやら変な臭いが充満していた。
その臭いの発生源の部屋の中心には、人一人が入れるぐらいの鍋がドンと置かれていた。
そして、その鍋に入っている緑色の液体を、目元に隈を作っている少女がかき混ぜていた。

「フッフッフ、桃地家の小娘に一歩先をやられたですが……これが完成したら、一発逆転サヨナラ満塁ホームランなのです」

少女は、ボコッボコッと音を立てて煮えたぎる液体に、黒こげになったトカゲ、赤い蛍光色を放つ謎の液体を投入した。
すると、緑色だったドロドロの液体が、瞬く間に変色しピンク色となった。

「ここまでは秘術書通りです。後は……」

おもむろに少女が取り出したのは、爆裂玉（小）。
その爆裂玉に火を付け、煮えたぎる鍋の中に放り込んだ。

―ドン！―

衝撃と共に、鍋から火柱が一瞬だけ上がった。
火柱が上がった後、少女はそぉ～っと鍋を覗き込む。

鍋に煮えたぎっていた液体は、あの一瞬で蒸発したのか、きれいさ

っぱりなくなっていた。
代わりにあるのはピンク色の謎の粉末。
その粉末は、鍋の底や側面にこびり付いていた。

「完璧です」

少女はその粉末を丹念にスプーンで剥ぎ取る。
剥ぎ取って得られた粉末はそれ程多くなく、その粉末は薬包紙に丁寧に包まれた。

「フッフッフ、これで霞さんをメロメロに……桃地家の小娘に吠え面をかかしてやるです！」

少女、鷹山　桜の高笑いが朝焼けの霧瀬市に響き渡った。

○

「起立、礼」

午前の授業がすべて終わった。
これから昼休みだ。
すでに、教室から駆け出し、血で血を洗う戦場へ向かう者、平和にお弁当を囲み出す者と別れている。
しかし、霞は机に突っ伏して、ピクリとも動かない。爆睡している。

「霞く～ん」

「お～い、霞～」

鳴海と東が霞に呼びかけるが反応が――

ビクン！！

「――いっ！」

「――ひっ！」

霞が突然痙攣したのに驚く。

「寝ている時にいきなり痙攣する人っているよね」

近くで様子を見ていた加奈が頬杖をつきながら言った。

「霞く～ん、起きなよ～。死なないで～」

「……うっ、ん～～。昼飯～～」

のっそりと起き上がる。

しかし、視点は定まっていない。

「昼飯……今日、ない」

バタッ……

霞は再び机に突っ伏した。

お腹の虫が鳴きまくっている。

「学食行けばいいじゃねえか」

「……財布、忘れた。お金…ない…」

かなり声が絶え絶えだ。

「……そんなお腹減ってるの？」

「あぁ、昨日の晩から食べていない……」

「えっ、なんで？」

「……色々あるんだよ」

本当は修行と称して、携帯食料しか食卓に出てこないのだ。
高校生にとっては厳しいものだ。

「じゃ、じゃあさ」

鳴海がモジモジと頬を朱く染める。
なんだか言いにくそうだ。

「わ、私のおべん――」

「かっすみさーん！！」

バーンと音を立て、教室のドアが開き、元気な声が響いた。
その声に、鳴海の声がかき消された。

桜が教室にやってきたのだ。

「鷹山さん!?今頃学校に登校ですか!?」

クラス委員長の女の子が色々と言っているが、桜は完全無視。
霞に向かっていった。

「霞さん!お弁当作ってきました!」

これが、後に騒動の原因になるのだった。

◯

場所は変わって屋上。
霞、東、鳴海、朱里、桜といったメンツで昼食タイム。

「おぉ、なかなか立派だな」

それが桜のお弁当を見た霞の第一声だ。
二段の重箱みたいなお弁当箱。
唐揚げ、煮物、ミニハンバーグ、サラダ、おにぎり……ｅｔｃ
色とりどり様々な料理が詰められている。

「さぁ、どうぞ!」

「分けてくれるのはありがたいが、本人より先に箸をつけるのはちょっとな」

「いえ、私は気にしません!さぁ!」

「いや、でもな……」

「別に薬なんて入ってません。さぁ！」

「じゃあ俺が――」

東が唐揚げを掴もうとしたら、次の瞬間には桜に裏拳を顔面に喰らい、吹き飛ばされていた。
手で食べ物を掴むのはよくない。

「さぁ！どうぞ！何なら私が食べさせてあげます」

「いや……それはちょっと」

「はい、あ～～～ん」

霞の前に唐揚げが差し出された。
口の近くで停滞している。
これは口を開いてくださいという合図なのか？
恥ずかしいことこの上ない。
人に見られているのも原因か……？

「あ～～～ん」

「……いや、ちょっと」

そこで、朱里と鳴海の堪忍袋の緒が切れた。
といっても表面上はなにも変わらない。
ただ、心の中でかなり般若的なことになっているのだ。

――シュパン！

何やら愉快な音を立て、桜が握る箸が真っ二つになっていた。
勿論、唐揚げは落っこちてしまっている。
勿体無い。

「……朱里さん！なにするですか！？」

「いえ、別になにもしてませんよ？」

「嘘です！証拠もあります！」

そう言って、桜が指さした先には、見事にコンクリートの壁に突き刺さった手裏剣が一つ。

「あらあら、最近は手裏剣も飛んでくるような物騒な社会になってるんですねぇ～」

「んな訳ないです！バカにしてるですか！？」

「どうでしょう？桜さんの、語尾に『です』を付けるという喋りをバカっぽく思いはしますけど」

「ムキィィィ！！」

戦いのコングが鳴った。
朱里ＶＳ桜のキャットファイトが繰り広げられる。

飛ぶ苦無、煌めく手裏剣、火花を散らす忍び刀、火のついた爆裂玉
……ｅｔｃ

かなりデンジャラスな事になっている。

当の原因である霞は、我関せずで桜から貰ったお弁当を食べているし、鳴海は面白そうに喧嘩の光景を観ているし、東は未だに気絶している。

……あれ？

「うむぅ……少し変な味がする気がするな……。なにか入っていたか……？」

本人より先に手をつけるのはどうとか言っていたくせに、霞はちゃっかり食べ始めている。

……いや、問題はそこではない。

「……うむ…？」

霞は自らの体の異変に気が付いた。

体がジワジワと暑くなり、頭がクラクラと重みを感じ始めているのだ。

何やら霞の様子がおかしいと気が付いた鳴海が声をかける。

「霞くん。どうかした？」

「いや、何か体がおかしくって――ウッ！」

「霞くん！」

ふらりと体を揺らしたかと思うと、そのまま倒れ込んでしまった。

○

頭が痛い。
ジンジンと二日酔いのような鈍痛を頭部に感じる。
といっても霞は高校生。
勿論未成年でお酒は飲んだことがない。
二日酔いなどわかるはずがない。

（くそ、何があった？）

心の中で毒吐きながら、頭を抱えて体を起こす。

（ここは……保健室か）

パイプベッド。そしてその周囲を白いカーテンが囲んでいる。
直ぐに、この場所が保健室と認識できた。

「……です！……ません！」

「……なのです！……に……です！」

「……くん……だね」

「……か！この……が！」

カーテンの向こう側から何やら言い争う声。
内容までは聞き取れないが、かなりヒートアップしている。
まだ、聴覚がしっかりしていないようだった。

「……惚れ薬……！」

（うむ？）

霞の鍛えられた聴覚が、不穏な言葉を聞いた。

（……まだ耳が馬鹿になってるな。聞き間違いだ）

ブンブンと左右に頭を振る。

そして意識を聴覚に集中させ、周囲の声を聞き取り始めた。

「くぅ……皆さんしつこいです。私が霞さんに惚れ薬を使ったのですから、私が責任をとるのです！」

「そんなの駄目！霞くんとは付き合いが長いから、私が――」

「いえ、許嫁の私の責務ですので手出しは結構です」

声からして、桜、鳴海、朱里の三人だ。

三人の会話から、霞は自分に惚れ薬を盛られた事を知った。

しかし、分からないこともあった。

それは惚れ薬の発動条件。

何をすれば相手が惚れるかである。

家に帰れば解毒薬ぐらいは作れるが、その帰路で発動なんぞしたら大変なことになりそうだ。

（薬を服用して、最初に見た異性……そんな発動条件じゃないことを祈りたいな）

しかし、そんな希望は儚く散ることになる。

「霞さんには、最初に私を見てもらうのです！」

桜の高らかな声に、霞は愕然とした。

どうやら、発動条件は『服用後、最初に見た異性』みたいだ。

実際は、”最初に見た人”なのかもしれないが、惚れ薬とは異性を自分に惚れさせる物であるので、同性には発動しないように作られているものだ。

（さて、どうしたものか……）

腕を組み、霞は悩み始めるが、外野ではまだ、女三人の言い争いが行われていた。

このままでは、いつか武器が飛び交う事態になるだろう。

（まったく、忌々しき事態じゃないか）

無い知恵を絞り、霞は頭をひねる。

実際に、頭を捻ったりしてみるが、それで打開策が思いつくはずもない。

そうこうする内に、遂に外野では戦闘が……という訳でなく、なぜか静まり返っていた。

（……なんだ、どうかしたか？）

その時、カーテンの外に人の気配がした。

「……カスミさん。起きましたか……？」

「霞くん？」

（しまった……気付かれた！？）

いきなりの事に、霞は動揺した。

思わず、少しばかり動いてしまい、ベットが軋む音をたててしまった。

「起きてますね。入らせていただきます」

「いやいやいや！少し待て！しばし待て！早まるんじゃない！？」

そんな霞の叫びも虚しく、無情にもカーテンが開かれる。

それと同時に、霞は目を瞑らざるおえなかった。

「霞くん。なんで目を瞑っているの？さぁ、目を開けて私を見て？」

いつになく優しい声で鳴海は霞を諭す。

「無理。断じて目を開けません」

「ほら、怖くないから」

「いや、そう言う問題じゃないし」

「怖くな～い、怖くな～い」

むしろ怖い。

笑顔のまま、鳴海は霞の目を実力行使で開けようとしている。

「痛い痛い！？やめてくれ！」

「私の心も痛いの！さぁ、目を開けなさい！」

「意味が分からん！？」

そんな危機の中、霞の味方が現れた。

「やめてください。カスミさんが痛がっています！」

朱里だった。

朱里は霞から鳴海を引き剥がすと、さりげなく霞の横に陣取る。

「大丈夫ですか、カスミさん」

「あぁ、大丈夫。それより、〝惚れ薬〟とはどういうことだ？」

「……お聞きになっていましたか。どうやら、鷹山の小娘がお弁当に盛っていたようです」

朱里はさりげなく桜に視線を送る。

それに気付いた桜は頬を膨らまして膨れっ面となる。

霞は伺い知ることができないが。

「……解毒は？」

「今は手元に解毒薬はありません。それ以前に、解毒薬を調合できません」

「ハ？なぜ？」

「材料の中に、既に絶滅した植物が必要でして――」

その言葉を聞いた瞬間、霞は頭がクラッとした。

まさに絶望的。

何とかなるであろう解毒薬作りの希望がここで潰えるとは……。

新しく調合し直して解毒薬を作るにしても、時間がかかる。

舞ならできるかもしれないが、現在は家の地下にある舞のラボにて、プルトニウムの研究に勤しんでいるはずだ。

携帯は圏外だし、内線電話は絶対に取らないし……連絡しようがない。

「……カスミさん。大丈夫ですよ。きっと何とかなります」

「朱里さん……」

朱里の励ましに、霞は胸に熱いものを感じた。

「目を開けて、私を見てください。それですべてが丸く収まります」

「……」

ブルータス、お前もか！

胸の熱いものは急速に引いていった。

「なに抜け駆け使用としてるですか！？」

「そうですよ！」

「私は許嫁何です！早い者勝ちですよ！」

「そんなの関係ないです！」

ワァワァギャーギャーキーキー！

女三人寄れば姦しいとはよく言ったものだ。
この隙に、霞は保健室からの脱出を試みる。
目を瞑ったまま、感覚を研ぎ澄まし、気配と忍者の勘で飛び出す。
言い争う三人の頭上を飛び越えて着地。
そのまま、窓があるだろう方向にダイブした。

カシャァァァァン

窓ガラスが割れる音と同時に、三人が慌て出す声を聞く。
保健室は一階なので、さほど高くはない。接地と共に、クルリと回り衝撃を吸収、そのまま一気に姿を眩ました。
霞の姿を見失った三人は慌てる。

「逃げた、逃げちゃったです！」

「とにかく、早く見つけないと」

「こんな油売ってる場合じゃありません！」

朱里達が、保健室から出ようとしたとき、タイミングよく扉が開いた。

「……お前ら」

静かな怒りを携える白衣の女性がそこに立っていた。

そう、彼女こそこの部屋の”主”である。

「「「セ、センセ……」」」

思わず三人は後ずさる。

「ガラス、割ったのは誰だ？」

「「「……」」」

皆が沈黙する。

割った張本人は、もうここにはいない。

「ほぅ、答えられないと……」

「……ち、違うのです」

「何が違う、鷹山」

「えと、割ったのは……コイツです！」

そう言って桜は朱里を指差す。

指差された朱里は手と頭を振り、自分でないとアピール。

そして、横の人物を指差す。

「わたしぃ！？」

鳴海が素っ頓狂な声を上げる。

「……わ、私じゃない！た、鷹山さんが！」

「違うです！桃地の小娘が！」

「小娘とはなんです！」

再び火花を散らす三人。しかし、戦闘までには至らなかった。
突如感じた冷たい殺気に一斉に後ろを向いた。

「テメェら」

……ユラリ……

そこには、白衣を着た修羅がいた。修羅は不気味に三人に近づく。
あまりの恐怖に腰を抜かして動けない。
あんなに火花を散らし、険悪な感じだったのに、今や三人は寄り添って震えている。

「お・し・お・き・ネ・☆」

可愛らしく言ったつもりらしいが、それは三人の恐怖を助長するのに十分だった。
なぜか独りでに保健室の扉が閉まり、鍵がかかる。
窓ガラスが割れているので、完全ではないが密室の完成だ。
保健室に三人の悲鳴が響き渡ると共に、恐怖の時間が始まった。

惚れ薬ぱにっく！（前）（後書き）

ども、月見です。
とりあえず、周囲が落ち着き始めましたので、筆をとることにしました。
といっても遅い更新になると思います。
ではでは、年内中にまた……。

惚れ薬ぱにっく！（後）（前書き）

後書きとかって読みます？
いえ、ただの質問です。

惚れ薬ぱにっく！（後）

穏やかな風が吹く。
お昼下がりで気温的にも心地いい。
食後であるなら睡魔が襲ってきて、昼寝をしてしまうだろう。
しかし、霞にはそんな悠長な事をしている暇はなかった。

「まいったな……」

霞は一人、屋上で愚痴っていた。
今、屋上には誰もいない。
目を開けていられた。

「うむ……やはり留守電か……」

家にいるであろう、母さんに救援を求めたのだが、買い物に行っているのだろうか？
あわよくば、学校をサボって地下のラボで研究に勤しんでいる舞が、電話に出てくれるかと思っていたが、甘かったようだ。
メッセージを録音することもなく携帯電話を切り、ポケットにしまう。

「とにかく、逃げるしかないのかな……」

その場にゴロンと寝っ転がり、目を閉じる。

（このまま、眠ってしまおう）

しかし、世の中そんなに上手くはずもない。

「何が逃げるしかないんだ？」

「……」

「……おい、聞いているのか？起きているのは分かっている」

この高圧的な口調。

「おい、無視か。無視なのか！？先輩だぞ！」

そして、ことある事に先輩であることを主張する人間。

間違いない、黒井　夏だ。

「……なんだ」

とりあえず、そのままの状態で答えた。

「なんだじゃない！ちゃんと先輩を敬え！」

「はいはい」

「なおざりにするなぁ！！」

全く、ウルサいったらありゃしない。

早くどこかへ消えてくれないだろうか。

「あ、今早く消えろと思っただろ！」

「……そ、そんなことないですよぉ～」

「何だ、その微妙な間は！しかもどもっているし、不自然すぎるぞ！」

「あ～、早く消えてくれないかな」

「ストレートだなオイ」

ふと、夏は何かに気付いたらしく、んっ？という表情をする。

「何故ずっと目を瞑る？」

「……まぁ、ちょっとな」

とりあえず、誤魔化すことにした。

「とにかく、人と話す時は目を開けなさい」

「……そいつは出来ない相談だな」

「何故よ？」

「出来ないものは出来ない」

「……」

「……」

二人の間に剣呑な雰囲気が流れる。

「先輩の言うことが聞けないのか」

「こればかりは聞けない」

「そう……だったら！」

急速に接近する気配。

その気配に霞は飛び起きる。

「無理にでも言うこと聞かせるだけ！」

夏が弾丸のごとく、霞に飛びかかっていった。

夏の直撃を霞は喰らい、体をくの字にして吹っ飛んだ。

「さあ、覚悟！」

夏はマウントポジションをとり、霞は絶体絶命！

そう思われたが……

「――しまった！変わり身か！」

夏が捕まえたのは、へのへのもへじで顔が描かれた抱き枕のようなものだった。

周りを見渡しても、誰の姿もない。

「逃げられたか」

ぽつりと夏は呟いた。

○

学校の屋上から逃げ出した霞は、廃ビルの屋上にいた。

「とにかく、ここなら安全だろ」

近くにあったコンクリート片に腰をおろす。

「薬の効果が切れるまで待つか？いや、こういった薬は半永久的に長いからな……」

う～んと、腕を組んで考える。

「ちゃんと調薬系の術をしとくべきだった」

誰にも得意不得意はある。
霞は調薬系の術が不得意だった。
だからと言って全く出来ない訳ではない。
基本的な調薬はできる。
しかし、新しく解毒薬を作るといった調薬は無理があった。

「無理を承知でやってみるか？」

その時だった。
霞は気配を察知した。
空中を高速で飛行する物体。
もちろんそれは……

「ウルサいハエだな」

パシン、ヒュルヒュルヒュル……

そんな面白い音をたてて、霞の周りを飛んでいたハエが叩き落とされた。

「とにかく、道具を取りに帰ら――」

言葉の途中で区切ったかと思うと、霞は素早く立ち上がり、瞬間的に忍装束になる。

「今度はデカいハエだな……」

そう霞が呟いた途端、そいつは現れた。

黒い三角帽子に黒いローブのようなものを羽織り、なぜか箒に跨って空を飛んでいる変態だった。

「お縄じゃあぁぁぁ！！」

そう叫びながら、そいつは物騒な火炎弾を放ってくる。

それを霞は寸前ですべて避けた。

もちろん、目は瞑ったままだ。

気配と火炎弾の熱気、そして予測のみが頼りの芸当だ。

「貫け、裁きの雷！ジャッジメントサンダー！」

杖から放たれる雷撃。

それは一直線に霞に向かっていく。

霞は直感で回避行動をとったのだが、少し遅かった。

「――ッ！」

脇腹に鋭い痛みがはしる。
脇腹を雷撃が掠ったのだ。
実際、掠った所は焦げている。

（さすがに、目を瞑ったままはキツいか……）

背中に嫌な汗が流れるのが分かる。

（コイツはヤバいな。逃げた方がいい）

霞は迎撃という方針から、逃走という選択に変更することにする。
袖からこっそり閃光玉を取り出す。
しかしその直後、足元に何かが絡み付いた。

「――なっ！」

「もらったぁぁ！」

霞はそのまま足を持ち上げられ、宙ぶらりんの状態に、更に体に光る糸みたいなものに雁字搦めにされた。

「……くそ」

「やったね。ついに捕まえた」

変態……いや、加奈は嬉しそうな顔をする。

一方、霞の表情は苦々しい。

「でも、何で目を瞑ったままなの？まぁ、それで捕まえれたのだけど」

つかつかと靴の音を鳴らし、霞に近づいていく。

「う～～ん、やっぱし誰かに似ている」

しげしげと霞の顔を加奈は見る。
霞の額に冷や汗が流れた。

「……覆面、とっていい？」

「ダメダメダメ！それはやっちゃいかん」

「じゃあ、あなたのお名前は？」

「……匿名希望だ」

「そう、じゃあ覆面を……」

そう言って、霞の覆面を取ろうと手をのばす。
その気配を察知したのか、霞は慌て出す。

「ま、待ってくれ！それは困る」

「残念ね、私は困らないの」

あぁ、絶体絶命。

正体がバレるのも時間の問題だ。

「チクショウ、目が開けれたらこんなの……」

霞は苦々しく言う。

負け犬の遠吠えに近い。

「そう言えば、あんた何で目を瞑っているのよ？」

「……ちょっと、惚れ薬を盛られてな」

「ほ、惚れ薬……？本当にあるんだ……」

「よりによって解毒薬がない奴でな。どうしようかと思っていた時に、お前さんが来たわけだ」

「……なら、取引といかない？」

加奈はニヤリと怪しい表情をする。

「取引だと？」

「そう、その薬を、私の魔法で解毒してあげる」

「本当か！？」

「た・だ・し・♪」

人差し指を立て、霞のでチッチッチとする。

当の本人は見えていないのだが。

「アナタの正体を教えて？大丈夫。秘密にするわ」

「うむ……」

霞にとっては魅力的な条件だった。
さて、どうするか。
しばし考えて答えた。

「分かった。条件を受け入れよう」

「オーケー、じゃあ解毒するわよ」

加奈は杖を構えると、呪文を唱え始める。
いまだに霞は宙ぶらりんのままだ。

「……癒やしの鐘よ、邪なる気配を浄化せよ」

加奈は、杖を振り上げる。

「鳴り響け！キュアカウベル」

――カランコロン、カラン……

辺りに少し低めの鈴の音が鳴り響く。
実際に、霞の上に大きなカウベルが左右に揺れている。
しばし、カウベルは音を鳴り響かせると、光の粒子となって姿を消した。

「解毒終了！もういいよ」

「本当か？目を開けるのは怖いのだが……」

「大丈夫！もしダメなら消せばいいから」

「……それは心強い」

そう言ってから、霞は覚悟を決めた。

ゆっくりと目を開ける。

「うむ……」

目の前には黒い三角帽子をかぶり、ローブを纏った加奈がいる。

ただ、逆さまに見えるのだが。

「大丈夫のようね」

「ああ、そうなのだが……」

「どうかした？」

「いい加減、降ろしてくれないか」

霞に言われて、初めて加奈は気づいたようだ。

頭を掻いて、アハハ～と笑っている。

「笑いごとじゃない。こっちは頭に血が……」

「ごめんごめん。今降ろすね」

えい。
かけ声とともに加奈は杖を振る。
すると、霞を拘束していた糸が、光の粒子となって消え去った。
その結果、霞は頭から落っこちる羽目になった。

「いたたた」

「大丈夫――って大丈夫じゃなさそうね」

「まったく、降ろすじゃなくて落とすじゃないか」

「ごめんごめん」

また、アハハと笑う。

「さて、じゃあこっちも約束の正体を明かしてもらうよ」

「ふっ、そう簡単に正体を明かすと思うか」

「――ッ！逃げる気！」

加奈は身構える。

「まっ、そう思ったけど、恩ができちまったからな」

「じゃあ――！」

「教えてやるよ、僕の正体を」

霞はゆっくりと覆面を外していく。

そして、顔がすべて現れたとき、加奈の目が見開いた。

「霧島　霞。君が追った忍者の正体だよ。加奈さん」

「あなた……霧島君？」

「そうだ」

「グータラの印象しかないんだけど」

「……そうか」

少し、霞は傷ついたようだが、これは本人が悪いことだ。

「とりあえず、このことは秘密にしてくれよ」

「わかってる。私のことも秘密ね」

「ああ、わかっているさ」

「それじゃ、私は行くよ」

どこからともなく現れた箒に、加奈は跨る。

「あ、この前は箒折ってすまないな」

「いいよいいよ。おかげで新しく作って性能あがったし。それより、急いだ方がいいんじゃない？」

「なにが？」

「学校。私は分身を放っているからいいけど、霧島君はサボりになるんじゃない？」

「あっ」

「じゃ、がんばってね～」

加奈は、ぴょんとビルから飛び降りると、箒に乗って空を駆けて行った。

「ヤバいな……。午後は担任の授業じゃないか。呼び出しは勘弁だ！」

霞の姿は、一瞬でかき消えた。

なお、その後学校で再び鳴海、朱里、桜の三人に振り回されたことをここに記しておく。

惚れ薬ぱにっく！（後）（後書き）

どうも、月見　岳です。
皆さんは後書きとか読んでいるのでしょうか？
まぁ、自由にやらせてもらいます。
さて、この小説も長らくやってきました。
しかし、どんなに長くやっても避けられない道は必ずあるものです。
この、『現代忍者の日々』もついに次回で最終章に入ります。
気を付けてください。『最終章』であって『最終回』ではありません。時間の問題ですが。
よって、次回よりコメディー色はほぼ無くなる予定です。
ちなみに伏線すべて回収しません。
なぜ？そのうちわかると思います。
だから、文句言わないでくださいね？

最終章・闇に胎動せし者達

闇……。
光は無く、ただ暗闇が支配する。
見渡してもなにも見えない…否、見ることが出来ない闇。
そんな闇でも、人の気配だけはあった……。

――暗闇に朧気ながらも、光が出現した。
赤く燃える灯火。
ろうそくの炎だった。
暗闇にろうそくの炎が次々と現れ、暗闇を照らした。
そこは、朽ち果てた木造の家屋の中らしく、神社かお寺のようだった。
ろうそくの光に照らされた室内には、黒装束の人間が集まっていた。
さらに、全員が『ひょっとこ』のお面で顔を隠していた。
怖いような、滑稽なような……。

「時は満ちた」

「今こそ我らが鉄槌を下す」

「力がすべて」

「力は何者にも勝る」

「力で世界を変える」

「黒き霧で闇を覆う」

「「「今こそ我らの復権の時！！」」」

ひょっとこの面を被った全員が吠えた。

「「「そうはいくか！！」」」

「「「――っ！！」」」

突如、乱入してきた人間達。

覆面をし、紫色の忍装束。そして緑色の忍装束。

「やはり貴様ら何か企んでいやがったな！」

「なっ！鷹山家と桃地家の忍か！なぜバレた！」

ひょっとこ達に動揺が走った。

ただ、表情は伺いしれない。

ひょっとこのお面を被っているから。

「このところ、怪しい行動ばかり闇でしていたからな。警戒していたんだ」

「くそ、感づかれていたか」

「そりゃ、そのお面を付けて毎回集まってると目に付くのは当たり前だ」

「「「……」」」

ひょっとこ一同沈黙した。

「”黒き霧”との繋がりの証拠も上げてある」

A4サイズの茶封筒から、バサッと沢山の写真をバラまいた。
そこには忍者が迷彩服の人間とやり取りしているところや、背広姿の人間と飲み合っているところが写っていた。

「言い逃れは出来ないぜ。”黒井”」

「……その様だな」

「「「若頭！」」」

ひょっとこ達が左右に別れ、その間に出来た道から、ガタいの良い中年男性が現れた。

「黒井家若頭、黒井　圭介。忍三家の掟を破り、闇への介入。そして、黒き霧との繋がり……。すべて吐いてもらう」

「くっくっく……」

気味悪く、黒井　圭介が笑い出した。
ひょっとこ達を囲む忍者達がギョッとする。

「ハハハハ……ヒャヒャヒャヒャ、ゴホッ、ゲホ」

むせた。笑いすぎで。

「……ふぅ、笑わせてくれる。まるでそちらが主権を握っているよ

うだな」

パチンと指を鳴らす。
すると、どこからともなく迷彩服の人間達が現れ、銃を構えて忍者達に狙いを定める。
忍者達に動揺が走った。

「黒き霧の戦闘員……！はめられたという事か！！」

「そう言う事だ。残念だったな」

ダダダダダン！

朽ちた廃屋に銃声が鳴り響いた。

◆

「さて、準備は出来たな」

黒井　圭介の言葉に、ひょっとこ達と迷彩服の戦闘員が頷いた。
部屋の隅っこには、忍者達が簀巻きに猿轡をされ転がされている。

「若頭、一人逃げましたが追撃しなくていいのですか」

「別によい。今更、手のうちようがないだろう」

「……確かに」

一人のひょっとこが頷く。

「しかし、驚きましたよ。躊躇いなく発砲したんですから」

「ゴム弾の装填を命じていたからな。このゴム弾は通常の銃器で使用できる物でな、実弾を装填しているように見えるのだ……」

その後も、クドクドと話し始める。

長話になるムードが出てきた。

「……にしても、小遣いが二万五千円とは低すぎないか？ウチの嫁は厳し――」

「若頭、話が愚痴になってます」

「……おっと、すまなかった。さっきの愚痴は忘れてくれ」

――こんな事を部下に愚痴ったのがバレたら後が怖いからな。

最後の言葉はボソッと言った。

どうやらカカア天下で尻に敷かれているご様子だ。

「……では、これより大規模攻勢を行う。まず、虎之介！」

「はっ！」

黒井　圭介の前にひとりの忍びがシュッと現れる。

ひょっとこの仮面はもちろん装備済みだ。

「お前の部隊は、黒き霧と連合して暗部機関本部を抑えろ」

「しかし、同盟関係にある魔法協会の介入も……」

「抜かりない。そちらには龍之介の部隊を送る」

虎之介と呼ばれた忍びの隣にシュッと新たな忍びが現れる。

「お前たちの部隊で、暗部機関本部・魔法協会に一斉同時攻撃を仕掛け、速やかに無力化せよ」

「「御意」」

シュッと姿を消した。

沢山集まっていたひょっとこ軍団からも、何人か消えている。

「隼人」

「はい」

今度は、お面をつけていない忍者が現れた。

前の忍者よりは若い。

大学生ぐらいといったところか。

「お前は……分かっているな？」

「はい」

「それで、お前の妹は拒否しているのか？」

「……はい」

黒井　圭介は、ウ～ムと言いながら顎に手にやり、何やら思案する。

「仕方ない。抵抗する場合は、邪魔にならないように閉じこめるなりして無力化しておけ」

「はい」

そう言ってシュッと消えた。

残ったのは黒井　圭介と十数人の忍び達だけ。

「……では、我らも行くとするか」

「ですが、若頭。どこに攻めるというのですか？闇に関連する場所は桃地家と鷹山家の邸宅ぐらいですよ？」

その指摘に黒井　圭介は首を振った。

「そこにはすでに兵を送ってある。もう制圧してるんじゃないか？ほとんどの兵力がコッチに来てたみたいだしな」

そう言って、簀巻きになってある忍者達の群れを一別にて、嘲笑した。

「なら、尚更どこへ……？」

「決まってる。忍三家を管轄している組織……」

――宮内庁にな

最終章・親不在につき（前書き）

長くなりました。

最終章・親不在につき

つい3日前のことだった。
霧島家では、トップ二人が大きなトラベルバックを持って、玄関に立っていた。
いつものラフな服装でなく、余所行きの服装だ。

「それじゃ、行ってくるわね」

「いや、どこに？それにその荷物……」

「旅行だ。とりあえず二週間は帰らない。場所はヨーロッパだ」

「二週間って……。家のことはどうすんだよ」

「お前に任せた」

「任せたって……ちょっと！？父さん！母さん！」

そんな感じで霧島家のトップ二人は旅立っていった。

「まったく、父さん達にも困ったよ」

「だよね兄さん」

のんびりとテーブルを囲んでお茶を飲む霞と涼。
とても平和な時間を過ごしていた。
最近は、昼間でも随分と寒い。

何だかんだでもう冬だ。
今年は『秋』が短かったような気がする。松茸だって食べていない。
しかし、鍋はすでに食べている。

「寒いね兄さん」

「そうだな。こんな日は家に居るのが一番だ」

「そうだよね」

ズズズ……

温かい緑茶を飲む。
あぁ、和むなぁ。
そう思いながら、平和を噛み締める。
あの両親がいないだけで、こんなにもゆっくり出来るのだ。
いきなり手裏剣が飛んでくることもない。

「あ、兄上！」

――ドスン！

しかし、包丁は飛んできた。
見事にテーブルの真ん中に突き刺さっている。

「…おぅ……」

霞はそんな声しか出なかった。
パタパタとスリッパで音を鳴らし、舞が台所からやってくる。

「スミマセン。ネギを斬ろうとして振りかぶったらすっぽ抜けてしまい……」

「”切る”じゃなくて”斬る”に聞こえるのは僕だけか？」

「兄さん、意味分からないよ」

それは置いといて

「ネギを切るなら振りかぶらなくてもいいじゃないか」

「いえ、奴にはそれぐらいしないと」

「どんな恨みがあるんだ？ネギに」

「万能ネギというくせに、壊れた鍋の取っ手がくっつきませんでした」

「万能ネギに何を求めているだよ……」

霞は呆れたように言う。
同じく涼も呆れていた。
そんな二人の様子に、舞はムキになる。

「万能ですよ！？万能ということは、あらゆる事象すべてに効果があることです。ならば、鍋の取っ手ぐらいくっつける事ぐらい出来るはずです！」

「いや、そう力説されてもな……所詮ネギだし」

「……うん、ネギだしね」

「――ナゼッ！何故分かってくれないのですか！」

舞はついに膝をついた。
そのままシクシクと泣き出す始末。

「……姉さん、もういいよ。お昼はボクが作るから」

ヤレヤレといった表情で立ち上がると、涼は自分の湯のみを持って台所へ行った。
その姿を舞は確認すると

「フッ、チョロいもんですね」

ニヤリと黒い笑みをこぼした。

「舞、お前なぁ……」

霞は気付いていたようだ。
今までのが舞の演技であった事に。

「流石にネギに恨みを持つ事はないと思っていたが、案の定か」

「流石は兄上です。しかし、ネギの話は本当に思っていることですので」

「……」

少し、舞の将来が心配になった霞であった。

○

ランチタイムも終了し、午後の一息。
霞は食後のお茶をすすりながら新聞を読み、涼はソファーに寝っ転がって週刊の少年マンガを読み、そして舞はポータブルオーディオプレイヤーで音楽を聞いていた。

――平和な午後だった。

それまでだった。

コンコン……

ガラスをたたく音。
その音に反応し、霞と涼がそちらに顔を向ける。
そこには、庭にボロボロで今にも倒れそうな忍者がいた。

「――ッ！大丈夫か！？」

霞は急いで窓を開けた。
途端に、霞の胸に忍者は崩れ落ちる。

「……か……す……み…さん……」

「桜じゃないか！おい、しっかりしろ！」

霞は覆面をとる。

そこには桜の見慣れた顔があった。
しかし、傷だらけのボロボロで生気が失われている。

「舞、治療の準備だ！涼、ちょっとこっちきて手伝え！」

「わ、分かった」

霞と涼は、とにかく治療のために桜をソファーに寝かす。
ちょうど、舞が医療キットを持ってきた。
桜の傷を確認すると、感情が籠もらない口調で呟くようにいった。

「……思ったより傷が深い所がありますね。骨も折れているかよくてもヒビがいっている所もあります」

そして、ポツリと一言。

「正直、ここまで酷いとは思いませんでした」

「一体どうしたんだろ……」

涼が唖然として呟いた。

「兄上、もしや何者かの襲撃を受けたのでは」

「そうだろうな」

いつになく、霞は真剣な表情で頷いた。
そして、目が鋭くなる。

「どうやら囲まれたようだな」

「え？一体何が――」

「静かに！」

霞は静かに苦無を取り出す。

「舞、お前のラボに桜さんを運べ。涼、舞を手伝え」

「でも、兄さんは」

「ここで来客をもてなせねばならないからな」

「でも……」

涼はどうやら心配のようで、行きづらいみたいだ。
その様子をチラリと見て、霞は苦笑する。

（涼に心配されるとは……兄貴としてまだまだということか）

「そら、早く行け！ゴーゴーゴー！！」

「う、うん」

霞に急かされ、涼と舞は桜を担いで出て行った。
一人残った霞は、静かに息を潜める。
気配を感じれるだけで、外には五人。同業者だ。

（奇襲のつもりか……だったら逆にこっちから仕掛けるか）

霞は忍装束になると、床板を取り外して床下へ、そこから匍匐前進をして進む。
そして、庭の物陰に素早く隠れた。
そっと周囲を伺うと、二人の忍者の姿が確認する事ができる。

（まずは、あいつ等から……）

霞は忍び針を取り出すと、吹き矢の要領で飛ばす。
そして見事に命中し、昏倒する。
それを確認すると、素早く二人目に狙いを定め、忍び針を飛ばして昏倒させる。
これで、相手方よりも先手をとることができた。
仲間がやられた事に動揺したのか、巧みに隠れていた忍者達が、次々とボロを出していく。
屋根の上で伏せている者、壁に張り付いて擬態している者、草むらから覗いている者。
どれも忍者だ。

（そこだ！）

霞は手裏剣を煌めかせて放つ。
相手にも、忍者のプライドというものがある。
手裏剣をかわし、逆にその倍以上の手裏剣を放った。
四方八方から迫る手裏剣。
しかし、それは霞に命中せず、何故か丸太に突き刺さっていた。

「――残念だったな」

屋根にいた忍者が目を見開く。
背後から、有り得ない声が聞こえたから。

そして、その声の正体を確かめようと、後ろを向こうとしたとき、光が一閃し、意識がなくなった。

「……これで三人」

霞は次の獲物を見る。
その目は、猛禽類のように鋭く、相手に恐怖心を与えるのに十分だった。
残る忍者二人は、互いに顔を合わせると頷き合い、霞に襲いかかる。

「――遅い！」

光が一閃した。
途端に忍者達が倒れ込んだ。
霞は忍者が気絶していることを確認すると、チンと涼しい音を立てて、忍者刀を鞘におさめた。
そして、ハッとする。

「しまった……！なんで僕たちを襲ったのか聞くのを忘れた！」

再び、足元に転がる忍者を見る。
目が鳴門になっていて、聞ける様子でない。
霞は溜め息をひとつ吐く。

「仕方ない……な」

とりあえず、簀巻きにでもして拘束しておこう。
そして目が覚めたところでじっくりと話を伺うことにしよう。
勿論、場合によっては拷問もありだ。
霞は懐から麻縄を取り出し、クルクルと巻いて拘束していく。

「よ…こら…せと」

簀巻きにした五人の忍者を担ぎ上げる。
流石に重いのか、少しばかりふらついている。
五人一度に担ぎ上げたのは無理があったようだ。

――ブチ！

麻縄が千切れた。
担いでいた忍者達が、屋根から転げ落ちていく。

「あ、しま――」

しまった、そう言い切る前だった。
霞の足元に苦無が突き刺ささる。

「――誰だ！」

苦無は放たれたであろう方向に顔を向ける。
そこには、電柱のてっぺんで漆黒の忍装束の忍者が立っていた。

「忍が名乗る訳ないだろう」

とても冷ややかに、冷徹さを醸し出す口調でいった。
霞はニヤリと笑い、ポツリ呟く。

「違いない」

二人の間に、一陣の風が吹いた。

その瞬間、戦いのゴングがなった。
まず、空中で無数の苦無と手裏剣が火花を散らし、空中衝突していった。

「ちくしょうめ……」

霞は愚痴りながら疾走する。
相手の忍者に接近戦を試みる。
既に先ほどの戦闘で、手元にある手裏剣の数が少ない。遠距離戦では分が悪い。
ならば、接近戦を仕掛けるのが最善と判断した結果だ。

（一撃で決める……！ならば！）

霞の会得している技の中で、最速の攻撃スピードを持つ技を……

「我流・紫電颯刃！！」

霞、最速の斬撃が放たれた。

――スパン！

真っ二つに切り裂かれる。
目の前でスプラッタな展開が予想されたが、その予想は裏切られる。
誰だって、血を見るのは嫌である。

「――変わり身！」

そこには、真っ二つになった丸太が転がっていた。
霞の背後から、鎖分銅が飛んでくる。

それは霞の右足首に絡みついた。

「――ッ！」

一瞬、霞の動きが止まる。
その一瞬の隙を、相手の忍者が見逃すはずもなかった。
高速で飛来する苦無。
それが、霞の眼前まできていた。

「斬撃・鎌鼬！！」

真空の刃を放ち、飛来する苦無を断ち、そして鎖分銅の鎖も切った。
自由になった霞は、相手の忍者と距離をとる。

（コイツ、今までの奴と違う……。強い……！）

霞は背中に冷や汗が流れるのを実感する。
もしかしたら、相手は自分よりも強いかもしれない。
流石に、今回ばかりは無事ではすまないだろう。
だが、

「……ここで退くわけにはいかないんだよな」

霞は愛用の忍者刀『月影』を握りなおした。

「さぁ、行くか」

霞は再び駆け出した。

○

「斬撃・鎌鼬！！」

霞は真空の刃を放つ。
対して、相手の忍者は丸い球体を霞に向かって投げつける。
真空の刃はその球体を切り裂く。
ボンと音を立てて、白い煙が立ち込めた。

（煙幕！くそ、ドコだ！？）

周りを見渡すが、何も見えない。
焦る気持ちを抑え、冷静に努める。

（そうだ、視覚だけを頼るな……全ての感覚を研ぎ澄ませ……自分の感覚を信じるんだ……）

目を閉じ、神経を張り詰める。
そして、

「そこだ！」

素早く、斬りつけた。

「なっ！また変わり身だと！？」

そこに転がるのはただの丸太だった。
驚愕する霞に向かって、四方八方から飛来する苦無。
煙幕で視界が短く、霞は防ぐので精一杯。

足元に転がってきた球体に気付くのに遅れた。

――ドン！

球体が炸裂し、爆発が霞を襲う。

爆発の影響で煙が晴れたが、変わりに霞は傷つき、ズタボロの状態で現れた。

膝をつき、忍装束も煤けている。

腕のところが破けて、出血をしていた。

霞の後ろに忍者が現れ、首に忍者刀を当てた。

霞、絶体絶命。

（僕もヤキがまわったか……）

「ちくしょうめ……」

霞は諦めたように呟いた。

首元に当てられた忍者刀が引かれる……その時だった。

「兄さん！！」

甲高い声が響き渡った。

霞の横に、また一人忍者が現れる。

「……夏」

「もう止めて兄さん！そんなの間違ってる！」

「……夏？まさか先輩か？」

いまいち状況は掴めないがチャンスだ。
霞は首元の忍者刀を払い、忍者から距離をあける。

「しまった。夏！邪魔をするな！」

「いや！こんな事納得いかない！」

霞の前に夏が庇うように立ちはだかった。

「夏、例えお前でも、邪魔するようなら……死んでもらう」

「……兄さん」

夏も臨戦態勢に入る。
忍者刀を構えた。

「先輩……止めておけ」

「霧島……」

「兄妹でやり合うものじゃない」

霞はヨロヨロと立ち上がる。
ダメージは酷く、戦える状況でない。

「兄上！！」

「兄さん！！」

霞の後ろに、涼と舞が忍装束で現れた。

舞は鎖鎌をブンブンと回し、涼は霞の傷の治療をしている。

「チッ、増えたか。一時撤退だ。次は覚悟しろ霧島」

「兄さん！」

夏の叫びに、静かに背中を向ける。

「……残念だ。夏」

忍者はフッと姿を消した。

「……兄さん」

夏は静かに呟く。

その夏に、舞が近づいて肩に手を添えた。

「黒井先輩、詳しく話を聞かせていただきます」

「分かってる。でも今は霧島を何とかしないと」

○

霧島の秘密の地下室。

近代的な高度なセキュリティーが施され、地下室への入り口も分からないようにされている。

霧島家の中で最も安全な場所とされており、代々の秘伝の術が書かれた巻物や重要書物が保存されていたり、かなり危険な薬品や忍び

薬などが保存されている。
他にも、長期籠城が可能なように食糧庫に武器庫、医療設備もある。
核に晒されても耐えられるように設計されており、換気システムだってしっかりしている。
そんな何でもある地下室の一角に舞のラボがある。
ある意味、地上に存在させることが無理だったのだ。
その舞のラボでは、包帯だらけの桜がベッドで眠り、霞はパイプ椅子に座り、涼に腕に包帯を巻いてもらっている。

「さて、話を聞かせてもらうよナッツ」

「夏！ナッツはやめて！」

「兄上……」

白い目で妹達から見られ、形だけでも霞は謝った。

「で、なにがあった」

「反乱……というより決起。黒井一族のね」

その夏の言葉に、霧島兄妹はピクリとした。

「決起だと？」

「そ、黒井一族の復権が目的だ」

「復権ですか？どうゆうことです？」

涼が頭を傾げる。

「昔、黒井一族は忍三家で覇権を握っていた。だけど力が衰えてきて、今じゃ”役立たず”と言われている。それが若頭には耐えられなかったみたいだ」

「それで、一発かますつもりということか」

「それだけじゃない。この忍三家というシステム自体を壊して乗っ取るつもりだ」

その言葉に息をのむ。

「おいおい、そんな事したら……」

「表に闇が侵蝕して、表社会は混沌となるな」

夏は冷静に述べる。

「首謀者は分かっているのか！？」

「分かってるけど自分達の力だけで処理できると思っているみたいだ」

「馬鹿が……！三つの家でやっとなのに、出来るわけない！」

「しかも、まだ悪い知らせがある」

その夏の言葉に、霞は頭を抱えた。

本来なら、父さんや母さんが処理する問題だ。

しかし、旅行でいない今、この問題は霞が処理しなくてはならない。

霧島家忍者として、闇の監視者で闇に介入出来る、唯一の一族としての初仕事にしては、問題が多すぎる。

「やめてくれ、これ以上は流石に冗談きつい」

「いや、これが一番大切だ。”黒き霧”が関与している」

「黒き霧……最悪だ」

「奴らは暗部機関、魔法協会を襲撃している」

「……」

「桃地、鷹山家もやられた。動けるのは私たちだけ」

「じゃあ、ボクたちがやられたらおしまいということなんだね」

涼の軽い口調は、本当に現状を理解しているのか疑いたくなった。

「兄上、どうしますか？」

「……」

霞は決断した。

「現実から逃げ出したって、いつかはやらなきゃいけないんだ。やってやる」

「兄さん……！」

「分かりました。では、まずどこから？」

「暗部機関だ。解放後、魔法協会に向かう。桃地と鷹山家は最後だ」

霞は立ち上がり、ラボの出入り口に向かう。

「兄上、待ってください。私もやります」

「ボクも……！」

「私も、兄さんを止めたいし」

「……分かった。人手は欲しい。だが、先輩。あんたはここに残ってくれ」

「何故だ」

その言葉に、霞はある方向を指差す。

その先には、未だに眠る桜の姿があった。

「あいつを診てやっててくれよ」

「……分かった。この娘が意識を取り戻したら直ぐに行く」

「よし……。舞、涼！各自フル装備で持てるだけ持って集合だ」

「「ハイ！」」

その声と共に、三人の姿は瞬時に消えた。

残った夏は静かにパイプ椅子に座り直した。

ラボの中は、桜の寝息が聞こえるくらい、静まり返った。

最終章・エマンジェシー（前書き）

エマンジェシーで正しかったかな？

最終章・エマンジェシー

時間は少しさかのぼる。

暗部機関の本部の統合司令部室。

その部屋の中心、司令官がいるべき位置にひとりの少女がいた。

ショートカットの髪につけている黄色いカチューシャが、薄暗い室内で目立っていた。

「あ～～、暇よねナビィ」

『そうですが……逆を返せば、それは平和ということですよ』

知らない人が見たら、驚くだろう光景だ。

何もないところに話しかける少女に、その少女に応えて響き渡る声。

しかし、司令部にいる人達には日常的な光景であり、驚くことはない。

「だけど、なんか変な気分なのよねぇ～」

『変な気分ですか……？私には分からないことですね』

「仕方ないわよ、それは」

司令官シートの椅子をクルクルと回して少女、樫野　美里は暇を持て余す。

『時に副長。そこは司令の席ですが……』

「いいのよ。お役所の役人よ？選挙関連で忙しいのに、コッチに来る訳無いじゃない」

椅子を回すのに飽きたのか、美里は今度は胸ポケットに入れていたボールペンで、ペン回しをし始めた。

「ナビィ、現在の状況はぁ？」

『各区画、異常はありません。機関員の小競り合いなども見られませんね』

「じゃあ――」

『ゴキブリ、ムカデなどの害虫やネズミも発生していません』

「……そう、何も無いわね」

『せっかくなんです。外出してみてはどうですか？』

「現在の気温は？」

『8度です』

「寒い。止めとくわ」

引きこもり副長、美里は以前ペン回しに夢中だ。

『……あ』

ナビィが素っ頓狂な声を上げる。
人工知能でありながら、妙に人間くさい。

「どうしたの？」

『第七区画に侵入者です！人数は……どんどん増えています！』

ナビィの声に、素早く美里が反応した。
手元にあるマイクにスイッチを入れて叫ぶ。

「レッドアラート発令！戦闘員は直ちに武装し、第七区画に急行！発砲は各自で判断せよ！」

『侵入者は第五区画、第八区画にさらに侵攻！』

「全く、嫌なことは当たるものね」

ペン回しをしていたボールペンを胸ポケットに入れて、頭のカチューシャを装着し直す。

『第三区画で交戦開始。押されています』

「戦闘員の増員、急がして！」

統合司令部が慌ただしくなっていく。

「木野機関員より通信！敵は忍者と黒き霧の戦闘員の混合部隊との事です！」

オペレーターと思われる女の子が声を張り上げる。

「オペレーター、協会に支援要請。ナビィ、第三区画から第八区画に続く通路全ての隔壁閉鎖。指定区画にいる機関員に撤退指示！！」

次々と寄せられる報告に、美里は素早く的確に判断し、指示を出していく。

「副長！協会に支援要請しましたが、向こうも襲撃を受けているようです！」

『状況からして、同時拠点攻撃ですね』

「分かってるわよ。でも、狙いはなに？」

美里は親指の爪を噛む。

眉間にはシワが寄っている。

『隔壁閉鎖完了。非戦闘員の退避、無事に終了しました』

「副長、戦線後退の許可を求めています！」

「第二区画までの後退を許可！それ以上は許可できないわ！」

統合司令部室のモニター上では、この施設の見取り図上で赤い点と青い点が衝突している。

赤色が敵、青色が味方を表記している。

「戦闘区画の監視カメラの映像出せる？」

『無理です。すべて破壊されています』

「あぁ、もう！」

美里は苛立ち、デスクを思いっきり叩いた。

それと同時に爆発音がした。

――ドォン！

「な、なに？そんなに叩くのが強かった？」

『副長と違います。第八区画の隔壁が魔力砲撃によって破られました。その音です』

「魔力砲撃……。まいったわね。コッチの機関員は魔法が使えないのに」

『敵の増援を確認。このままでは第二区画が……』

「畳み込まれているわね……。このままじゃあ、やられるわ」

トントントンとデスクを指で叩く。

明らかな劣勢。

戦力差でも負けている。

しかも相手は自分達が使えない魔法を使える人間がいる。

このままでは、全く勝てる気がしない。

何か、現状打破のための奇策はないものか……。

『副長、防衛ラインが崩壊！こちらに向かってます！』

そのナビィの声に、美里は思案の海から帰る。

どうやら、策を考える暇もないようだ。
つい数分前は暇で困っていたのに、皮肉なものだ。
やはり、時は金なりということか。

「……撤退」

「副長？」

「総員、撤退よ！〝船〟に移るわよ！」

美里の発言に、司令部が静まり返り、そしてざわめいた。

「しかし副長、今〝船〟に移るとなると、敵にその存在が露呈します」

「だからといって、ここに留まってやられても、どの道露呈することには変わりないわよ」

『では、私はどうすれば？』

「ナビィは有機生体に入って。データベースとシステムのコピーと完全消去忘れないでね」

『分かりました』

「さて、オペレーター！全機関員に〝船〟への撤退を指示！他は必要な物を持って撤退準備！」

美里の言葉に、司令部内の人が返事をしてテキパキと作業を始める。
敵は眼前まで迫っている。

撤退は手早く的確に。
撤退作業は、素早く行われた。

その後……
暗部機関統合司令部は陥落し、暗部機関は黒き霧と黒井家忍者の混合部隊によって制圧された。

一方、魔法協会。
首都東京の霞ヶ関の上空に存在し、ちょっとした異空間に隠れている。
並みの人間では、協会の建物がある異空間に行き来することができない。
そんな場所に存在する魔法協会。荘厳な石造りの建物で、その土地は深く抉れている。
そこから見える景色は素晴らしい。

「綺麗なんだけどねぇ～」

「どうしたの？いきなり」

テラスの一角で、二人の魔女が紅茶を飲みながら会話をしていた。
一人は楠木　加奈だ。
黒い三角帽子にローブ。
いつもの格好だが、三角帽子の先が折れ曲がっていた。

「いや、こうもいつも見ていると、感動が薄れてくるわねぇ～」

「そうかな？」

「そうよ、毎日好きな物食べたら飽きるみたいな感じよ」

優雅に加奈は紅茶を飲む。

その紅茶は、残念ながら冷めてしまっていた。

「……冷めたわね。入れ直そうかな」

「いくら第二深界だからって、やっぱりこの時期に外は寒いよ」

「そうね、中に入ろうか」

加奈は、紅茶セットを片付けようとした時だった。

――バシン！

電気が放電されたような音が響き渡った。

その音は一度でなく、何度も何度も続く。

「何事！？」

加奈はテラスから身を乗り出した。

「危ないよ加奈ちゃん」

友人の忠告も耳に入らず、加奈は食い入るように広がる空を見渡す。

「……あそこ！みて！」

「なに……って…うそ……」

加奈が指さした先、それを見た瞬間、友人は声を失う。
巨大な寸胴。
強固な装甲。
そして巨大な砲身。
まだ少し遠くて詳しくは見えないが、まるで戦艦のようなものが”空中”にあった。

――キュイン…

二股に別れた巨大な砲身から光が収束した。

――ドオォォォン！！！

光の帯が、砲身から発射された。
その光は魔法協会の施設を囲む防御結界に直撃した。
その衝撃に、防御結界が歪む。
だが、依然と照射される光線に、防御結界の歪みは激しくなる。
そして、ついに防御結界が砕け散った。

「防御結界が破られた！」

「そんな！」

加奈とその友人は驚愕する。
空中のそれは、未だゆっくりと近寄ってきながら９０度回転、横の姿を現した。
一際大きな砲身からは水蒸気のようなものが出ているが、他の砲身がこちらを向いていた。

――ドォン！！

加奈達がいる場所でも、空気を震えるのが分かった。
それほどの音だった。
二連装の砲身が火を噴いて、砲弾を発射する。
その砲弾は、魔法協会の建物前に着弾し、クレーターを作った。

「なによなによあれは～！！」

「か、加奈ちゃん、危ないよ！とにかく避難しよ」

「そんな事している――」

――ドォン！！

加奈達の近くに着弾し、建物の破片が襲いかかる。

「大丈夫！？」

「う、うん。シールド張ったから」

「とにかく、早く逃げよう！」

加奈は友人に手を引かれてテラスから立ち去る。
その時に少し外を見たとき、魔法協会の魔法使い達が魔法砲撃を加え始めた所だった。

「どうしよう。加奈ちゃん……」

「戦うしかないんじゃない？」

「でも、あんなのとどうやって……」

こちらの魔法砲撃を行うとしても、あちらの方が圧倒的な火力がある。

今は魔法砲撃で近づかせないようにしているが、どの道時間の問題だ。

思案の中で、加奈はふと思い付いた。

「……ねぇ、近付いたらいいんじゃない？」

「え？」

「いくら火力があっても、砲台の照準補足速度は遅い。なら近付いて攪乱させながら攻撃すればいいじゃない」

「でも、そんなに上手くいくかな？」

「やってみなきゃ分からないわよ」

加奈そういって駆け出す。

手から光が溢れ、箒が現れる。

そのままテラスから飛び降り、箒に跨り飛び立った。

「加奈ちゃーん！」

友人の声が聞こえたが、無視をした。

加奈は、箒をグングンと加速させていき、空中戦艦に近付く。

砲塔の一つがこちらを向き、火を噴いた。

「――ッ！」

それに気がついた加奈は、急旋回。
その途端、横で砲弾が炸裂した。
加奈はゾッとしながらも、箒をかっ飛ばす。
速度を落とせば、狙われて一巻の終わりだ。

「もう少し……」

そう呟いたときだった。
二つの砲塔が加奈に向けられる。
さっきの物と少し形状が違う。

――ダン！ダン！ダン！……

連続で砲弾が発射された。
加奈はとっさに降下するが、爆風に煽られてバランスを崩す。

――バラララ……！

追い討ちをかけるようにして、２０ｍｍの弾が浴びせられる。
加奈はこれをシールドを展開しながら、箒の機動によって何とか凌ごうとする。

「くそ……！」

容赦ない弾幕に近付くことはおろか、箒のバランスを保つことも難しい。

「くそ！くそ！くそ！！」

あまりに無力な自分に腹が立つ。
自分なら……自分の箒を操る技術なら……
そう思って飛び出したはいいがなんてざまだ。
ヒーローや英雄、勇者なんかと違うのだ。
ただの魔女。しかも他の人に比べて新人だ。
あの”忍者”を捕まえて、おごっていたのだろう。
自分の力量がわからない奴が一人前な筈がない。

（……加奈ちゃん！！）

「――ッ！」

頭の中で友人の声が響き渡った。

（良かった。生きてるね）

（何とかね）

（加奈ちゃん。大魔術師様が地下に撤退だって。加奈ちゃんも早く）

（そう……でも、私はまだ退けない。ごめんね）

（加奈ちゃん！）

友人の悲鳴に近い声が頭に響き渡ったが、無視をする。
加奈は前方にシールドを展開し直し、最小の面積で魔力をありったけ練り込み、シールドを最大まで強化した。
そして、全速力で戦艦に突っ込む。

「いっっけぇぇぇ！！」

砲撃がシールドに直撃しても怯まない。
ただ突っ込む。
シールドにヒビがいく。
まだ行ける。まだ飛べる！
シールドが欠けた。
もう少し……！
そして遂に戦艦の真上に到達した。
シールドは破壊され、体も傷だらけだ。

「これで決める……！破滅の光！ライトニングキャノン！！」

加奈の杖の先で光が収束し、極太の光線として放たれた。
光線は戦艦の甲板後部に直撃した。

「やった……！」

喜びもつかの間だった。
攻撃の直撃を受けた砲塔はひしゃげて使用不能に陥っているが、周りの砲塔などの火器は生きていた。

――ダン！ダン！ダン！

砲撃が加奈を襲う。
シールドを張る時間もない。
爆風が加奈を襲う。
直撃は間のがれたものの、加奈が跨る箒は真っ二つに折れた。

（……私はまだ、死ねない！）

加奈は落ちていく中で、杖を振った。
光が加奈を包み込む。
その光が粒子となって消えたとき、加奈の姿も消えていた。

その後……
戦艦から黒き霧の戦闘員、黒井家の忍者が上陸。
魔法協会の建物全域は混合部隊の占領下に置かれた。

最終章・奪回、暗部機関！（前書き）

少し最後辺りをカットしました。

最終章・奪回、暗部機関！

霧瀬市の隣町、保上町。
そこにある御笠山。
その中腹には墓場がある。
その名は御笠霊園。そこに、暗部機関への入り口がある。

「しかしだ」

墓場のある一角で霞達は立ち止まっていた。
既に、暗部機関の入り口の墓標まで来ているのだが、何故か突入を躊躇っていた。
怖がっているわけではない。

「これから先のセキュリティーをどうするか問題だ」

「しかし、兄上は既にセキュリティーパスがあるのではないのですか？」

「そんなもの、とっくに変えられてるさ」

暗部機関が攻撃を受けた時点で、既にセキュリティーは変えられているだろう。

「ということで、涼の出番だ」

霞はある墓石を叩きながら、涼の方を見た。
涼は全く分からないらしく、キョトンとしている。
仕方なく、霞は話を進める。

「コイツをこうしたら……」

墓石の側面をペタペタ触り、感触が違う場所を力任せに外す。
墓石の中には、半導体の基盤やコード類でゴチャゴチャしていた。

「ここから警備システムに侵入して、無力化して欲しい。コイツを何とかしないと入れない」

「分かったよ兄さん」

涼は墓石の中に頭を突っ込み、コードの類を弄る。
基盤にコードを付けたり、逆に取り外したり……
そして、ドコからともなくノートパソコンを取り出すと、一つのコードを取り外してノートパソコンに接続する。

――カタカタカタカタカタ

涼のタイピングの音が鳴り響く。

「ねぇ兄さん」

「なんだ」

「なんかさ、システムが見つかんない」

「……どういうことだ」

「警備システムとかそういったもの以前に、全体的なシステムデータがないんだよ」

「ということは、警備は働いていない……そういうことか？」

「うん」

ということは、今までの事は無駄だったのか。
そう思うと力が抜けてきた。

「……とりあえず、コイツを動かそう」

霞が力任せに開けようと、墓石に手をかける。
その時、

――ゴゴゴゴゴ

墓石が二つに別れ、したへと続く階段が現れる。
一体何故？

「兄さん、とりあえずこの入り口は開けたよ～」

未だにパソコンをカタカタとしている涼が言った。
どうやってしたか知らないが、涼が入り口を開けたらしい。

「……なんだ、このやる気を奪う感じは」

「兄上、とにかく突入しましょう」

「そうだな。涼、行くぞ」

「ちょ、兄さん待って……あ、姉さんダメだよ。勝手に変なものと

か弄っちゃ……ひゃあ、ゴメンナサ～イ！」

「愚妹の癖に、姉に口答えですか！」

状況を分かっているのかどうなのか、姉妹喧嘩を始めた二人。
喧嘩といっても、舞が涼を叩くという一方的なものである。
霞はそんな二人に不安を覚え、ため息をつきつつも階段を降りていくのだった。

○

――ハアッ……ハアッ……ハアッ……

息があがっている。
呼吸の声が、静かな通路に響き渡る。
暗部機関の戦闘員、木野　拓也は身を隠しながら、ある場所を目指していた。

《木野さん、急いでください》

耳に取り付けている通信機から、オペレーターの女の子の声が聞こえる。

「退避は完了したのか？」

《はい、司令部は完全に機能を”船”に移しました》

「そうか……」

《ですので、木野さんも早くこちらに撤退を》

「そうしたいのは山々なんだがな……」

通路の分岐にさしかかる。

木野は、通路の角に身を隠すと、ベルトからナイフを取り出す。

光り輝く刀身を鏡代わりにして、通路の安全を伺う。

ナイフの刀身には、二名の戦闘員が見ることができる。

黒い戦闘服と防弾チョッキに、頭には鉄ヘル。

武器は、先頭を歩く奴がショットガンとして信頼性の高いレミントンＭ８７０。

そしてもう一人は、ヘッケラーコッホのＧ３６。アサルトライフルだ。

対して自分の武器はアサルトカービン銃のＭ４。

今、装填されている弾は残り少ない。

３０発の予備のマガジンが現在二つ。

殺り合ってもいいが、出来るなら発砲音で気付かれるような事はしたくない。

しかし、撤退するには奴らがいる通路を通る必要がある。

奴らはこちらに警戒しつつ、向かってくる。

時間はない。

――ゴクリ…

唾を飲み込む。

汗が、頬を流れてゆく。

Ｍ４を単発射撃に切り替えて再び握りなおした。

（……よし！）

木野はいきおいよく通路に飛び出した。
同時に、銃口を先頭の戦闘員に定める。
そして、相手が発砲する前に発砲する。

――タン！

銃声と共に先頭の戦闘員が倒れる。
木野は銃口をもう一人の戦闘員に向け、発砲した。
こちらも銃声と共に倒れる。
木野は、戦闘員が倒れたのを確認すると、全力で走り出す。
倒れている戦闘員を飛び越える。

《拓也！聞こえてる！？》

「そんな怒鳴らなくても聞こえてる副長！」

その時、後ろで木野が撃ったはずの戦闘員が立ち上がった。

「敵だぁ！！いたぞ！」

――ダダダダダ！！

立ち上がった戦闘員のＧ３６が火を噴いた。
銃弾が耳元や足など、様々なところを掠っていく。

（しまった！防弾チョッキに当たっていたか！！）

今、悔やんでも仕方がない。

素早くフルオートに切り替えて、後退しながら射撃を行う。

《拓也！聞いてるの！？》

「ウルサい！今、交戦中だ！」

《だったらとっとと逃げ出しなさい！》

その瞬間、銃弾が耳の通信機を貫いた。
見事に、通信機が機能を奪われる。

「ちっ！」

木野は舌打ちをすると、通信機を取り外し、その辺に投げ捨てた。

（身を隠す場所が……ない……！）

なんとか、自らの不規則な動きと、発砲による牽制により、被弾することは避けられているが、最早彼は限界であった。
疲れが足を鈍らせ、瞬発力を弱めていた。
銃弾が、木野の左ふくらはぎを撃ち抜いた。
木野はその場に膝を付き、崩れ落ちそうになるがなんか耐える。
銃口は依然前に。
引き金を引き、発砲するが、今度は右肩を撃ち抜かれる。

「――グゥ！」

遂に、木野は崩れ落ちた。
すぐに死につながる致命的な傷は受けていないが、肩に足、そして腕にも銃弾を受けていた。

銃を発砲することはおろか、立ち上がり走ることも難しい。
動けない木野を見て、銃口を依然こちらに向けたまま敵の戦闘員が近づいてくる。

（……これまでか）

諦めが支配し、木野は十数年の人生を振り返る。
物心つく前から銃を握り、硝煙と血の匂いの世界で過ごしてきた。
表社会の、ふざけているとしか思えない馬鹿げた”決まり”を守るために……。
信じて戦ってきた。
仲間も沢山死んだ。
だが、ある時表社会を見て愕然とした。

たかが紙切れの束に踊らされる人間たち。
世界を知ろうとしない人間たち。
平和ボケでとろけきっている人間たち。

そんな国民を見て、言い知れぬ怒りを覚えた。
俺達が命を散らしてやってきたことはなんだったのか。
こんなことなら半世紀前の”決まり”なんかなくなってしまえばいい。
だから俺達は、表社会の”決まり”……”憲法9条”を嫌悪する。
平和を謳う憲法。
馬鹿げてる。そんなもので平和が保たれる筈がない。
他国や闇にそんなものは関係ないのだから。
それすら分からないこの国の中枢や国民には呆れかえる。
特に、平和な国で平和を一方的に語る活動家など、本当の平和を理解していると思えない。
本当の平和を理解するならば、戦争を理解しなければ分かる訳がな

い。
結局、この国の”憲法9条”を守っているのは武力だ。
闇の暗部機関。そして、表社会でいう自衛隊という武力が他国の抑止力になっている。
間違っても、憲法9条が抑止力になっている訳ではない。
そうでないと、俺達の”やっていること”はなにになる。
……そういえば、このことを俺達の”教官”に話したことがある。
しかし彼は、俺達を逆なでするように飄々として言った。

「それがどうした」

ニヤリと犬歯を覗かせた悪人のような笑い方。
それが”教官”の笑い方だった。

「文句言ってキャンキャン吠えるのは、弱いヒョッコだけだ。そのクセ、何にも知っていない。お前等は俺にとって表の奴らと変わらないんだよ」

その言葉に、俺はキレた。
見事に返り討ちにあったが。
倒れ込んでいる俺に教官は言った。

「変えたいのなら、世界を知れ。そのために強くなれ。どんな権力も、どれだけの金でも、単純な暴力の前では意味をなさないからな」

それから、俺は強くなった。
だが、今はどういうことだ。
四肢を貫かれ、銃口を向けられて、もう数十秒もたたない内に引き金は引かれ、死んでいるだろう。

「チクショウ……」

自然とそんな言葉が口から出てきた。
そんなことに驚いた。
まだ、生きることを望んでいたとは。
出血が思ったより多かったのだろう。薄れゆく意識の中でそう思った。
そんな時だった。

「ざまぁないな」

懐かしく、ムカつきを覚える声だった。
黒いつなぎの戦闘服。強化繊維プラスチックの簡易防毒マスク。
そして、鷹のような猛禽類の目。
見間違うはずがなかった。
暗部機関最強と謳われながら、ある特定特殊任務で消息不明になった機関員。
コードネーム”教官”。
彼の帰還だった。

その頃、霞達、霧島家兄妹はすべてのセキュリティーを破り、進軍中だった。
発砲音が続く方向へ向かって突き進む。
突き進むのだが……

「何があったんだ」

「死屍累々ですね」

沢山の人間が倒れていた。
痛みに唸っている。
見る限り、全員が急所を外しているので、今すぐ死ぬといった事態にはならないだろう。

「ボク達が来なくても大丈夫だったんじゃない？」

涼のいうのももっともだった。
侵入してから一度も接敵をしていない。
接敵をしたとしても、敵が既に戦闘不能になっているのだ。
しかし、それなら暗部機関の機関員を見かけないというのもおかしい。
霞は疑問を抱きながら走り抜けていた。

「――ッ！兄上！」

舞の声に反応し、瞬時に忍者刀を抜いた。
通路の分岐に当たる。
霞が自慢の俊足を生かし、先陣を切って飛び出す。
目の前には、戦闘員と忍者の混合部隊がいた。
霞は素早くその部隊の中心に突貫し、凪払っていく。
中心にいては、相手の戦闘員は発砲することができない。
高確率で味方に当たるからだ。
それを見越しての霞の行動だった。
少し遅れて舞と涼がやってくる。
舞は大量の爆裂玉を、そして涼はそれと同等の手裏剣を放った。
霞は巧みな体さばきで飛来する手裏剣を避け、尚且つ敵を凪払う。
次に、壮大な爆発が起こった。
その爆発による煙から、霞と舞、涼が駆けだしてくる。
爆発をモロに受けた戦闘員と忍者は戦闘不能に陥っている。

霞のいる位置のみ爆発がこないように、周囲を爆発させた舞の精密爆撃のおかげだ。
霞にはダメージはない。

「兄さん、やったね」

「あぁ、上手くいった。だが、これからが激しくなる」

「そうですね」

更なる気配を感じとっていた。
前方の方に、新たな敵の一団を認識することができた。

「舞、涼！いくぞ！」

「はい、兄上！」

「うん」

霞達は速度を上げて駆け抜けていった。

○

”船”の中。
暗部機関臨時司令部。
非常灯の灯りで赤く照らされる室内。
大型モニターが三つ、中にぶら下げられ、その奥には壁と見間違うような巨大なモニターがある。

「ナビィ、”船”の起動はまだできない？」

『ジェネレーターの出力がまだ低いです。全体の起動には時間がかかります』

美里は、全体を見渡せるように高い位置にある場所で思案する。
その横で、ショートカットで、全身を白いタイツのような物で身にまとった格好の女性が立っていた。
ただ、首の辺りからコードが伸びており、そのコードは美里の席の前にあるコンソールに繋がっていた。

「ナビィ、ジェネレーターの出力が正常値になるのにどの位かかる？」

美里が隣に立つ女性に話しかける。

『１０分から１５分というところです』

「なら、５分で済まして」

『不可能ではありませんが……暴走させても知りませんよ？』

「……なら、１０分でいいわ」

『了解しました』

女性……ナビィ有機生体版は、ニコッと笑うだけで何もしない。
いや、実際は動く必要がないだけで、頭の中の人工頭脳がフル回転で働いて、システムを動かしているのだ。

「オペレーター。拓也と連絡は？」

「いえ、全く繋がりません」

「マズいわね……。やられたとしたら、痛い戦力ダウンだわ……」

ふと、美里は中にぶら下がるモニターの一つに目をやった。
それは、施設内の戦闘がどのようになっているか表しているものだった。

「……えっ」

何故かどんどんと敵の赤い点が消えていく。
しかも、二カ所でその現象が起こっている。
味方の青い反応もない。

「どういうこと……？」

その時、部屋に声が響きわたった。

《久しぶりだな！！》

「――っ！」

その声には聞き覚えがあった。
暗部機関最強の機関員の声だった。

『回線に強制介入ですか……。驚きです』

「そんな事より、教官！今何を！」

《雑魚を蹴散らしている》

「じゃあ、とりあえず勝手に駆除しちゃって」

《そうか、なら勝手にさせてもらう》

そこで一時通信が止まり、再び入る。

《そうだった。木野が負傷して倒れていた。救護隊を向かわせろ》

「分かったわ」

美里は通信を切ると、再びモニターとにらめっこを始めた。
先程の通信で、敵を殲滅しているのは教官だと分かった。
しかし、反応はもう一つある。
一体誰なのだろうか？
思案する美里に、一人の人物が思い浮かんだ。

「……もしかして」

そう呟きながら、美里は携帯電話を取り出し、電話をかけ始めた。

○

――ピロロロロ、ピロロロロ

その電子音に霞は急停止をした。
ちょうど周囲に敵はいない。

「……僕だな」

霞は懐に手を突っ込んで何やら探し出す。
そして、白い携帯電話を取り出した。

「もしもし」

『あ、霧島君？今どこ？』

樫野　美里だった。

「今、暗部機関の施設内だが……？」

『やっぱりね』

「やっぱり？」

『いや、こっちの話』

なんだかはぐらかされた気がするが、気にしないことにした。

『今ね、ウチの機関員が一騎当千の働きをしているから、巻き込まれないでね』

「は？」

そんな強い人間がいただろうか？

そんな疑問が浮かんだが、話は続いた。

『あと、その先拓也が倒れてると思うから、回収してくれない？』

「拓也…？木野のことか」

『そっ、回収してコッチに来てくれたらいいから』

「待て。敵はほったらかしか？それにコッチとはどこのことだ」

『一度に聞かないでよ！』

何故か怒られた。

『まず場所だけど、これは拓也に聞いて』

「うむ」

『次に、敵についてだけど……』

美里は少し言いよどむ。

『ウチの機関員にやられたくないでしょ？』

「……」

何となく理解した。

霞は無言で頷いた。

電話ではその行動は無意味だが。

『分かった?だったら拓也をお願いね』

「了解した」

そう言って、霞は電話を切った。

「兄さん……?」

「……活躍、ほとんどなしか」

「えっ?」

「何でもない。行くぞ」

霞はそう言って駆け出す。
その後を、舞と涼がついてくる。

しばらくして、
霞達は木野を回収し、誘導に従い”船”に到達した。

なお、暗部機関本部は、当機関の戦闘員、コードネーム”教官”により完全に奪回。
敵部隊は全滅した。

最終章・"教官"（前書き）

主人公が……主人公が活躍してくれない……！！

最終章・"教官"

暗部機関臨時司令部”船”。
本部を奪回したのだが、施設破壊が深刻で司令部として機能させることが出来ないと判断し、当分の間司令部を”船”におく事になったのだ。

『ジェネレーター出力正常値。各ブロック異常なし。完全に起動しました』

「ふぅ……」

美里は安堵した。
背もたれに寄りかかり、背伸びをする。

「とにかく、一段落ね。今は」

『そうですね』

「霧島君達は？」

『今こちらに向かっているとの事です』

しばらくして、プシューと音をたてて扉が開いた。
そこから、忍装束の霧島家兄妹が現れた。

「なんなんだここは……」

「うわぁ、ＳＦみたい」

「……広いですね」

三者三様の反応だった。

「樫野、ここは一体なんだ？」

「ここは、暗部機関保有の”船”よ」

「”船”？」

霞のクエスチョンにナビィが答えた。

『正式名は、高機動型全域空中航空巡洋艦『フェニックス』。分かりやすく言えば宇宙戦艦とでも言うでしょうか……』

「「「宇宙戦艦！？」」」

霧島家兄妹は一同驚愕した。

驚くのも無理もない。漫画やアニメで見るようなものにいるのだから。

オーバーテクノロジーといってもよい。

「そんなに驚かなくてもいいじゃない」

「いや、驚くから」

「そう？」

闇に慣れた人間には当たり前に近いらしい。

霞はまだ闇には慣れていないようだ。

『副長、そろそろ……』

「そうね。じゃあみんな、準備を始めて！」

パンパンと手を叩き、作業を促した。

途端、人がせわしなく動き出して騒がしくなる。

霞たちは何が起こっているのか分からず戸惑うばかりだ。

「ちょっとすまないが、一体なにするつもりだ？」

霞は美里に尋ねた。

美里も、何やらコンソールを叩いて作業中なので少し控えめに。

「何って、決まってるじゃない」

クルリと椅子ごと振り向いた。

「魔法協会を助けるのよ！」

○

「プラズマ魔導炉、エネルギー変換効率１００％。ジェネレーターの機関を切り替えます」

「深界潜行システム起動。第二深界に接続中」

「火器管制システム、レーダーシステム正常に作動」

『航路クリア。オールグリーンです』

「オーケー。フェニックス、出撃！」

『あ、やっぱりストップ』

気合いが籠もった美里の出撃の合図も、ナビィの妙に人間くさい言葉に止められた。

美里は、前を指差しポーズを決めていたが、ガクリとズッコケそうになっていた。

「なによナビィ。せっかく決めていたのに……」

『いえ、その……。先程航路上に……というより、この艦の上に人がいます。今、光学映像を出します』

パッと、大型モニターに艦の外の様子が映し出される。

ある部分をズーム、更にズーム。もう一つズームしてやっと人が認識できた。

「忍者……だな」

「忍者ですね」

「忍者だね」

「忍者ね」

『忍者です』

忍者だった。
ただ、”ひょっとこ”のお面をしているが。
変態にしか見えない。

「あいつ……こいつを爆破するつもりか？」

「でも兄さん。爆裂玉じゃあ無理だよ」

「……すみませんが、手元をもう少し拡大できませんか？」

「ナビィ」

「了解しました」

舞の頼みでナビィがズームをする。
画面に映るのはちょっと変わった球体だった。

「あれは……」

その球体を見た途端、舞は顔をしかめた。
霞も顔をしかめている。

「ヤバいな」

「なに、あれは？」

「施設破壊用爆裂玉……。通常爆裂玉の桁違いの威力です」

「この艦がどれ程の装甲かは知らないが、最悪あれ一発で吹っ飛ぶぞ」

「嘘でしょ！あいつを倒さなきゃ」

「僕が行く。最短経路を教えてくれ」

その時、回線に無理やり介入する者があった。

《俺だぁ！聞こえているか》

「教官！」

「「「……教官？」」」

霧島家兄妹は疑問の声を上げるが、美里は一切無視して話を続けた。

「待機を命じていたはずよ！今どこ！？」

《なに、いまから変態を狩りにいくだけだ。いいから霧島の奴らと見学しとけ！》

「ちょっ――」

《それと、これが終わったら休暇貰うからな。二年くらい。通信終わり！》

「教官！？なに勝手なこと言ってんですか！聞いているんですかぁー！！」

返答がないのに、美里はひたすらマイクに叫び続けた。

○

「フッ」

簡易防毒マスクに内蔵された通信機の電源を切った。
そして、眼下でひたすら工作活動に専念する忍者を見据える。
その目は、獲物を狙う猛禽類の目だった。
彼は、マスクの下で口を歪めた。
久し振りの戦場。
訳あって今まで来ることが出来なかったが、ちょっと前の戦闘で確認した限り、腕は鈍っていなかった。
彼は、腰のホルスターからハンドガンを取り出した。
グロック１８Ｃという小型のハンドガンだ。
自動連射機構を搭載したモデルだ。
彼は、フルオートになっているレバーをセミオートに切り替える。
この時、始めてセーフティーにしていなかった事に気付いた。
暴発しなくてよかったと思いつつ、今あるマガジンの残弾と愛銃の性能を考慮しつつ戦略を考える。
しばしの思案の結果、ある結論に至った。

「考えるだけ無駄だ。目の前の敵性がある奴は排除するだけ」

そう、いくら策を練ったとしても圧倒的な力の前では意味をなさないのだから。

「さあ、狩りを始めようか」

マスクの下でニヤリと口元を歪め、彼は飛び降りた。
空中で無駄に二回転くらいしてから、音もなく艦に着地する。
それに気付いた忍者は、少し間をおいて襲いかかってきた。
少しの間は驚いていたからなのだろうか？
お面をしているので表情は分からない。
まず、彼は手始めに一発頭に向かって発砲した。
９ｍｍパラベラム弾は、忍者に首だけの動きで簡単にかわされてしまう。
それでいい。そうでないとこちらは面白くもない。
彼は再び発砲する。
接近してくる忍者に立て続けに発砲するが、ことごとく避けられている。

「避けられてるというのもあるが……集弾性が低いのも難だな」

そう愚痴りながら、体を反らす。
顔スレスレのところを苦無が通り過ぎる。
彼は体勢を元に戻すと同時に、空いている左手で腰に付けていた小さな短剣を抜く。
その短剣は、少し青みがかった透明な刀身だ。
どうみても鋼で出来ている物でなかった。
既に、かなり接近していた忍者を発砲で一瞬牽制し、その時に出来た隙をついてこちらから切り込んでいく。
彼の急な接近に驚いたのか、忍者は前に出そうとしていた足を押し止めようとしてバランスを崩す。
そんなチャンスを彼が見逃すはずもない。
素早く足払いをし、忍者を転かす。そしてそのまま短剣を突き立てた。
予想していた肉の感触はなかった。

「……身代わりか」

丸太に突き刺さった短剣を引き抜く。
丸太には律儀にひょっとこのお面が装着されている。
こんな無駄な行動ができるほど余裕があるということは、スピードが遅いのか……鈍ったな。
彼は自分の足を二回程踏み鳴らした。

「まぁいい。これといって問題はない。一回で仕留められなかったのは残念だが」

セミオートにしていたレバーを、再びフルオートに切り替える。
ついでに、マガジンを取り替えた。
さっきのマガジンには、既に弾が入っていないのは分かっていた。
彼は銃口を上に向けた。
その先には、お面が外れた素顔の忍者が、彼に向かって降下してくるところだった。

――ダダダダダダダッ！！

彼のグロック１８Ｃが火を噴く。
空薬莢が、落ちて軽い金属音を響かせる。
忍者は怯むことなく、彼に突っ込んでいった。

――カイィィィィィン

金属音とは少し違った高い音が響いた。
そして、

「――なっ！」

「フッ」

忍者の忍者刀の刀身が見事に真っ二つに斬れた。
その事実に忍者は驚き、彼は得意げだった。

「残念だな。こいつは”大体”のものは斬れるんだ」

そういって、短剣をクルクルと回したのちに、腰にある鞘におさめた。
そして、忍者に銃口を向ける。

「戦闘中に呆けるな」

――ダダダダッ！

彼は発砲した。
忍者は何とか避けるが、判断するのが遅すぎた。
二発、弾が当たる。
忍者は苦しみながらも、彼と距離をとろうとする。
苦無を大量に放った。

「……面白くないな」

彼はそう呟くと発砲した。

――ダダダダダダダダッ！

飛来する苦無を、すべて撃ち落とす。

「もういい。終わらせよう」

もう飽きたとでもいいたげに淡白だ。
彼は一気に距離を詰める。
この戦闘で見せなかったスピードだった。
足が鈍っているとは思えなかった。
忍者が反応する前に背後に回り込む。
直後、マガジンキャッチを押し、マガジンを落とす。そして青いマークをいれた新しいマガジンに入れ替えた。
更に、セミオートに切り替えた。

「いい夢を」

――タン！

彼は忍者の背後、少し離れたところから銃を発砲した。

○

「凄い……」

霞は画面に映る光景を見て感嘆の声を上げた。
”教官”と呼ばれいる機関員と黒井家の忍者との戦闘。
圧倒的な強さを見せて、教官の勝利に終わった。

「教官、遊んでいたわね」

「あれで遊んでいたのか！？」

「えぇ、その気になれば瞬殺よ」

「嘘だろ……」

霞は言葉を失った。

上には上がいるということだ。

そんな時、再び教官から通信が入った。

今度は強制的に介入はしてこなかった。

《変態は倒した。一応、暴徒鎮圧用のゴム弾でやっといた》

「ご苦労様。助かったわ」

《フン、とっとと行きな》

「なによその言い方。せっかく礼を言ったのに」

《あんたが礼を言うのが気味悪かったんだよ》

「なっ――！」

《じゃあな！》

一方的に通信を切られた。

美里は拳を握りしめ、この鬱憤をどこにぶつければいいか不完全燃焼な気分だった。

全く、あの教官はいつもいつも……。

プルプル震える拳をどこにぶつければいいんだ！

『副長、そろそろ出航を……』

「そうね。分かってるわ」

スーハースーハーと深呼吸をして心を落ち着かせる。
冷静な心を持たなければ、司令官としてやっていけない。
何千という命を預かっているのだから尚更だ。

「気を取り直して……フェニックス、出撃！！前進微速！！」

『前進微速！』

○

「やっと行ったか……」

”教官”は、ドックからゆっくりと出て行くフェニックスを見届けた。
彼の足元には、気を失った忍者が転がっていた。

「しかし、俺も甘くなった。”表”に感化されたんだろうな……」

マガジンキャッチを押して、マガジンを取り出す。
マガジンの中には、弾頭が青色の硬質ゴムでできたゴム弾が入っている。
このゴム弾は、通常の銃器で発射できる最先端兵器の一つでもあるのだ。

「前なら、問答無用で殺していたが……丸くなったか」

カチャリと音をたてて、マガジンを再び入れる。
そのままセーフティーにしてホルスターに戻した。

「さて、俺も行きますか」

彼は、気を失っている忍者の足首を持ち、引きずっていく。
たまに、忍者の頭が段差で打ち付けられたり、ドラム缶にぶつけられたりしていた。
忍者が目を覚ますのは、まだまだ先になりそうであった。

最終章・超空中戦（前書き）

注意・専門用語多数につき、分からない言葉は各自調べてください。後、その専門用語が間違った意味とかで使われていても起こらないでください。多分、ありますので……

最終章・超空中戦

東京、霞ヶ関。
各省庁舎や合同庁舎が集中し、日本の政治・行政の中心地である。
そんな日本の重要な拠点の上空に、魔法協会の建物がある。
しかし、現在は黒き霧と黒井忍者に占拠されている。
そんな、宙に浮く魔法協会の建物に近付こうとする物体があった。
暗部機関所有、高機動型全域空中航空巡洋艦『フェニックス』である。
現在、魔法協会がある第二深界を航行中で、眼下に広がる街からフェニックスの姿は見ることはできない。
フェニックスは、上から見れば”山”という字に見え、先端は、最近引退した新幹線０系の顔に似ている。
寸胴は比較的シャープである。

『副長、レーダーに機影。敵艦と思われます』

「敵艦ね……。ヘリとか戦闘機じゃないのね？」

『はい、データベースと照合した結果、５年前の太平洋空戦で確認された『シャトルス』と一致しました』

「シャトルス……！？確かその時に沈んだ筈じゃ！？」

『はい、シャトルスはその時に沈みました。私も確認しております』

「なら、あれの存在はどう説明するのよ」

『多分、シャトルスを元にした姉妹艦でしょう。多少ですが、データベースと一致しませんですし……』

「……データベースと一致って言ってなかった？」

『はい、データベースと９８％一致しました』

「９８％とか、言ってなかったわよねぇ～？」

『そうでしたっけ？』

やはりこの人工知能、抜けている。
それが、余計に人間味を出しているのだが。
この人間味こそ、ナビィの良いところなのだ。

「……まぁいいわ。進路そのまま、上昇３０」

フェニックスは上昇する。
軽くＧを感じる。

「全砲門解放、スタンダードミサイル発射！」

「レーダーロック、スタンダードミサイル発射！」

艦中央付近にあるＶＬＳからミサイルが発射される。
白煙を上げ、ミサイルは停泊中のシャトルスに向かっていく。

「３０……２０……１０…迎撃されました」

「主砲レーザー砲発射！」

艦前方の二連装の砲塔から、レーザー光線が発射される。
直線軌道ではあるが、絶大な攻撃力を誇る。

『ミサイル接近！その数……４！』

「迎撃！プラズマキャノン発射！」

艦側面や上部、下部などいたるところに配置されている、ガトリングのようなものからプラズマ弾が発射された。
フェニックスの周囲に、プラズマの弾幕が展開される。

『迎撃完了』

「オーケー、面舵６０。主砲発射！」

主砲塔が少し回転し、砲身を調節され、レーザーが発射される。
レーザーは、見事にシャトルスに命中する。

「上陸部隊、準備できた？」

「はい、いつでもオーケーです」

「ハッチオープン。艦載機を発艦のち、上陸部隊は侵攻を開始！」

「了解！」

「さあ皆！借りを返すわよ！ペイバックタイム！」

○

フェニックスのデッキ。
霞達はそこにいた。

「お前たちはこのヘリに乗ってくれ」

ヘルメットにヘッドホン姿の機関員が言うが、霞達はなぜか頭を傾げるだけ。
今、デッキ上は戦闘機やヘリのエンジンの爆音で支配されており、声がかき消されているのだ。

「通信機の電源を入れろ！」

自分のヘッドホンをトントンと叩くジェスチャーをする。
何とか通じたようで、霞達は耳に装着している通信機の電源を入れた。

「通じるか？」

「あぁ、通じる」

「妹さん方も大丈夫か？」

「大丈夫です」

「うん」

「この通信機は骨伝導タイプだから、どんな騒音でも聞こえる。頼

むから電源を切らないでくれよ」

「あぁ、すまなかった」

「分かればいい。じゃあこのヘリに乗って！」

機関員は後ろにあるＮＨ９０の胴体を叩く。
金属音が実際はしたのだろうが、エンジンの爆音で聞こえることはない。
霞達は、ヘリに素早く乗り込み、機関員により扉が閉められる。
ヘリの中には、すでに１０人以上の機関員が、フル装備の格好で乗り込んでいた。
黒いつなぎの戦闘服に、アサルトライフル。背中にはリュックを背負っている。

「来たわね、早く座って」

コックピットにいる機関員から急かされる。
どうやら、このヘリの操縦桿を握るのは、女性の機関員みたいだ。
霞達は、大人しく簡易座席に座る。シートベルトは面倒だからしなかった。

「戦闘機が発艦しだい、離陸するわよ！」

霞がこっそりコックピットの方から外をうかがってみると、Ｆ／Ａ－１８Ｅがカタパルトに接続されるところだった。
ジェットブラストディフレクターが、エンジン後ろで跳ね上がらり、Ｆ／Ａ－１８Ｅはアフターバーナーを吹かす。
カタパルト・シャトルが一気に加速し、Ｆ／Ａ－１８Ｅを打ち出した。その時の速度は２５０ｋｍにもなる。

「凄いな……」

始めて生でみる戦闘機の発艦シーンに、霞は興奮を隠しきれない。

「離陸するわよ！」

ヘリのエンジン音が更にけたたましく音をあげ、ローターの回転数を上げていく。

フワリとした感覚を感じると同時に、ＮＨ９０は宙に浮いた。

少し機体を前に傾け、前進する。

開いたハッチを抜けると、その下は首都東京だ。

第二深界にから見える東京の景色は、色を失って灰色一色だった。

霞達が乗ったヘリは、魔法協会に向かって、全速力で飛んでいく。

「フェニックスの攻撃で、敵の艦艇の攻撃能力がダウンしている内に運ばないと……」

「機長、先行するアパッチヘリのＩＦＦに反応があったそうです」

「フェニックスに通達。後は戦闘機に任せましょう」

霞達の乗ったヘリを追い越して、ＯＨ－５８Ｄが飛んでいった。

○

「ダリア１より各機。これより敵機を迎撃する。気を引き締めてかかれ」

四機のＦ／Ａ－１８Ｅが、フィンガーチップという編隊を組み、飛行していた。

「敵機を補足。マスターアーム解除」

《こいつは……ラファール！》

《フランス機か……。しかし、ホーネットの敵じゃない》

「油断は禁物だ。ダリア１、ＦＯＸ３」

《ダリア２、ＦＯＸ３》

《ダリア３、ＦＯＸ３》

《ダリア４、ＦＯＸ３》

四機のＦ／Ａ－１８Ｅのハードポイントから、ミサイルのＡＩＭ－１２０が発射された。
ミサイルは白煙をあげて進んでいく。

《頼む……当たってくれよ……》

しばらくして、ＨＵＤにＬＯＳＥと表示される。
それは、ミサイルが当たらなかった事を示す。

「チッ、そう簡単にはいかんか」

しかし、僚機のうち一人はミサイルを当てたらしく、一機減ってい

た。

「敵機視認！ドッグファイトだ！」

四対三のドッグファイトとなると、数の多いこちらが有利だ。
しかしこの際、数の云々は関係ない。この戦域全体をみると数は同等だからだ。

右にハイGターン旋回をし、ある一機の後ろに素早くつく。

「ダリア1、FOX2」

自機のパイロンから、ミサイルAIM－9を発射する。
ミサイルは吸い込まれるように敵戦闘機に向かっていき、炸裂した。
敵の戦闘機は黒煙を吐いて墜ちていく。

《ナイスキル！この調子でやっちまおう》

「他人の仕事ばかり見るな。ほら、後ろにつかれているぞ」

《……やべっ》

敵に追っかけ回される僚機の一つ。
ロール旋回を繰り返して速度を落とし、敵のオーバーシュートを誘うが、敵もロール旋回を行って、結果的に交差と離反を繰り返す軌跡を描く。
手詰まり状態だ。

「ダリア3、合図したら左に離脱しろ。助けてやる」

《隊長！助かるぜ》

「そら行くぞ！3、2、1！」

合図と同時に、僚機は左に旋回する。
それを追って、敵戦闘機も右に旋回しようとするが、

「……もらった！」

正面から接近したダリア1の20mmバルカン砲に蜂の巣にされる。
敵戦闘機は、錐揉みしながら墜ちていった。

《九死に一生だぜ》

「チェック・シックスを怠っただろ」

《油断しちまってな》

「次は助けないからな」

《こちらフェニックス。上陸部隊が敵戦闘機に狙われている。手の空いてる者は、護衛にまわれ》

「こちら、ダリア隊。俺達が護衛に回る。後は任せておけ！」

四機のバラバラに動いていた戦闘機は、再びフィンガーチップの編隊を組み、飛んでいった。

○

「のぅ……うおぃ……！」

霞は変な声を発しながら、何かに耐えていた。

「に、兄さん……」

「耐えろ……今は耐えるんだ……！」

「……うっ、ダメ」

「全く、愚妹はだらしがない」

「くっ、何故舞だけがこの揺れに耐えれるんだ……！」

霞の言うとおり、舞以外、ヘリの中にいる兵士を含め、全員が乗り物酔いでダウン寸前だった。

その原因は勿論パイロットにある。

「いいねいいね！私を墜とすことが出来ると思わないでよね！」

「機長！何を……うわあ！」

ヘリコプターとは思えないぐらいの角度で横に傾く。

もう少し頑張れば、ロール出来るんじゃないかと思うほどだ。

「ヒャヒャヒャ、楽しい……楽しいよぉ！」

「機長ぉぉ！無茶は、無茶だけは！」

そんな副機長の叫びは虚しく、ヘリは右に左に上に下にと、空を縦横無尽に動き回る。
これが戦闘機ならロール回転に宙返りにと、それはすごい機動をする事だろう。もしかしたらプガチョフ・コブラやクルビット、フックといった空中戦闘機動（マニューバ）をやりそうだ。

「ミサイル……？そんなもの当たるわけないでしょ！」

再び、ヘリが有り得ない角度で傾いた。

「はい、避けた～。戦闘ヘリなら反撃したのに……。これだから輸送ヘリは嫌なのよ！」

「嫌だ！もう嫌だぁ！」

「しっかりしなさい副機長！男でしょう！」

機長の叱咤激励も虚しく、副機長は意識を失った。
どうやら恐怖で失神したようだ。

「たく……だらしないわね。積み荷の皆さんも大丈夫？」

「大丈夫なわけ――」

「無論、大丈夫です」

霞が言う最中に、舞が言葉を重ねてきた。
更に残念なことに、霞の言葉は機長に届かず、舞の言葉だけ受け入れられてしまった。

「まだまだ、暴れていただいて結構です」

「ハハハハ、あんた気に入ったよ！思う存分暴れさせてもらうからね！」

「……まるでジェットコースターですね」

そんな甘っちょろいものではないのだが……。

ヘリは再び中身をシェイクする。

「くっ……。まるでミキサーの中みたいだ……！」

「きゅう……」

「これは……楽しい乗り物です」

霞は生き絶え絶え、涼は既に失神。舞は至って普通に楽しんでいた。

「ひゃほぉう！ミサイルだミサイルだ！」

グインとヘリが横に傾いた。

途端、ヘリの近くで爆発が起こり、機体が大きく振動した。

「近接信管でも私を仕留められないの！？素人ばっかり！！」

そう言いながら、コックピットから色々と警報音が聞こえてくるのは気のせいだろうか……。

気のせいと思いたい。

「あぁもう！この警報音ウルサいわね！」

スイッチをいくつか操作する音が聞こえ、警報音が止む。

「積み荷さん方！もうすぐ到着よ！ヘリボーンの準備を！」

その声に、部隊の隊長と思われる青年が復活した。

「よし！全員、銃に弾をこめろ！」

機関員達は、マガジンをＭ４に取り付けた。

そして、装填する。

「お、やってるやってる」

先行したＡＨ－６４Ｄが、攻撃を行い、ヘリボーン予定地点の敵を殲滅。

更に、ＯＨ－５８Ｄが一度攻撃を行った後、乗組員がヘリボーンで先行して上陸。

ヘリボーン地点を確保する。

「ヘリボーン地点に到着。さぁ行ってきなさい！」

「よし、ヘリボーンだ！後がつっかえてる。素早く降りろ！」

機関員はスムーズに、そして恐ろしいほど素早くロープを使って降りていく。

上陸した機関員達は、先行した部隊と共同して侵攻していく。

「後はお前達だ！さあ早く！」

「……僕達にロープはいらん。飛び降りるからな」

そう霞は一言。

今までのグダグダぶりが嘘のようにスッと立ち上がり、そのままヘリの出入り口から躊躇いなく飛び降りた。

「愚妹、いつまでも眠っているつもりですか。行きますよ」

「あいたぁー！」

舞が涼の頭をひっぱたく。

少々力が強かったのだろう。あまりの痛さに絶叫した。

「だらしない」

「えっ、ちょっと姉さん？ちょ、ま、いや……」

ズリズリと涼を引きずって、ヘリの出入り口へ。

「さて、行きましょう」

「姉さん？ちょっ……」

「レッツゴーです」

舞はそう言うと、涼をポイッとヘリの外に放り出した。

「きゃあああぁぁぁぁ……」

とても女の子らしい声を上げて、涼は落っこちていった。

「では、私もお先に」

舞も、華麗に飛び降りていった。

「……やっぱ、俺達と違うのか……？」

コントみたいなやり取りを見ていた機関員の青年は、呆然としてそう呟くのだった。

このあと、なかなか降りない事にキレたパイロットが、機体を傾けて青年を落っことすと言う出来事が人知れず起こったのだった。

最終章・奪回、魔法協会（前書き）

なんか、やる気なくなってどーでもよくなってきたこの頃

『上陸部隊、上陸を開始。被害は５％。当初予想より非常に少ないです』

ナビィの声が鳴り響いた。

「それはよかった。戦闘機は？」

『現在も交戦中』

「オーケー。とにかく私たちはあのデカ物をやるわよ！」

○

鳴り響く発砲音。断続的な爆発音。そして硝煙の臭い。

まさに戦場だった。

「舞、涼！ついて来てるか！」

「はい、兄上！」

「うん！」

霞達は、飛び交う銃弾の中を突き進んでいた。

敵に出くわせば瞬時に叩きのめし、魔法を撃たれれば忍者刀で打ち返す。

「黒き霧の機関員ばかり……！」

先ほどから、銃と魔法の攻撃しかしてこなかった。

忍者がいるなら、刀の接近戦や苦無、手裏剣の投擲による攻撃があるはずだ。

しかし、それがないというのは忍者はどうしたのだろうか？

事前情報では、数は少ないが派遣されているはずだ。

《忍者さん。聞こえますか？こちら、フェニックスオペレーターです》

「感度良好、よく聞こえる」

迫り来る火炎の塊を、忍者刀を振り抜いて流し打ちをした。

《魔法協会の方々の居場所が判明しました。地下室です》

「地下室？どうやって行く？」

《突き当たりに扉があるはずです。しかし、それはダミーで、地下室の入り口は扉の下です》

しばらくして、霞の視界に大きなアンティーク調の木製の扉が現れた。

「あれか……！」

霞は扉をけり破り、扉があった場所に爆裂玉一（大）をセットした。

「離れろ！」

霞が言うとほぼ同時に、爆裂玉が爆発を起こした。
粉塵が舞う中、霞は目を凝らす。
爆裂玉の爆心地には、ポッカリと穴が空いていた。

「……発破したが、もしかしてダメだったか？」

今更だった。

《どうしました？》

「いや……敵の攻撃の爆発で、地下室の入り口が破壊された」

《大変！急いで突入して救助してください！そこだけが唯一の出入り口何ですから！》

「そいつは大変だぁ！」

白々しい霞に、妹たちの白い視線がビシバシと突き刺さる。
霞は全く堪えてないようだが。

「さて、敵に破壊されたが……突入だ！」

堂々と、躊躇いなく、霞は敵のせいにした。

「兄上は敵でしたか？」

「何のことだ？僕は何もしてないぞ。なぁ涼」

「えっと……ボクは目を閉じてたから」

いきなりふられても困る。

兄と姉、どちらに味方したとしても、後でひどい目に合いそうだ。

だから涼は適当にごまかした。

「とにもかくにも突入だ。簡易擬態させたとしても、精々リミットは五分だろう」

「そうですね。急ぎましょう」

「涼、ここの簡易擬態を頼むぞ」

「うん」

涼がこくりと頷いたのを確認して、霞と舞は穴の中に飛び込んだ。

○

その頃、フェニックスでは美里が声を張り上げて指示を飛ばしていた。

「前方シールド３０％強化！推力１０％減少！」

『敵、超硬レールガンに高エネルギー反応！』

「進路変更、面舵いっぱい！緊急降下！」

その途端、体が宙に浮く感覚を感じてフェニックスが降下する。
シャトルスがレールガンを発射する。
アルミとオリハルコンの合金でできた弾が、光を伴ってフェニックスの強化シールドに直撃する。
ビリビリと強化シールドが大きく振動し屈折する。同時に、衝撃でフェニックスが揺れた。
弾は、しばらく強化シールドを屈折させていたが、弾力のある強化シールドのせいで進行方向が変わって、そのまま飛んでいった。

「戦闘機は！？あのレールガンを攻撃してるの！？」

「弾幕で近付けないとのことです！ミサイルも撃ち落とされます！」

『高度なイージスシステムを採用しているのでしょうか？』

「知らないわよ！解析しなさい！」

『分かりました』

シャトルスが速射砲といった大量の砲装備で砲撃を行ってくる。まさに鉄の雨だ。
強化シールドのおかげで、フェニックス本体にはダメージはないが、シールド発生装置にかなりの負担がかかっている。

「全砲門、シャトルス艦橋に集中砲火！」

フェニックスに装備されている砲装備が、すべてシャトルスの方向に向く。

「ファイヤー！」

レーザーと砲弾が一斉掃射された。
シャトルスに直撃し、爆発を伴って艦橋部分が傾いていく。
爆発が爆発をよび、分厚い装甲が吹き飛んでいく。
風前の灯火だった。
トドメを刺すため、四機の戦闘機がミサイルを撃ち込む。
弾薬庫に引火したのか、今までにない大爆発を起こし、バラバラになりながらシャトルスは墜ちていった。

『敵艦撃沈……』

「終わったぁー！」

緊張感が抜けた美里は、背もたれに仰け反った。

『副長、まだ航空部隊が』

「大丈夫、心配ないわよ。時期に撤退するわ。燃料も多くないでしょうしね」

ぐいっと美里は背中を伸ばした。

「とにかく、フェニックスを停めましょう」

『分かりました。これより自動操縦に切り替えます。皆さんはしばし休憩してください』

○

その頃、霞と舞は薄暗い通路を突き進んでいた。

「この先に気配が」

「やっと着いたか」

緩やかに走る速度を緩めていく。

「扉……？」

アンティーク調の木製の扉が現れた。
霞はゆっくりと扉を開いた。
中にいる人が息をのむのが分かった。

「……」

中には、ローブに三角帽子といういかにもな人達が潜んでいた。
霞は、その人達を無言で見渡した。

「あ……、霧島の者です」

お届けものです、というような宅配便の人のように自己紹介。
その言葉に、緊張していた魔法使いはホッとするのがわかった。

「霧島の忍者が来たということは、助けがきたのですね」

全身真っ黒な格好をした女性が近づいてきた。

まさに、魔法使いといった格好だ。しかし、気味悪さはなく、むしろ高貴な感じを漂わせていた。

「今、暗部の機関員が掃討作戦を行っている」

「そうですか……では皆さん、私達も行きましょうか」

そう一言いうと、いく人かの魔法使いの姿が消えた。

「そういえば、あなたは加奈と知り合いでしたね？」

「加奈？あぁ確かに」

霞は頷いた。

「あの娘は現在負傷してまして……出来るなら治療を」

「……舞、治療を」

霞は背後に立っていた舞に言った。

「どこにいますか？」

「奥の部屋です」

舞はスタスタと奥の部屋に入っていった。

同時に、霞の通信機に通信が入る。

《こちらオペレーター。施設内を制圧しました。そちらはどうです？》

「こちらも保護した」

《そうですか。よかった》

ふと、よぎった引っ掛かりを感じて霞は尋ねた。

「忍者は……見たか？」

《忍者ですか？しばらくお待ちください》

通信機がしばらく沈黙した。

《いえ、忍者は確認されていません》

「おかしいな……」

霞は眉をしかめた。

「どうしました」

「いや、忍者が確認されていないんだ。どこに潜んでいる……」

その瞬間だった。

「こんなところに隠れていたか」

部屋に男の声が響いた。

低く、冷たい声だ。

「……に……兄さん…」

「……涼！」

ズタボロになった涼が、ひょっとこのお面を被った忍者に捕まっていた。

涼の忍装束は、至る所が切り裂かれていた。

「……貴様、何しやがった」

珍しく、敵意剥き出しで霞は威圧的に言った。

目は鋭く細められ、臨戦態勢だ。

「小細工をしていたからな。ただ邪魔を排除したまでだ。しかし……坊主と思ったら嬢ちゃんだとはな」

――ガチン！

金属音が響き渡った。

霞が瞬時に斬り込んだのだが、苦無によって阻止された。

鍔迫り合いにより金属が擦れ合う音が響き、火花が散る。

「涼になにしやがった」

「何もしてないさ。今はな」

霞は力押しで忍者刀で苦無を払う。

そして一歩踏み込み、腰の捻りと腕の力を使い、忍者刀を方向を変え、大きく横に斬りつける。

――ガキッ！

再び、忍者刀と苦無が火花を散らす。
霞は連続して斬り込んで畳み込む。相手の忍者は防戦一方だった。
しかし、厳しい状況であるはずなのに、焦っている様子はない。むしろ、余裕に思えた。

「怒りは周囲を曇らせる」

「そんなの――！」

知っているとは言えなかった。
周囲に細い糸が張り巡らされており、それに気付いた霞は瞬時に離脱を試みたからだ。

「無駄だ！」

「――っ！」

細い糸が爆発を起こした。糸に超高性能爆薬を編み込んでいたようだ。

「奥義・爆裂蜘蛛の巣。焼け死にな」

「……そうはいかないんだよ！」

炎獄の中から、霞が飛び出してきた。
そして、そのまま斬りつける。
霞の斬撃を、寸前のところでかわしたが、ひょっとこのお面は真っ二つとなり、素顔が現れる。

「くぅ……！」

「残念だな。さっきのは変わり身だ！」

更に一歩踏み込む。

「我流・紫電颯刃！！」

忍者刀の背が、鳩尾にクリーンヒットした。
そのまま、相手は吹き飛んでいき、壁にぶちのめされる。
起き上がる隙を与えず、霞は追撃を行い、相手の鳩尾に拳を喰らわせた。

「ぐぅ……！」

更に霞は拳を振り上げて、

「終わりだぁ！！」

思いっきり叩き付けた。
衝撃で、大理石っぽい床がヒビが入るぐらいだ。
相手の忍者は白目を剥き、口からは泡を吹いて気を失った。

「……貴様は手を出してはいけない一つに手をかけた。愚行だったな」

そう呟くと、倒れている涼の所にいってしゃがみ込んだ。

「大丈夫か？」

「……精神面が酷いかも」

「……そうか」

霞はそれ以上詮索せずに、涼を持ち上げた。
何があったかは聞かない。涼もきっとあまり言いたくないだろう。

「……ちょ、兄さん。これは流石に恥ずかしい」

涼は俗に言う”お姫様だっこ”の状態で霞に持たれている。
あまりの恥ずかしさに暴れ出す。

「コラ、暴れるな。落としてしまう」

「下ろして！下ろしてぇ！！」

「はいはい。舞に手当してもらいに行こうな」

「いやぁ！自分で歩くぅ！」

「無理言うな」

そんなやりとりをしながら、霞と涼は舞のいる奥の部屋に消えていった。

「あらあら、微笑ましいわ」

スッカリ忘れ去られていた黒衣の女性が、口に手を当てて柔和な笑みを浮かべていた。

魔法協会、奪還。

最終章・それぞれの今（前書き）

構成はあるけど、文にならない。

最終章・それぞれの今

イタリア半島にある小さな国家。バチカン市国。
世界最小の独立国家として知られているだろう。
観光地として、バチカン宮殿やサンピエトロ寺院がある。
ローマカトリック教会の中心で、教皇庁がおかれている。
その教皇庁の地下深く。そこは倉庫になっており、予言書や聖杯といったものからオカルトチックなものが厳重に保管されている。
そんな所に、明らかに異文化な格好でコソコソと行動する二人組がいた。

「これ？」

「そうだ。これが第三の予言書だ」

そういって、忍装束の男が本を開いた。
その横から同じく忍装束の女が顔を覗かせた。

「……」

「……」

しばし目を通した後、

「これは……何語だ？」

「ラテン語じゃない？」

「どの道さっぱりだ」

そういうと、静かに本を閉じた。
そして、二人の姿が消える。

「ふぅ、ホテルに帰って一杯するか」

「そうね、久し振りだったし疲れちゃったわ」

次に現れたのはサンピエトロ寺院の上だった。
忍装束ではあるが、覆面はとってある。
その顔は、霧島家の父親と母親だった。

「大丈夫かしらね。子供達は……」

「何とかするさ」

「そうね……」

二人は寺院の屋根にもたれかかった。
目は、遠くにいる子供達を思っていた。

「こうなることは分かっていた。だからあの子達への試練を与えたんだ」

「分かってる」

「いつかは知る道だ。だから、今は信じよう」

「そうね」

そこにいたのは、ただ普通に子供達を思う親の姿だった。

某山脈の山奥。
秘境というより人跡未踏な場所にある桃地家由来の地。
桃地一族によって小さな村が形成されている。
無論、ガスは通っていないが、太陽光パネルと風力、川に設置した水力発電装置により電気は引いている。
ちなみに水道は、その川から直接引いている。
最近では、近代化の波をもろに受け、パラボナアンテナを設置して衛星経由でインターネットが出来るようになった。しかも光通信。
そんな桃地一族の村だけど、今は黒井家の忍者達に占拠されていた。
人々は、本家の建物の一角に詰め込まれ、軟禁状態に陥っていた。
偶々、実家に戻っていた朱里も例外ではなかった。

（この状態に陥ってかれこれ六時間です。陽も落ちてしまいました……）

格子状の小さな窓からは、夕日の光が入らなくなり部屋は既に暗くなっていた。
少々であるが、小腹もすいた。

「どうしましょう……」

誰かが助けに来るのを待っていたが、どうやら桃地の人間は全員捕まってしまったようだ。
それに、どうやら鷹山家も同じように占拠されているらしい。
だとすれば、頼りになるのは……

「カスミさん……」

朱里は脳裏に浮かんだ顔の人の名前を呟いた。

そして、脳内で王道的な展開が広がっていく。

（きっと、カスミさんが助けに来てくれて、なんだかんだ一緒に行動をする事によって相思相愛になってそれから……）

たちまち、顔がゆるんでいく。

「おい、聞いたか？」

「なにを」

「うち、霧島も襲撃したらしいよ」

「――っ！？」

かすかに聞こえてきた見張りの会話に、一気に現実に引き戻された。

（カスミさんのところを襲ったですって！）

瞬く間に顔色が青ざめていく。

（大丈夫でしょうか！？カスミさんのことでしょうから無事でしょうが……）

オロオロとするが、体は拘束されているので首をせわしなく動かすだけ。

周囲の人間は、そんな朱里を訝しむ目で見ていた。

「朱里ちゃん、どうかした？」

同じく拘束されていた従姉が芋虫のごとく這ってきた。

「霧島家が襲われたって……」

「う～～ん、そうみたいだね」

「なら、こんなとこで待ってる場合じゃありません！」

しかし、拘束されているし、周囲は黒井家の人間によって見張られている。

どうしょうもない。

「朱里ちゃん。一人なら何とかなるかもしれない」

「本当ですか！」

大声をだした朱里に、人差し指を口の前で……とはいかないので、必死に『し～～っ』と小声で言う。

「いい、私が朱里ちゃんの縄を切ってあげる。その後、床を外して脱出口を作って、軒下から逃げるの。今日の天気予報では、もうすぐ月が雲に隠れるはずだからその隙にね」

「分かりました」

「脱出口は、私達で隠すから、一人消えても分からないよ」

従姉は朱里の後ろに回り込むと、口で胸元から苦無を取り出して、口にくわえた苦無でロープを切り始めた。
しばらく悪戦苦闘したのち、朱里を拘束していたロープが切れ、ハラリと床に落ちた。

「さあ、行ってきなさい」

「はい……！」

小声ながら力ある返事を返し、朱里は床板を外して闇に消えていった。

――一方、その頃。
霧島家秘密の地下室。
医療室のベットに横たわる桜は未だに目を覚ましていなかった。
一時的に熱があった時もあったが、今は容態は落ち着いていた。

「……36．7℃。大丈夫なようね」

体温計を確認した夏は、ホッと息をついた。
しかし、その表情は憂いを秘めていた。

「兄さん……」

その呟きのあと、沈黙が長らく支配した。
時計の秒針の音と桜の呼吸の音が異常なまで聞こえた。

「……う…ぁ…」

「――っ！」

桜の声に我に返った。

「鷹山！気付いたか鷹山！」

夏の声に応じたのか、桜の目がゆっくりと開いた。

「…ここ…は？」

「霧島の地下室だ」

「確か……私は…」

そこで、何かに気づいたらしく目を見開いた。

「黒井……グッ！」

「まだ傷が治りきっていない。むやみに動くな」

「何故、黒井が……！」

そこで、夏は桜が言いたいことを理解したらしく、少し憂いの表情を浮かべる。

「私、抜け忍みたいなものだから……。安心して、黒井の忍者とは関係ないわ。だからここにいるのよ」

「……分かりました。信用します。で、ここは？」

「霧島の地下室だ」

「へぇ、すごい」

感嘆の声を上げ、キョロキョロと周囲を見渡していた。
その様子を見て、夏はもう安心だと判断した。

「何か飲む？のど乾いたでしょ」

夏がそう言って立ち上がり、医療室から出て行こうとした時だった。
桜があっ、と声を上げた。

「どうかしたか」

「宮内庁……」

ポツリ、そう呟いた。

「宮内庁がどうかしたか？」

「そう、宮内庁だよ！私逃げるときに聞いたんだ。忍三家や暗部機関、魔法協会が狙いじゃない！宮内庁なんだよ」

「……そう言うことね」

初めっから狙いはお役所。
暗部機関や魔法協会への襲撃は囮ということか。
しかも、宮内庁の襲撃が発覚したとしても、日本政府は、唯一といってよい対抗策の暗部機関は襲撃により混乱して動かそうにも動かせない。魔法協会も同じくだ。

警察や自衛隊に任せるには荷が重すぎるし、秘匿することもできない。
……しかし、何故宮内庁？
忍三家の管轄している組織だから？
でも、何かしら彼らが求める物があるのは間違いない。

（一体、何をするつもり？）

夏は、彼らと共に行動しているであろう兄を想った。

宮内庁。
一般には知られてはいないが、宮内庁舎には地下深くに倉庫がある。
この倉庫は、表社会に出してはいけないもの……”闇”に繋がる品々がかなり厳重に保管されている。
これらは、宮内庁直属の近衛軍団が警備している。皇宮警察では役に立たないのだ。
しかし、その近衛軍団も今は黒き霧と黒井忍者の主力部隊の攻撃で壊滅的な状態に陥っていた。
重要な倉庫すら、彼らの手に堕ちていた。

「……おい、本当に秘伝書があるんだろうな」

「……」

黒井家若頭であり、反乱の首謀者である黒井　圭介は、先を歩く黒き霧のリーダー格の人間に言った。
宮内庁に来たのは、かつて霧島家が加わって”忍四家”となっていた時代に書かれた秘伝書が目的だった。
その秘伝書には、失われた技が書かれているらしく、それをもって

すれば闇にかなうと教えられた。
目の前を歩く男に……。
だから、仲間を集めて反旗を翻したのだ。

「……見つけた」

「なに！？」

「こいつだ」

見れば、かなり古ぼけた巻物を持っていた。
圭介は、その巻物を奪い取ると期待に満ちた目をしながら巻物を開いていった。

「……」

巻物を読み進めていくに連れて、顔がひきつっていった。

「なんだこれは！秘伝書とはま――」

パン！

乾いた音が響き渡った。
そして、黒井　圭介の体がゆっくりと崩れていった。

「君の役割は終わり、よくやってくれたね」

手に持つハンドガンの銃口からは硝煙が上がっていた。
転がり落ちていた巻物を拾い上げると、開いて軽く目を通す。

「……ふむ」

すぐに読み終えて巻き取ると、懐にしまい込んだ。
通信機の電源を入れると、マイクに呼びかける。

「こちらリーダー。もう宮内庁には用はない。速やかに次の目標に向かう。目標は豊稲神社。霧瀬市の豊稲神社」

そう言うと通信機の電源を切り、足元に転がる圭介を見下ろした。

「まったく、力がないくせに粋がるからですよ。〝若頭〟」

凶弾を受け、息も絶え絶えと言う状態でありながら、圭介は彼を睨みつけた。

「……ふっ」

彼は鼻で笑うと、おもむろに覆面を脱ぎ捨てた。
その顔を見た圭介は驚愕した。

「なっ――！」

「じゃあね」

彼は圭介の首に手刀を振り下ろし、意識を刈り取った。
素顔をさらした彼――黒井　夏の兄、黒井　隼人は冷酷な目をしていた。

「あと少し……あと少しだ」

そう呟き、天井を見上げた。

（夏、邪魔してくれるなよ……）

今、敵対する妹を思うのだった。

最終章・事は知らぬうちに進むもの（前書き）

もうヤダ……。終わる予定が終われないグダグダだ。

最終章・事は知らぬうちに進むもの

フェニックス艦内。
円卓を囲み、暗部機関、魔法協会、そして霧島兄妹が座っていた。
各人の前には小型モニターが置かれている。

「さっき、官邸と繋がったわ。宮内庁が襲われたそうよ」

部屋全体が薄暗くなり、円卓中央にホログラムが浮かび上がる。
宮内庁と地下倉庫の全体像だ。

「彼らは正面から堂々と侵入。駆けつけた皇宮警察を殲滅。更に地下回廊に侵攻したわ」

ホログラム上で無数の赤い光点が宮内庁舎の下へ動いていく。
これが、敵を表しているらしい。

「その後、近衛軍団と交戦を開始」

新たに青い光点が現れて交わった。

「しかし、展開が遅かったことから苦戦。防衛ラインを突破されて各個撃破されていきます」

青い光点の壁の中央が破られ、赤い光点が流れ込む。
青い光点が次々と消えていく。

「その後、彼らは１０分に渡り一時的に宮内庁全域を制圧。しかし、すぐに撤退したとのことです。現在、第三深界を含め探査中です」

淡々と説明を行っていた美里は以上です、と最後に言って椅子に座った。

「まず、桃地家と鷹山家を解放するべきではないか？そうすれば、情報統制を強固に行え、大胆に行動ができる」

『既に、部隊を送っています。しかし、移動に少し時間がかかると思われます』

「……あ～、そういや、かなりの山奥だって言っていたな」

霞は朱里が実家に戻る際に、ぼやいていたことを思い出した。
曰く、アスファルトの道路がないらしい。

「とにかく、奴らがどこにいるのか分からないとな……。なにしでかすか分からない」

「はぁ、分からないことだらけね」

美里がため息をつき、椅子の背もたれに仰け反った。
そんなお手上げ感が支配した部屋に飛び込んでくる少年が一人。

「次の目的地が分かりましたぁ！」

「なにぃ！」

美里は勢いよく立ち上がった。
その際、円卓の縁に足をぶつけた。

「ふ、副長……」

「だ、大丈夫よ……。報告を」

「はい……。では」

少年は戸惑いながらも、手に持ったファイルに目を通す。

「微かではありますが、彼らの通信を傍受していました。解析を行った結果、彼らは『豊稲神社』に向かっています」

「豊稲神社……？」

聞き慣れないのか眉をしかめた。

しかし、霞は驚愕の表情。

「豊稲神社だと……！」

「知ってるの？」

「知ってるもなにも、友人宅だ」

「そうだったの……」

神妙な顔つきになり、円卓に肘をついて手を組んだ。その手を上に顎をおく。

「残念だけど、これから先は私達は手を出せないわ」

「……なぜだ」

「管轄が違うわ。神社とかは文部科学省文化庁の管轄。勝手に暴れたら文句がくるわ」

「……ここの管轄はなんだよ」

「……政府直属だからね。この組織」

「は？」

「前任は情報局……内閣情報局と言った方が分かるかしら？」

内閣情報局…正しくは情報局。
戦時中、プロパガンダや情報統制をおこなった内閣直属の組織。
今は暗部機関として形を変え、色々と活動しているのだ。

「だから、勝手なことしたら反乱と思われかねないのよ。前にちょっとやらかして目をつけられてるし……」

「……何したんだよ」

「積極的な春闘。給与、予算アップを求め、財務省に殴り込み」

「……」

そりゃ、目を付けられる。

「ということで、部隊は送れないわ。まぁ、桃地と鷹山にも部隊を送っているから実働部隊は少ないわ」

「魔法協会も先ほどの戦闘でほとんどがダウンしてしまいました……」

つまり、霧島家で何とかしろということか……。

「兄上、愚妹は……」

「あぁ、無理だろうな」

涼は先の戦闘でかなり痛めつけられている。動けと言うのは酷だ。しかし、二人だけというのも、ただやられにいくようなものだ。

「あぁ……涼くんね、悪いけど引き取ってよ？」

「あ？医務室に置いてくれても――」

「無理、今野戦病院とかして一杯よ。あなたの家においた方が衛生的」

「……なら仕方ない」

そう言うと霞は椅子から立ち上がった。

隣に座る舞も同じように立ち上がる。

「これからはこっちで勝手にする」

そう言い放つと、さっさと部屋から出て行ってしまった。

舞もその後を追う。

「……孤立無援となるとはな」

「どうします？鳴海先輩が……」

「少し様子を見る。トリガーハッピーだからな」

「ハイ？トリガーハッピーですか？」

意味が分からず、舞は首を傾げた。なかなか可愛らしい。

「……知らない方がいいかもな」

「そう言われると知りたくなります」

「我慢だ。忍耐だ。忍者だろ」

「それ以前に人間です。秘密にされると知りたくなるのは人間の性です」

結局、霞は何も言わずに歩いていく。

無論、舞は不満で口を尖らせていた。

○

『行っちゃいましたよ。いいんですか？』

ナビィが部屋に残る美里を含めた人間に言った。

「なにが？引き留めなかったこと？それとも部隊を派遣しないこと

？」

『いえ、違います。〝黙っていたこと〟です』

ナビィの言葉に少し眉をしかめた。意味がすぐに理解出来なかったようだ。

しかし、ナビィが言わんとすることを理解すると、手を頭の後ろに組み、再び背もたれに仰け反った。

「いいじゃない。言ってあげる義理もないしね」

『しかし、仮にも我々を助けに来てくれた方々ですよ』

「そう言っても、結局は〝教官〟がやっちゃったでしょ？役にたってないわよ」

頬杖をついて、どうでもいいように言う。

「事態は〝闇〟の範疇を越えたの。あそこに手を出したのが分かった時点でね」

『分かっていますが……』

「それに、彼らなら言っても無駄だったでしょうね。〝放っておいても勝手に解決する〟って言っても」

ハアとため息をついた。

無力さを感じさせる。

「確かに、明日には終わっているでしょう。どういう形かは分かり

ませんが……。そこに、私達が介入することはできません」

魔法協会の――大魔導師と言われていた女性が言った。

そして、部屋は沈黙に支配された。

最終章・意志と覚悟（前書き）

先に謝ります。次回では期待（あるかは知らないが）裏切ることになるでしょうし……悪い意味で

最終章・意志と覚悟

気がつけば、既に陽は落ちていた。
霞は傷だらけの涼を背中に背負い、闇夜を民家の屋根を走り抜ける。
その後ろを、舞がピッタリと追随してくる。
今、霞達は自分の家を目指していた。一刻も早く豊稲神社に向かいたいが、仕方がない。涼を放っては置けない。

ストッと我が家の屋根に飛び乗ると、そのまま玄関に飛び降りる。
舞が玄関の鍵を開け、扉を開く。霞は涼を背負ったまま地下室へ直行する。

「霧島……！」

「あぁ、先輩。追加だ」

霞は桜の隣のパイプベッドに涼を寝かした。

「一体どうした霧島」

「思いの外強くてね。この通り、涼がやられたんだ」

「おい、大丈夫なのか」

「なにが？」

「何って……」

そこで夏はモゴモゴと言いよどむ。

なかなか先を言ってくれない。こんな事で時間を割かれている場合ではないのだ。

「すまんが、時間がないんだ」

そう言って立ち去ろうとするが、肩を掴まれた。

「待ってくれ、事はまだ終わっていないのだろ？」

「……あぁ、しかも援軍もなしだ」

「おい、それは……ヤバくないか？」

「ヤバいね。最悪死んじゃうね」

霞はおちゃらけたように言う。しかし、その事が夏の怒りの琴線に触れた。

「なぜそうヘラヘラしてられる！このままでは世界が壊れるんだぞ！」

夏は霞の胸ぐらを掴んだ。悲しいぐらい身長が足りず、ほとんど見上げる状態になってしまった。

しかし、夏は気にせずまくし立てる。

「霧島しかいないんだ！それはわかっているのだろ？」

「分かってる」

胸ぐらを掴む夏の手を振り払った。

「分かってるさ、その事ぐらい。奴らの目的が何かは知らない。だけど、これ以上は見過ごせない。霧島家として」

「霧島……」

「それと、友人としても……かな？」

霞はニッと笑った。

「……」

「そう言うことだ。僕らは行く」

そう言って、霞は舞と連れ立って出て行こうとしたのだが、再び夏に肩を掴まれた。

「……今度はなんだ」

「私も連れていけ」

夏の目には明確な意志が宿っていた。

「兄を止めたいんだ」

「……出来ないときは、分かってるな」

「……分かってる」

答えるまでに時間があった。躊躇いはあるのだろう。

「……舞、ここにいろ」

「兄上！？」

「桜と涼をみる人間は必要なんだ」

「ですが、戦力は二人より三人の方が！」

「確かにな。だが、ほっとけないだろ？怪我人を」

「ですが！」

「それに、舞。右足、痛めただろ」

「！？」

舞は驚いたようで、珍しく驚愕した表情をしていた。レアものだ。

「バレないようにしていたようだが……そんな状態では連れていけない」

「……分かりました」

――ですが、と言葉が続く。

「父さんと母さんに、兄上の訃報を伝えるのは嫌ですからね」

「分かってるさ。じゃあ行ってくる」

そう言って、霞と夏は部屋から出て行った。夏は、部屋から出るときに一礼して。

「いってらっしゃい」

舞は、霞らが出て行った扉に向かって、ポツリとそう呟いた。

○

霞と夏が、霧島家を出た直後だった。

「カスミさぁ～ん！」

甲高い声が響きわたった。

もう暗くなっているので、近所迷惑になりかねない。

「カスミさん！」

朱里が目の前に現れた。

「うぉ、朱里さん？無事だったか」

「はい、大丈夫です」

朱里は腕をぐるぐる回して健全ぶりをアピールした。

確かに、怪我一つないようだ。これは戦力になるかもしれない。

「朱里さん。聞いてくれ」

霞は事のいきさつを話し始めた。襲撃を受けたこと、暗部機関での事、魔法協会での事、そして援軍がないこと。一部を省略したりまとめたりしたが、伝わったようだ。

「分かりました。手伝います。私も知らんぷりはできません」

「ありがとう」

「ありがとうございます」

夏が頭を下げる。その事に少し目を丸くして朱里は驚いたが、直ぐに笑顔になる。

「頭あげてください。困った時はお互い様です」

「桃地……」

朱里は夏のそばにそっと寄り、耳元で呟いた。

「カスミさんはあげませけど」

「な、ななな！要らん！そんな物要らん！！」

顔を真っ赤にさせ、顔の前で両手をブンブン振る。

「何やってんだ。先行くぞ」

「あ、はい」

霞の姿が消えた。

「ほら、行きますよ」

「うぅ……」

それに続き、朱里と夏の姿が消えた。

その時の夏の顔は未だに真っ赤なトマトみたいだった。

最終章・締まらない終わり方

闇夜に支配された夜。
本日は満月であったが、空にはどんよりとした雲が覆われて、満月は隠れてしまっていた。
光がないので当然真っ暗のはずだが、豊稲神社は松明の光に包まれていた。

「ねぇ、本当にここが襲われるの？」

巫女装束にアサルトカービン銃のモデルガンという戦闘体制の鳴海が、本殿の前に仁王立ちでいた。
隣では、狛犬が鎮座している。

――あやつからの情報じゃ、間違いないじゃろ

「あの人のこと、知ってるんだね」

――なに、ヤツが小僧の時にな

「ふ～～ん」

端から見たら、鳴海の独り言。だが、もう一つの声は確実にしている。

――さて、来たようじゃの

そんな古めかしい女性の声が響きわたると、狛犬の体が光った。
石像の狛犬が変化し、人間の形をなし、輝きを増していく。

「オーケー、やってやるわ」
「勇ましいのぉ」

光が治まると、そこには妙齢の女性が立っていた。
腰まである黒髪に、少し鳴海より高い身長。
ちょっぴり高そうな着物を見事に着こなし、帯のところには日本刀を差していた。
ただ、一番特徴的なのは、頭についている犬耳だ。
鳴海と女性の前に、一人の忍者を先頭に、黒い戦闘服に身を包んだ人間が現れた。
はじめに仕掛けたのは犬耳の女性だった。
日本刀の柄と鞘を持ち、着物を着ているとは思えない程のスピードで走り出した。

「ファイヤー！！」

鳴海の電動Ｍ４が火を噴いた。
弾は真っ直ぐ飛んでいくが、その軌道上には犬耳の女性もいる。犬耳の女性は後ろを見ず、迫る弾を避けながら走る。
無論、相手側も黙っちゃいない。走ってくる女性に銃口を向けて発砲する。こちらの銃は本物だ。
鳴海の弾が着弾し、爆発を起こす。その爆発で戦闘員が数人吹き飛んだ。更に爆発は連続して続き、戦闘員は吹き飛んでいく。

「やっぱ、弾だけじゃなくて銃自体に魔導加工すると、いつもの二倍の威力ね」

シュポポポポ

やはり、気が抜けそうな音をたてる発砲音。
フルオートで撃ちっぱなす。

「はあぁぁぁ……ハアッ！！」

犬耳の女性は、自分の間合いまで忍者に近づくと、体勢を低くして一気に鞘から刀を抜いた。居合い斬りというものだ。
だが、抜きはなった日本刀は残像を斬るだけだった。

「チッ……」

再び日本刀を鞘におさめ、柄を持ち構える。
目を閉じて精神統一。神経を研ぎ澄ませる。

「そこじゃ！」

目をキッと見開き、上に刀を振り抜く。
金属と金属が擦れる音が響く。

（なっ……力を流したじゃと！）

忍者は空中で一度受け、刀を傾かせて力を流したのだ。

「――！」

振り抜いてしまったら、すぐに戻すことは難しい。この時に生まれる隙が狙われた。
目の前に着地した忍者は、忍者刀を首に突きつけた。犬耳女性は刀を振り抜いた格好のまま、固まらざるおえなかった。

「豊稲の狛犬……それほどでもないな」
「……くぅ、体が鈍っとったか……」
鳴海も、戦闘員に銃を突きつけられていた。
「さぁ狛犬。ここに神がいるのは分かっている。案内しろ」
「ほぅ、霧神様が狙いかのぅ」
「いや、奴が隠している物がねらいだ」
そう言うと、忍者刀を構え直して更に犬耳女性の首もとに突きつけた。
「……」
「さぁ！」
その時、何かが飛来し、忍者刀を弾き飛ばした。
「そこまでだ！」
声が響きわたった。
それは、鳴海にとっては聞き慣れた声だった。
「やはり来たな。霧島ぁ！」
忍者は振り向きざまに手裏剣を放った。
トストスと木の枝や幹に突き刺さった。
「前は油断してやられたが、今度はそうはいかない」
また、別の場所から声が響く。

「こっちには人質が――」

その瞬間、忍者の足元の地面が盛り上がった。
そして、刀が地面から突き出る。
素早く反応し、バックステップで距離をとっていた。

「上手くいったと思ったんだけどな」

盛り上がった地面の下から、忍び装束の霞が這い上がってきた。
パンパンと体についた土を払う。

「霞君！」
「鳴海、大丈夫みたいだな」

朱里と夏によって助け出された鳴海が駆け寄ってきた。

「兄さん！もう止めてよ！こんなことしたって何になるの」
「夏、君も邪魔するのか？」
「兄さん……」

ふと、夏は気づいた。

「兄さん……だけなの？」

黒井家の忍者も参加していたはずだが、この場にいるのは夏の兄、隼人だけである。他はどうしたのだろうか。

「奴らには眠ってもらったよ。ウルサかったし」
「――ッ！兄さん！！」

思わず殴り飛ばそうとして走ろうとした夏を、犬耳女性が首根っこを掴んで止める。

「止めい。あやつは取り憑かれとるんじゃ」
「取り憑かれてる？なにに」
「うむ、九尾の狐がじゃ」
「九尾の狐？」
「そうじゃ。昔は大陸の王をたぶらかして、国を滅亡させたり、最近じゃ、ドイツのヒトラーとアメリカのヘンリー・スティムソンとハリー・S・トルーマンに取り憑いておった」

第二次世界大戦でのキーマン。
第二次大戦を引き起こした人物と、原子爆弾の投下に関する人物。
どちらも、十万人以上を間接的ではあるが殺している。

「相当ヤバそうなもんだな」
「おぉ、ヤバいぞ。実際、既に体の持ち主の心は飲まれとる」
「……つまり、これは先輩のお兄さんの意志でないと？」
「いや、少なからず”世界を変えたい”という意志はあったのじゃろ。それが邪気に当てられて乗っ取られたのじゃ」

未だに『兄さん』と叫ぶ夏に、犬耳女性は五月蠅いと空手チョップを頭部におみまいし、夏を黙らせた。

「だが、厄介なことになった。こうなると攻撃が――」

その瞬間、霞の視界の端に何か現れた。
脊髄反射の領域で反応し、忍者刀を引き抜いて攻撃を受ける。

（コイツ……人間離れした力してやがる！）

鍔競り合いで霞は押される。

ギチギチと刀同士が嫌な音を立てている。

「はあぁぁぁぁ！！」

そこに犬耳女性の居合い斬り。

隼人はバク転をすることで回避した。

「これじゃ、手の出しようがないぞ」

「……わしと鳴海で引きずり出す。しばらく奴を頼まれてくれんか？」

「……三分だ。その間に何とかしろ」

そう言った瞬間、霞は飛び出した。

息つく暇のない斬撃を繰り出していく。

「鳴海！」

「分かってる」

鳴海と犬耳女性は目を瞑り、ブツブツ呪文っぽい葉をつむぎだす。

「我流・紫電颯刃ぁ！」

勢い良く忍者刀同士がぶつかりあい、嫌な金属音と共に火花を散らす。

両者とも後ろに跳び、一旦間を開ける。

「斬撃・鎌鼬！」

真空の刃を放つ。
しかし、霞の攻撃は簡単に避けられ、逆に大量の苦無の投擲に晒される。
隼人に走って接近しつつ、降ってくる苦無を避ける。
いくつか掠って、顔に血が垂れる。

「はあぁぁぁぁ！」

一気に踏み込んで加速。
隼人の目の前まで接近する。
一閃。
隼人の前髪を散らした。

「……くっ」

隼人は仰け反った体勢から、体を回転しながらしゃがみこみ、更に霞の足を払う。

「――なっ！」

霞はバランスを崩し転ける。そこを狙い、隼人が刀を突き立てようとする。

「――ッ！」

霞はとっさに体を回転させ、刀を回避する。刀は霞の頭があった場所に突き刺さった。

「カスミさん！」

朱里の声と共に、霞の横に突き刺さった刀が吹き飛んだ。
どうやら、鎖鎌の分銅で飛ばしたみたいだった。

「ごめんね、兄さん」

夏も、大量の手裏剣を放ち援護する。
隼人はバク転しながら手裏剣の雨を避けるが、

「――ッ！」

同じく手裏剣の雨を掻い潜ってきた霞の追撃を受ける。
忍者刀で斬りつけられるも回避し、カウンターで霞の腹部を蹴って吹き飛ばす。
だが、ほぼ同時に攻撃の展開をしていた朱里には反応しきれなかったようで、鎖分銅が足に絡めつけられていた。

「ち……」

なんとか外そうと抗ってみるが、一向に解ける気配はない。

「させるか！」

霞も忍者刀での攻撃から鎖鎌での攻撃に切り替え、鎖分銅を隼人に絡めつける。
鎖で簀巻き状態になった隼人は、力ずくでの脱出に試みる。つまり、鎖を引きちぎろうというのだ。
隼人に絡まった鎖が、軋み始めて悲鳴をあげ始めた。

「……なんて力だ」

「もっていかれそう……」

霞と朱里の力が抜けそうになったとときだった。
更にもう一本の鎖が隼人の身体に絡まった。

「兄さんには、正気に戻ってもらいたいからね」

兄想いゆえの行動だった。
霞、朱里、夏の三人で
隼人を拘束する。
そして、時間は過ぎていく。

（……まだか！）

一体何を行うかは知らないが、既に三分は過ぎた。
なのに、一向に何も起こらない。

（これ以上、鎖鎌で拘束するのは無理だ。鎖が保たない……！）

霞の額に汗が滲んだ。

「……っ、……！……よし」

ブツブツと呪文っぽい言葉を紡いでいた鳴海が動いた。
どこからともなく取り出した大きな筒状のもの。
片方の先端には、ひし形の物体が取り付けられていた。
ＲＰＧ７。テロリスト御用達のロケットランチャーだ。

「ちょ、それはヤバい……！」

霞の声は届かなかった。

――バシュン！

激しいバックブラストの炎を出し、弾頭が発射器から勢いよく飛んでいった。

弾頭はまっすぐ飛んでいき、隼人に向かっていく。

「ぐぅぅぅ……！」

隼人の眼前に弾頭が迫り来る。

――ズドン！！！！

強烈な爆風が霞達を襲った。

手に持つ鎖鎌には手応えがなくなっていた。

しかし、どうなったか霞の位置から粉塵で確認できなかった。

「どうなった……？」

しばらくして、粉塵が晴れる。そこには隼人が力無く倒れていた。

「兄さん！」

夏は傍らに駆け寄り、体を抱き起こす。

「う……夏……。一体俺は……」

「よかった。生きてるんだね……」

夏は、ホッと息をついた。
しかし、夏以外の人間は、夏と隼人のいる奥の方を茫然と見ていた。
――グゥゥ……まさか、弾き出されるとはな。
金色の毛並み。そして九本の尻尾。周囲には狐火だろうか、青白い火の玉が浮かんでいた。
「ふふ、久しいのぉ九尾。前あったのは六十年前じゃの」
――狛犬、相変わらず霧の眷属め
「口が悪いのも変わらん」
犬耳女性が日本刀を鞘におさめる。今の今まで出しっぱなしだった。
「その様子じゃと、霧神様にようかの？」
――やつの守る、門（ゲート）をくぐるだけだ。
「それは無理じゃと、何度言ったら分かるのじゃ！」
――無理なら、無理やり通るのみ
「それが何度失敗しとるのじゃ戯け！」
犬耳女性は、手にハリセンを召還し、九尾の頭をひっぱたいた。
――地味に痛いぞ
「当たり前じゃ！思いっきりじゃからな」
手に持つハリセンは、一発でぐしゃぐしゃに折り曲がり、使い物にならなくなっていた。
そのハリセンをポイと後ろに投げ捨て、話を続ける。
「いい加減諦めい、門（ゲート）をくぐったところで、貴様にはどうすることもできんよ」
――馬鹿にするな。そう言われて引くと思うか！

「油揚げあげるから」
――……！、……。
「……悩んだじゃろ」
――な、悩んでおらん！
なんだか話がついていけない。
霞達は置いてけぼりを食らっていた。
「あの……、すまないけど」
霞は勇気を出して、会話に割り込んだ。
「ん？なんじゃ霧島」
「話、分かんないのだけど」
霞の言葉に、人間な方達は頷いた。
たが、
「分からんでいい」
その一言で一蹴されてしまった。
「ほれ、油揚げやるぞ」
油揚げを九尾の前でちらつかせる。九尾の視線は油揚げにロックされていた。
「な、諦めい」
九尾少し悩み、差し出されている油揚げをくわえる。

そして、本殿とは違う神殿に向かって走り出した。

――誰が諦めるか！油揚げも門（ゲート）もな！

そのまま走って神殿に突入した。

なのに、犬耳女性は動こうとしなかった。

「お、おい。追わなくていいのか？」

「別にいい。霧神様もおるしな。それに……」

フッと口を不敵に歪めた。

「アヤツがおるしのぉ」

フフフと笑い出した。

「霧島らも帰ってよいぞ。全て解決ずみじゃ」

「いや……意味が……」

その時だった。

――ひぎゃあああぁぁぁ……

そんな叫び声が響き渡った。

そのあと、ドッタンバッタンと暴れまわる音がする。

しばらくその音は続き、突入口からみすぼらしくなった九尾が飛び出してきた。金色の毛並みは茶色く煤けて無残な形となっていた。

――くそ、あんな奴がいるとは！

九尾の体全体を、狐火の青白い炎が包み込んだ。

「逃げるかの？」

――違う！転進だ！

そう言い残すと、九尾は狐火に消えていった。

――九尾が消えたことにより、黒井家と黒き霧によるクーデターは完全に終息。制圧下にあった桃地、鷹山両家も暗部機関により解放され、忙しかった一日が終わった。

最終回・現代忍者の日々

――ドカン！！

この日の朝は爆発で飛ばされることから始まった。
ベッドで眠っていたはずだったが、爆発により見事に天井にめり込んでいた。

「起きた？」
「……あぁ、バッチリだよ母さん」

ドスンと霞は天井から落ちる。天井は人型に凹んでいた。

「さて、次は涼ね」

嬉々として母が、霞の部屋から出て行く。
霞は、未だ爆発のショックから抜けない頭を振って、頬をパシッと叩いて気合いを入れる。
そして、いそいそと制服に着替え始めた。

――ズドン！！！！

再び爆発が起こり、家が揺れた。
しかし、霞は気にすることなく着替えている。いつもの事だ。
着替え終わると、リビングの方に向かう。

「おはよう」
「……おはようございます」

低血圧ぎみの舞と挨拶をかわし、自らの席につく。

「父さんは？」

「……もう出ました」

「そうか」

「……」

「……」

相変わらず、朝は会話が進まない。

「おはよ～」

まだ眠たそうに目を擦りながら、涼がリビングにやってくる。

今は、中等部の『女性用』の制服に身を包んでいる。

「母さんにも困ったものだよ。いい加減、目覚まし代わりに爆裂玉を使うのは止めてくれないかな……」

「あら、それは自分で起きない限り無理ね」

いつの間にか、リビングに戻っていた母さんがのたまった。今更驚かない。

「でも、体が保たないよ」

「黙らっしゃい！！」

その瞬間、母さんの手から沢山の苦無が放たれた。そのすべては、涼の方向に向かわず、何故かトーストを食べている霞に向かっていた。

――パシパシパシパシ……

向かってきた苦無を全て片手で受け取った。
トーストを食べているままでだ。
その光景を見た母さんは、関心したような声を漏らした。

「へぇ、ちょっと前だったら避けるので一杯だったのに」
「僕だって、成長しているってことだよ」

グイッと牛乳を飲み干した。

○

「いってきます」

学校に行く道中は、霞は涼と舞と一緒に行く。
変わらない日常だ。
しかし、最近は増えた。
居候している朱里。そして途中で合流する桜。そこに、二人揃って登校する鳴海と東も入る。
朱里と桜は互いを口撃しあい、舞と鳴海は新兵器の話し合いをしている。
涼はといえば、〝女の子〟として登校してから、東に口説かれて困っている。今も、霞の背後に隠れて東をやり過ごそうとしている。

そして……

「おはよう」

交差点で待っていた一組の兄妹。

九尾に操られていた隼人とチビ先輩の夏。黒井兄妹だ。
黒井家は、若頭一派が捕まえられ、監禁されていた頭により、全員がモヒカン頭にされて街頭募金をさせられている。
隼人は、操られていたということもあり、無罪放免とはいかないが、里を降りて世俗を勉強してこいと言われて兄妹で学校に通い続けることになった。
少し、賑やかになったが、変わらない日常だ。
だけど、そんな中でも世界は動いている。
しかし、霞は思うのだ。
世界と言われても分からない。未だにこの現代社会で忍者が必要なのか分からない。役割もいまいち分からない。
だけど、その力が必要な時があったら、全力でそれに対処しよう。
分からない事だらけだけど、別に分からなくたってもいい。自分が決めた事を守ればいい。それが、どう世界に作用するかは知らないけど、僕は、僕の日常を守るだけだ。

こうして、現代忍者は自分の日常を日々過ごしていく……。

あとがき

今まで読んでいただいた読者の皆様、ありがとうございます。作者の月見　岳です。
約一年続いた”現代忍者の日々”も無事に終わらせる事ができました。
最後の方はどうしても文章が上手くいかず、ヘンテコ意味不明になってしまいました。頭の中ではちゃんと出来ていたんですけどね……。
あと、お気づきな方もいらっしゃるでしょうが、回収していない伏線や、謎の人物がいます。これらは、次に連載するであろう作品で分かるはずです。
今回では出せなかった設定や、世界の秘密を出せたらと思います。

さて、この作品は実は試しに投稿したものでした。小説を書くのも初めてで、ノリで始めはやっていました。
プロット？なにそれ？って感じです。
そりゃもう、初っ端から躓きましたよ。ネタがない。どうやって終わらせようってね。
まぁ、方向性が決まったのは、涼が〇〇〇と分かってからですけど。
そう言えば、この作品の人気キャラは涼でした。続いて主人公の霞。
やはり、弄られキャラというのはいいのかな？

では、最後に……。
今まで読んでくださった読者の皆様、そして応援していただいた皆様、ありがとうございます。
そして、なろう秘密基地にて、素敵なイラスト&ショート漫画を描いてくださった命さん。何度あなたの描いたキャラで頑張ることが出来たか……。ありがとうございます。

では皆さん。これにて一旦お別れになりますが、何らかの機会にお会いできたらと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3409d/

現代忍者の日々

2010年10月12日18時19分発行